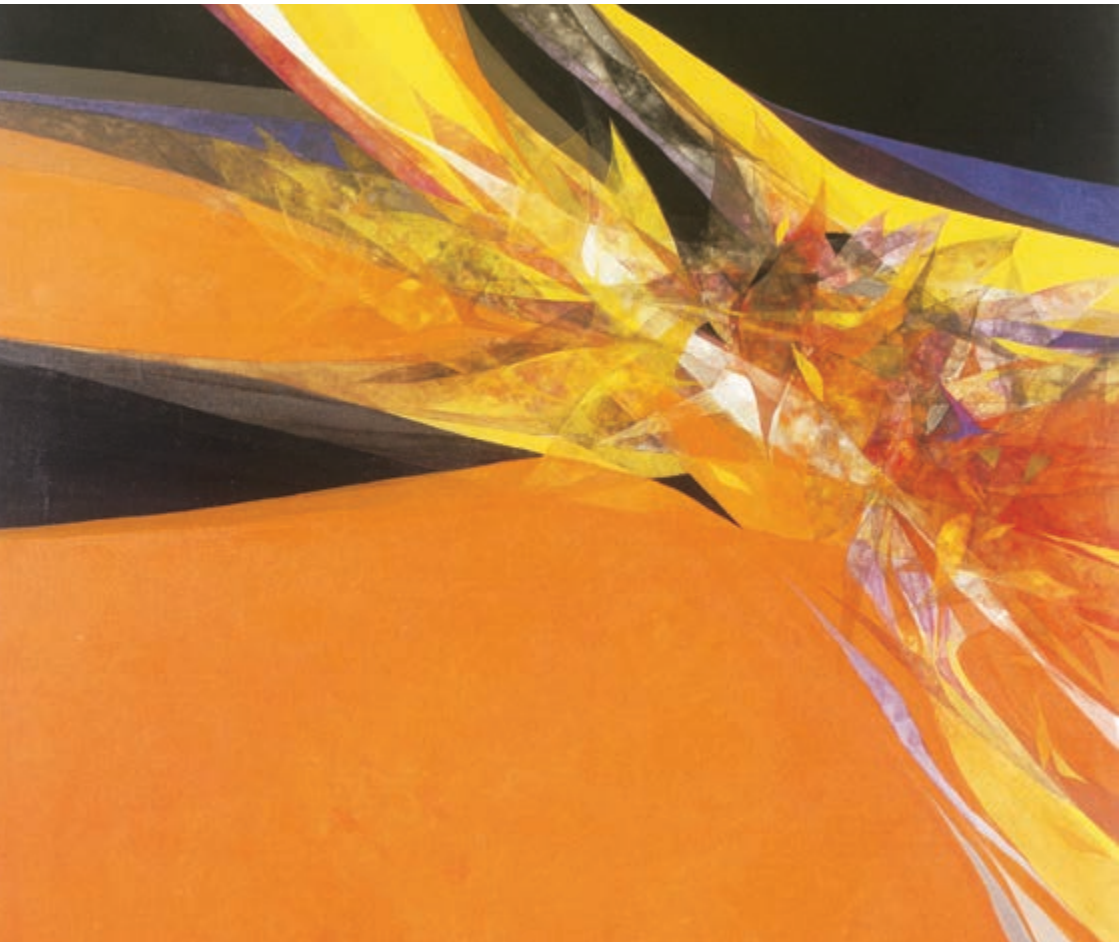
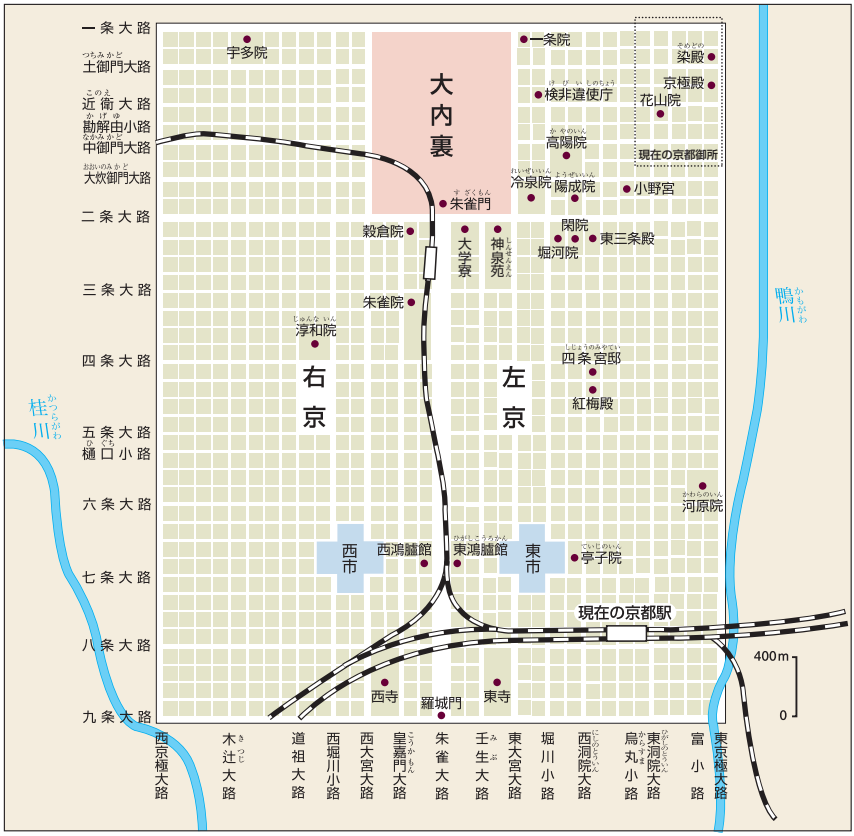
文部科学省検定済教科書
高等学校国語科用
117 明治 | 言文 711

精選 言語文化

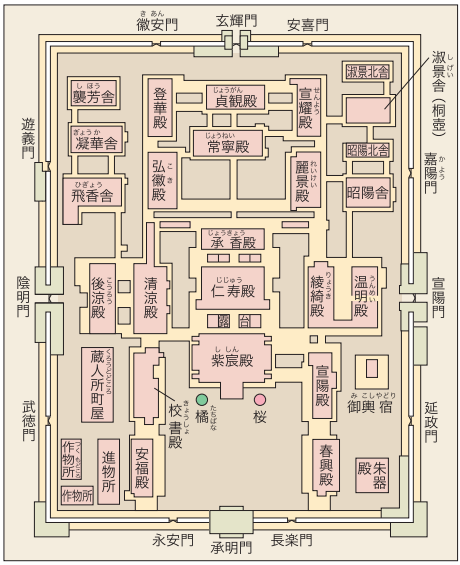
明治書院

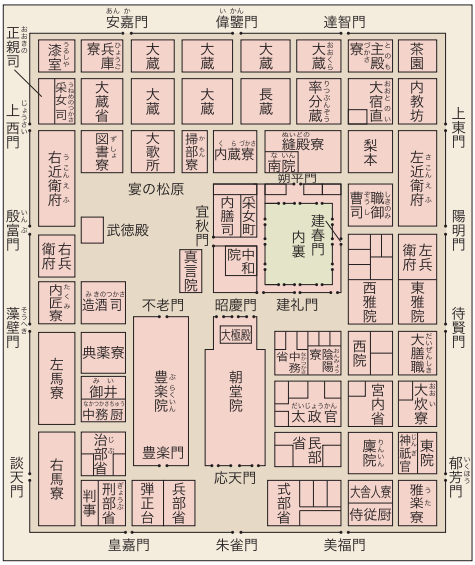


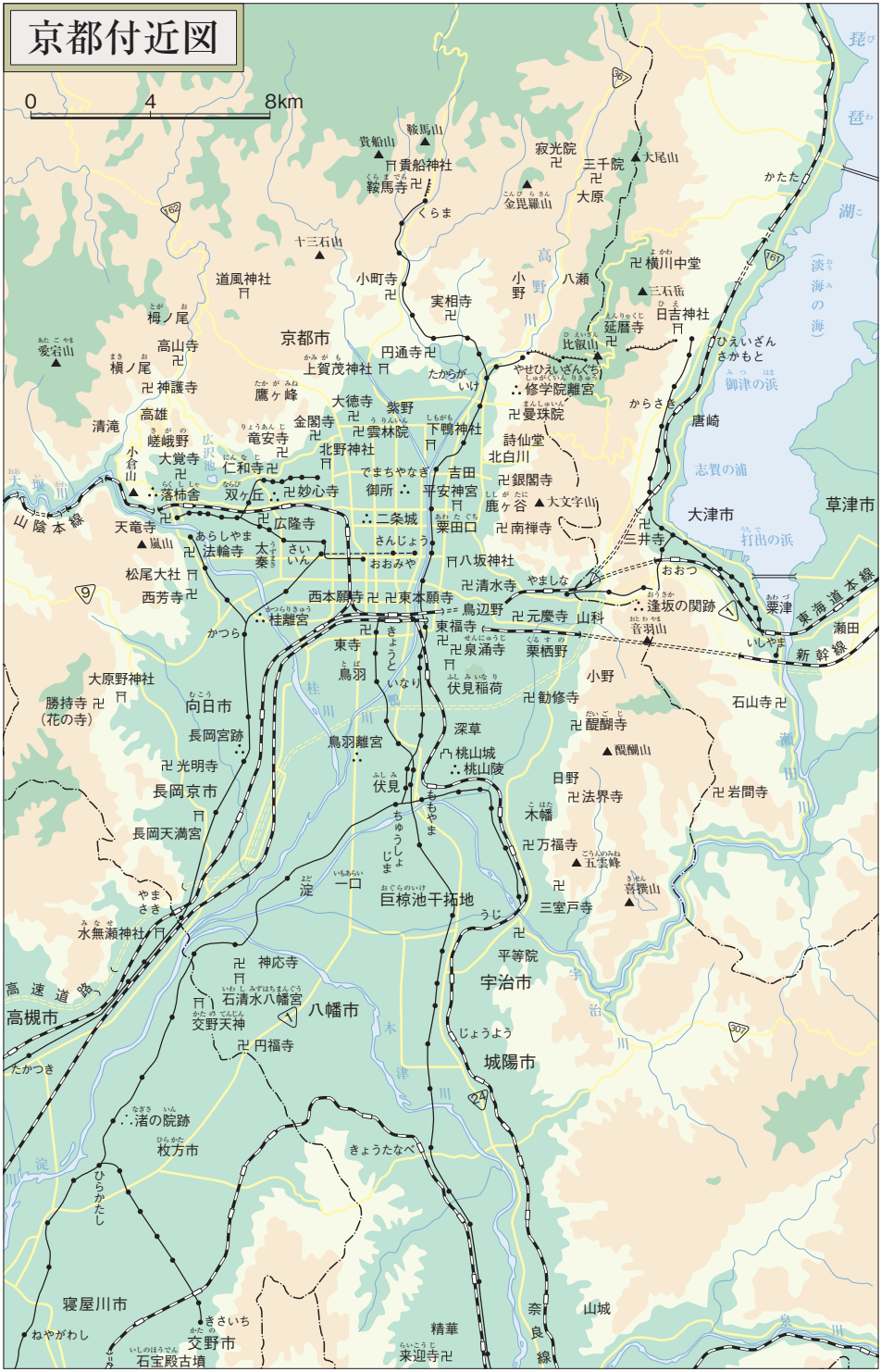
平安京条坊図・大内裏・内裏



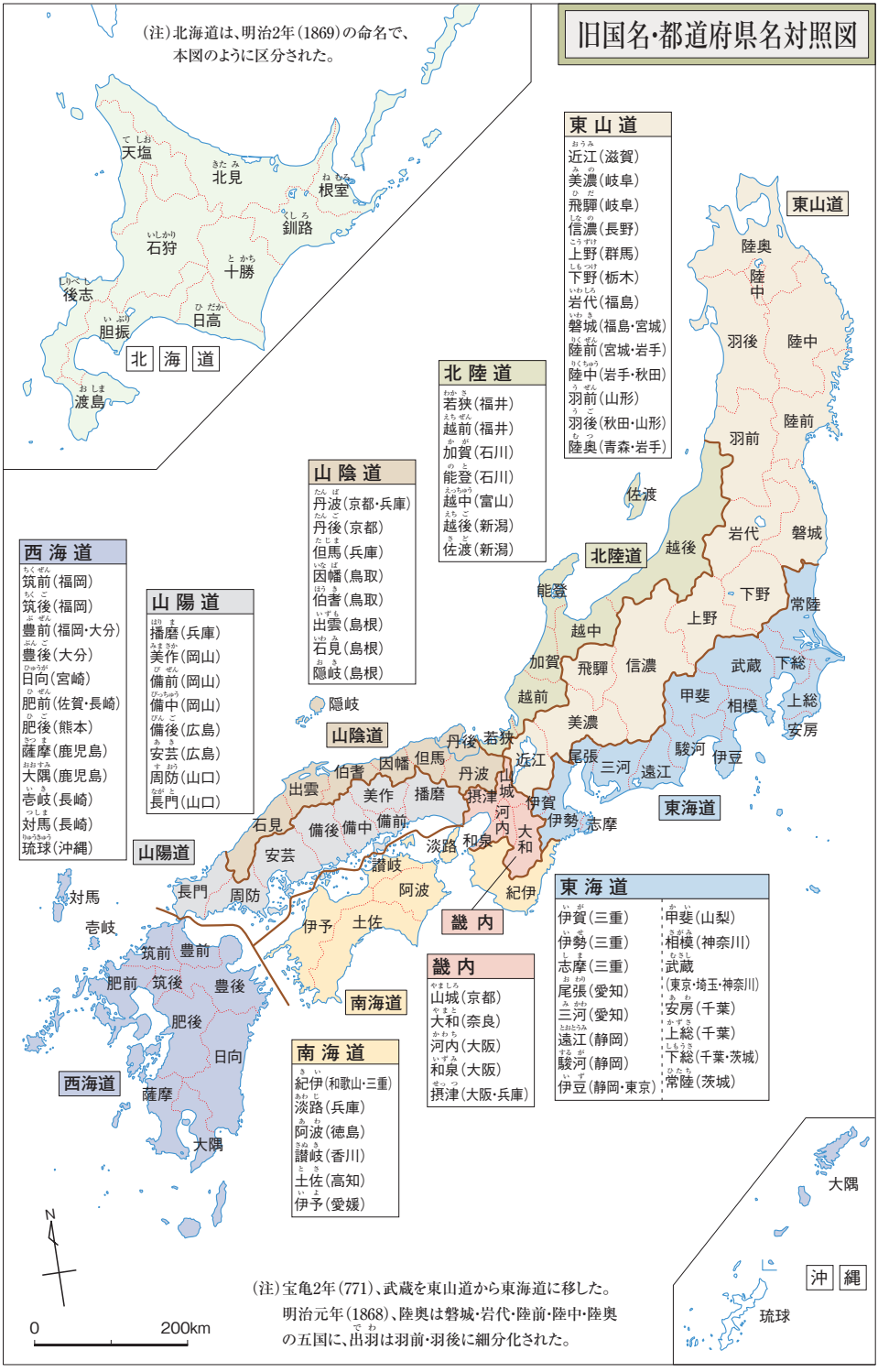
◀平安京条坊図






京都付近図
0
4
8km
琵琶湖
(淡海の海)
かたた
寂光院
三千院
大尾山
大原
金毘羅山
貴船山
鞍馬山
貴船神社
鞍馬寺
くらま
十三石山
道風神社
小町寺
実相寺
小野
八瀬
横川中堂
三石岳
日吉神社
延暦寺
比叡山
ひえいざん
さかもと
御津の浜
梅ノ尾
高山寺
愛宕山
槇ノ尾
神護寺
京都市
上賀茂神社
円通寺
たからがいけ
やせひえいざんぐち
修学院離宮
曼珠院
からさき
唐崎
志賀の浦
高雄
清滝
嵯峨野
竜安寺
金閣寺
大徳寺
紫野
雲林院
下鴨神社
鷹ヶ峰
詩仙堂
北白川
小倉山
大覚寺
仁和寺
北野神社
でまちやなぎ
吉田
銀閣寺
広沢池
落柿舎
双ヶ丘
妙心寺
御所
平安神宮
鹿ヶ谷
大文字山
草津市
大津市
天竜寺
嵐山
広隆寺
二条城
南禅寺
三井寺
打出の浜
あらしやま
法輪寺
太秦
さんじょう
おおみや
八坂神社
おおつ
松尾大社
西芳寺
やましな
清水寺
逢坂の関跡
粟津
瀬田
西本願寺
東本願寺
鳥辺野
元慶寺
山科
桂離宮
かつら
東福寺
音羽山
いしやま
東寺
きょうと
泉涌寺
栗栖野
新幹線
鳥羽
いなり
伏見稲荷
小野
大原野神社
勝持寺
(花の寺)
向日市
勧修寺
石山寺
長岡宮跡
醍醐寺
深草
鳥羽離宮
桃山城
醍醐山
光明寺
伏見
桃山陵
日野
岩間寺
長岡京市
法界寺
長岡天満宮
木幡
万福寺
五智峰
淀
一口
巨椋池干拓地
喜撰山
三室戸寺
水無瀬神社
うじ
神応寺
平等院
宇治市
石清水八幡宮
八幡市
交野天神
円福寺
じょうよう
城陽市
たかつき
渚の院跡
枚方市
きょうたなべ
寝屋川市
ねやがわし
きさいち
交野市
石宝殿古墳
精華
来迎寺
奈良線
山城
山陰本線
東海道本線
高槻市
高速道路

旧国名・都道府県名対照図



精選

言語文化

明治書院

はじめに

小石を集める

小川洋子（おがわようこ）

いつ、どんな時でも、手元に本があれば、心が落ち着く。自分が愚かに思えるとき、わけもなく、一人きりだと感じてしまうとき、ただぼんやりとして心が空っぽのとき、何でもいい、本を一冊手に取ってページをめくるだけで、果てしもなく遠いところへ行ける。見ず知らずの、言葉も通じないはずの誰かの声が聞こえてくる。死者であろうと、架空の存在であろうと、その人の声はなぜか親しみ深く胸に響いてくる。

別に準備などはいらない。言葉の連なりに身を任せていれば、新たな地平に立っている自分に気づける。そこは境界線のない場所だ。善と悪、美と醜、未来と現在と過去、生と死。あらゆる区分けから解き放たれている。文学の世界だけに許される自由が、目の前に広がっている。

両手に載るほどの、小さな四角でしかない本の中に、なぜこれほどの出会いが隠れているのか、時々不思議に思う。例えば、作者もよく分からない『竹取物語（たけとりものがたり）』[1]。

日本最古の物語とされながら、少しも古びていない。それどころか、竹を通路として宇宙とつながる壮大な組み立てには、SF小説を読むような驚きがある。

千年以上昔の人々と自分は、同じ月を眺めている。そんな当たり前の事実に、改めて思い至る。人類の足跡がそこにあると知っている私たちでも、泣きながら月へ帰ってゆくかぐや姫の物語を、非科学的だと否定できない。時に私たちは、大事な死者や、遠くにいて会えない愛しい人の姿を、月の光の中に見いだし、悲しみを癒やそうとする。現実の境界を超えた先に、救いを求める。『竹取物語』が生まれた頃の人々と、全く同じように。

あるいは『[2]今昔物語集』を出典として[3]芥川龍之介が描いた『[4]羅生門』。平安時代と大正と現代が、一つの物語によって結ばれている。その結び目は滑らかで、時代の隔たりなどみじんもない。目まぐるしく変化する登場人物たちの心理を追いかけるうち、自然と羅生門の楼の風景が浮かび上がってくる。死体の髪の感触がてのひらに伝わってくる。いつしか、自分の中に潜む、ごまかしきれない悪の気配に気づいて立ちすくむ。

ただし読者は、『羅生門』に描かれる人々を裁く役目は負っていない。非難したり、正そうとしたりする必要もない。文学の世界にいる限り、私たちは善悪と

1『竹取物語』
五〇ページ参照。
2『今昔物語集』
一九五ページ参照。
3芥川龍之介
一九三ページ参照。
4『羅生門』
一八二ページ参照。

いう社会的な基準よりももっと自在な、懐の深い視野を持つことができる。羅生門の楼にいる下人を鏡とし、そこに写る自分を見つめ、自身でも意識していなかった心の奥底に、光を当てる。心を豊かに掘り起こしてくれる鏡が、文学の中にはいくつもある。

読書は無言の対話だ。声なき声だからこそ、遠くまで届く。日常生活の言葉が、家族や友人や社会など、他者へ向かって発せられるのに比べ、文学の言葉は読み手の内面へ、どこまでも深く届いてゆく。一見、地味な行為だと誤解されるが、一人の読み手の中では、劇的な変化が起こっている。もしかするとそれは、ほかの人と共有するのは難しい種類の変化かもしれない。逆に言えば、文学に感動するのは、誰にも奪えない自分だけの宝石を手にしているのと同じなのだ。

しかし、宝石は最初から磨き上げられた完成品として、光を放っているわけではない。一度読んで、単なる小石の感触しか残らず、そのまま忘れ去ってしまう場合も多い。それなのに、どれほど長い年月が過ぎようと、本のほうは読み手を覚えている。その人にとって大切な本とは、再び巡り合えるよう、文学の偶然が取り計らっている。

再会したとき、本が見せる新たな光に驚かされる経験は、神秘に満ちている。

味気ない小石が、いつの間にか輝く宝石に変わっている。一冊の本が、自分だけのために辛抱強く待ち続けてくれていたのだ、という格別な喜びに浸ることができる。

若いうちにどんどん小石を集めておけばいい。目先のもろもろは脇に置いて、ゆったり文学と付き合えばいい。小石たちは時空を超えた永遠の流れの中に、自分の居場所を作るための星座となる。いつか宝石のように光を放ち、心の内を照らしてくれる。

5



小川洋子（おがわ ようこ） 昭和三十七（一九六二）年〜。小説家。岡山県の生まれ。言葉になる前の心の機微や思いを小説という形で表現した作品が多く、日常・非日常が織り成す繊細な世界を表現する。作品に『揚羽蝶（あげはちょう）が壊れる時』『妊娠カレンダー』『密（ひそ）やかな結晶』『薬指の標本』『博士の愛した数式』『ミーナの行進』『人質の朗読会』などがある。本文は本書のための書き下ろし。

目次

はじめに
小石を集める（小川洋子）——2

古文編

1 古文入門

宇治拾遺物語
児のそら寝——16
古文を読むために❶ 歴史的仮名遣い　古語と現代語
五十音図——18
絵仏師良秀——20
古文を読むために❷ 文・文節・単語　品詞　古文の特徴
古語辞典の引き方——22
十訓抄
大江山——24
古文を読むために❸ 活用・活用形　動詞　形容詞
形容動詞　係り結び——26
◇単元の言語活動 1 ◆声に出して古文を読む——28

2 随筆

徒然草（兼好）
亀山殿の御池に——30
大事を思ひ立たん人は——32
奥山に猫またといふものありて——34
花は盛りに——36
参考 つれづれなるままに——38
古文を読むために❹ 助動詞——40
古文の窓 1 無常の世を生きる——43
◇単元の言語活動 2 ◆作者の主張を読み取る——44

3 物語 〈1〉

竹取物語
かぐや姫の生ひ立ち——46
かぐや姫の嘆き——48
古文を読むために❺ 助動詞　注意すべき言葉遣い——51
古文の窓 2 古典文学と月——54
◇単元の言語活動 3 ◆月が詠まれた和歌を鑑賞する——56

4 物語 ◇2

伊勢物語
芥川 …… 58
東下り …… 60
筒井筒 …… 64
◆読み比べ◆沖つ白浪（『大和物語』） …… 67
梓弓 …… 69
古文の窓3 平安文学の恋 …… 71
◇単元の言語活動4 ◆視点を変えて、物語を書き換える …… 72

5 日記

土佐日記（紀貫之）
門出 …… 74
阿倍仲麻呂 …… 77
帰京 …… 79
古典に関する文章 男の文章と女の文章（橋本治） …… 81
古文の窓4 真名と仮名 …… 83
◇単元の言語活動5 ◆変体仮名を読む …… 84

6 物語 ◇3

平家物語
木曽の最期 …… 86
参考 祇園精舎 …… 94
古文を読むために6 敬語　音便 …… 95
古文の窓5 和文と和漢混交文 …… 97
◇単元の言語活動6 ◆人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する …… 98

7 近世の文学

おくのほそ道（松尾芭蕉）
旅立ち …… 100
平泉 …… 103
古文の窓6 写本の本文――「青々たり」と「草青みたり」 …… 105
種の浜 …… 106
玉勝間（本居宣長）
田舎に雅言の残れること …… 108
◇単元の言語活動7 ◆歴史を再発見し、随筆を書く …… 111
文学と芸能 …… 113

漢文編

1 漢文入門

なぜ漢文を学ぶのか …… 116
訓読の世界 …… 117
漢和辞典の使い方 …… 124
◇単元の言語活動 1 ◆熟語の意味「創作」ゲームを行う …… 125
故事成語
蛇足（戦国策） …… 126
漢文の窓 1 中国の寓話 …… 127
朝三暮四（列子） …… 128
断腸（世説新語） …… 130
漢文の窓 2 現在も使われる故事成語 …… 131
◇単元の言語活動 2 ◆故事成語を「五・七・五」で表現する …… 132

2 史伝

十八史略（曽先之）
先従レ隗始 …… 134
鶏口牛後 …… 136
管鮑之交 …… 138
臥薪嘗胆 …… 140
古典に関する文章 中国英傑伝（海音寺潮五郎） …… 144
◇単元の言語活動 3 ◆登場人物の魅力を紹介する …… 146

3 詩文

詩
絶句
四季 春暁（孟浩然）・参考 春あけぼの（土岐善麿） …… 148
江南春（杜牧） …… 149
秋風引（劉禹錫）・江雪（柳宗元） …… 150
送別 送二元二使一安西一（王維）・勧レ酒（于武陵）・参考 コノサカヅキヲ（井伏鱒二） …… 151
望郷 涼州詞（王翰）・静夜思（李白） …… 151

律詩
春望（杜甫）——152
八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一（白居易）——153
日本漢詩
富士山（石川丈山）・鳥児塞宮（成島柳北）——154
漢詩の手引き——156
文
雑説（韓愈）——158
春夜宴二桃李園一序（李白）——160
古典に関する文章 名月——八月の詩（一海知義）——162
単元の言語活動 4 ◆漢詩漢文の表現の特徴をつかむ——164
4 思想
論語
学問 六章——166
政治 四章——167
人生 八章——169
慎思録（貝原益軒）——172
笑話出思録（乾篤軒）——173
古典に関する文章 知るということ（金谷治）——174
単元の言語活動 5 ◆『論語』の言葉を今に生かす——176



近現代文編

参考 明治期の文語文と口語文 177
大つごもり（樋口一葉）
我牢獄（北村透谷）
敢て同胞兄弟に望む（清水豊子）
怪談牡丹灯籠（三遊亭円朝）
編新 浮雲（二葉亭四迷）

1 近代〈1〉

羅生門（芥川龍之介） 182
◆読み比べ◆ 羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語（『今昔物語集』） 195
城の崎にて（志賀直哉） 196
◆単元の言語活動 1 ◆ フィクションの特性を話し合う——小説の世界を観察し、思い切って参加する—— 208

2 近代 2
待つ（太宰治） 210
うそとパン（幸田文） 215
写真班（梅崎春生） 221
単元の言語活動 2 作家の工夫を意識して文章を書く——文学が伝えているのは、ストーリーだけではない—— 232
3 現代
青が消える（村上春樹） 234
離さない（川上弘美） 243
単元の言語活動 3 話し合うと何が起こるか確かめる——あなたにとって大切なものは何ですか—— 256

詩歌編

1 和歌・短歌

和歌
万葉集 258
古今和歌集 260
後拾遺和歌集 262
新古今和歌集 262

和歌の修辞 265

詩歌の窓 見立て 267

短歌
正岡子規・与謝野晶子・若山牧水・石川啄木・斎藤茂吉・齋藤史・寺山修司・春日井建・俵万智 268

◇単元の言語活動 1 ◆折句の技法を用いて、短歌を作る 273

2 俳諧・俳句

俳諧
松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶 276

俳句
正岡子規・高浜虚子・種田山頭火・飯田蛇笏・久保田万太郎・水原秋桜子・橋本多佳子・永田耕衣・西東三鬼・中村草田男・山口誓子・富沢赤黄男・星野立子・加藤楸邨・能村登四郎・石田波郷・渡辺白泉・金子兜太・飯田龍太・鷹羽狩行・高野ムツオ 278

俳句の修辞 282

俳句の英訳（長谷川櫂） 283

◇単元の言語活動 2 ◆HAIKUを鑑賞する 284

3 近現代詩

小景異情（室生犀星） 286
およぐひと（萩原朔太郎） 288
永訣の朝（宮沢賢治） 289
参考 人生の〈救い〉としての詩（鮎川信夫） 293
汲む（茨木のり子） 294

◇単元の言語活動 3 ◆文語定型詩と口語自由詩を読み比べる 298

おわりに
大人にはわからない日本文学史（高橋源一郎）―― 299
◇単元の言語活動 ◆「自分の文学史」を作る―― 307

付録

文法要覧―― 308
日本文学史年表―― 318
重要古語の解説および索引―― 327
漢文の基本句形―― 333
漢文の重要単語―― 335
常用漢字表―― 337
読書のすすめ―― 352
参考図録　封筒・はがきの書き方　頭語・結語の例（手紙文）
敬称の例（手紙文）
原稿用紙の使い方―― 356
月の異名と二十四節気　陰暦月齢表
十干・十二支・干支　古方位　古時刻　江戸時代の不定時法



この教科書で学習するに当たって

1 筆者名のないものは、編集委員が書き下ろしたものである。

2 漢字・仮名遣いの使用について、

(1) 漢字は、原則として「常用漢字表」及び「付表」による漢字を使用した。これによらない場合は、原則として教材ごとの初出の際に読み方を示した。

(2) 仮名遣いは、古文、漢文の訓読、文語体を用いた近現代の文章、短歌、俳句、詩については歴史的仮名遣いを使用した。

3 引用した箇所を示す場合、本文ページを漢数字で、行を算用数字で示した。(例)(一三・10)

4 注の欄には、次の四種類を掲げた。

(1) 注　番号を付けて、主として固有名詞、外来語、難語句などを解説した。

(2) 注意点　本文読解上の注意点について、本文中に●印で示し、脚注に問の形で掲げた。

(3) 注意する語句　＊印を付けて示した。古文・古典詩歌(和歌・俳諧)、漢文では、重要単語を掲げ、付録にそれぞれ「重要古語の解説および索引」「漢文の重要単語」を設けた。近現代の文章・詩歌(短歌・俳句・近現代詩)では、知っておきたい語句、慣用句などを掲げた。

(4) 重要句形　漢文で▼印を付けて示した。重要句形を掲げ、付録に「漢文の基本句形」を設けた。

5 ＊深い学びのために＊ ◇**学習のポイント** 「読むこと」の学習領域に関する問題を中心に、「書くこと」の学習領域に関する問題を随時加えた。◇**言葉と表現** 言葉の特徴や使い方に関する問題と、語句や文法の知識の整理を中心とする問題を設けた。◇**言語活動** 各教材に関する実践的な活動を設けた。◇**漢字熟語** 近現代の文章では、本文に出てくる重要な漢字熟語をまとめた。書体は、書く便宜を考慮し、教科書体(筆写体)を用いた。

6 古文の窓 漢文の窓 詩歌の窓 各教材で学習した内容を、より深めることができるコラムを掲げた。

7 **古文を読むために** 古文を読むために必要な語句や文法のきまりをまとめた。

8 古典に関する文章 古文、漢文の教材と関連するテーマを扱う、近代以降の文章を掲げ、◇**学習のポイント** を設けた。

9 参考 各教材を理解するうえで参考となる事柄を掲げた。

10 ◇単元の言語活動 1 各単元のまとめとなる、実践的な活動を設けた。

11 教材を理解するうえで参考となる音声を用意した。

1 古文入門

- 説話のおもしろさを味わう。
- 文語のきまりを理解し、古文に親しむ。
- 歴史的仮名遣いの読み方を理解し、古文を音読する。

宇治拾遺物語　児のそら寝
絵仏師良秀
大江山

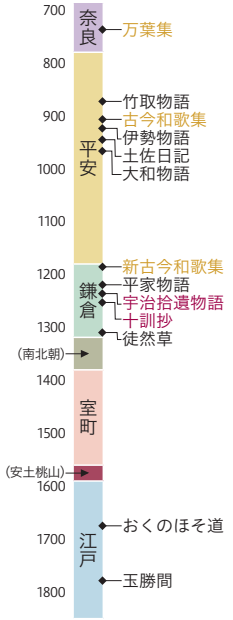
十訓抄

古文を読むために❶

1 歴史的仮名遣い　2 古語と現代語　3 五十音図

古文を読むために❷

1 文・文節・単語　2 品詞　3 古文の特徴　4 古語辞典の引き方



古文を読むために❸

1 活用・活用形　2 動詞　3 形容詞　4 形容動詞
5 係り結び

単元の言語活動 1

声に出して古文を読む



不動明王二童子像
中央に炎を背負う不動明王、左右に童子を配置する。

宇治拾遺物語

児のそら寝

今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。さりとて、し出ださむを待ちて寝ざらむも、*わろかりなむと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

この児、さだめておどろかさむずらむと待ちゐたるに、僧の、「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへむも、待ち



慕帰絵詞

1 **今は昔**　今となっては昔のことだが。説話の冒頭などの決まり文句。

2 **比叡の山**　比叡山。京都府と滋賀県との境にある。ここでは、その山にある延暦寺を指す。

3 **児**　寺院で召し使われた少年。学問や行儀作法を修得するために貴族や武家の子弟が児として預けられることも多かった。

4 **かいもちひ**　ぼた餅の類い。

5 **し出ださむを**　作り上げるのを。

問 **「思ひて」「待ちけるに」「ひしめき合ひたり」の主語は、それぞれ誰か。**

6 **おどろかさむずらむ**　起こしてくれるだろう。

7 **もの申しさぶらはむ**　もしもし。誰かに話しかけたりするときの言葉。

8 **待ちけるかともぞ思ふとて**　待っていたのかと思うといけないと考えて。

けるかともぞ思ふとて、いま一声(ひとこゑ)呼ばれていらへむと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。幼き人(をさな)は寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、あな、わびしと思ひて、いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ、ずちなくて、無期(むご)ののちに、「えい。」といらへたりければ、僧たち、笑ふこと限りなし。

問「思ふ」の主語は誰か。

9 **な起こしたてまつりそ** お起こし申し上げるな。「な…そ」で、禁止を表す。

10 **起こせかし** 起こしてくれよ。

11 **ずちなくて** どうしようもなくて。

12 **無期ののちに** かなり時間がたってから。

＊
わろし よし　申す さぶらふ
おどろく たまふ　いらふ な…そ
たてまつる あな　わびし

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

❖学習のポイント

1 児が心の中で思っていることが書かれている部分を、本文中から全て抜き出し、心情がどのように変化しているか、まとめてみよう。

❖言葉と表現

1 次の語の品詞と意味を、古語辞典で調べてみよう。また、現代語の意味との違いについて、まとめてみよう。

(1) 念じ（一七・1）（注）「念ず」で調べる。

(2) わびし（一七・3）

❖言語活動

1 「僧たち、笑ふこと限りなし。」（一七・5）とあるが、僧たちが笑ったのはなぜか、話し合ってみよう。

古文を読むために 1

1 歴史的仮名遣い

古文では、平安時代中期の発音に基づいた**歴史的仮名遣い**が用いられるが、これには、ふだん私たちが用いている**現代仮名遣い**とは異なる点が幾つかある。

歴史的仮名遣いで書かれた文章を読む場合、次のようなことに注意が必要である。

1 語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。

例 くふ（食ふ）→クウ
おもへども（思へども）→オモエドモ

2 ワ行の「ゐ・ゑ・を」は「イ・エ・オ」と読む。

例 まちゐたるに（待ちゐたるに）→マチイタルニ
ひとこゑ（一声）→ヒトコエ
をさなきひと（幼き人）→オサナキヒト

3 助動詞「む」や助詞「なむ」などの「む」は「ン」と読む。

例 いざ、かいもちひせむ（→ン）。（一六・2〜3）
もと光る竹なむ（→ン）一筋ありける。（四六・3〜4）

4 「くわ」「ぐわ」は「カ」「ガ」と読む。

例 くわかく（過客）→カカク
ぐわんじつ（元日）→ガンジツ

5 母音が重なる場合、次のように長音で読む。

あう
あふ　→オー〔au→ō〕

例 やうやう（→ヨーヨー）豊かになりゆく。（四六・10〜11）
子になり給ふ（→タモー）べき人なめり。（四六・6〜7）

♦「給ふ」は「タマウ」と読んでもよい。

いう
いふ　→ユー〔iu→yū〕

例 いうげん（幽玄）→ユーゲン　いふ（言ふ）→ユー

えう
えふ　→ヨー〔eu→yō〕

例 えう（要）→ヨー　けふ（今日）→キョー

おう
おふ　→オー〔ou→ō〕

例 おうな（嫗）→オーナ　かげろふ（陽炎・蜻蛉）→カゲロー

2 古語と現代語

古文に用いられている語（**古語**）には、「今」「聞く」などのように、現代でもほとんど同じ意味で用いられているものもある。しかし、現代では使われなくなった**古文特有の語**や、**現代語と形は同じでも意味の異なる語**がある。

例えば、「わろかりなむ」（一六・4）の「わろし」は、「よくない」という意味であり、「いらへたりければ」（一七・5）の「いらふ」は、「返事をする」という意味であるが、これらは、現代では使われなくなった古文特有の語である。

さらに、古文特有の助動詞や語法といった文法事項にも注意が必要である。「児（ちご）ありけり。」（一六・2）の「けり」などの助動詞や、「な起こしたてまつりそ。」（一七・2）の「な…そ」の禁止の表現などがこれに当たる。

また、現代語と形は同じでも意味の異なる語の例としては、「おどろく」があげられる。「おどろく」は、現代では「びっくりする」の意味で用いられるが、「おどろかせたまへ。」（一六・10）のように、古文では、「目を覚ます」等の意味でも用いられた。

3 五十音図

同じ母音を持つ仮名を横に、同じ子音を持つ仮名を縦に配列したものを**五十音図**という。横の並びを段といい、縦の並びを行という。

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を

全ての仮名を一度ずつ用いて作られた「いろは歌」がある。

いろはにほへと　ちりぬるを
わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて
あさきゆめみし　ゑひもせす

色は匂（にほ）へど　散りぬるを
我が世誰（たれ）ぞ　常ならむ
有為（うゐ）の奥山　今日越（けふこ）えて
浅き夢見じ　酔（ゑ）ひもせず

絵仏師良秀

これも今は昔、絵仏師[1]良秀[2]といふありけり。家の隣より、火出できて、風おしおほひて、せめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるを[3]ことにして、向かひのつらに立てり。

見れば、すでに我が家に移りて、煙・炎、[4]くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちてながめければ、「あさましきこと。」とて、人ども、来とぶらひけれど、騒がず。「いかに。」と、人、言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、[5]しつるせうとくかな。年ごろは、わろく書きけるものかな。」と言ふときに、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。あさましきことかな。[6]物のつきたまへるか。」と言ひければ、「[7]なんでふ、物のつくべきぞ。年ごろ、[8]不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だによく書きたて

1 **絵仏師**　仏像を描くことを専門にする画家。仏画師。
2 **良秀**　伝未詳。
3 **ことにして**　よいことにして。満足して。
4 **くゆりけるまで**　くすぶり出したところまで。
問 **人々が「あさましきこと。」「いかに。」と言ったのは、それぞれ、どのようなことに対してか。**
5 **しつるせうとくかな**　大変なもうけものをしたなあ。
6 **物**　怨霊や鬼など、人にとりついて正気を狂わせると考えられていた存在。
7 **なんでふ**　どうして。「なにといふ」が変化した形。
8 **不動尊の火炎**　不動尊の像を描くとき、周囲に描き添える火炎。「不動尊」は、一切の悪や煩悩を滅ぼすとされる諸尊の一つ。不動明王ともいう。
問 **「この道」とは、何のことか。**

まつらば、百千の家も出で来なん。[9]わ党たちこそ、[10]させる能もおはせねば、物をも*惜しみたまへ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

その後にや、良秀が[11]よぢり不動とて、今に、人々、*めで合へり。



不動明王像（良秀様）

9 わ党たち　お前さんたち。
10 させる能　これといった才能。
11 よぢり不動　不動尊の火炎の形がよじれるような曲線で描かれていたことから、名付けられたのであろう。

*
おはす　さながら　おほかた　ながむ
あさまし　とぶらふ　いかに　あはれ
年ごろ　悪し　心得　世　惜しむ　めづ

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 見舞いに来た人々は、絵仏師良秀に対してどのような感情を持っているか。また、その感情はどのように変化したか。順を追ってまとめてみよう。

❖言葉と表現

1 次の傍線部の語の意味の違いを調べ、それぞれ現代語訳してみよう。

(1) わろく書きけるものかな。（二〇・10）　(2) 悪しく書きけるなり。（二〇・13）

❖言語活動

1 絵を描くことに対して、絵仏師良秀はどのような考えを持っているか、まとめてみよう。また、それについてどのように思うか、話し合ってみよう。

宇治拾遺物語　説話集。編者未詳。十三世紀前半の成立か。「鬼に瘤とらるる事」などの多様な説話、百九十七編を収める。本文は『新日本古典文学大系』によった。

古文を読むために 2

1 文・文節・単語

現代語と同様に、古文においても、文章は、**文・文節・単語**に分けられる。

文　ひとまとまりの判断や感情を表す、一続きの言葉の連なり。言語を用いた行為の最小単位。

文章　まとまった思想や感情を幾つかの文で表したもの。

文節　文を、不自然にならないよう、意味上の最も短い単位に区切ったもの。

単語　文を組み立てる要素としての、言語の最小単位。

文を単語、文節に区切ると次のようになる。

例 人の／書か／する／仏も／おはし／けり。（二〇・3〜4）

◆ —→単語で区切った場合。／→文節で区切った場合。

単語は、次の二種のいずれかに分類される。

▼**自立語**　それ単独で、ある意味を成し、単独で文節になることができる語。

▼**付属語**　それだけでは意味を成さず、自立語の下に付いて文節を構成する語。

2 品詞

単語は、次の基準で表のように**十種の品詞**に分類される。

1 **自立語か付属語か。**

2 **活用**（変化）するか、しないか。

3 単独でどのような働きをする文節になるか。

自立語か付属語か	活用するか活用しないか	単独でどのような働きをする文節になるか	言い切りの語尾	品詞
自立語	活用する	述語になる＝用言	ウ段（「あり」などを除く。）	動詞
			「—し」「—じ」	形容詞
			「—なり」「—たり」	形容動詞
	活用しない	主語になる＝体言		名詞
		主語にならない	修飾語になる	用言を修飾	副詞
				体言を修飾	連体詞
			修飾語にならない	接続語になる	接続詞
				独立語になる	感動詞
付属語	活用する				助動詞
	活用しない				助詞

3 古文の特徴

「古文を読むために1」（一八〜一九ページ）にあるように、古文では仮名遣いなどに特徴がある。そのほかにも、古文の特徴として、主語を表す助詞「が」や目的語を表す助詞「を」、さらには主語や目的語そのものが明示されていない文が多い、ということがあげられる。

1 助詞の省略

例 比叡の山に児（が）ありけり。（一六・2）

かのこと（を）沙汰しおきて（三二・3〜4）

2 主語の省略

例 （小式部内侍が）御簾より半らばかり出でて（二四・9）

3 目的語の省略

例 や、（児を）な起こしたてまつりそ。（一七・2）

はや一口に（女を）食ひてけり。（五九・1）

場面を理解するためには、前後の文をよく読み、省略されている語がある場合は、それを補って考える必要がある。

4 古語辞典の引き方

古語辞典は、基本的には国語辞典と同じように引くことができるが、次のようなことに注意する必要がある。

1 歴史的仮名遣いで引く

例 煩ひ（わづらひ）　なほ

2 活用する語の引き方

(1) **動詞**　終止形に直して引く。終止形は、一部の例外（「あり」など）を除いて、ウ段の音になる。

例 寝→寝　おどろか→おどろく　念ずる→念ず

(2) **形容詞**　終止形に直して引く。終止形は、「…し」「…じ」の形になる。

例 わろかり→わろし　をさなき→をさなし

あまねく→あまねし　むつまじき→むつまじ

(3) **形容動詞**　語幹で引く古語辞典が多い。

例 ほのかに→ほのか　つれづれなる→つれづれ

(4) **助動詞**　終止形に直して引く。

⬇四〇〜四二ページ「古文を読むために4」参照。

調べたい語を古語辞典で引くと、意味が複数あげられていることがある。その場合は、どの意味がふさわしいのか、前後の文脈を確かめながら決めることが必要となる。

十訓抄（じっきんしょう）

大江山（おほえやま）

1和泉式部（いづみしきぶ）、2保昌（やすまさ）が妻（め）にて、3丹後に下りけるほどに、京に歌合（うたあはせ）4ありけるに、5小式部内侍（こしきぶのないし）、歌詠みにとられて詠みけるを、7定頼中納言（さだよりのちゅうなごん）、たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「丹後へ遣はしける人は参（まゐ）りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ。」と言ひて、8局（つぼね）の前（まへ）を過ぎられけるを、御簾（みす）より半（なか）らばかり出（い）でて、僅（わづ）かに9直衣（なほし）の袖をひかへて、

10大江山いくのの道の遠（とほ）ければまだふみもみず11天（あま）の橋立（はしだて）

10　5



天の橋立

1 **和泉式部**　生没年未詳。歌人。初め橘道貞（たちばなのみちさだ）の妻となり、小式部内侍を産んだ。後に藤原保昌（ふじわらのやすまさ）の妻となった。

2 **保昌**　藤原保昌。九五八年～一〇三六年。丹後の国の国司などを歴任した。

3 **丹後**　現在の京都府北部。

4 **歌合**　参加者が左右の組に分かれ、決められた題で詠んだ和歌を出し合い、その優劣を競う催し。

5 **小式部内侍**　生年未詳～一〇二五年。歌人。

6 **歌詠みにとられて**　歌合の詠み手として選ばれて。

7 **定頼中納言**　藤原定頼。九九五年～一〇四五年。歌人。藤原公任（きんとう）の息子。

8 **局**　（女房たちの）部屋。

問 **「過ぎられけるを」「出でて」「ひかへて」の主語は、それぞれ誰か。**

9 **直衣**　貴族の男性が着る平服。

10 **大江山**　現在の京都市と亀岡市との境にある山。一説に、生野（いくの）（現在の京都府福知山市生野）の北の丹後にある大江山。

と詠みかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに。●かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて逃げられけり。

小式部、これより、歌詠みの世に*おぼえ出できにけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、[12]かの卿(きやう)の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。

5

11 **天の橋立**　現在の京都府宮津(みやづ)市にある砂州。丹後の国の名勝地。

問 **「かかるやう」とは、どういうことか。**

12 **うちまかせての理運のこと**　ごく普通で、当然のこと。

＊

遣はす　参る　心もとなし　おぼす
かかる　おぼえ

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◆学習のポイント　[1]「丹後へ遣はしける人は参りたりや。」（二四・6〜7）という言葉には、誰の、どのような気持ちが込められているか、考えてみよう。

[2]「大江山」の歌で、小式部内侍は定頼にどのようなことを伝えようとしたのか、まとめてみよう。

◆言語活動

◆言葉と表現

[1]本文中から形容詞を全て抜き出して、活用の種類と活用形をまとめてみよう。

[1]「大江山」の歌について、

(1)「いくの道」「ふみもみず」には、それぞれ二つの意味が掛けられている。どのような意味が掛けられているか、まとめてみよう。

(2)この歌のどのような点がすばらしいと考えられるのか、話し合ってみよう。

十訓抄　説話集。編者は六波羅二藤左衛門(ろくはらにとうざえもん)入道（伝未詳）といわれる。建長四（一二五二）年成立。十種の教訓のもとに約二百八十編の説話を収める。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

古文を読むために 3

1 活用・活用形

例えば、「言ふ」は「言へば」のように、語の形が変化する。これを**活用**という。活用したそれぞれの形を**活用形**といい、次の**六種**に分類される。

活用形	活用形の名称の意味	下に続く主な語
未然形	まだその事態になっていない、という内容を表す形。	助動詞「ず・む」
連用形	用言などに連なる形。	助動詞「けり・たり」 助詞「て」
終止形	言い切りの形。	（言い切る）
連体形	体言などに連なる形。	名詞「こと・とき」
已然形（いぜん）	すでにその事態になった、という内容を表す形。	助詞「ど・ども」
命令形	命令の言い切りの形。	（命令で言い切る）

活用形については、次の点に注意する。

(1) 現代語の「仮定形」の位置に、古文では「**已然形**」が置かれ、働きも異なる。

(2) 活用する語（活用語）は、変化しない部分を**語幹**、変化する部分を**語尾**（**活用語尾**）という。

例 言（語幹）は（語尾）ず　言（語幹）へ（語尾）（已然形）ども

2 動詞

用言のうち、動作・作用・存在などを表し、言い切りの末尾が原則としてウ段（ラ行変格活用の動詞のみイ段）の語を**動詞**という。古文の動詞は活用のしかたから次の**九種**に分類される。

活用の種類	活用のしかた	例語
四段活用	ア〜エの四段	思ふ　知る
上二段活用	イ・ウの二段	落つ　過ぐ
下二段活用	ウ・エの二段	上ぐ　寝（ぬ）
上一段活用	イ段のみの一段	着る　見る
下一段活用	エ段のみの一段	蹴る
カ行変格活用	カ行の三段	来（く）す　おはす
サ行変格活用	サ行の三段	死ぬ　往（い）ぬ
ナ行変格活用	ナ行の四段	あり　をり
ラ行変格活用	ラ行の四段	

⬇活用表は三〇八〜三一〇ページ「文語・口語動詞活用表」参照。

3 形容詞

用言のうち、性質や状態、人の感情などを表し、「―し」で言い切る語を**形容詞**という。形容詞には、連用形の活用語尾が「―く」になる**ク活用**と、「―しく」になる**シク活用**がある。

活用の種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	白し	しろ	(く)	く	し	き	けれ	○
		から	(しく)	しく	し	しき	しけれ	○
シク活用	美し	うつく	しから	しかり	○	しかる	○	しかれ

◆ク活用の形容詞は物事の客観的な性質・状態を表し、シク活用の形容詞は人の感情などの主観的な内容を表す傾向がある。

◆ク活用・シク活用のそれぞれに、本活用（点線右側）と、連用形が「かり」「しかり」になるカリ活用（点線左側）の二系統がある。カリ活用は補助活用ともいい、下に助動詞を続ける場合などに用いられる。

◆シク活用の形容詞には、「いみじ」「すさまじ」などのように活用語尾が「じ」と濁音化しているものもある。

4 形容動詞

用言のうち、性質や状態を表し、「―なり」または「―たり」で言い切る語を**形容動詞**という。前者を**ナリ活用**と呼び、後者を**タリ活用**と呼ぶ。

活用の種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	ほのかなり	ほのか	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	朧々（ろうろう）たり	ろうろう	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

5 係り結び

普通、文が活用語で終わるときは、終止形か命令形で結ぶ。しかし、文中に次の表の係助詞（五二ページ）がある場合、それに応じて文末（結び）の活用語が、連体形または已然形になる。これを**係り結び**という。

例 昔の人の袖の香 ぞ する（サ行変格活用動詞・連体形）（二六一・3）

例 初め終はり こそ をかしけれ。（形容詞・已然形）（三六・9）

助詞	意味	結び
や・か	疑問・反語	連体形で結ぶ
ぞ・なむ		
こそ	強意	已然形で結ぶ

◆声に出して古文を読む

いけない、寝坊だ。
時計はどこだ。
もう学校へ出かける時間じゃないか。

高校生の朝のひとこまの描写である。「時計」は平仮名で表記すると「とけい」となる。しかし、皆さんが話しているのをよく聞いてみると、「トケイ」とは聞こえないのではないだろうか。「トケー」と聞こえる。さらに、「学校」は「ガッコウ」ではなく、「ガッコー」と聞こえるし、「学校へ」の「へ」は「へ」ではなくて、「エ」と発音している。このように現代語でも表記のとおりに発音していない言葉を見つけることができる。

古文では、表記と発音との関係が、現代語よりも複雑である。古文の学習は正しく読めるようになることから始まる。古文を読むときのルールを学び、正確に読めるようにしよう。実は、古文を正確に読むと、目で見ているだけのときよりも内容が理解しやすくなる。初めはたくさん音読して、古文を滑らかに読めるようにするとよい。そうすると、声に出さなくても次第に内容が理解しやすくなっていくだろう。さあ、古文を音読してみよう。

課題 「児(ちご)のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を、声に出して読んでみよう。

1 「古文を読むために1」(一八ページ)の**1**歴史的仮名遣いの読み方のルール1〜4に当てはまる箇所を「児のそら寝」(一六〜一七ページ)「絵仏師良秀」(二〇〜二一ページ)「大江山」(二四〜二五ページ)の本文から、それぞれ指摘してみよう。

2 「古文を読むために1」の**1**歴史的仮名遣いの読み方のルール5に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘してみよう。
・その際に、1のルールと5のルールを二段階に用いている箇所に気をつける。

3 グループを作り、「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を間違えた箇所で交代しながら、順に音読してみよう。

2 随筆

- 『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉える。
- 文語助動詞の種類と用法を理解する。
- 作者の主張を読み取り、批評する。

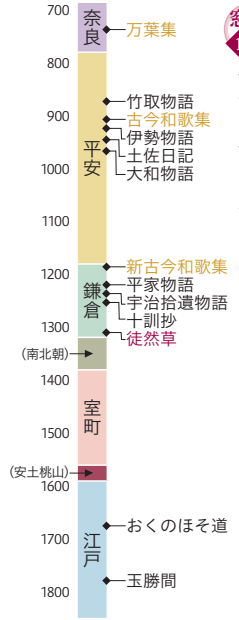
徒然草

亀山殿の御池に（第五十一段）
大事を思ひ立たん人は（第五十九段）
奥山に猫またといふものありて（第八十九段）
花は盛りに（第百三十七段）
参考 つれづれなるままに（序段）

古文を読むために ◆4

助動詞

古文の窓 ◆1 無常の世を生きる



◆単元の言語活動 2

作者の主張を読み取る



奈良絵本『徒然草』
机に向かい、筆を取る兼好。

徒然草（つれづれぐさ）

亀山殿の御池（みいけ）に

兼好（けんこう）

亀山殿[1]の御池に、大井川[2]の水をまかせられんとて、大井の土民（どみん）[4]に仰せて、水車（みづぐるま）を作らせられけり。多くの銭（あし）を給（たま）ひて、数日（すじつ）に営み出（い）だして掛けたりけるに、おほかためぐらざりければ、とかく直しけれども、つひに回らで[6]、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人（さとびと）を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結ひて[8]参らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水をくみ入るること、めでたかりけり。

よろづにその道を知れる者は、やんごとなきものなり。

（第五十一段）



水車（石山寺縁起）

1 **亀山殿**　後嵯峨（ごさが）・亀山上皇の離宮。建長七（一二五五）年に造営された。現在の天竜寺の地（京都市右京区嵯峨）にあった。

2 **大井川**　大堰川（おおいがわ）。保津川が嵐山の麓を流れる間の名。その下流は桂川（かつらがわ）という。

3 **まかせられん**　お引き入れになろう。「まかす」は池などに水を引く意。「られ」は尊敬の意。

4 **土民**　土地の住民。

5 **おほかた**　下に打ち消しの表現を伴って「全然」「少しも」の意味を表す。

6 **回らで**　回らないで。「で」は「…ないで」の意で、活用語の未然形に付く語。

問 **「いたづらに」とは、どのような様子か。**

7 **宇治**　宇治川沿いの地。現在の京都府宇治市付近。宇治川は昔から水車で有名であった。

8 **結ひて**　組み立てて。

9 **その道**　その専門。

＊
仰す　いたづらなり　召す　参らす
めでたし　やんごとなし

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1 「大井の土民」の「数日に営み出だして」（三〇・3）と「おほかためぐらざりければ」（三〇・4）に対応する「宇治の里人」の様子を、本文中からそれぞれ抜き出してみよう。さらに、「大井の土民」と「宇治の里人」の間にはどのような違いがあったのか、考えてみよう。

2 「その道を知れる者」（三〇・10）とは、どのような人のことを言うのか、話し合ってみよう。

◆言葉と表現

1 次の文を単語に分け、用言を抜き出して、それぞれ終止形に直してみよう。

(1) いたづらに立てりけり。（三〇・5〜6）

(2) やんごとなきものなり。（三〇・10）

◆言語活動

1 「その道を知れる者」にふさわしい人を、身近にいる人の中から選び、どのような点で「道を知れる」と言えるのか、発表してみよう。

大事を思ひ立たん人は

大事[1]を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかからんことの*本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。*しばし、このこと果てて、同じくはかのこと沙汰しおきて、しかしかのこと、人の嘲りやあらん、行く末難なく[2]したためまうけて、年[3]ごろもあればこそあれ、そのこと待たん、ほどあらじ、もの騒がしからぬやうになど思はんには、*えさらぬことのみいとど重なりて、ことの尽くる限りもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心あるきはは、*みなこのあらましにてぞ一期[4]は過ぐめる。

近き火などに逃ぐる人は、「しばし。」とや言ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは。*無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを、そのとき、老いたる親、*いときなき子、君の恩、人の情け、*捨てがたしとて捨てざらんや。

（第五十九段）

1 **大事**　人の一生において最も大切なこと。ここでは、仏道に入り、悟りを開くこと。

2 **したためまうけて**　前もって処理しておいて。

3 **年ごろもあればこそあれ**　「長年の間こうして（出家せずに）過ごしてきたのだから」の意か。

問 **「…など思はんには」とあるが、思うことの具体的な内容を抜き出しなさい。**

4 **一期**　一生。

問 **「無常」は、ここでは、どのような意味か。**

＊

本意　しばし　果つ　え…ず（打消）　いとど　きは　無常　いときなし　情け

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント 1「大事を思ひ立たん人」（三一・2）にとって、支障となるのはどのようなものであるか、大きく二点にまとめてみよう。

2「少し心あるきは」（三一・7）とは、どのような人であるか、話し合ってみよう。

❖言葉と表現

1 本文中の近所の火事の例は、表現上どのような効果を上げているか、考えてみよう。

❖言語活動

1「少し心あるきは」は、なぜ「みなこのあらましにてぞ一期は過ぐめる。」（三一・8）のか、考えてみよう。



徒然草絵巻

奥山に猫またといふものありて

「奥山に猫[1]またといふものありて、人を食らふなる。」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経上[2]がりて、猫またになりて、人取ることはあ[3]なるものを。」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏[4]とかや、連歌しける法師の、行願寺[5]のほとりにありけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて夜更くるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川[6]のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄り来て、*やがてかきつくままに、首のほどを食はんとす。胆心も*失せて、防がんとするに、力もなく、足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫またよや、よや。」と叫べば、家々より松[7]どもともして走り寄りて見れば、この*わたりに見知れる僧



奈良絵本『徒然草』

1 **猫また**　伝説上の動物。藤原定家（ふじわらのさだいえ）の『明月記』に「目は猫のごとく、その体は犬のたけのごとし。」とある。

2 **経上がりて**　年を経て変化して。

3 **あなるものを**　「あなる」は「あるなる」の音便「あんなる」の「ん」を表記しない形。音読するときには、「あんなる」と読む。

4 **何阿弥陀仏**　なんとか阿弥陀仏。法師の呼称を曖昧にぼかした表現。

なり。「こはいかに。」とて、川の中より抱き起こしたれば、連歌の賭け物取りて、扇、小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。*希有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

（第八十九段）

問「法師の」は、下の部分とどのような関係で続いているか。

5 行願寺　京都府京都市上京区にあった寺。その後、移転して、現在は中京区にある。

6 小川　行願寺の近くを流れていた川の名前。

7 松　たいまつ。

問「抱き起こしたれば」の主語は、誰か。

8 連歌の賭け物　連歌の会での賞品。

＊ありく　やがて　失す　わたり　希有なり

深い学びのために

学習のポイント

1 「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったか、本文中から抜き出してみよう。

2 「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動を、順を追って箇条書きにしてみよう。

言葉と表現

1 次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。

(1) 人を食らふなる。（三四・2）

(2) 山ならねども（三四・2〜3）

(3) 人取ることはあなるものを。（三四・3〜4）

(4) 見知れる僧なり。（三四・14〜三五・1）

2 最後の一文は、表現上どのような効果を上げているか、考えてみよう。

言語活動

1 作者は法師をどのような人物として描こうとしているのか。本文の描写を手がかりにして、話し合ってみよう。

花は盛りに

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。」とも、「障ることありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは、さることなれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男女の情けも、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の

1 **雨に向かひて月を恋ひ**　『類聚句題抄』の「対レ雨恋レ月」という題を踏まえる。

2 **垂れこめて…**　『古今和歌集』春下に「垂れこめて春の行方も知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり」（藤原因香）とある。「垂れこめて」とは、簾を垂らしてその中に引き籠もることを指す。

3 **詞書**　和歌の前書き。作歌の状況や趣旨などを説明したもの。

問 **「花を見て。」という詞書と比べて、ほかの二つの詞書には、どのような共通点があるか。**

4 **かたくなる人**　情緒を解さない、不粋な人。

5 **あだなる契り**　はかなく、実を結ばなかった（恋人との）約束。

6 **遠き雲居**　遠く離れた場所。

7 **浅茅が宿**　茅などが生い茂った、荒れ果てた家。

問 **「昔をしのぶ」とあるが、ここではどのようなことをしのんでいるのか。**

8 **色好む**　恋の情緒が分かる。

9 **千里の外**　はるか遠い所。『白氏文集』

影、うちしぐれたる群雲隠(むらくもがく)れのほど、またなくあはれなり。*濡(ぬ)れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。*

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨(ねや)の内ながらも思へるこそ、いと頼もしう、をかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせず*まもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には手・足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづの物、よそながら見ることなし。

（第百三十七段）



奈良絵本『徒然草』

に「三五夜中新月色　二千里外故人心」（白居易）とある。一五三ページ参照。

10 椎柴　椎の木のこと。「椎」はブナ科の常緑高木。実は食用になる。

11 白樫　ブナ科の常緑高木。葉が小さく、葉裏が白い。

12 心あらん友　情緒を解するような友。

13 閨　寝室。

14 色濃く　しっこく。

問「色濃く」と対照的に用いられている語は、ここでは、何か。

15 あからめもせず　脇目もふらず。

16 よそながら見る　それとなく見る。

＊くまなし　なほ　あはれなり　まかるかたくなり　をかし　逢ふ　あだなり　契り　かこつ　しのぶ　望月　暁　いと　影　おぼゆ　まもる

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント 1 本文で作者が好ましく思っている「花」「男女の情け」「月」の状態は、それぞれどのようなものか、まとめてみよう。

2 「よそながら見る」（三七・12〜13）とは、どのような態度のことを言うのか、考えてみよう。

◇言葉と表現 1 次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。

(1) 咲きぬべきほどの梢（三六・3）

(2) はやく散り過ぎにければ。（三六・5）

◇言語活動 1 作者の論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたをどのように考えるか、話し合ってみよう。

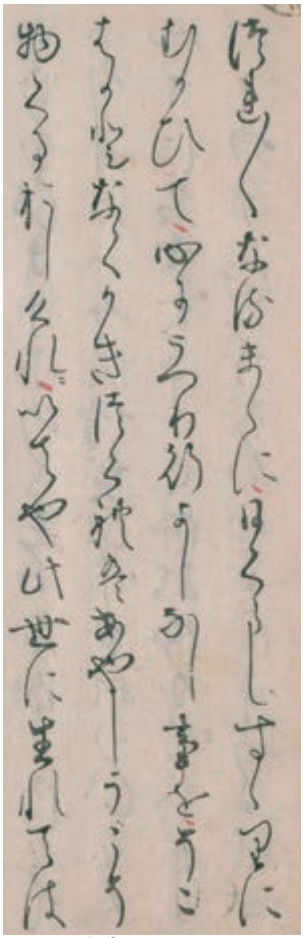
参考 つれづれなるままに

暗唱してみよう

つれづれなるままに、日暮らし硯（すずり）に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、*そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。*

（序段）

* つれづれなり　あやし



嵯峨（さが）本『徒然草』

徒然草　随筆。作者は兼好。元徳二（一三三〇）年～元徳三（元弘元）（一三三一）年頃成立。序段のほか二百四十三段から成る。自然観察、人生論、恋愛話など多様な話題に鋭い視点から批評を加え、人間や社会の諸相について深く考察している。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

兼好　弘安六（一二八三）年頃～正平七（文和元）（一三五二）年頃。歌人。俗名は卜部兼好（うらべのかねよし）とも。博学多識で歌人としても知られ、頓阿（とんあ）・浄弁・慶運とともに二条派の「和歌四天王」と称せられた。家集に『兼好法師集』がある。

古文を読むために 4

助動詞

➡ 三一二〜三一三ページ「文語助動詞一覧表」参照。

活用のある付属語を**助動詞**という。自立語やほかの助動詞に付いて、さまざまな意味を加え、叙述を助ける語である。主な助動詞の種類と用法には、次のようなものがある。

1 過去の助動詞【き・けり】

「き」は話し手（書き手）が**直接**経験した過去を表し、「けり」は**伝聞**した過去を表す場合が多い。

例 ほとりに松もありき。（七九・7）
比叡（ひえ）の山に児（ちご）ありけり。（一六・2）

2 完了の助動詞【つ・ぬ・たり・り】

「つ」は**意志的**な動作の完了を表し、「ぬ」は**自然的**な作用の完了を表す傾向がある。

例 なよ竹のかぐや姫と付けつ。（四七・12）
竹の中におはするにて、知りぬ。（四六・6）

「つ」「ぬ」には、強意（確述）の用法もある。

例 寝ざらむも、わろかりなむ（一六・4）
◆この例のように強意（確述）の場合、下に推量の助動詞を伴うことが多い。

「たり」「り」には存続の用法もある。

例 すでにし出（い）だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。（一六・6〜7）

3 打消（うちけし）の助動詞【ず】

「ず」は前の語を「…ない」と打ち消す助動詞である。

例 し出ださむを待ちて寝ざらむも（一六・3〜4）
ゆくへも知らぬわが思ひかな（二六四・4）
◆右のように、「知らぬ」と未然形に接続する場合は「ぬ」は打消の意味であるが、「知りぬ」と連用形に接続する場合は完了の意味になる。助動詞の意味の把握には、こうした**接続**に注意する必要がある。

4 推量の助動詞【む〈ん〉・むず〈んず〉・まし・けむ〈けん〉・べし・らむ〈らん〉・らし・めり】

「む〈ん〉」「むず〈んず〉」は文末では主に**推量・意志**を表す。文中で連体形の場合は、**仮定**や**婉曲**（えんきょく）などの意味で用いられる。

例 なほ飽かずやあらむ（七九・14）　推量
首のほどを食はんとす。（三四・10）　意志
心あらん友もがな（三七・2）　婉曲
迎へに人々まうで来むず。（四九・5〜6）　推量

「まし」は、主に「…せば〜まし」「…ましかば〜まし」の形で、**反実仮想**（事実に反したことを仮に想定すること）の意味で用いられる。

例 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（二六一・11）

「べし」は確信を持って**推量**する場合に用いられるほか、**意志・可能・当然・適当・命令**などの意味で用いられる。

例 見送るなるべし。（一〇一・7）　推量
羽なければ、空をも飛ぶべからず。（『方丈記』）　可能
子になり給ふべき人なめり。（四六・6〜7）　当然

「らむ〈らん〉」は主に**現在推量**の意味で、「けむ」は主に**過去推量**の意味で、それぞれ用いられる。

例 春立つ今日の風やとくらむ（二六〇・7）
昔は聞きけんものを（八七・2）

「らし」「めり」は**推定**の意味で用いる。「推定」とは**根拠のある推量**のことである。「らし」は主に客観的な事実に基づく推定を表し、「めり」は主に**視覚的**な根拠に基づく推定を表す。

例 筒井筒井筒にかけしまろが丈過ぎにけらしな妹見ざるまに（六四・9）
子になり給ふべき人なめり。（四六・6〜7）

5 伝聞・推定の助動詞【なり】

「なり」は主に**聴覚**で推定する場合に用いられる。そこから「なり」に**伝聞**の用法も生じたと考えられる。「めり」が**視覚**で推定するのとは対照的である。

例 男もすなる日記といふものを（七四・2）　伝聞

6 打消推量の助動詞【じ・まじ】

「じ」は**打消推量・打消意志**を表し、「まじ」は**打消推量・打消意志**のほか**不可能・打消当然・不適当・禁止**などを表す。「じ」は「む〈ん〉」の、「まじ」は「べし」の打消の意味の助動詞である。

例 京にはあらじ（六〇・11）　打消意志
かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども（七八・1）　打消推量

7 断定の助動詞【なり・たり】

「なり」「たり」は**断定**の意味を表す助動詞である。これらは体言や活用語の連体形に接続する。

例 夢にも人にあはぬ**なり**けり（六二・3）
清盛、嫡男**たる**によつて（『平家物語』）

「なり」には、**存在**の意味もある。

例 春日**なる**三笠の山に出でし月かも（七七・14）

◆「なり」は、「まつ虫の声す**なり**」のように、**終止形**に接続する場合は伝聞・推定の助動詞であるが、「春日**なる**」「あはぬ**なり**けり」のように、**体言・連体形**に接続する場合は断定の助動詞である。

8 受身・尊敬・可能・自発の助動詞【る・らる】

「る」「らる」は**受身・尊敬・可能・自発**の意味で用いられる。「自発」とは「自然とそうなる」という意味である。

例 いま一声呼ばれていらへむ（一七・1）　受身
袖を引き放ちて逃げられけり。（二五・2）　尊敬
湯水飲まれず（五〇・2〜3）　可能
風の音にぞおどろかれぬる（二六一・5）　自発

◆「る」と「らる」には、意味上の違いはなく、上に来る動詞の活用の種類が違うだけである。これは次の「す」「さす」も同様である。

9 使役・尊敬の助動詞【す・さす・しむ】

「す」「さす」「しむ」は**使役・尊敬**の意味を表す助動詞である。尊敬の用法では、「…せ給ふ」などと下に尊敬の補助動詞（九六ページ）を伴う。

例 物も絶えず得**させ**たり。（七九・5）　使役
あの松原へ入ら**せ**給へ。（九〇・5〜6）　尊敬

10 願望の助動詞【まほし・たし】

「まほし」「たし」は**願望**の意味を表す助動詞である。

例 紫のゆかりを見て、続きの見**まほしく**おぼゆれど
常に聞きたき**は**、琵琶・和琴。（『徒然草』）
（『更級日記』）

11 比況の助動詞【ごとし】

「ごとし」は**比況**の意味などを表す。「比況」とは、あるものをほかのものに比べて例えることである。

例 ただ春の夜の夢の**ごとし**。（九四・3）

古文の窓1

無常の世を生きる

無常は、この世のあらゆるものが変化を続けてとどまらず、生起と消滅を繰り返すという仏教の観念である。万物のそのようなあり方を心に深く悟ることを、無常観という。この思想が日本に移入され、日本の文学に大きな影響を与えた。それは、特に中世の文学作品に著しい。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」で始まる『平家物語』の冒頭（九四ページ）は、あまりにも有名である。この物語は、絶頂を極めた平家一族の滅亡のさまを語ってゆく。平家のことだけではない。平安時代から鎌倉時代へと、大きく変貌してゆく歴史そのものが叙述される。無常観は、激動の時代を記述する原動力でもあった。物事の価値が揺れ動き、善悪の基準すら分からなくなっている世の中を描くために、無常という視点が重要な働きをしたのである。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」と起筆する『方丈記』[1]は、「その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。」と、人と人が住む場所の無常のさまを語る。とりわけ読者を捉えて離さないのは、大火事、つむじ風、遷都、飢饉、大地震の描写である。日本の中心都市平安京に甚大なる被害を及ぼしたこれらの災厄が、実に迫力に満ちた筆致で語られている。無常への認識が、未曽有の現実を描き出す力を養ったといえよう。

『徒然草』は無常をさらに積極的に捉える。「世は定めなきこそいみじけれ。」、世界は無常だからこそすばらしい、というのである。無常でなかったら、物事の味わいや美しさへの感動がなくなってしまう、とさえ言う。あるいはまた、唐突にやってくる死をしっかり自覚せよ、と繰り返す。どうせ死ぬのだから何をしても無意味だ、というのではない。社会も人も変動してやまない世界で、どうしたら自分を見失わずに、しかも心豊かに生きられるか、そのための知恵を示しているのだろう。

動乱の続いた中世だけではなく、いつの時代も、私たちは先の見えない今を生きている。だからこそこれらの作品の言葉は、時代を越えて人々の心に届くのである。

（注）

1 **『方丈記』** 随筆。作者は鴨長明。建暦二（一二一二）年成立。

◆作者の主張を読み取る

古典作品における随筆の代表とも言える『徒然草』は、多彩な内容を含んでいる。たとえば、無常観を中心としたもの、人生論や芸術論、説話的なもの、有職故実などである。

しかし、気ままにつづられるのが随筆とは言うものの、『徒然草』には、作者の主張が明確に述べられている章段もある。そのような章段において、作者は自分の主張をどのようにして示しているだろうか。さらにそのうえで、どのように文章を組み立てて読む人に伝えようとしているのか、読み取ってみよう。

課題 「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」から、それぞれ作者の主張が表れている箇所を読み取り、全体の構成がどのように組み立てられているかを確認し、どちらが分かりやすいか、意見を交換してみよう。

1 作者のもっとも主張したいことがどこに書かれているか、読み取ってみよう。

① 「亀山殿の御池に」（三〇ページ）で、作者がもっとも主張したいことが読み取れる箇所を抜き出す。

② 「大事を思ひ立たん人は」（三二ページ）で、作者がもっとも主張したいことが読み取れる箇所を抜き出す。

2 本文中で作者の主張がどのように扱われているか、考えてみよう。

① 「亀山殿の御池に」で、作者のもっとも主張したい部分がどの位置に置かれ、全体の構成がどのように組み立てられているか、確認する。

② 「大事を思ひ立たん人は」で、作者のもっとも主張したい部分がどの位置に置かれ、全体の構成がどのように組み立てられているか、確認する。

3 「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」における作者の主張の取り上げ方を比べ、どちらが分かりやすいと思うか、意見を交換してみよう。

・なぜ、分かりやすいと思うのか、その理由を具体的に示して意見を述べる。

3 物語 1

- 『竹取物語』に描かれた人物の心情などを読み取る。
- 文語助詞の種類と用法を理解する。
- 昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表する。

竹取物語

かぐや姫の生ひ立ち
かぐや姫の嘆き

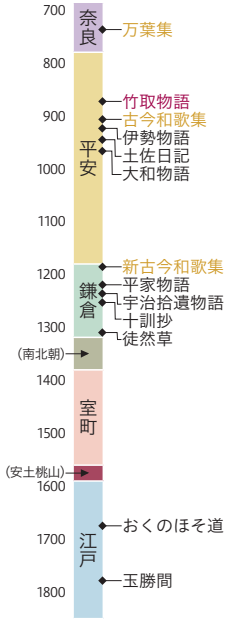
古文を読むために

1 助詞　2 注意すべき言葉遣い

古文の窓2 古典文学と月

単元の言語活動 3

月が詠まれた和歌を鑑賞する





竹取物語絵巻
月を見て泣くかぐや姫と、かぐや姫の告白に驚き嘆く翁(おきな)たち。

竹取物語

かぐや姫の生ひ立ち

暗唱してみよう

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて[1]竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば讃岐の造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、[2]三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。*

翁、言ふやう、「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。[3]子になり給ふべき人なめり。」とて、[5]手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗に預けて養はす。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。[6]かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。

1 まじりて　分け入って。

2 三寸　「寸」は長さの単位。一寸は約三センチメートル。

3 子　「籠（かご）」と掛けた洒落。

4 なめり　「なるめり」の撥音便「なんめり」の「ん」を表記しない形。音読するときには、「なんめり」と読む。

5 手にうち入れて　手の中にひょいと入れて。

6 よ　節と節との間の空洞部分。

7 よきほどなる人　一人前の大きさの人。

8 髪上げ　垂らしていた髪を結い上げること。女子の成人儀礼。普通十二〜十四歳頃に行う。

9 さうして　さまざまに準備して。

この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたち、*けうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しきときも、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

翁、竹を取ること久しくなりぬ。●勢ひ猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸斎部の秋田を呼びて、付けさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。このほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。世界のをのこ、*あてなるもいやしきも、*いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞き、めでて惑ふ。*



竹取物語絵巻

10 裳　腰の後ろに広がる装飾的な衣。女子の正装に用いる。初めて裳を着ける裳着は、髪上げとともに女子の成人儀礼の一部。



11 帳　部屋を区切ったり、人目を避けたりするために垂らした布。

12 勢ひ猛の者　富裕で勢力のある者。

問 竹取の翁が「勢ひ猛の者」になったのは、なぜか。

13 御室戸斎部の秋田　「御室戸」は地名。「斎部」は氏。「秋田」は名。

14 うちあげ遊ぶ　宴会を開き音楽を奏でて楽しむ。

15 うけきらはず　誰でも構わず。

16 得てしがな　妻にしたいものだ。

＊
うつくし　ゐる　やうやう　かたち
けうらなり　遊ぶ　かしこし　あてな
り　いやし　いかで　惑ふ

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント 1 かぐや姫がほかの人と違うことが分かる部分を、本文中から指摘してみよう。
2 かぐや姫に対する翁の心情はどのようなものか、本文中の表現をもとに考えてみよう。

◇言葉と表現 1 次の傍線部の助詞の種類と用法を、それぞれ確認してみよう。
(1) それを見れば、三寸ばかりなる人（四六・4〜5）
(2) いかでこのかぐや姫を得てしがな（四七・15）

◇言語活動 1 本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるか、確認してみよう。

かぐや姫の嘆き

多くの男たちがかぐや姫に求婚し、中でも熱心だった五人の貴公子が、結婚の条件として姫が出した難題に挑むが、皆失敗に終わる。さらにかぐや姫は、帝からの求愛にも応じなかった。ただし、姫と帝との間には三年にわたる手紙のやり取りが続く。その後、かぐや姫は月を見て物思いに沈むようになるが、翁たちにはその理由が分からなかった。

八月十五日ばかりの月に出でゐて、かぐや姫、いといたく泣き給ふ。人目も*今はつつみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。

1 出でゐて（月が見えるように建物の端近くに）出て座って。

かぐや姫、泣く泣く言ふ、「[2]さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ごし[3]侍りつるなり。[4]さのみやはとて、[5]うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。[6]それを、[7]昔の契りありけるによりなむ、この世界にはまうで来たりける。今は帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。[8]さらず、まかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆き侍るなり。」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことのたまふぞ。竹の中より見つけ聞こえたりしかど、[9]菜種の大きさおはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞こえむ。[10]まさに許さむや。」と言ひて、「我こそ死なめ。」とて、泣きののしること、いと堪へがたげなり。

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。[11]片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かく、この国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず、ここには、かく久しく遊び聞こえて、[13]慣らひ奉れり。[14]いみじからむ心地もせず、悲しくのみある。されど、おのが心ならず、まかりなむとする。」と言ひて、もろともにいみじう泣く。

2 **さきざき**　以前。
3 **過ごし侍りつるなり**　そのままにしていたのです。
4 **さのみやは**　ずっとそう黙ってばかりいられようか。
5 **うち出で**　うち明けて。
問 **「この国」「この世界」「かのもとの国」は、それぞれどこを指すか。**
6 **それを**　それが。ところが。
7 **昔の契り**　前世からの因縁。
8 **さらず**　避けようもなく。
9 **菜種**　カラシ菜の種子。ごく小さいものの例え。
10 **まさに**　ここでは、「や」と対応して反語の意。どうして…か（いや…ない）。
11 **片時の間**　僅かの期間。
12 **遊び聞こえて**　気ままに過ごさせていただいて。
13 **慣らひ奉れり**　慣れ親しみ申し上げた。
14 **いみじからむ心地**　（月に帰ることが）うれしく思われる気持ち。

＊

いたし　つつむ　侍り　まうづ　いみじ　のたまふ　聞こゆ　ののしる　かく　あまた

使はるる人々も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、*心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。15

15 **使はるる人々も**　召し使われている人たちも。

* **心ばへ**

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◆学習のポイント

1 「悲しくのみある。」（四九・14）とあるが、かぐや姫が悲しんでいるのはなぜか、まとめてみよう。

2 かぐや姫の話を聞いた翁の心情はどのようなものであったか考え、その心情を効果的に表している部分を、本文中から指摘してみよう。

◆言葉と表現

1 次の傍線部「に」を、それぞれ文法的に説明してみよう。

(1) おのが身は、この国の人にもあらず。（四九・3）

(2) 今は帰るべきになりにければ（四九・4～5）

(3) まさに許さむや。（四九・9）

◆言語活動

1 かぐや姫が、「この国」を去るのを嘆き悲しむのはなぜか。その理由を考え、話し合ってみよう。

竹取物語　日本で現存最古の物語。『源氏物語』に「物語のいできはじめの祖」とある。作者未詳。九世紀末から十世紀初頭頃の成立。古い伝承をもとに、仏典や漢籍の影響も受けながら、仮名文で巧みに構成された物語。本文は『新日本古典文学大系』によった。

古文を読むために 5

1 助詞

➡三一六〜三二 七ページ「文語助詞一覧表」参照。

活用のない付属語を**助詞**という。ほかの語に付いて、語と語、文節と文節の関係を示したり、文にさまざまな意味を添えたりする。働きの違いによって、格助詞・接続助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞の六種に分類される。

Ⅰ 語と語、文節と文節の関係を示すもの

1 格助詞

主に**体言**に付き、その文節がほかの文節とどのような関係にあるかを示す。

古文の格助詞は、現代語と同様の用法のものもあるが、次のように古文に特徴的なものもある。

▼同格の「の」「が」　訳…で

例 女のが得まじかりけるを（五八・2）

▼比喩の「の」　訳…のように

例 見し人の松の千年に見ましかば（八〇・1）

▼即時の「より」　訳…やいなや

例 三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて（一〇〇・8）

2 接続助詞

主に**活用語**に付き、その文節とほかの文節との関係を示す。以下のようなものに注意する。

▼「ば」

接続助詞「ば」の働きは次の二種に分類できる。

(1) 活用語の**未然形**に接続する場合。

順接の仮定条件を表す。訳もし…ならば

例 仏だによく書きたてまつらば、百千の家も出で来なん。（二〇・14〜二一・1）

(2) 活用語の**已然形**に接続する場合。

順接の確定条件を表す。これは、さらに三つの用法に分けられる。

(イ) **原因・理由**を表す。訳…ので

例 いと幼ければ、籠に入れて養ふ。（四六・8）

(ロ) **偶然条件**を表す。訳…ところ

例 それを見れば、三寸ばかりなる人（四六・4〜5）

(ハ)**恒常条件**を表す。　訳…と必ず

例 この子を見れば、苦しきこともやみぬ。（四七・7〜8）

▼**「と・とも」「ど・ども」**

「と・とも」は**逆接の仮定条件**を表し、「ど・ども」は**逆接の確定条件**を表す。

例 兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。（八九・5）

さきざきも申さむと思ひしかども（四九・1）

▼**「で」**

打消接続を表す。

例 逢はでやみにし憂さを思ひ（三六・10）

Ⅱ　文にさまざまな意味を添えるもの

3 副助詞

種々の語に付き、副詞のようにある意味を添えることによって、下の用言を修飾する。

例 一文字をだに知らぬ者（七五・11）　類推

草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく（『万葉集』）　類推

神さへいといみじう鳴り（五八・8）　添加

悲しくのみある。（四九・14）　限定

名にし負はばいざ言問はむ都鳥（六二・15）　強意

4 係助詞

種々の語に付き、強意・疑問・反語などの意味を添える。下の活用語に一定の結び方を要求する。

⬇「係り結び」については、二七ページ参照。

例 今は見どころなし。（三六・8）

見渡せば花も紅葉もなかりけり（二六三・6）

もと光る竹なむ一筋ありける。（四六・3〜4）

5 終助詞

種々の語に付き、文末で用いられ、禁止や詠嘆などの意味を添える。

例 あやまちすな。心して降りよ。（『徒然草』）　禁止

心あらん友もがな（三七・2）　願望

あはれ、しつるせうとくかな。（二〇・9）　詠嘆

いま一度起こせかし（一七・3）　念押し

6 間投助詞

文節の終わりに置かれて、詠嘆や呼びかけなどの意味を添える。

例 今日は重うなつたるぞや。（八九・1）　詠嘆

少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。（『枕草子』）　呼びかけ

2 注意すべき言葉遣い

1 副詞の呼応

現代語で、「決して…ない」のように、ある副詞を用いたときに、下に決まった言い方が来ることがある。これを副詞の呼応という。古文にも副詞の呼応がある。

例 な起こしたてまつりそ。（一七・2）　禁止

◆「な…そ」で、「…するな」の意。

え聞かざりけり。（五九・2〜3）　不可能

◆「え…（打消）」で、「…できない」の意。

いかでこのかぐや姫を得てしがな（四七・15）　願望

◆「いかで…（願望）」で、「なんとかして…」の意。

2 形容詞・形容動詞の主な語幹用法

形容詞・形容動詞の語幹には次のような用法がある。ただし、形容詞シク活用では終止形が用いられる。

(1) 単独、または感動詞を伴って**感動表現**になる。

例 あな、をさなや。（『源氏物語』）

↑ク活用の形容詞「をさなし」の語幹

(2) 格助詞「の」が付いて、**連体修飾語**になる。

例 勢ひ猛の者になりにけり。（四七・9〜10）

↑形容動詞「猛なり」の語幹

あなおびたたしの源氏の陣の遠火の多さよ。（『平家物語』）

↑シク活用の形容詞「おびたたし」の終止形

(3) **形容詞の語幹に接尾語「み」が付いて、原因・理由を表し、連用修飾語になる。**多くは**「体言（＋を）＋形容詞の語幹＋み」**の形で用いられ、「…を〜み」の形となり、「…ガ〜ノデ」と訳す。「を」が省かれることもある。

◆接尾語とは、語の末尾で意味を添えたり品詞を変化させる語。

例 瀬をはやみ（川瀬の流れが速いので）（『詞花和歌集』）

水清み（水が清いので）（『古今和歌集』）

古文の窓2

古典文学と月

『竹取物語』では、「八月十五日」が、ある特別な出来事の起こる日として語られている。

ところで、古典文学に出て来る八月十五日と現代の八月十五日とは、厳密には同じ日ではない。現代の私たちが使っている暦は、地球が太陽の周囲を一周する時間を一年とする太陽暦（新暦）だが、日本で新暦が一般に普及したのは明治五（一八七二）年以降であり、それ以前は月の満ち欠けを基に一か月を定め、太陽の運行をも勘案して一年の長さを調整する太陰太陽暦（旧暦）を使っていたからである。『日本書紀』には、持統天皇四（六九〇）年に勅（天皇の命令）によって旧暦の「元嘉暦」と「儀鳳暦」を用いたとの記事がある。

新暦では一年を三六五日とし、四年に一度、閏日（二月二十九日）を設けて実際の太陽の運行との間に生じるずれを調整する。旧暦では、一か月は二十九日または三十日であり、一年は十二か月だが、十九年に七度、閏月を加えて十三か月とした。旧暦の一か月は朔日（新月）から始まり、上弦の月（半月）・満月（望月）・下弦の月（半月）を経て晦日で終わる。満月は一か月の真ん中あたり、おおむね十五日目の月である。つまり旧暦の八月十五日の月は、ほぼ満月と考えてよい。一方、新暦では、八月十五日の月は必ずしも満月とは限らない。

旧暦の八月は、秋である。秋の月の美しさは多くの和歌に詠まれてきた。ここでは二つの歌を紹介したい。

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ
（月にあるという桂の木も秋には紅葉するからだろうか、この季節の月は、いつにもまして明るいようである。）
（『古今和歌集』巻四　秋上・壬生忠岑）

この和歌は、月に大きな桂の木があるという古代中国の伝説に基づいている。秋の月の明るさを、桂の木の紅葉という想像上のイメージと結び付けて詠んだ幻想的な歌である。なお、月には男がいて桂の木に斧を振るっているという伝説もある。「桂男」はその男を指す言葉であり、月の異名でもある。

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しより
（心は身から離れてしまった。秋の夜更けの月を一人で見たときから。）
（『新古今和歌集』巻四　秋上・源道済）

「あくがる」は、いるべき場所を離れてさまよう、何かに心ひかれる、といった意味である。この和歌は、秋の夜の月を見ているうちに、月に魅了されてゆく心情を詠んでいる。見る者

をそのような気分にさせる月の美しさはいかばかりか、思いをはせたい。

さて、八月十五日の月見の折に、中国では月に月餅（小麦粉などを材料とする丸く平たい菓子）を供えるが、これは明代以降の風習と考えられている。日本では月に団子を供え、薄を飾る。江戸時代には八月十五日の月を「芋名月」といった。これは月にサトイモの新芋を供えたことによるとされる。ちなみに日本では九月十三日にも月見をする風習があった。その日の月を「後の名月」「後の月」、また「豆名月」「栗名月」という。江戸時代の俳人・与謝蕪村（二七七ページ）に、「後の月」を詠んだ次の句がある。

山茶花の木の間見せけり後の月　（『蕪村句集』）

夜空に後の月が浮かんでいる。その月明かりで、山茶花の木々の隙間までが見えるという情景である。作者は庭の木々の下から月を見上げているのかもしれない。

江戸時代には、月の出を拝む「月待」という行事もあった。天保五～七（一八三四～三六）年に刊行された地誌『江戸名所図会』の挿絵（下段参照）には、江戸の高輪（現在の東京都港区高輪）の海辺に人々が集まり、飲食しながら七月二十六日の月の出を待つ「二十六夜待ち」の様子が描かれている。七月二十六日の月の出の時刻は深夜である。挿絵には[1]行灯を出している露店や[2]提灯を持って歩いている人の姿も見え、闇の中で楽しみながら月の出を待つ様子がうかがえる。

（注）
1 **行灯**　木や竹などの枠に紙を張り、中に油皿を入れて火を灯す器具。
2 **提灯**　紙を張った籠状の火袋にろうそくを入れて火を灯す器具。



江戸名所図会

◆月が詠まれた和歌を鑑賞する

『竹取物語』の「かぐや姫の嘆き」（四八～五〇ページ）では、かぐや姫が「八月十五日ばかりの月」を見て嘆き、ある重要な告白をする。また、「古典文学と月」（五四～五五ページ）によれば、古来、日本では、月は生活や年中行事と密接に結び付いていた。人々は月の美しさを鑑賞するだけでなく、月にさまざまな心情を託し、ときに和歌に詠んできた。

課題 月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞してみよう。

1 月の呼び名を調べてみよう。

①「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。

②「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。

③「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

2 次の『百人一首』の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞してみよう。

ア　月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど　（二十三番　大江千里）

イ　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

ウ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　（三十六番　清原深養父）

①六つのグループを作る。グループA・Bのメンバーはア、グループC・Dのメンバーはイ、グループE・Fのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。

②グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。

③ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

3『百人一首』の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞してみよう。

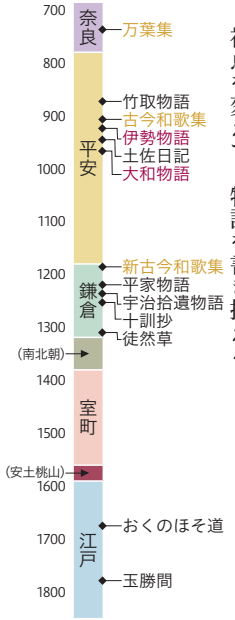
4 物語 2

◇昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しむ。
◇同じ和歌を主題とした異なる物語を読み比べる。
◇想像力を働かせ、人物の心情を考える。

伊勢物語
芥川（第六段）
東下り（第九段）
筒井筒（第二十三段）
◆読み比べ◆沖つ白浪（『大和物語』第百四十九段）
梓弓（第二十四段）

古文の窓3 平安文学の恋

◇単元の言語活動 4
視点を変えて、物語を書き換える





燕子花図屏風（尾形光琳筆）
『伊勢物語』第九段「東下り」の世界を、主題となる人物は描かずに燕子花を描いて表現している。

伊勢物語

芥川

昔、男ありけり。女の[1]え得まじかりけるを、年を経て*よばひわたりけるを、[2]かろうじて[3]盗み出でて、いと暗きに来けり。[4]芥川といふ川を*率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ、男に問ひける。

行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、[5]胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたり



芥川（『伊勢物語絵巻（模本）』狩野晴川院養信ほか）

1 女のえ得まじかりけるを　女で手に入れられそうもなかった人を。

2 よばひわたりけるを　求婚し続けたが。

3 かろうじて　やっとのことで。

4 芥川　所在不明。現在の大阪府高槻市を流れる川、という説がある。

問「神」とは、ここでは、何のことか。



5 胡籙　矢を差して背中に負う武具。

けるに、鬼、はや一口に食ひてけり。「あな[6]や。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。●[7]足ずりをして泣けども、かひなし。

[8]白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消え[9]なましものを

これは、[10]二条后の、[11]いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてゐ給へりけるを、*かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、[12]御兄人[13]堀河の大臣、[14]太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ参り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返し給うてけり。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后の[15]ただにおはしけるときとや。

（第六段）



5

10

6 **あなや**　驚きの叫び声。

7 **足ずり**　地に足をこするさま。
問 **男が足ずりをしたのは、どのような気持ちからか。**

8 **白玉**　真珠。

9 **消えなましものを**　消えてしまえばよかったのに。「消ゆ」は「露」の縁語。

10 **二条后**　藤原長良の娘、高子。清和天皇の女御。陽成天皇の母。

11 **いとこの女御**　藤原良房（長良の弟）の娘、明子。文徳天皇の女御。

12 **御兄人**　兄上たち。

13 **堀河の大臣**　藤原基経。長良の三男で良房の養子となる。後の摂政関白太政大臣。京を流れる堀川の東に邸宅があったため「堀河の大臣」と呼ばれた。

14 **太郎国経の大納言**　藤原国経。長良の長男。

15 **ただにおはしけるとき**　（入内する前の）普通の身分でいらっしゃったとき。

＊
よばふ　率る　つかうまつる

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1 「かれは何ぞ。」（五八・6）とあるが、この言葉から女がどのような身分であるか、考えてみよう。

2 「白玉か」の歌には、男のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。

3 各段落の内容を簡潔に説明してみよう。

◆言葉と表現

1 次の傍線部「なむ」を、それぞれ文法的に説明してみよう。

(1) 「かれは何ぞ。」となむ、男に問ひける。（五八・6）

(2) はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに（五八・11～五九・1）

2 本文中から、副詞の呼応を用いた表現を、二か所指摘してみよう。

◆言語活動

1 第三段落（五九・8～13）があることによって、どのような効果があるか、話し合ってみよう。

東下り（あづまくだり）

昔、男ありけり。その男、身を要なきもの[1]に思ひなして、京にはあらじ、東の方（かた）に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、ひとりふたりして行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国[2]八橋（やつはし）[3]といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く川の蜘蛛手（くもで）[4]なれば、橋を八つ渡せるに

10

1 **要なきもの**　必要のない人間。

2 **三河の国**　現在の愛知県の東部。

3 **八橋**　現在の愛知県知立（ちりゅう）市八橋町。

4 **水行く川の蜘蛛手**　ここでは、川が幾筋にも流れているさま。

よりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木の陰に下りゐて、[5]乾飯食ひけり。その沢に、かきつばた[6]いとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句[7]の上に据ゑて、旅の心を詠め。」と言ひければ、詠める。

から衣着つつなれにしつましあれば[8]
はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、乾飯の上に涙落として、ほとびにけり。

行き行きて、[9]駿河の国に至りぬ。[10]宇津の山に至りて、わが入らむとする道は、[11]いと暗う細きに、蔦・楓は茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、



八橋（伊勢物語図屏風）

5 乾飯　一度炊いた飯を乾燥させた携帯用の食料。水で戻して食べる。

6 かきつばた　アヤメ科の多年草。初夏に、紫や白の花を咲かせる。



7 句の上に据ゑて　和歌の各句の頭に置いて。このような詠み方を「折句」という。

8 から衣…　「から衣」は「着る」を導く枕詞。「から衣着つつ」は「なれ」を導く序詞。「なれ」は「馴れ」・「褻れ」、「つま」は「妻」・「褄」、「はるばる」は「遥々」・「張る張る」、「き」は「来」・「着」の掛詞。また、「褻れ・褄・張る・着」は「衣」の縁語。

9 ほとびにけり　ふやけてしまった。

10 駿河の国　現在の静岡県の中・東部。

11 宇津の山　現在の静岡県藤枝市と静岡市との境にある宇津ノ谷峠。

＊
おもしろし　すずろなり

12修行者会ひたり。「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。13

14駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子15まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、16比叡の山を二十ばかり重ね上げたらむほどして、なりは17塩尻のやうになむありける。

なほ行き行きて、18武蔵の国と19下総の国との中に、いと大きなる川あり。それをすみだ川といふ。その川のほとりに群れゐて、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな、とわび合へるに、渡し守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、21鴫の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと23

12 **修行者**　仏道修行のために諸国を旅して歩く僧。

問 **「その人」とは、男にとってどのような人か。**

13 **つく**　言づける。

14 **駿河なる宇津の山べの**　「うつつ」を導く序詞。

15 **鹿の子まだら**　鹿の毛のように、白くまだらがあるさま。ここでは、山の残雪のこと。

16 **比叡の山**　一六ページ注2参照。

17 **塩尻**　塩を作るため、海辺に砂を円錐形に積み上げたもの。

18 **武蔵の国**　現在の埼玉県・東京都および神奈川県の一部。

19 **下総の国**　現在の千葉県の北部と茨城県の南西部。

20 **すみだ川**　現在の東京都東部を流れる隅田川。当時は武蔵の国と下総の国との境であった。

21 **鴫**　シギ科の鳥の総称。くちばしと脚が長く、水辺にすむ。

22 **都鳥**　ゆりかもめのこと。カモメ科の小形の鳥。冬の渡り鳥で、水辺に群棲する。

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

（第九段）



業平（なりひら）東下り図（尾形光琳（こうりん））

23 **名にし負はば**　（「都」という言葉を）名に持っているのならば。



＊いかでか　います　うつつ　つごもり　わぶ　渡る

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント　1 全体を三つに分け、場面ごとに内容をまとめてみよう。

❖言葉と表現　1 次の傍線部「ば」の用法を、それぞれ確認し、現代語訳してみよう。

(1) 京には見えぬ鳥なれば（六二・13）

(2) 名にし負はばいざ言問はむ都鳥（六二・15）

❖言語活動

1 「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌に共通する心情はどのようなものか、考えてみよう。

筒井筒（つつゐづつ）

昔、田舎渡らひしける人の子ども[1]、井のもとに出（い）でて遊びけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ。女は、この男をと思ひつつ、親のあはすれども[2]、聞かでなむありける。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。

筒井筒[3]井筒にかけしまろが丈[4]過ぎにけらしな妹（いも）[5]見ざるまに

女、返し、

くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれか上ぐべき[6]

など言ひ言ひて、つひに本意（ほい）のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経（ふ）るほどに、女、親なく[8]、頼りなくなるままに[9]、もろともに言*[10]ふかひなくてあらむやはとて、河内（かふち）[11]の国高安（たかやす）[12]*の郡（こほり）に、行き通ふ所出で来にけり。



奈良絵本『伊勢物語』

1 **田舎渡らひしける人**　地方を回って生計を立てている人。

2 **あはすれども**　ほかの男と結婚させようとするけれども。

3 **筒井筒**　「筒井」は筒状に円く掘り下げた井戸。「井筒」は井戸の地上部分の囲い。

4 **井筒にかけし**　井筒の高さと背比べした。

5 **まろが丈**　私の背丈。

6 **振り分け髪**　左右に分けて肩の辺りで切りそろえた子供の髪型。

7 **上ぐ**　髪上げをする。「髪上げ」は四六ページ注8参照。

8 **親なく**　（女の）親が亡くなって。

9 **頼りなくなるままに**　生活のよりどころがなくなるにつれて。

10 **言ふかひなくて**　ここでは、窮乏した状態で、の意。

11 **河内の国**　現在の大阪府南東部。

12 **高安の郡**　現在の大阪府八尾（やお）市の辺り。

さりけれど、このもとの女、悪しと思へる気色もなくて、出だしやりければ、男、異心ありてかかるにやあらむと思ひ疑ひて、前栽の中に隠れゐて、河内へ往ぬる顔にて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり。

まれまれ、かの高安に来てみれば、初めこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙取りて、筒子の器物に盛りけるを見て、心憂がりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

と言ひて見出だすに、からうじて大和人、「来む。」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る

と言ひけれど、男、住まずなりにけり。

（第二十三段）

13 異心　浮気心。

問「かかる」とは、どのような内容を指しているか。

14 往ぬる顔　行ったふり。

15 風吹けば沖つ白浪　「たつ」を導く序詞。

16 たつた山　竜田山。現在の奈良県生駒郡にある山。

17 飯匙　飯を盛るしゃもじ。

18 筒子の器物　飯を盛る器。

19 大和　現在の奈良県。

20 生駒山　現在の奈良県生駒市と大阪府東大阪市との境にある山。

＊
頼り　言ふかひなし　気色　往ぬ　かなし　心にくし　頼む

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◆学習のポイント

1 「筒井筒」「くらべこし」の歌は、それぞれ相手にどのようなことを伝えているか、まとめてみよう。

2 大和の女と高安の女を、詠んだ歌、振る舞いや性格について、比較してみよう。

◆言葉と表現

1 次の傍線部の助詞の種類と用法を、それぞれ確認してみよう。

(1) 聞かでなむありける。（六四・7）

(2) 君があたり見つつををらむ（六五・9）

◆言語活動

1 『伊勢物語』と『大和物語』はともに十世紀頃に成立した歌物語である。「筒井筒」（六四〜六五ページ）と「沖つ白浪」（六七〜六八ページ）は、「風吹けば」の歌を、男が別の女性のところに通うときに、もとの女が詠んだ歌とする物語の骨格は共通しているが、細部にさまざまな違いがある。二つの作品を読み比べてみよう。

(1) 「筒井筒」と「沖つ白浪」で描写が違う部分を指摘してみよう。

(2) 「筒井筒」と「沖つ白浪」の作風の違いを指摘してみよう。

◆読み比べ◆

沖つ白浪（『大和物語』）

昔、[1]大和の国、[2]葛城の郡に住む男・女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。*年ごろ思ひかはして住むに、この女、いと[3]わろくなりにければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら、[4]妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、行けばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。

かくに[5]ぎははしき所にならひて、[6]来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらに妬げにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。[7]心地には、限りなく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「往ね。」と言ひければ、わがかくありきするを妬まで、[8]異わざするにやあらむ、さるわざせずは恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。

さて、出でて行くと見えて、前栽の中に隠れて、男や来ると見れば、[9]端に出でゐて、月のいといみじうおもしろきに、[10]頭かいけづりなどしてをり。夜更くるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、人待つなめりと見るに、[11]使ふ人の前なりけるに言ひける。

[12]風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

1 **大和の国**　六五ページ注19参照。
2 **葛城の郡**　現在の奈良県西部の御所市と葛城市の辺り。
3 **わろくなりにければ**　貧しくなってしまったので。
4 **妻をまうけてけり**　ほかに妻を作ってしまった。
5 **にぎははしき**　裕福な。
6 **来たれば**　（もとの女の所へ）来てみると。
7 **心地には**　内心では。
8 **異わざするにやあらむ**　ほかに男を通わせているのだろうか。
9 **端**　縁側。
10 **頭かいけづりなどしてをり**　髪を櫛でとかしたりしている。
11 **使ふ人**　召し使い。
12 **風吹けば…**　六五ページ注15・16参照。

＊
清らなり　わづらふ　さらに…（打消）　心憂し　わざ

と詠みければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いとかなしうなりぬ。この今の妻の家は、竜田山越えて行く道になむありける。

かくて、なほ見をりければ、この女、うち泣きて伏して、金椀に水を入れて、胸になむ据ゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。されば、この水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入る。見るにいとかなしくて、走り出でて、「*いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ。」と言ひて、かき抱きてなむ寝にける。かくて、ほかへもさらに行かで、つとゐにけり。

かくて、月日多く経て思ひやるやう、*つれなき顔なれど、女の思ふことといみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむと、思ひ出でて、ありし女のが*り行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましくて立てりけり。さて、垣間めば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛に挿しかけてをり、手づから飯盛りをりけり。いといみじと思ひて、来にけるままに、行かずなりにけり。この男は王なりけり。

（第百四十九段）

13 **かなしう**　「かなしく」のウ音便。
14 **金椀**　金属製の椀。
15 **ふてつ**　捨てた。
16 **つとゐにけり**　（この女のそばを）ずっと離れずにいた。
17 **ありし女のがり**　今の妻の所へ。
18 **つつましくて立てりけり**　気が引けて（外に）立っていた。
19 **垣間めば**　垣根の隙間からのぞき見ると。
20 **大櫛を面櫛に挿しかけてをり**　大きな櫛を額髪に挿していて。
21 **来にけるままに**　帰って来たまま。
22 **王**　天皇の子や孫で、親王宣下を受けない男子。平城天皇の孫に当たる在原業平（二六一ページ）をほのめかす。

*
いかなる　つれなし　がり

大和物語　歌物語。作者未詳。十世紀中頃の成立。およそ百七十段から成る。当時の貴族の間に流行していた歌語り（著名な和歌にまつわる説話）が大部分を占めるが、中には地方に伝えられた伝説なども含まれている。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

梓弓（あづさゆみ）

昔、男、片田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみて行きにけるままに、[1]三年来（みとせこ）ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろに言ひける人に、今宵（こよひ）会はむと契り*たりけるに、この男来たりけり。「この戸開け給（たま）へ。」とたたきけれど、開けで、歌をなむ詠みて出（い）だしたりける。

[2]あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

と言ひ出だしたりければ、

梓弓[3]ま弓槻弓（つきゆみ）年を経て我がせしがごとうるはしみせよ*

と言ひて、往（い）なむとしければ、女、

[4]梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

と言ひけれど、男帰りにけり。女、いとかなしくて、後（しり）に立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、指（および）の血して書きつけける。

[5]あひ思はで離（か）れぬる人をとどめかね我が身は今ぞ消え果てぬめる

1 **三年来ざりければ**　三年間帰らなかったので。当時、夫が家を出て三年間帰らなければ、妻は再婚することが許されていた。

問 **「この男」とは、誰のことか。**

2 **あらたまの…**　「あらたまの」は「年」を導く枕詞（まくらことば）。「新枕」は、男女が初めて共寝をすること。

3 **梓弓…**　「梓弓ま弓槻弓」は「年」を導く序詞（じょことば）。「槻」に「月」を掛けて、「年」の序詞とした。「うるはしみせよ」は、（新しい夫を）愛し、むつまじくしなさいの意。

4 **梓弓…**　「梓弓」は「引く」を導く枕詞。「引けど引かねど」は（あなたが私の心を）引こうが引くまいがの意。

5 **あひ思はで**　私が思っているのに、私のことを思ってくれないで。

＊ねむごろなり　契る　うるはしみす

と書きて、そこにいた[6]づらになりにけり。

（第二十四段）

6 いたづらになりにけり　死んでしまった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント　1 本文中のそれぞれの歌は「男」または「女」のどのような気持ちを述べたものか、状況を踏まえて考えてみよう。

◆言葉と表現　1 本文中から係り結びを起こす係助詞を抜き出し、その結びの語を指摘してみよう。

◆言語活動　1 「あひ思はで」の歌を書きつけた後、「そこにいたづらになりにけり。」（七〇・1）という結末は、この話をどのように印象付けているか、話し合ってみよう。

伊勢物語　現存最古の歌物語。作者未詳。十世紀初頭頃の成立。全体として在原業平（ありわらのなりひら）（二六一ページ）を想起させる「男」の一代記のような体裁を取っている。恋の話や友情の話などそれぞれが和歌を物語の中心に据えた、およそ百二十五段の短編から成る。本文は『新日本古典文学大系』によった。

古文の窓3

平安文学の恋

平安文学の恋は「かいま見」から始まることが多い。「かいま見」は「垣間見」、すなわち垣根の間から姿をのぞき見ることをいう。『伊勢物語』の第一段は、元服を迎えた男が旧都奈良に狩りに出かけ、そこで美しい姉妹をかいま見て「春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず」という歌を詠み贈る話である。その「かいま見」は物語の手法として、[1]『源氏物語』若紫巻で光源氏が美しい少女紫の上に出会う場面へと受け継がれた。「若紫」という巻名は、『伊勢物語』の「若紫」を明らかに意識している。

恋は、文（手紙）によって進められた。想いを懸ける文ということで「懸想文」とも呼ばれる。多くの場合は男性から送るのだが、初めのうちは返事がなかったりする。それでも何度も届けられる文に対して、しばしばお付きの女房や時には母親、さらには父親によって返事が代作される。そのうちに、相手の女性本人から返事が寄越されるようになると、たとえそれがはぐらかしたり断ったりする内容であったとしても、恋の駆け引きとしては前進なのである。それらの恋文は薄様という薄手の色紙にしたためられ、折枝（季節の花の枝）に結ぶなどして交わされた。文面に加え、和歌・筆跡・紙・折枝など、多くの要素で差出人の教養とセンスが問われたのである。

恋が成就した共寝の翌朝は、「後朝の別れ」という。「きぬぎぬ」とは夜着に用いた男女の衣と衣を指し、互いの単を交換して別れた後、夕方まで会えないことを嘆く「後朝の歌」を朝のうちに詠み交わす。三日間通い続けると、「三日夜の餅」といわれる小さな餅を共に食べる。それまでは秘められた恋であっても、餅の用意を命じられることで周囲も二人の関係に気づくことになる。それは「露顕」と呼ばれ、現在でいう披露宴のような役割があった。ただし、いわゆる「通い婚」は、法的意味での結婚でない場合も多く、男性が通うことがなくなれば二人の関係は自然消滅するのであって、訪れを待つ女性は常に不安定な立場に置かれていた。平安時代も律令によれば一夫一妻制であるが、事実上は妻といえるような通い所をほかに持つ男性貴族は多く、その実態から一夫多妻制であったと考える見方もある。平安時代について述べる際の「妻」や「結婚」の定義は一様でないので注意を要する。

（注）

1『**源氏物語**』物語。五十四帖。作者は紫式部。十一世紀初め頃成立。

◆視点を変えて、物語を書き換える

『伊勢物語』は和歌を中心として、主に男女の恋と結婚を主題にした物語が展開していく歌物語である。それぞれの章段では男性か女性か、どちらか片方の視点から物語が語られることが多い。「梓弓」（六九～七〇ページ）は、「女」の視点から語られているが、「男」の心情は語られていない。語られていない「男」の心情を考えてみることで、物語が別の顔を見せることもある。それも物語を読み味わう一つのやり方である。「女」の心情を理解したうえで、相手の「男」はどのように感じていたのかを考えて、表現してみよう。

課題 視点を変えて「梓弓」の物語を書き換え、「男」の心情を表現してみよう。

1 「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌を詠んだときの「女」の心情を、表の中に整理してみよう。

2 「梓弓引けど」「あひ思はで」のそれぞれの歌に対して、「男」はどのような心情を抱いたかを想像し、表に書き込もう。

和歌	「女」の心情	「男」の心情
梓弓引けど…	・・・	・・・
あひ思はで…	・・・	・・・

3 「男帰りにけり。」以下を「男」の物語に書き換えよう。

①グループを作り、ひとりひとりが考えた「男」の心情についてグループ内で発表し、意見をまとめる。

②グループでまとめた意見に従って、「男」の心情に基づいた「男」の行動を考える。

③「男帰りにけり。」（六九・11）以下を「男」の視点の物語に書き換える。

・現代語で書き換える。

4 「男」の視点の物語を発表しよう。

①グループでまとめた「男」の物語を発表する。

②発表を聞いて、共感できる点をあげる。

5 日記

- 日記文学の特徴や成立の背景を理解する。
- 諧謔（かいぎゃく）などの表現の工夫を味わう。
- 変体仮名を読む。

土佐日記

門出
阿倍仲麻呂
帰京

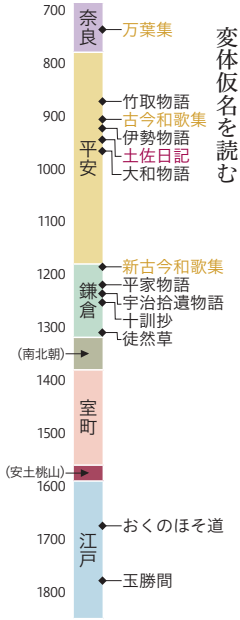
古典に関する文章

男の文章と女の文章（橋本治）

古文の窓4 真名と仮名

単元の言語活動 5

変体仮名を読む





北野天神縁起絵巻（きたのてんじんえんぎえまき）
平安時代の船旅の様子。

土佐日記

門出

暗唱してみよう

男もすなる[1]日記といふものを、女もしてみむとてするなり。それの年の[2]十二月の二十日あまり一日の日の[3]戌の刻に、[4]門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。

ある人、[5]県の四年五年果てて、[6]例のことどもみなし終へて、[7]解由など取りて、住む[8]館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。か

紀貫之



1 **すなる** する（書く）という。
2 **それの年** ある年。わざとぼかした表現で、実際の貫之の門出は承平四（九三四）年のこと。
3 **戌の刻** 午後八時頃。
4 **門出** 出発。
5 **県の四年五年** 地方官としての任務期間の四、五年。貫之は、延長八（九三〇）年に土佐の国（現在の高知県）の国守となった。
6 **例のことども** 国司交替に伴う、慣例の事務引き継ぎのこと。
7 **解由** 解由状。新任者が前任者の任務完了を証明する公文書。
8 **住む館** 作者が住んでいた国司の官舎。現在の高知県南国市比江にあった。
9 **くらべつる人々** 親しく交際してきた人々。

問 **「人々なむ」の「なむ」の結びはどうなっているか。**

10 **日しきりに** 一日中。

れこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつ、ののしるうちに、夜更けぬ。[9][10]

二十二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原のときざね、船路なれど、馬のはなむけす。上中下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。[11][12][13][14]*

二十三日。八木のやすのりといふ人あり。この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。これぞ、たたはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守柄にやあらむ、国人の心の常として、「今は。」とて見えざなるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。これは、物によりて褒むるにしもあらず。[15][16][17][18]

二十四日。講師、馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。[19][20][21]

11 **和泉の国**　現在の大阪府南部。
12 **藤原のときざね**　伝未詳。国府の役人か。
13 **馬のはなむけ**　旅立つ人に餞別の品を送ったり、送別の宴を開いたりすること。
14 **あざれ合へり**　ふざけ合った。「あざる」には「ふざける」と「（魚などが）腐る」の二つの意味が掛けてある。
15 **八木のやすのり**　伝未詳。土佐の豪族か。
16 **国**　国司の役所。国府。
17 **ざなり**　「ざるなり」の撥音便「ざんなり」の「ん」を表記しない形。
18 **守柄**　前国守の人柄。
問 **「守柄にやあらむ」は、どこに掛かっているか。**
19 **講師**　国分寺の住職。国内の僧尼を管掌し、仏の教えを講じる。
20 **出でませり**　おいでになった。「出でます」は動詞「出づ」に尊敬の補助動詞「ます」が付いて一語化したもの。
21 **しが足は**　その足は。「し」は代名詞。

* 飽く

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1 「和泉の国までと、平らかに願立つ。」（七五・3）とあるが、『土佐日記』旅程図も参考にしながら、「和泉の国まで」としているのはなぜか、考えてみよう。

2 「八木のやすのりといふ人あり。」（七五・6）とあるが、作者は「八木のやすのり」をどのように評価しているか、「国人」と対比して、まとめてみよう。

◆言葉と表現

1 次のそれぞれの表現のおもしろさについて、考えてみよう。

(1) 船路なれど、馬のはなむけす。（七五・3～4）

(2) 潮海のほとりにて、あざれ合へり。（七五・4～5）

(3) 一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。（七五・11）

◆言語活動

1 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」（七四・2～3）とあるが、作者は女性に仮託することによって、どのようなことをこの日記に書こうとしたのか、「男の文章と女の文章」（八一～八二ページ）を参考に、話し合ってみよう。

阿倍仲麻呂

十九日[1]。日悪しければ、船出ださず。

二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。みな人々、憂へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日と数ふれば、指も損なはれぬべし。いとわびし。夜は寝も寝ず。

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かう[2]やうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂[3]と言ひける人は、*唐土に渡りて、帰り来けるときに、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし[4]、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主[5]、「我が国に、かかる歌をなむ、神代より神も詠ん給[6]び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもあるときには詠む。」とて、詠めりける歌、

青海原振りさけ見れば春日[7]なる三笠の山に出でし月かも



光琳かるた（尾形光琳筆）

1 **十九日**　承平五（九三五）年正月十九日。

2 **かうやうなる**　このような。「かうやう」は「かくやう」のウ音便。

3 **阿倍仲麻呂**　六九八年～七七〇年。養老元（七一七）年に遣唐留学生として渡唐。帰国を果たせず、客死した。

4 **馬のはなむけ**　七五ページ注13参照。

問 **「かしこ」とは、どこのことか。**

5 **主**　人名につく敬称。

6 **詠ん給び**　「詠み給び」の撥音便。

7 **春日**　現在の奈良県奈良市街東方の丘陵地を指す。三笠山（御蓋山）もこれに含まれる。

* 唐土

とぞ詠めりける。かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

8 **聞き知るまじく**　（日本語なので）理解できまいと。

9 **言の心**　歌の意味。

10 **男文字**　男手。漢字のこと。平仮名を女手というのに対する言い方。

問 **「ここの言葉」とあるが、どこの言葉か。**

問 **「賞でける」の主語は誰か。**

11 **そのかみ**　当時。仲麻呂が歌を詠んだ当時。

深い学びのために

学習のポイント

1 「指も損なはれぬべし。」（七七・4〜5）とあるが、どのような心情が表現されているか、考えてみよう。

2 「二十日の夜の月出づるまでぞありける。」（七七・9〜10）とあるが、どのような状況だというのか、「二十日の月」の出がいつ頃かを調べたうえで、考えてみよう。

3 「心をや聞き得たりけむ」（七八・2〜3）とあるが、誰がどうしたというのか、説明してみよう。

言葉と表現

1 次の各文を傍線部に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1) 指も損なはれぬべし。（七七・4〜5）　(2) 船に乗るべき所にて（七七・8）

(3) 月の影は同じことなるべければ（七八・4）

言語活動

1 「青海原」「都にて」のそれぞれの歌に込められた心情を考え、作者がなぜ「青海原」の歌を日記に引用しているのか、話し合ってみよう。

帰京

京[1]に入りたちてうれし。家に至りて、門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家[2]に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣[3]こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。*さるは、便りごとに物も絶えず得させたり。今宵、かかることと、声高にものも言はせず。いとはつらく*見ゆれど、志[4]はせむとす。

さて、池めいてくぼまり、水漬ける[5]所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへ[6]はなくなりにけり。今生ひたるぞ交じれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、*いかが[7]は悲しき。船人[8]もみな、子たかり[9]てののしる。かかるうちに、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる[10]人と言へりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ

とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、また、かくなむ。

1 **京に入りたちて**　一行は、承平五（九三五）年二月十六日に帰京した。
2 **家に預けたりつる人の心**　家の世話を頼んでおいた人の気持ち。
3 **中垣**　隣家との隔ての垣根。
問 **「かかること」とは、どのようなことを指しているか。**
4 **志**　お礼。
5 **水漬ける所**　水がたまっている所。
6 **かたへ**　一部分。
7 **いかがは悲しき**　どんなに悲しいことか。強調表現。
8 **船人**　作者と同じ船で帰京した人々。
9 **たかりて**　群がって。
10 **心知れる人**　気持ちを理解してくれる人。

＊
さるは　つらし　いかが

●見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや

忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。[11]とまれかうまれ、*疾く破りてむ。

問「見し人」とは、誰のことを指すか。

11 **とまれかうまれ**　ともかく。「ともあれかうもあれ」のつづまった形。

*口惜し　疾し

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◇学習のポイント

1 前半の段落において、作者の心情はどのように移り変わっているか、まとめてみよう。

2 「ほとりに松もありき。」（七九・7）とあるが、「松」と「生まれしも」、「見し人の」の二首の歌はどのように関連しているか、説明してみよう。

◇言葉と表現

1 次の各部は下の部分とどのような関係で続いているか、説明してみよう。

(1)中垣こそあれ（七九・4）　(2)見し人の松の千年に見ましかば（八〇・1）

1 「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。」（八〇・2～3）とあるが、この部分は、作品の冒頭部（七四ページ）とどのように対応しているのか、話し合ってみよう。

◇言語活動

土佐日記　仮名による最初の日記文学。作者は紀貫之。承平五（九三五）年頃成立。土佐守としての任期を終え、土佐から都に帰るまでの出来事や感想などをつづったもの。作者が女性に扮する形で書かれている。本文は『新日本古典文学大系』によった。

紀貫之　貞観十四（八七二）年頃～天慶八（九四五）年頃。紀友則や凡河内躬恒、壬生忠岑とともに『古今和歌集』の編集に従事した。当代随一の歌人。

古典に関する文章

男の文章と女の文章

橋本（はしもと） 治（おさむ）

平安時代の男は「漢字だけの文章」しか書けなかった

平安時代に、「日記」というものは、男が書きました。「日記」を書く文体は、漢文に決まっていました。女が漢字の本を読んでいるだけでへんな顔をされる平安時代なんですから、これはとても女の書くようなものではありません。だから、「男もすなる（男もするらしい）」です。この時代は男女の区別がはっきりしていて、「女が漢字を読めたらヘン」なんですから、女が男のしていることに詳しかったら、これもやっぱりヘンでしょう。それだから、紀貫之（きのつらゆき）が〝女〟になって書いた『土佐（とさ）日記』は、「男がする」ではなくて、「男もするらしい」という婉曲（えんきょく）表現で始まるのでしょう。「男もすなる」の「なる」は、推量の意味です。

当時の「日記」は「男の書くもの」で、女が書くものではありませんでした。ところがそれを、紀貫之はわざわざ〝女〟になって書いてみたんです。どうしてでしょう？

私は、紀貫之が「有名な歌人」だったからだと思います。和歌というものは、ひらがなで書きます。「男とは漢字の文章を書くもの」という常識の支配していた時代に、この紀貫之は、男のくせに「ひらがなを扱う名人」だったのです。だから、紀貫之は「ひらがなの文章」を書いたのです。

「漢字の文章を書くのは男だけ」という常識の支配している時代に、「ひらがなの文章」は「女しか書かないもの」です。「ひらがな使いの名人」が、自分のその特技を生かして文章を書くとなると〝女〟になって書くしかなかった——平安時代というのは、そんな不便な時代でもあったのですね。

紀貫之は「女流文学の時代」の先駆者

当時の公式文書はみんな漢文で、社会人である男にとって、「漢文を書く」というのは、必須常識でした。逆に言えば、「男は漢文以外の文章を書けなかった」ということです。「日記」というのは、そういう男が書くんですから、文章はもちろん「漢文」で、内容だって、「自分のこと」ではありません。「世の中のこと」や「政界メモ」みたいなものです。今でも、政治

家の日記が時々「政界秘話」という形で出版されますが、漢文で書かれた平安貴族の日記も、そういう種類のものだったのです。『土佐日記』は、一人の女性が土佐（高知県）から京都まで旅行する間の記録ですが、当時にはそんな「日記」なんかなかったのです。

紀貫之は、そういう、当時としてはいたって変わった内容の「日記」を、わざわざ〝女〟になって書きました。歌人であった紀貫之は、同時に〝中央政府の役人〟でした。役人の彼は、実際に地方長官として土佐へ行ったんです。そういう経験のあった彼は、自分の経験したことを、「女の書くひらがなの日記」という形で書いたんです。「日記」というよりは、「日記の形をした小説（フィクション）」と言うべきものでしょうけれどもね。紀貫之が書いたのは、そういう種類のものでした。

ところで、平安時代は「女流文学の時代」です。この時代には、[1]右大将道綱（みちつな）の母による『蜻蛉（かげろう）日記』や、『和泉式部（いずみしきぶ）日記』『紫式部日記』、菅原孝標（すがわらのたかすえ）の女（むすめ）による『更級（さらしな）日記』といったぐあいに、女たちの日記文学の名作がいっぱいあります。清少納言の書いた『枕草子（まくらのそうし）』だって、「ひらがなの文章」です。だから、うっかりするとカン違いをしてしまいます――「紀貫之は、そういう女流文学の真似をしようと思って『土佐日記』を書いたのではないか」と。でもそれは間違いです。紀貫之は、そういう女性たちよりも前の時代に生きていた人だからです。時代順からいって、紀貫之の方が先です。事実は、「紀貫之の『土佐日記』があったからこそ、後の時代の女性たちは自由にひらがなの文章を書くことができた」なのです。紀貫之が『土佐日記』を書かなかったら、後の女流文学は生まれなかったのかもしれないのです。

（注）
1 右大将道綱　藤原道綱（ふじわらの）。九五五年～一〇二〇年。

◇学習のポイント

[1] 平安時代の日記について、男性のものと女性のものはどのように異なっていたか。文体と内容の面からまとめてみよう。

[2] 平安時代の男性の日記について、誰がどのような名前の日記を残しているか、調べてみよう。

橋本治　昭和二十三（一九四八）年～平成三十一（二〇一九）年。小説家・評論家・随筆家。東京都の生まれ。ユニークな発想と独特の軽妙な文体で、多彩な執筆活動を行った。日本の古典文学に関する造詣も深い。本文は『これで古典がよくわかる』（平成十三（二〇〇一）年刊）によった。

古文の窓4 真名と仮名

蕎麦屋の看板に「生そば」とあるのを見かけたことはないだろうか。「生そば」と書かれているのだが、この「そ」と「ば」はふだん私たちが使っている平仮名ではない。「そ」は「四面楚歌」の「楚」、「ば（は）」は「者」を崩した字である。このような、仮名の元となる漢字を「字母」と呼ぶ。ちなみに、読み方は「なまそば」ではない。それは茹でる前の蕎麦のことで、ここでは「きそば」、混じり気のない蕎麦という意味である。蕎麦の前に置かれた箸袋には「御手茂登」と書いてあるかもしれない。これは字母で書けば「御手茂登」、すなわち「おてもと」と読む。



蕎麦屋の看板

現在使用している平仮名の「そ」の字母は「曽」、「ば」の字母は「波」だが、かつてはほかにもさまざまな字母に基づく平仮名を用いていた。それらを「変体仮名」と呼ぶ。右の図にあげたような文字を読むには、どのように崩されているかというだけでなく、どの字母を崩した仮名であるかの把握も必要なのである。変体仮名のバリエーションが整理され、それぞれの平仮名が今日のように一種類ずつに定められたのは明治三十三（一九〇〇）年の「小学校令施行規則」で、仮名を使ってきた長い歴史からすればさほど昔の話ではない。それまでの日本語の文章は、この多様な変体仮名を駆使して書かれていた。

ところで、そもそも「仮名」とは「かりそめの文字」という意味である。それでは「かりそめでない文字」とは何か。察しの通り、漢字である。漢字は「仮名」に対して「真名」と呼ばれ、公の記録などに用いられた。一方で漢字をもとに新たに発明された仮名は、プライベートな領域をもつづれる文字として位置づけられた。『土佐日記』や『源氏物語』（七一ページ注1）などの仮名文学も、「かりそめの文字」で記された文学作品という性格を帯びており、奥付に当たる作者名や日付などが何もないことも、その性格と関わるはずである。

近年では変体仮名を学習するスマートフォン[1]用アプリ[2]も開発され、気軽に接することができるようになった。変体仮名が読めることは、変体仮名で書かれた書物が読めることにつながり、読書の世界が一気に広がる。変体仮名を通して日本語の文字の豊かさを体験してみよう。

（注）
1 スマートフォン　smartphone（英語）。携帯電話を兼ねた情報端末。
2 アプリ　アプリケーション（application　英語）の略称。

変体仮名を読む

私たちが古典文学作品に触れる際は、活字になったものに触れることがほとんどである。しかし、昔の人が活字を書いていたわけではない。昔の人の書いたものを、読みやすい活字の形にして読んでいるのである。例えば、『土佐日記』の冒頭部分は、鎌倉時代に書写された本では、図版1のようになっている。現代の仮名とほとんど変わらないように見える字もあるが、字母が異なると思われる字もある。「真名と仮名」（八三ページ）にもあるように変体仮名が読めるようになることは古典文学への理解を深めることになる。

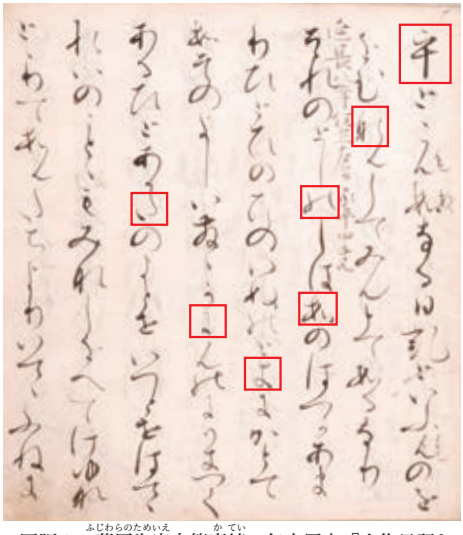
課題 変体仮名を読んでみよう。

1 現代の平仮名と字母が異なる仮名を読んでみよう。

①図版2の「仮名字体表」から、図版1の□で囲った部分の字母となっている漢字を探す。

②□で囲った部分を平仮名に置き換える。

2 図版1を「門出」（七四ページ）の本文と比べ、本文中で句読点が付けられている箇所に句読点を加えてみよう。



図版1　藤原為家自筆嘉禎二年古写本『土佐日記』



き	た	に	を
喜	堂	丹	乎
幾	多	二	尾
支	當(当)	仁	緒
祈		尓	越
貴		耳	遠
起		而	

す	な	の
壽(寿)	南	乃
數(数)	名	濃
春	奈	能
須	那	農
	難	

図版2　仮名字体表

6 物語 3

- 音読する、平曲を聞くなどを通して『平家物語』特有の表現を味わう。
- 軍記物語の文体の特徴について理解する。
- 物語に描かれた人物の心情を深く読み取る。

平家物語　木曽の最期（巻第九）

参考　祇園精舎（巻第一）

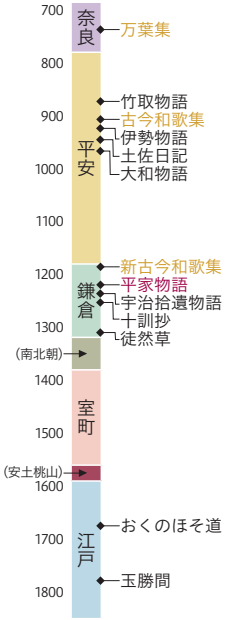
古文を読むために◆6

1 敬語　2 音便

古文の窓5　和文と和漢混交文

◆単元の言語活動 6

人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する





『平家物語』関係地図　主な武将の進路をあげた。

平家物語

木曽の最期

寿永二（一一八三）年、源義仲（木曽義仲）は北陸道で平家の大軍を破り、同年七月に京に入ったが、政治力の欠如や独裁的な行動のために孤立を深めた。後白河法皇は源頼朝に義仲追討を命じ、頼朝は弟の範頼・義経の軍勢を京へ派遣した。翌年一月、義仲は寵愛する巴を連れ、京を敗走し、大津の打出の浜で今井四郎兼平（義仲を養育した中原兼遠の子）と再会した。

【清和源氏略系図】

清和天皇…為義
- 義朝
  - 義平
  - 頼朝
  - 範頼
  - 義経
  - 義賢
    - 義仲

木曽左馬頭[1]、その日の装束には、赤地の錦の直垂[2]に唐綾威[3]の鎧着て、鍬形[4]打つたる甲の緒締め、いかもの作りの大太刀[5]はき、石打ちの矢[6]、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、重籐[7]の弓持つて、聞こゆる木曽の鬼葦毛[8]といふ馬の、きはめて太うたくましいに、黄覆輪[9]の鞍置いてぞ乗つたり

1 **木曽左馬頭**　源義仲。一一五四年～一一八四年。信濃国木曽（現在の長野県木曽郡辺り）で育つ。寿永二（一一八三）年に左馬頭（左馬寮の長官）に任ぜられた。

2 **直垂**　ここでは鎧の下に着用する鎧直垂のこと。袴が短く、袖と袴の裾をくくれるようにしてある。

3 **唐綾威**　唐綾（模様を浮き織りにした絹織物）を細長くたたんで鎧の札（鉄または革で作られた小板）をつづりあわせたもの。

4 **鍬形**　甲の正面に付けられた、角のように突き出た金属製の飾り。

5 **いかもの作りの大太刀**　大きく堂々と見えるように作った太刀。

6 **石打ちの矢**　鷲などの尾の両端の羽（石打ち）を矢羽とした戦闘用の矢。

7 **重籐の弓**　黒漆を塗り、その上に籐を巻きつけた弓。

8 **鬼葦毛**　「鬼」は、強いことを表す語。「葦毛」は馬の毛色で、黒色や濃褐色の毛に白い毛が混じったもの。

ける。[10]鐙踏ん張り立ち上がり、大音声を上げて名乗りけるは、

「昔は聞きけんものを、木曽の[11]冠者、今は見るらん、左馬頭兼[12]伊予守朝日の将軍源義仲ぞや。[13]甲斐の[14]一条次郎とこそ聞け。互ひによい敵ぞ。義仲討つて[15]兵衛佐に見せよや。」

とて、[16]をめいて駆く。一条次郎、

「ただ今名乗るは大将軍ぞ。あますな者ども、もらすな若党、討てや。」

とて、大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。木曽三百余騎、六千余騎が中を縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行くほどに、[17]土肥二郎実平、二千余騎で支へたり。それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。五騎がうちまで[18]巴は討たれざりけり。木曽殿、

「おのれは、[19]疾う疾う、女なれば、いづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を

9 **黄覆輪の鞍**　金で縁どりした鞍。
10 **鐙**　鞍の両脇にさげ、足を踏み掛ける道具。
11 **冠者**　元服して冠を着けた若者。
12 **伊予守**　伊予（現在の愛媛県）の国主。
13 **甲斐**　現在の山梨県。
14 **一条次郎**　頼朝方の武将。
15 **兵衛佐**　兵衛府の次官。ここでは、源頼朝を指す。一一四七年～一一九九年。鎌倉幕府初代の将軍。
16 **をめいて**　大声で叫んで。

問 **「縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割つて」とは、何のどのような様子を表しているのか。**

17 **土肥二郎実平**　頼朝方の武将。「土肥」は現在の神奈川県足柄下郡湯河原町。

問 **「主従」とは、誰のことか。**

18 **巴**　義仲に愛され、木曽から従って来た女性。武勇に優れ、たびたび武勲を立てたといわれている。
19 **疾う疾う**　早く早く。「疾く疾く」のウ音便。



恩田八郎と戦う巴（絵本『平家物語』）

具せられたりけりなんど、言はれんこともしかるべからず。」[20]

とのたまひけれども、●なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて[21]、

「あつぱれ、よからう[22]敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」

とて、控へたるところに、武蔵[23]の国に聞こえたる大力、恩田八郎師重[24]、三十騎ばかりで出で来たり。巴、その中へ駆け入り、恩田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪[25]に押しつけて、ちつともはたらかさず[26]、首ねぢ切つて捨ててんげり[27]。その後、物の具[28]脱ぎ捨て、東国の方へ落ちぞ行く。手塚太郎[29]討ち死にす。手塚別当[30]落ちにけり。

今井四郎[31]、木曽殿、主従二騎になつてのたまひけるは、

*具せられたりけりなんど　よろしくないだろう。

20 **しかるべからず**　よろしくないだろう。

問 **「なほ落ちも行かざりけるが」とあるが、ここでの巴の心情は、どのようなものか。**

21 **奉つて**　「たてまつりて」の音便形「たてまつつて」のつづまった形。

22 **よからう**　「よからむ」が転じた形。

23 **武蔵の国**　六二ページ注18参照。

24 **恩田八郎師重**　頼朝方の武将。

25 **前輪**　鞍の前部の高くなっている部分。

26 **はたらかさず**　身動きさせず。

27 **捨ててんげり**　「捨ててけり」の変化した形。

28 **物の具**　鎧、甲などの武具。

29 **手塚太郎**　木曽方の武将。

30 **手塚別当**　太郎の叔父。木曽方の武将。

31 **今井四郎**　兼平。木曽方の武将。八六ページ参照。

「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」*

今井四郎申しけるは、

「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。何によつてか、一[32]領の御着背長[33]を重うはおぼしめし候ふべき。それは御方に御勢が候はねば、臆病[34]でこそさはおぼしめし候へ。兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢[35]つかまつらん。あれに見え候ふ、粟津[36]の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」

とて、打つて[37]行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出で来たり。

「君はあの松原へ入らせ給へ。兼平はこの敵防ぎ候はん。」

と申しければ、木曽殿のたまひけるは、

「義仲都にていかにもなるべかりつるが、これまで逃れ来るは、なんぢと一所で死なんと思ふためなり。ところどころで討たれんよりも、ひとところでこそ討ち死にをもせめ。」

とて、馬の鼻を並べて駆けんとし給へば、今井四郎馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、

32 **一領**　「領」は鎧などを数える際の単位。

33 **着背長**　大将の着る大鎧の別称。

34 **臆病**　気後れ。

35 **防ぎ矢**　相手を寄せ付けないようにするための矢。

36 **粟津の松原**　現在の滋賀県大津市粟津町付近。琵琶湖畔の松原は古来景勝地として知られていた。

37 **打つて行くほどに**　（馬に）鞭を打って進むうちに。

問 **「いかにもなる」とは、具体的にはどのようになることか。**

*

具す　日ごろ　おぼしめす

「弓矢取り[38]は、年ごろ、日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、長き[39]きずにて候ふなり。●御身は疲れさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押し隔てられ、言ふかひなき人の郎等[40]に組み落とされさせ給ひて討たれさせ給ひなば、『さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、それがし[41]が郎等の討ち奉つたる。』なんど申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」

と申しければ、木曽、

「さらば。」

*

とて、粟津の松原へぞ駆け給ふ。

今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鐙踏ん張り立ち上がり、大音声上げて名乗りけるは、

「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曽殿の御乳母子[42]、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿[43]までも知ろしめされたるらんぞ。兼平討つて見参[44]に入れよ。」

*

とて、射残したる八筋の矢を、さしつめ引きつめさんざんに射る。死生は知ら

38 弓矢取り　武士。
39 長ききず　いつまでも残る不名誉。
問「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」と、兼平が言ったのはなぜか。
40 郎等　家来。
41 それがし　誰それ。なにがし。
42 乳母子　ここでは、守り役の子。
43 鎌倉殿　源頼朝。
44 見参に入れよ　御覧に入れよ。



兼平最後の戦い（平家物語絵巻）

ず、やにはに敵八騎射落とす。その後打[45]ち物抜いて、あれに馳(は)せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つて回るに、面(おもて)を合はする者ぞなき。[46]分捕(ぶんどり)りあまたしたりけり。ただ、

「射とれや。」

とて、中に取りこめ、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず[47]、あき間[48]を射ねば手も負はず[49]。

木曽殿はただ一騎、粟津の松原へ駆け給ふが、正月二十一日、[50]入相(いりあひ)ばかりのことなるに、薄氷(うすごほり)は張つたりけり、深田(ふかた)ありとも知らずして、馬をざつとうち入れたれば、馬の頭(かしら)も見えざりけり。[51]あふれどもあふれども、打てども打てどもはたらかず。今井が行方のおぼつかなさに、

45 **打ち物**　刀。

46 **分捕り**　敵の武器を奪うこと。

47 **裏かかず**　（鎧の札が丈夫なので、矢が）裏まで通らない。

48 **あき間**　鎧の札と札との間などのすき間。

49 **手も負はず**　負傷もしない。

50 **入相**　日没。たそがれ時。

51 **あふれども**　（馬の腹を鐙で蹴って）駆り立てても。

＊ さらば　知ろしめす



深田にはまる義仲（平家物語絵巻）

振り仰ぎ給へる内甲（うちかぶと）[52]を、三浦の石田次郎為久（いしだのじらうためひさ）[53]、追つかかつてよつぴいてひやうふつと射る。[54][55]痛手（いたで）なれば、[56]真向（まつかう）[57]を馬の頭に当てて、うつぶし給へるところに、石田が郎等二人（ににん）落ち合うて、つひに木曽殿の首をば取つてんげり。[58]太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声を上げて、

「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、三浦の石田次郎為久が討ち奉つたるぞや。」

と名乗りければ、今井四郎いくさしけるが、これを聞き、

「今は誰（たれ）をかばはんとてか、いくさをもすべき。これを見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛（かう）の者の自害する手本。」

とて、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失（う）せにける。[59]さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

（巻第九）

52 **内甲**　甲の内側。額の部分。

53 **三浦の石田次郎為久**　頼朝方の武将。「石田」は現在の神奈川県伊勢原（いせはら）市。

54 **追つかかつて**　追いついて。「追ひかかりて」の音便形。

55 **よつぴいて**　「よくひきて」の音便形。

56 **痛手**　重傷。

57 **真向**　甲の前面。

58 **取つてんげり**　「取りてけり」の音便形「取つてけり」に「ん」が加わった形。

問 **「聞こえさせ給ひつる」の「聞こえ」は、どのような意味か。**

59 **貫かつて**　「貫かりて」の音便形。「貫かる」（四段動詞）は「貫く」に対する自動詞の形。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1 音便や文の調子に注意して、音読してみよう。

◆言葉と表現

1 次の各部分から敬語を指摘し、敬語の種類と品詞について調べてみよう。

(1) のたまひけれども（八八・3）

(2) 申しけるは（八九・2）

(3) おぼしめし候ふべき。（八九・4）

(4) 討たれさせ給ひなば（九〇・3〜4）

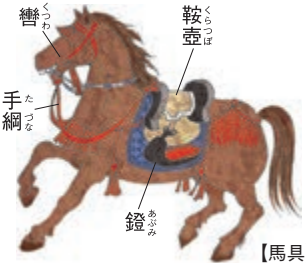
◆言語活動

1 次のそれぞれの場面での、登場人物の心情はどのようなものか、考えてみよう。

(1) 義仲と巴が別れるときの、義仲と巴のそれぞれの心情。

(2) 主従二騎になったときの、義仲と兼平のそれぞれの心情。

(3) 義仲と兼平の、それぞれの最期を遂げたときの心情。



【馬具】

参考

祇園精舎

暗唱してみよう

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。*猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先皇の政にも従はず、楽しみを極め、いさめをも思ひいれず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごれる心も猛きことも、みなとりどりにこそありしかども、間近くは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、心も言葉も及ばれね。

（巻第一）

平曲を聞いてみよう



琵琶法師（太平記絵巻）

平家物語　軍記物語。作者未詳。十三世紀前半の成立か。十二巻。仏教的無常観を基調とする叙事詩的物語。源平の動乱を描く。擬態語などが多用される和漢混交文で、琵琶法師が語り伝えることで広まった。本文は『新日本古典文学大系』によった。

＊ことわり　猛し

古文を読むために 6

1 敬語

書き手（話し手）が、読み手（聞き手）や話題にしている人物に対して、敬意を表した言葉遣いを**敬語**という。

1 敬語の種類

誰に敬意が向けられているかによって、敬語は次の三種に分けられる。

(1) **尊敬語**　書き手（話し手）が、話題の中の**動作をする人物**（動作主・為手）に対して敬意を表すもの。

(2) **謙譲語**　書き手（話し手）が、話題の中の**動作を受ける人物**（受け手）に対して敬意を表すもの。

(3) **丁寧語**　書き手（話し手）が、**読み手（聞き手）**に対して丁寧な言葉遣いを用いて直接敬意を表すもの。

(1)〜(3)のいずれの敬語も、誰からの敬意を表すかは、会話文か地の文かを手掛かりに考える。

- **会話文**→その会話の話し手からの敬意。
- **地の文**→その文章全体の書き手からの敬意。

例 「子になり給ふべき人なめり。」とて（四六・6〜7）
——竹取の翁からかぐや姫への敬意を表す尊敬語。

例 木曽殿のたまひけるは（八九・10）
——書き手から木曽殿への敬意を表す尊敬語。

例 「最後のいくさして見せ奉らん。」とて（八八・5〜7）
——巴から木曽殿への敬意を表す謙譲語。

例 今井四郎申しけるは（八九・2）
——書き手から木曽殿への敬意を表す謙譲語。
◆『平家物語』の「書き手」が、今井の動作に謙譲語を用いることで、今井の動作（「申す」）を受ける木曽殿への敬意を表している。

例 「今まで過ごし侍りつるなり。」（四九・2）
——かぐや姫から「親ども」への敬意を表す丁寧語。

例 百首歌詠ませ侍りけるに（二六三・5）
——書き手から読み手への敬意を表す丁寧語。

2 敬語の表現方法

敬語の表現方法には、本動詞を用いるもの、補助動詞や助動詞を用いるものなどがある。

本来の意味で用いる動詞を**本動詞**という。これに対して、

その動詞本来の意味を失い、ほかの動詞に付いて、特定の意味を添える動詞を**補助動詞**という。

▼本動詞を用いた敬語表現

例「しかるべからず。」と**のたまひ**けれども（八八・1〜3）

▼補助動詞を用いた敬語表現

例何人か迎へ**聞こえ**む。（四九・9）

▼助動詞を用いた敬語表現

例局の前を過ぎ**られ**けるを（二四・8）

◆「亀山殿の御池」（三〇・1）のように、接頭語を用いた敬語表現もある。

3 注意すべき敬語表現

(1) **二重敬語（最高敬語）**　尊敬語を二つ重ねて用い、特別な敬意を表すもの。

例御身もいまだ疲れ**させ給は**ず。（八九・3）

(2) **二方面への敬語**　書き手（話し手）が、動作をする人、動作を受ける人の両方に敬意を表すため、二種類の敬語を同時に使うもの。

例御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ**参り給ふ**に、（五九・10〜11）

――「参り」→書き手から内裏（帝の居所）への敬意を表す謙譲語。

――「給ふ」→書き手から堀河の大臣・太郎国経の大納言への敬意を表す尊敬語。

(3) **絶対敬語**　天皇・上皇・皇后・中宮など、身分の高い特定の人物に対してのみ用いられる敬語。

例**奏す**＝「（**天皇・上皇に**）申し上げる」の意。
啓す＝「（**皇后・中宮・皇太子に**）申し上げる」の意。

2 音便

発音の便宜上、単語中のある音が変化することを、**音便**という。

(1) **イ音便**　イ音へと変化するもの。

例馬の口に取りつい**て**申しけるは（八九・14〜15）→つき**て**

(2) **ウ音便**　ウ音へと変化するもの。

例きはめて太う**たくましい**に（八六・13）→太く**たくましい**

(3) **撥音便**　撥音（「ん」の音）へと変化するもの。

例人な**（ん）**めり。（四六・6〜7）→な**る**めり。

◆このように、音便化した「ん」は無表記の場合も多い。

(4) **促音便**　促音（「っ」の音）へと変化するもの。

例知らざ**つ**しかば（九四・7）→知らざ**り**しかば

古文の窓5

和文と和漢混交文

文章を読むとき、私たちは言葉の意味を考え、書かれている内容を理解しようとする。だが、文章は内容だけでできているわけではない。どのような言葉が選ばれ、どのように書かれているかということも、文章全体がまとう雰囲気を左右する重要な要素である。

古代から近代までの日本で読まれ、書かれてきた文章のスタイル（文体）は、実にさまざまである。主なものをあげれば、漢文・和文・漢文訓読文・和漢混交文などがある。

漢語で構成される漢文に対して、和語（やまと言葉）を中心に成される文を和文という。また、和漢混交文は和文と漢文訓読文（漢文を読みくだした文）が混ざり合った文である。

和文の例として、『伊勢物語』「芥川」（五八〜五九ページ）の冒頭部分を見てみよう。

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。

この文の中に「よばひわたりけるを」という表現がある。これは「求婚し続けたが」という意味である。しかし、この文では「求婚」という漢語は使われておらず、「よばふ」という和語が使われている。

次に、和漢混交文の例として、『平家物語』「祇園精舎」（九四ページ）の一節を見てみよう。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。

「諸行無常」「盛者必衰」などの漢語が多用され、「〜ごとし」のような漢文訓読調の表現もみられる。「〜ごとし」を和文調に書き換えるなら、「〜やうなり」となるだろう。

「春の夜の夢のごとし」よりも「春の夜の夢のやうなり」のほうが、語感がやわらかい印象がある。文の内容は変わらないが、使う言葉を変えるだけで、文のまとう雰囲気は異なるものになる。

鎌倉時代以降、和文は「擬古文」と呼ばれ、明治時代まで命脈を保った。和漢混交文も、中世から近世にかけてさまざまなジャンルで用いられた。古文といっても、その文体は一種類ではないのである。

◆人物の心情を想像して「木曽の最期」を脚本化する

『平家物語』は、文字で表記されたテキストとして読まれるだけではなく、琵琶法師の奏でる平曲の調べに合わせ、「声」を通じて多様な形で語られることで、人々に享受されてきた。特に「木曽の最期」（八六～九二ページ）は、登場人物の微妙な心の動きを巧みに描写した『平家物語』屈指の名場面である。文字で書かれたテキストでは明確に示されていない登場人物の心の動きを、「声」に出して演じることで生き生きと表現してみよう。

課題「木曽の最期」を脚本化し、演じてみよう。

1 担当するシーンと役割分担を決めよう。

①グループを作り、次のA～Cから一つずつ担当するシーンを決める。クラスの人数によっては一シーンを担当するグループが二つになってもよい。

シーンA「義仲と巴の別れ」

シーンB「義仲を励ます兼平」

シーンC「義仲と兼平の最期」

②義仲役・巴役・兼平役・ナレーション役・演出などの役割分担を決める。

2「せりふ」と「ナレーション」を考え、脚本を作ろう。

①グループ全員で話し合い、登場人物の「せりふ」を考える。「木曽の最期」の会話文を参考にするが、登場人物のさまざまな心情を想像して、本文には書かれていない表現を補ってもよい。

②場面の説明など、「せりふ」だけでは伝わりにくい要素を補足説明する「ナレーション」を考える。

③「せりふ」と「ナレーション」を脚本にまとめ、読み合わせをする。不自然な「せりふ」や、伝わりにくい「ナレーション」の表現がないか、確認する。

3 完成した脚本を基に演じてみよう。

①グループごとに脚本を輪読して、発表する。「せりふ」の担当者は、登場人物の心情を想像し、感情を込めて読む。

②ほかのグループの脚本のよかった点をあげる。

7 近世の文学

- 時間の経過や地域による言葉の変化について理解する。
- 俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わう。
- 古跡や伝統行事を調べることを通じて歴史を再発見し、随筆を書く。

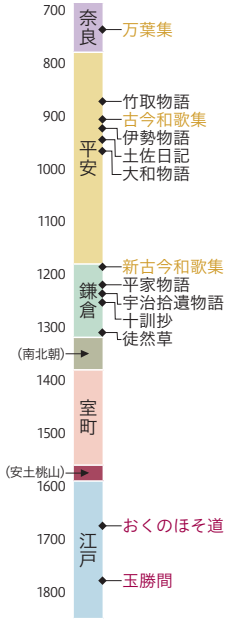
おくのほそ道　旅立ち／平泉／種の浜

玉勝間　田舎に雅言の残れること

古文の窓6　写本の本文――「青々たり」と「草青みたり」

単元の言語活動 7

歴史を再発見し、随筆を書く





芭蕉行脚図（森川許六筆）
笠を手に杖をつく芭蕉と同行する門人曽良。



本居宣長（望月春江筆）
鈴屋と名付けた書斎で筆を取る宣長。

おくのほそ道

旅立ち

暗唱してみよう

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、*片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に掛け置く。

松尾芭蕉

1 **月日は百代の過客にして**　月日は永遠の旅人であって。「夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。」（「春夜宴二桃李園一序」李白）による。一六〇ページ参照。

2 **古人**　芭蕉が敬慕した、西行・宗祇・李白・杜甫などを指す。

3 **海浜にさすらへ**　貞享四（一六八七）年から翌年にかけて、須磨・明石などを旅したことを指す。

4 **江上の破屋**　隅田川のほとりのあばら屋。江戸深川（現在の東京都江東区内の地）にあった芭蕉庵を指す。

5 **白河の関**　現在の福島県白河市旗宿にあった関所。

6 **そぞろ神**　何となく人の心を落ち着かなくさせる神。

7 **道祖神**　旅人を悪霊などから守る神。

8 **股引**　腰から脚までを覆う下着の一種。

9 **三里**　膝頭の下で、外側のややくぼんだ所。健脚を保つ灸点。

10 **松島**　宮城県の松島湾一帯の景勝地。

11 **杉風**　杉山杉風。一六四七年～一七三二年。芭蕉の門人。

弥生も末の七日、*あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。*むつまじきかぎりは宵より集ひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

5

12 **別墅** 別荘。芭蕉庵の近くにあった採茶庵を指す。

問 **「草の戸も」の句の季語と季節はどれか。**

13 **表八句** 百韻連句の最初の八句。懐紙の一枚目の表に記す。

14 **月は…** 『源氏物語』帚木巻に「月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えてなかなかをかしきあけぼのなり。」とある。

15 **上野、谷中** 共に現在の東京都台東区内の地。桜の名所。

16 **千住** 現在の東京都足立区内の地。奥州街道の最初の宿駅。

17 **矢立の初め** 旅日記の書き出し。「矢立」は携帯用の筆記具。

*いづれ　あけぼの　有明　むつまじ

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 作者は、どのような思いから旅に出ようとしているのか、考えてみよう。

❖言葉と表現

1 本文中から、対句表現を探してみよう。

2 次の傍線部の後にはどのような表現が省略されているか、考えてみよう。

(1)またいつかはと心細し。（一〇一・2）　(2)後ろ影の見ゆるまではと（一〇一・6〜7）

❖言語活動

1 「古人も多く旅に死せるあり。」（一〇〇・3〜4）とあるが、作者のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。

『おくのほそ道』旅程図

＊数字は宿泊日（陰暦）



矢立

平泉[1]

三代[2]の栄耀[3]一睡のうちにして、大門の跡は一里[4]こなたにあり。秀衡[5]が跡は田野になりて、金鶏山[6]のみ形を残す。まづ高館[7]に登れば、北上川、南部[8]より流る大河なり。衣川[9]は和泉が城[9]をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡[10]らが旧跡は、衣が関[11]を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり。」[12]と笠うち敷きて、時の移るまで涙を落とし侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房[13]見ゆる白毛かな

曽良[14]

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経



芭蕉が訪れた当時の姿を残す旧鞘堂

1 **平泉** 現在の岩手県西磐井郡平泉町。
2 **三代** 藤原清衡・基衡・秀衡。
3 **一睡のうちにして** 一眠りほどの僅かな間に消えて。
4 **一里** 約三・九キロメートル。
5 **秀衡が跡** 秀衡（生年未詳～一一八七年）の居館の跡。
6 **金鶏山** 秀衡が居館の西に富士山に似せて築いた山。
7 **高館** 源義経の居館があった所。
8 **南部** 平泉の北方の南部氏の領地。現在の岩手県盛岡市付近を指す。
9 **和泉が城** 秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居館だった所。
10 **泰衡** 一一五五年～一一八九年。秀衡の次男。
11 **衣が関** 高館の西方にあった関所。
12 **国破れて…** 「国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ。」（「春望」杜甫）による。一五二ページ参照。
13 **兼房** 十郎権頭兼房。義経の老臣。
14 **曽良** 河合曽良。一六四九年～一七一〇年。芭蕉の門人で、『おくのほそ道』の旅の同行者。

堂は三将の像を残し、[15]光堂は三代の棺を納め、[16]三尊の仏を安置す。[17]七宝散りうせて、[18]珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべきを、[19]四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨をしのぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂



卯の花

15 **三将の像**　清衡・基衡・秀衡の像。実際には、文殊菩薩・優闐大王・善財童子の像が納められている。

16 **光堂**　天治元（一一二四）年、清衡の建立した阿弥陀堂。「金色堂」ともいう。

17 **三尊の仏**　阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩。

18 **七宝**　金・銀・瑠璃など、仏教で言う七種の宝玉。

19 **四面新たに囲みて**　正応元（一二八八）年に光堂を覆う鞘堂が造られたこと。

問 **「しばらく」と述べたのは、なぜか。**

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント　1 「夏草や」「五月雨の」の句には、それぞれ作者のどのような心情が込められているか、考えてみよう。

◇言葉と表現　1 次の傍線部の助詞の用法を、確認してみよう。

(1) 夏草や兵どもが夢の跡（一〇三・11）　(2) すでに頽廃空虚の叢となるべきを（一〇四・3～4）

(3) 五月雨の降り残してや光堂（一〇四・6）

◇言語活動

1 「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べてみよう。

古文の窓6

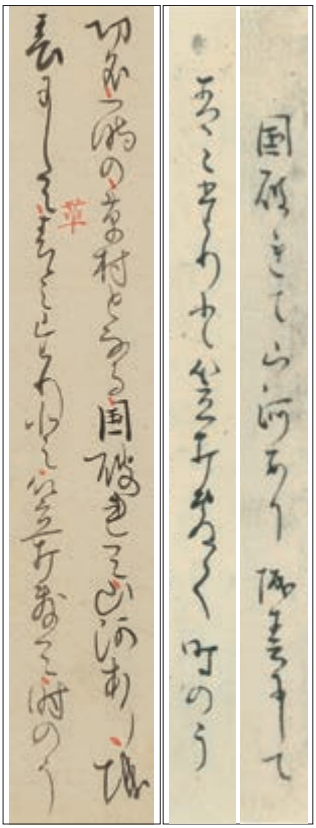
写本の本文
――「青々たり」と「草青みたり」

『おくのほそ道』が出版されたのは芭蕉（ばしょう）の死後である。出版された本のもとになったのは、西村本と呼ばれる写本（書き写された本）であった。

『おくのほそ道』には西村本のほかにも中尾本・曽良（そら）本などの写本がある。中尾本は芭蕉の自筆と考えられており、曽良本は中尾本を芭蕉の弟子が写した本である。西村本は、補訂後の曽良本を書家の素龍（そりゅう）が清書し、芭蕉が最後の旅に携えて行った本である。

写本の本文は必ずしも同じではない。例えば「平泉」の段の「城春にして…」の箇所は、中尾本では「城春にして青々たり」となっている。一方、曽良本では「城春にして青ミたり」となっており、さらに「青」の上に「草」を補入している。西村本では、これを踏まえて「城春にして草青みたり」となっている。

「青々たり」と「草青みたり」。芭蕉はどちらの表現がより良いと考えていたのだろうか。



中尾本　曽良本

種の浜

十六日[1]、空霽れたれば、ますほの小貝[2]拾はんと、種の浜[3]に舟を走す。海上七里あり。天屋なにがし[4]といふ者、破籠[5]・小竹筒[6]など細やかにしたためさせ、僕あまた舟に取り乗せて、追ひ風[7]ときの間に吹き着きぬ。

浜は僅かなる海人の小家にて、侘しき法花寺[8]あり。ここに茶を飲み、酒を温めて、夕暮れの寂しさ、感に堪へたり。

寂しさや須磨[9]にかちたる浜の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵[10]

その日のあらまし、等栽[11]に筆を取らせて寺[12]に残す。



ますほの小貝



色浜

1 十六日　元禄二（一六八九）年八月十六日。

2 ますほの小貝　淡い黄褐色に紅のさした小貝で、色浜の特産。西行（二六三ページ注41参照）の『山家集』に「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらむ」とある。

3 種の浜　現在の福井県敦賀市色浜。

4 天屋なにがし　天屋五郎右衛門。敦賀の廻船問屋。俳号玄流。

5 破籠　破子。「わりこ」ともいう。薄い檜の白木を曲げて作った入れ物。

6 小竹筒　竹筒で作った携帯用の酒入れ。

7 追ひ風ときの間に…　「ときの間」は、ほんの少しの時間。『源氏物語』須磨巻に「日長きころなれば、追い風さへそひて、まだ申の刻ばかりに、かの浦に着き給ひぬ。」とある。

8 法花寺　現在の日蓮宗の寺、本隆寺。

9 須磨　現在の兵庫県神戸市須磨区。『源氏物語』須磨巻に「須磨は、いとど心づくしの秋風に…またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」とある。

10 波の間…「小萩ちれますほの小貝小盃」を改案したもの。
11 等栽 福井の俳人。
12 寺に残す 本隆寺に「越前ふくゐ洞哉書」の一軸が伝存している。

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

❖学習のポイント

1 「寂しさや」の句について、「かちたる」とは、何が、何に、どのような点で勝ったのか、まとめてみよう。

❖言葉と表現

1 「波の間や」の句について、「波」「小貝」「萩の塵」を取り合わせたことで、どのような効果が生まれているか、話し合ってみよう。

❖言語活動

1 「ますほの小貝拾はんと」（一〇六・2）とあるが、作者はなぜこのようなことをしようとしたのか、話し合ってみよう。

おくのほそ道 俳諧紀行文。作者は松尾芭蕉。元禄七（一六九四）年以前の成立。元禄二（一六八九）年三月、門人河合曽良を伴って江戸を出発し、東北・北陸を経て、同年九月、大垣（現在の岐阜県大垣市）に至るまでの旅行記。和漢混交文で旅の事実に虚構を交えて記しており、簡潔で含蓄に富み、高雅な趣を伝えている。本文は『日本古典文学大系』によった。

松尾芭蕉 正保元（一六四四）年～元禄七（一六九四）年。俳人。名は宗房。伊賀上野（現在の三重県伊賀市）の人。貞門俳諧、談林俳諧を経て、三十五歳頃から俳諧師として立ち、しだいに独自の俳境を深め、閑寂高雅な蕉風俳諧を打ち立てた。蕉門の撰集として『春の日』など、紀行文に『笈の小文』などがある。

玉勝間（たまがつま）

本居宣長（もとをりのりなが）

田舎に雅言（みやびごと）[1]の残れること

すべて田舎には、*いにしへの言（こと）の残れること多し。ことに遠き国人（くにびと）[2]の言ふ言（こと）の中には、おもしろきことどもぞまじれる。おのれ年ごろ心をつけて、遠き国人のとぶらひ来たるには、必ずその国の言葉を問ひ聞きもし、その人の言ふ言をも、心とどめて聞きもするを、なほ国々の言葉どもを*あまねく聞き集めなば、いかにおもしろきこと多からん。

近きころ、肥後[3]の国人の来たるが、言ふことを聞けば、世に「見える」「聞こえる」などいふ類ひを、「見ゆる」「聞こゆる」などぞ言ふなる。こは今の世には絶えて聞こえぬ、雅（みや）びたる言葉遣ひなるを、「その国にては、なべてかく言ふにや。」と問ひければ、「ひたぶるの賤（しづ）、山がつはみな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』などやうに言ふを、●少し言葉をもつくろふほどの者は、

1 雅言　優雅な言葉。

2 遠き国人　都から遠く離れた国の人。

3 肥後　肥後の国。現在の熊本県。

問「少し言葉をもつくろふほどの者」とは、どのような場所に暮らす人々か。

多くは『見える』『聞こえる』とやうに言ふなり。」とぞ語りける。そはなかなか今の世の卑しき言ひざまなるを、なべて国々の人の言ふから、そをよきことと心得たるなめり。

いづれの国にても、賤、山がつの言ふ言は、[4]よこなまりながらも、多く昔の言を言ひ伝へたるを、人しげくにぎははしき里などは、異国人（ことくにびと）も入りまじり、都の人なども、[5]ことに触れて来通ひなどするほどに、*おのづからここかしこの言葉を聞きならひては、おのれも言選（ことえ）りして、[7]なまさかしき今やうに移りやすくて、昔ざまに遠く、なかなかに卑しくなんなりもてゆくめる。

まことや、同じ肥後の国の、またの人の言へる、「かの国にて、『ひきがへる』といふものを、『たんがく』と言ふなるは、いにしへの『たにぐく』のよこなまりなるべくおぼゆ。」と語りしは、*まことにしかなるべし。●この類ひのこと、国々になほ聞けること多かるを、今はふと思ひ出（い）でたることを言ふなり。なほ思ひ出でんままに、またも言ふべし。

4 **よこなまりながらも**　言葉や発音を崩して、なまりながらも。

5 **ことに触れて…**　折に触れて往来などするうちに。

6 **言選り**　言葉を選ぶこと。

7 **なまさかしき**　中途半端に小ざかしい。

問 **「この類ひのこと」とは、どのようなことを指しているか。**

＊

いにしへ　あまねし　なかなか　おのづから　まことに

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◆学習のポイント

1 本文では、「見える」「聞こえる」に対して、「見ゆる」「聞こゆる」のほうを「雅びたる言葉遣ひ」（一〇八・9）だと言っているが、その理由をまとめてみよう。

◆言葉と表現

1 次の傍線部の助動詞の意味の違いを、それぞれ確認してみよう。

(1)「見ゆる」「聞こゆる」などぞ言ふなる。（一〇八・8）

(2)こは今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひなるを（一〇八・8〜9）

2 次の部分を、傍線部の語に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1)あまねく聞き集めなば（一〇八・5）

(2)そをよきことと心得たるなめり。（一〇九・2〜3）

◆言語活動

1 作者の、地方の言葉に対する感じ方・考え方についてどのように思うか、話し合ってみよう。

玉勝間　随筆。作者は本居宣長。寛政五（一七九三）年に起筆、寛政七（一七九五）年から文化九（一八一二）年にかけて出版。内容は書籍からの抄録、注釈、学問論、古道論、随想など、さまざまなものを含む。千項目余から成る。本文は『日本思想大系』によった。

本居宣長　享保十五（一七三〇）年〜享和元（一八〇一）年。医者・国学者。伊勢松坂（現在の三重県松阪市）の人。契沖と賀茂真淵の影響を受け、実証性を重視した古典研究を行った。「もののあはれ」の論で知られる。主な著書に、古典注釈書『源氏物語玉の小櫛』『古事記伝』、歌論書『石上私淑言』などがある。

◆歴史を再発見し、随筆を書く

『おくのほそ道』（一〇〇～一〇六ページ）では、各地の古跡を訪れて先人の足跡を追体験する作者の姿が描かれている。ただ、それらの体験を通じて作者が描く古跡の風景は、単なる過去の歴史の再現ではない。過去の歴史を知ることで、目の前の風景の見え方ががらりと変わり、作者はそこから新しい発見をしているのだ。歴史を知ることは、自分たちが生きている時代のおもしろさを再発見することだとも言えよう。

「田舎に雅言（みやびごと）の残れること」（一〇八～一〇九ページ）で示された本居宣長（もとおりのりなが）の考え方の独創性も、古い言葉の成り立ちや変化に関する研究にとどまらず、それらを宣長の時代まで伝えられた方言と関連づけたという点にある。昔の言葉や文化について学ぶことは、自分たちが生きている時代について学ぶことにもつながるのだ。

課題 関心を持った古跡や伝統行事を題材として、随筆を書いてみよう。

1 古跡や伝統行事に関する体験談や知識について話し合ってみよう。

①グループを作り、旅行などで古跡を訪れたり、地域の伝統行事に参加したりしたときの体験について話し合う。

②実体験以外にも、古跡や地域の伝統行事について知っている事例があれば、互いに教え合う。

2 古跡や伝統行事を一つ選び、グループで調査してみよう。

①グループで話し合った古跡や伝統行事の事例の中から一つを選び、その歴史的背景を調べる。

・古跡の場合は、その場所で起きた歴史的な出来事や事件、現在の様子について調べる。

・伝統行事の場合は、起源、現在までの継承の過程や方法などについて調べる。

・書籍だけではなく、写真資料やパンフレット、インターネットなどを活用する。

・古跡の保存や再現、伝統行事の継承事業に関わっている人からの聞き取り調査などを行ってもよい。

②調査の成果をまとめる。

3 各自で、随筆を書いてみよう。

①2の調査をもとに下書きをする。

・調査したことをわかりやすくまとめる。最初から整った文章を書こうとするのではなく、箇条書きから始めてもよい。

・なぜそのテーマを選んだのかが分かるように、動機やきっかけを書く。

・調査の前と後で、どのように見方が変わったかなどを書く。

②推敲する。

・タイトルを工夫する。読み手の興味を引くような言葉を選ぶ。倒置法、体言止めなどの修辞を用いてもよい。

・文章の構成を工夫する。もっとも伝えたいことを文章のどこに配置するのが効果的かを考える。

・文体を工夫する。ですます体か、である体か、自分の伝えたいことに合う文体を選ぶ。

③清書する。

・誤字脱字がないか、文体は一致しているか、確かめる。

・全文を通読して、自分の伝えたいことが表現できているか、確かめる。

④完成した文章をグループ内で読み合う。

・文章表現に関してよかったと感じた点や、内容面について特に関心を持った点などを話し合う。

文学と芸能

古典文学を読むと、昔の人とつながることができる。昔の人は何を考え、どのように生きていたのか。文学は時を超えてそれらを教えてくれる。

能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎といった芸能も、昔の人と私たちをつなぐ窓口である。舞台で演じられる悲喜こもごものドラマ、芸能としての様式美や約束事は、かつて共有されていた価値観や長い年月をかけて培われた美意識を現代に伝えている。

物語が新たな物語を生む。その意味で、文学と芸能は切り離せない関係にある。現代小説を原作とする映画や現代劇があるように、古典文学に基づく芸能も数多くある。

例えば、能の『井筒』は『伊勢物語』の「筒井筒」を基にしている。旅の途中で在原寺を訪れた僧が在原業平と紀有常の娘の故事に思いをはせ、亡き二人を弔っていると、女が現れる。女は僧の求めに応じて業平の物語を語り、自らが紀有常の娘であると明かす。

（地謡）[2] 昔在原の中将、年経てここに石上、古りにし里も花の春、月の秋とて住み給ひしに、

（シテ）[3] そのころは紀の有常が娘と契り、妹背の心浅からざりしに、

（地謡）また河内の国高安の里に、知る人ありて二道に、忍びて通ひ給ひしに、

（シテ）風吹けば沖つ白波竜田山、

（地謡）夜半にや君が独り行くらんと、おぼつかなみの夜の道、行方を思ふ心遂げて、よその契りはかれがれなり。

『伊勢物語』の「筒井筒」では、物語は客観的な視点から語られているが、『井筒』では女（紀有常の娘）の亡霊による回想という形式で語られてゆく。ちなみに「筒井筒」の女を紀有常の娘とする説は、すでに中世から存在していた（これには異論もあった）。

能には『源氏物語』（七一ページ注1）や『平家物語』などに基づく演目もある。『平家物語』に取材した能『巴』では、旅の僧の前に武者姿をした巴の亡霊が現れ、木曽義仲の最期を語る。

（地謡）さてこの原の合戦にて、討たれ給ひし義仲の、最期を語り給へや。

（シテ）ころは睦月の空なれば、

（地謡）雪はむら消えに残るを、ただ通ひ路と汀をさして、

駒をしるべに落ち給ふが、薄氷の深田に駆け込み、弓手も馬手も鐙は沈んで、下り立たん便りもなくて、手綱にすがつて鞭をうてども、引く方も渚の浜波、前後を忘じて控へ給へり。こはいかにあさましや。

『平家物語』の「木曽の最期」と読み比べると、一致する部分の多いことが分かるだろう。

『平家物語』は浄瑠璃や歌舞伎の題材にもなった。現代でもしばしば上演される『義経千本桜』は、平家滅亡後の源義経主従の物語に平家の武将たちの物語をからめて創作したものである。浄瑠璃は延享四（一七四七）年十一月に初演され、歌舞伎は寛延元（一七四八）年五月に初演された。

劇中の「渡海屋」「大物浦」の段に着目したい。この段は『平家物語』を題材とする能『船弁慶』に基づいている。『船弁慶』では都落ちした源義経主従が海上で平家の亡霊たちに出会い、平知盛[4]の亡霊に襲われるが、『義経千本桜』では死んだはずの平知盛や安徳天皇[5]が実は生きていたという設定で、廻船問屋の渡海屋銀平（実は平知盛）が都落ちしてきた義経を暗殺しようとする。だが計画は失敗し、知盛は自らの体に碇を結び付けて入水する。

『平家物語』や『船弁慶』を知っていれば、観客は翻案の巧みさも含めて舞台を楽しむことができる。『平家物語』から『船弁慶』へ、そして『義経千本桜』へ。作る側も観る側も、それまでに自らが読んできた（観てきた）物語に支えられている。物語は物語を生む土壌になると同時に、物語を読み解く知識にもなるのである。

（注）

1 **紀有常の娘**　歌人。生没年未詳。在原業平の妻。

2 **地謡**　能で、地の文の部分。またはその部分を謡う斉唱団。

3 **シテ**　能および狂言の役種の名で、主役のこと。

4 **平知盛**　一一五二年～一一八五年。平清盛の息子。

5 **安徳天皇**　一一七八年～一一八五年。高倉天皇の皇子。母は平清盛の娘、徳子。



碇を掲げる知盛（義経千本桜）

1 漢文入門

- 格言や短い漢文を読み、漢文の世界に親しむ。
- 訓読のきまりや熟語の構造を理解するとともに、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取る。
- 故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながりを理解する。

なぜ漢文を学ぶのか

訓読の世界

漢和辞典の使い方

故事成語

漢文の窓1 中国の寓話

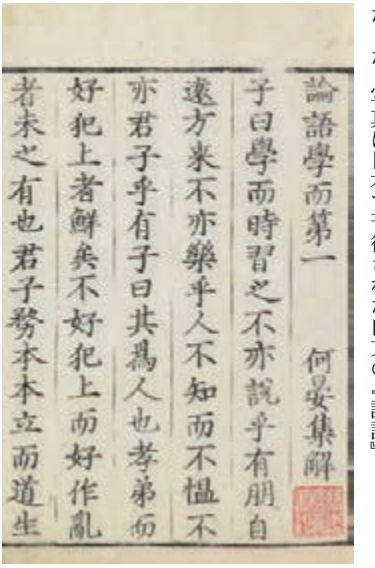
漢文の窓2 現在も使われる故事成語

- 蛇足（『戦国策』）
- 朝三暮四（『列子』）
- 断腸（『世説新語』）

単元の言語活動 1 熟語の意味「創作」ゲームを行う

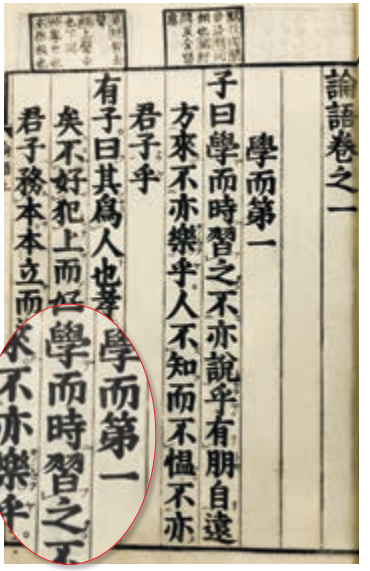
単元の言語活動 2 故事成語を「五・七・五」で表現する

白文の書物　中国の文章は本来全て漢字だけで記された白文だった。写真は日本で刊行された白文の『論語』。



天文二年泉南阿佐井野氏刊本『論語』

訓点を施した書物　日本では、白文に送り仮名、返り点などを施し、日本語として読めるようにした書物が作られた。写真は訓点を施した『論語』。



改正音訓四書正文『論語』

なぜ漢文を学ぶのか

今から三千数百年前、中国で漢字が生まれ、文明の発展に伴って多くの文章が記されてきました。わが国ではそれを漢文と呼んでいます。漢文の文献は次々に海を渡り、日本にもたらされました。私たちの祖先は、この漢文によって先進の文化を学び、豊かな文学や思想、文化を創り出してきたのです。

漢文を中国以外の地域の言語で読むために、各地域で独自の方法が生まれました。特に日本では、漢文を日本語の文章として読む訓読の方法が広く行われるようになりました。私たちの祖先はこの訓読によって、漢文の持つ簡潔さ、論理性、表現力などを日本語に取り入れ、言葉を豊かにしてきました。現代の私たちが日本の文学や文化の根源を見直し、現在の日常の言葉を深く理解するためには、漢文を学ぶことがどうしても必要なのです。

漢文はわが国の言葉と文化の源の一つです。そしてそれはもともと、中国や朝鮮半島の人々と共有してきたものです。私たち日本人は、自らの言葉と心の中に、広い世界の人々と共にしてきた源泉を持っているのです。漢文を学び、その広い世界につながる扉を開きましょう。

ポイント❶

訓読とは…漢字だけで表記された文（**白文**・本単元の扉の写真「白文の書物」参照）に、**訓点**（主に送り仮名・句読点・返り点）を施し（本単元の扉の写真「訓点を施した書物」参照）て日本語として読む方法。訓点に従って漢字仮名交じり文に書き改めたものを**書き下し文**（一一三ページ）という。

訓読の世界

送り仮名・句読点

漢字だけで表記された白文に、日本語の助詞・助動詞、用言の活用語尾などを補ったのが**送り仮名**であり、文を区切るために付けた符号が**句読点**である。送り仮名は漢字の右下に片仮名で書き、文語文法のきまりに従い、歴史的仮名遣いを用いる。

鳥語リ、花香ル。

鳥 語り、花 香る。

天朗ラカニ、気清シ。

天 朗らかに、気 清し。

大器ハ晩3成ス。

大器は晩成す。

ポイント❷

私たちがふだん使っている熟語の構造は、漢文の構造に従っている場合が多いため、漢文を理解するには熟語の構造を理解するのが近道である。

日没 ➡ 主語＋述語

美食 予定 ➡ 修飾語＋被修飾語

読書 登山 ➡ 述語＋目的語★1／補語★2

★1**目的語**　動作の目的や行為の対象を示す語。「ヲ」と送り仮名を施すことが多い。

★2**補語**　述語を補足する語。「ニ・ト・ヨリ」と送り仮名を施すことが多い。

1 **朗**　明るく広々としているさま。

2 **大器**　大きな器。大人物の例え。

3 **晩成**　出来上がるまでに時間がかかる。「晩」は、遅いの意。

返り点

漢文と日本語とでは言語構造が違うため、語順が異なる場合がある。漢文を日本語の文章として読むときには、例えば動詞の下に名詞がある場合、訓読するには下から返って読む必要がある。そのために漢字の左下に付けた符号が**返り点**である。

また、動詞以外で返り点の付く文字（「易・難・不・以・為」など）を、**返読文字**と呼ぶ。

転レ禍(わざはひヲ)4為レ福(なスト)。

禍を転じて福と為す。

少年易レ老(やすクイ)学難レ成(シリ)。

少年老い易く学成り難し。

人不レ学(ざレバ)、不レ知レ道(バずヲ)。

人学ばざれば、道を知らず。

懸(ケテ)5羊頭(ヲ)、売(ルヲ)レ狗(くヲ)肉(にくヲ)。

羊頭を懸けて、狗肉を売る。

◎返り点の働き

レ点	下の一字からすぐ上の一字に返って読む。
一・二点 一・二・三…点	二字以上を隔てて下から上に返って読む。
上・下点 上・中・下点	一・二点を含む句を挟んで、上点から下点に返って読む。
レ点・上点	レ点で返った後、一点・上点に従って読む。
甲・乙・丙…点 天・地・人点	さらに複雑に返って読む場合に、まれに用いられる。

4 禍　災難。

5 懸　（看板として）掲げる。

6 狗肉　犬の肉。質の悪い肉の例え。

百聞ハ不レ如二一見一。

百聞は一見に如かず。

吾日ニ三二省スル吾身ヲ一。

吾 日に吾が身を三省す。

君子ハ恥二其言之グルヲ過ニ其行ヒヲ一。

君子は其の言の其の行ひに過ぐるを恥づ。

君子ハ不二以レ言ヲ挙レ人ヲ。

君子は言を以て人を挙げず。

不二以テ人ヲ廃レ言ヲ。

人を以て言を廃せず。

悪ムル人之悪ヲ者ヲ。

人の悪を称する者を悪む。

不下為二児孫ノ一買ハ中美田ヲ上。

児孫の為に美田を買はず。

7 **不如…**　「…に及ばない」の意。比較を表す。

8 **三省**　何度も反省する。

熟語に返るときは、熟語の間に「-」（ハイフン）を入れ、その左側に返り点を付ける。

9 **君子**　徳の高い人。人格の優れた人。

10 **過**　上回る。

11 **君子**　注9参照。ここでは、優れた為政者の意。

12 **挙**　登用する。

13 **称**　言い立てる。

14 **美田**　よく肥えた田畑。

置き字

単独では実質的な意味を持たず、補助的な意味を添えたり、語気を補ったりする文字がある。これを**助字**という。特にその中でも、意味・用法が前後の送り仮名で明らかになるなどして、訓読しない文字を**置き字**という。

良薬苦レ於口一。
青取二之於藍一。
不レ信二於朋友一。
過而不レ改、是謂レ過矣。
心不レ在レ焉、視而不レ見。
三人行、必有二我師一焉。

良薬は口に苦し。
青は之を藍より取る。
朋友に信ぜられず。
過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。
心焉に在らざれば、視れども見えず。
三人行へば、必ず我が師有り。

15 於 場所を表す。
16 於 起点を表す。
17 於 受身を表す。
18 而 順接を表す。
19 矣 断定の語気を表す。
20 而 逆接を表す。
21 焉 断定の語気を表す。

◎置き字の働き

乎コ	於オ＝于ウ	而ジ		矣イ	焉エン
場所・時間〔…ニ〕	起点〔…ヨリ〕	順接〔…テ・シテ〕	逆接〔…ドモ〕	断定〔訓読しない〕	断定〔訓読しない〕
目的・対象〔…ニ・ヲ〕	比較〔…ヨリ（モ）〕	受身〔…ニ〜（ラ）ル〕			

学習のポイント

1 次のように返り点を施された文は、どのような順序で読むか、□に番号を入れてみよう。

(1) □ □レ □ □レ □レ □。
(2) □レ □三 □ □二 □一。
(3) □二 □ □一 □三 □。
(4) □レ □ □二 □レ □。
(5) □下 □二 □ □一 □中 □ □上 □。

2 次の文を、書き下し文に改めてみよう。

(1) 聞レ一 以レ知レ十。
(2) 遂迷不二復得一レ路。
(3) 得二天下英才一而教二育之一。
(4) 君子欲下訥二於言一而敏中於行上。

3 次の読み方に従って、白文に訓点を施してみよう。

(1) 陰徳有る者は必ず陽報有り。[2][3]
有 陰 徳 者 必 有 陽 報

(2) 虎穴に入らずんば虎子を得ず。
不 入 虎 穴 不 得 虎 子

(3) 夏の虫は与に寒を語るべからず。
夏 虫 不 可 与 語 寒

(4) 天下水より柔弱なるは莫し。
天 下 莫 柔 弱 於 水

(5) 悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ。
勿 以 悪 小 而 為 之

言葉と表現

1 次の四字熟語について意味を調べ、訓読してみよう。

(1) 朝令暮改　(2) 呉越同舟
(3) 傍若無人　(4) 臨機応変
(5) 以心伝心　(6) 不倶戴天

(注)
1 訥　口数が少ない。
2 陰徳　人に知られない善行。
3 陽報　はっきり現れるよい結果。

再読文字

一つの漢字を、日本語では二つの語として読むものがあり、これを**再読文字**という。この場合、初めは返り点とかかわりなく読み（送り仮名は右下に付ける）、二度目は返り点に従って読む（送り仮名は左下に付ける）。

未レ知レ生、焉知レ死。

未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らんや。

不レ知レ老将レ至。

老いの将に至らんとするを知らず。

及レ時当レ勉励。

時に及んで当に勉励すべし。

過猶レ不レ及。

過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。

惟仁者宜レ在レ高位。

惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。

人生得レ意須レ尽レ歓。

人生　意を得ては須らく歓を尽くすべし。

22 焉　「どうして…か（いや…ない）」の意。反語を表す。

23 及時　なすべきときに。

❖学習のポイント

1 次の熟語を例にならって訓読し、書き下してみよう。

(例)未来→未だ来らず。

(1)将来　(2)当然　(3)未完成　(4)未納金

2 次の読み方に従って、白文に訓点を施してみよう。

(1)応に故郷の事を知るべし。

応 知 故 郷 事

(2)鄭人に且に履を買はんとする者有り。

鄭 人 有 且 買 履 者

(3)盍ぞ疾を以て辞せざる。

盍 以 疾 辞

書き下し文のまとめ

漢文を日本語の語順に改めて、漢字仮名交じりで書いたものを「**書き下し文**」という。次の原則に留意しよう。

①送り仮名は平仮名（歴史的仮名遣い）にする。
②日本語の助詞・助動詞に当たる漢字は平仮名にする。
③訓読のときに読まない文字（置き字）は書かない。
④再読文字は、最初の読みは漢字を用い、二度目の読みは平仮名にする。

◎再読文字の読み方と意味

未（ミ）	いまダ…〈未然形〉ず	まだ…ない
将（ショウ）	まさニ…〈未然形〉（ント）す	…しようとする・…しそうだ
且（ショ）	まさニ…〈終止形〉ベシ	…すべきだ・…に違いない
当（トウ）	まさニ…〈終止形〉ベシ	きっと…だろう・…すべきだ
応（オウ）	よろシク…〈終止形〉ベシ	…するのがよい
宜（ギ）	すべカラク…〈終止形〉ベシ	ぜひ…する必要がある
須（シュ）	なホ…（ノ・ガ）ごとシ	ちょうど…のようなものである
猶（ユウ）（由）	なんゾ…〈未然形〉ざル	どうして…しないのか（「何不」と同じ。）
盍（コウ）（蓋）		

漢和辞典の使い方

漢和辞典を引くと、漢字の読み方や意味などのほかに、数多くの熟語が載っている。ためしに「謝」を引いてみよう。

言 10
【謝】
(17)
教5
訓 あやまる
音 シャ
漢音 シャ(漢)
呉音 ジャ(呉)
韻 禡
現代中国語の発音 xiè

❶わびる。❷礼をのべる。❸ことわる。❹告げる。❺入れ替わる。……

【謝恩】受けた恩に対して感謝する。
【謝罪】罪をわびる。あやまる。

漢字は長い時間の中でいくつもの意味が派生し、「謝」にも複数の意味がある。辞書を引くと、「謝恩」の「謝」は「礼をのべる」意、「謝罪」の「謝」は「わびる」意だと分かる。このように、先人は漢字を組み合わせて熟語とし、漢字の意味を理解しやすくした。

また、熟語には、日本で新たに作られたり（例1）、日本で新たに意味が付与されたり（例2）したものもある。

例1【労働】ほねおりはたらくこと。
例2【遠慮】❶先々まで見通した深い考え。
❷国 人に対して控え目にすること。
日本の用法

近年では、電子辞書やインターネット上で利用できる辞書が登場し、熟語の逆引きなど、より便利な検索が可能となった。

●漢和辞典の引き方

漢字の読み方が↓分かる… **音訓索引**
不明 ←
漢字の部首が↓分かる…… **部首索引**
不明 ←
総画索引

言葉と表現

1 次の熟語の意味を漢和辞典で調べ、熟語の構造を考えてみよう。

(1)気絶　(2)非難　(3)是正　(4)必要　(5)啓蒙　(6)暴露　(7)暴発

2 次の漢字や熟語の意味を漢和辞典で調べ、現代日本語の意味との違いを確認してみよう。

(1)鬼　(2)城　(3)故人　(4)人間　(5)百姓　(6)小人　(7)学者

◇単元の言語活動 1

◆熟語の意味「創作」ゲームを行う

漢和辞典の説明文は、簡潔で分かりやすい言い回しが多い。その言い回しを参考にしながら、漢字の意味や熟語の構造の知識を用い、熟語の意味を「創作」するゲームをしてみよう。

課題 熟語の意味を「創作」して支持数を競い合い、多くの人に支持される「創作」の特徴を見つけ出そう。

例「蓮歩（れんぽ）」

Aさん「美人がしなやかに歩くさま」
Bさん「蓮（はす）を売り歩くこと」
Cさん「集団で歩くこと」
Dさん「僧侶の軍隊」
Eさん「池のほとりを歩くさま」

1 漢和辞典から熟語を一つ選び、意味を「創作」してみよう。
①グループを作り、リーダーを決める。
②リーダーは熟語を選び、そのほかのメンバーがその意味を「創作」する。
・見慣れた漢字の熟語だが、意味を知らない熟語を選ぶ。
・「正解」ではなく、ほかの人に支持されそうな文を書く。
・漢和辞典の言い回しに似るよう、工夫する。
③リーダーは漢和辞典にある「正解」文を書き写す。

2 リーダーは、「創作」文と「正解」文を読み上げよう。
①「創作」文を回収し、読めない文字がないか目を通す。
②読み上げる順番を決め、各「創作」文と「正解」文に番号を振る。
③聞き取りやすいよう、はっきりと読み上げる。

3 メンバーは「正解」文を予想し、その番号を表明しよう。リーダーは「正解」文の番号と、それぞれの「創作」文の作成者を発表しよう。

4 ゲームを振り返り、支持されやすい文の特徴を話し合おう。
①リーダーを交代し、全員がリーダーを経験する。
②選んだ理由を発表し合い、支持されやすい「創作」文の特徴を話し合い、共有する。

故事成語

蛇足

楚(そ)[1]有(リ)二祠(まつる)[2]者一。賜(たまフ)二其(そノ)舎人(ニ)[3]一。舎人相謂(いヒテいハク)曰、「数人(ニテ)飲(マバこれヲ)レ之不(ずンバ)レ足(ラ)、一人(ニテ)飲(マバ)レ之(ヲ)有(リ)レ余(リ)。請(フ)[5]画(えがキテ)レ地(ニ)為(つくリ)レ蛇(ヲ)、先(まヅ)成(ル)者飲(マント)レ酒(ヲ)」。一人(ノ)蛇先(ヅ)成(ル)。引(キテ)レ酒(ヲ)且(まさニ)[6]レ飲(マント)。乃(すなはチ)左手(モテ)持(チ)レ巵(ヲ)、右手(モテ)画(キテ)レ蛇(ヲ)曰(ハク)、「吾(われ)能(よク)為(ルトガ)二之(ヲ)足一。」未(いまダ)レ成(ラ)、

5

一人(ノ)蛇(ヲ)成(ル)。奪(ヒテ)二其(ノ)巵一(ヲ)曰(ハク)、「蛇固(もとヨリ)無(シ)レ足(ヲ)。子(ガ)[7]安(クンゾ)能(ク)為(ランヤト)二之(ガ)足一(ヲ)。」遂(つひニ)飲(ム)二其(ノ)酒一(ヲ)。為(ル)二蛇(ノ)足一(ヲ)者、終(つひニ)亡(うしなヘリ)二其(ノ)酒一(ヲ)。

（『戦国策』）

1 **楚**　春秋戦国時代の大国。長江中流域にあった。

2 **祠者**　神霊を祭る者。司祭者。

3 **舎人**　貴人の傍らに仕える者。ここでは、召し使いのこと。

4 **巵酒**　大杯に満たされた酒。「巵」は、取っ手のある大杯。

5 **請…**　「…しよう」の意。勧誘を表す。

6 **且…**　「…しようとする」の意。意志を表す。

問 **「吾能為二之足一。」と言ったのは、どのような気持ちからか。**

7 **子**　二人称の敬称。ここでは、あなたの意。

8 **安…**　「どうして…か（いや…ない）」の意。反語を表す。

＊
為　且　乃　能　未　子

▼
無(シ)レ～（否定）　安(クンゾ)～(シヤ)（反語）

深い学びのために

学習のポイント　1 本文を書き下し文にしてみよう。

2 「蛇足」は、どのような失敗談であるのか、説明してみよう。

言葉と表現　1 「蛇足」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。

言語活動　1 身近な「蛇足」の例を、できるだけ多くあげてみよう。

戦国策　三十三巻。劉向（りゅうきょう）の編。戦国時代の遊説家の主張・政策の記録を国別にまとめたもの。

劉向　前七七年頃～前六年。前漢の儒者。

漢文の窓1　中国の寓話（ぐうわ）

寓話は、人が世の中のさまざまな問題に対処するために役立つ教訓を、人間、動物などを主人公にして、分かりやすく描いた例え話である。

中国では特に戦国時代に、多くの寓話が生まれた。戦国時代、各国は生き残りをかけて争っていた。そのため多数の思想家が、自己の理想とする哲学や、国家を強くする政策を各国の為政者に説いて回った。彼らは自分の政策を採用させるために、分かりやすく、興味をそそる寓話を好んで用いた。難しい理論を説くだけでは、聴き手の注意を引きつけられなかったからである。

中国の寓話は、意表を突く筋立てを特徴とし、ユーモアに富み、聴き手を話の中に引き込む魅力を持っている。戦国時代以後、思想家たちはしばしば寓話によって、人間や国家のあるべき姿を描き出し、また人間の陥りやすい過ちを批判した。こうした寓話に基づいて、数多くの故事成語が生まれた。

朝三暮四

宋有二狙公一者。愛レ狙、養レ之成レ群。能解二狙之意一、狙亦得二公之心一。損二其家口一、充二狙之欲一。俄而匱焉。将レ限二其食一。恐二衆狙之不一レ馴二於己一也、先誑レ之曰「与二若芧一、朝三而暮四。足乎」。衆狙皆起而怒。俄而曰「与二若芧一、朝四而暮三。足乎」。衆狙皆伏而喜。

（『列子』）

1 宋　春秋戦国時代の国。現在の河南省にあった。
2 狙公　猿飼いに付けた呼び名。「狙」は猿。
3 損其家口　家族の食糧を減らす。
4 俄　やがて。まもなく。
5 匱　少なくなる。
6 也　強調を表す助字。
7 誑　だます。
8 芧　どんぐりの実。
問 衆狙が「喜」んだのは、なぜか。

＊ 之 亦 焉 将 若
▼ ～ 乎（疑問）

深い学びのために

学習のポイント

1 「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことをまとめてみよう。

言葉と表現

1 二つの漢数字が用いられている四字熟語を探してみよう。

2 「朝三暮四」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。

言語活動

1 この寓話の「狙公」と「衆狙」は、身の周りではどのような人に置き換えられるか、考えてみよう。



群猿図（長沢蘆雪筆）

列子　八編。列禦寇著と伝えられる。道家思想を説いたもの。

列禦寇　生没年未詳。戦国時代の思想家。

断腸

桓公(1)入レ蜀、(2)至二三峡(3)中一。部伍(4)中有下得二猨(5)子一者上。其母縁(6)レ岸哀号、行百余里不(7)レ去。遂跳上レ船、至便即(8)絶。破二視其腹中一、腸皆寸寸断。公聞レ之怒、命(9)黜二其人一。

（『世説新語』）

1 **桓公**　桓温。三一二年～三七三年。東晋の武将。
2 **蜀**　現在の四川省とその周辺地域。
3 **三峡**　瞿塘峡・巫峡・西陵峡を指す。長江が蜀の山地から楚の平野に入る辺りに続く険しい峡谷。
4 **部伍**　部隊。
5 **猨子**　猿の子。
6 **縁…**　…に沿って。
7 **里**　当時の一里は、約四四〇メートル。
8 **便即**　すぐに。そのまま。
問 **「腸皆寸寸断。」とあるが、そうなったのは、なぜか。**
9 **黜**　地位を下げる。

▼命～(使役)

深い学びのために

学習のポイント

1 「聞レ之怒、命黜二其人一。」（一三〇・5）とあるが、桓公がこのようにした理由を、説明してみよう。

言葉と表現

1 「断腸」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。

2 次の語句は、それぞれどのような故事から成ったものか、辞書で調べてみよう。

(1)助長　(2)推敲　(3)完璧　(4)矛盾

言語活動

1 「断腸の思い」という表現を用いて小話を作ってみよう。

世説新語　三巻。劉義慶の著。後漢末から東晋末までの名士のエピソードを集めたもの。

劉義慶　四〇三年～四四四年。六朝時代の宋の人。

漢文の窓 2 現在も使われる故事成語

故事成語は現在の文章にも使われている。身近に使われている故事成語を探してみよう。

●随想

「お米の話」

玄米は白米とは別な意味で非常にうまい。玄米のごはんにご馳走をつけて出すのは**蛇足**である。漬けものでもあれば充分である。だから、いくらうまいといっても、料理の後では邪魔になる。



北大路魯山人　明治十六（一八八三）年～昭和三十四（一九五九）年。京都府の生まれ。

●小説

『三国志』

「[1]骨肉の別れ、相思の仲の別れ。いずれも悲しいのは当然だが、男子としては、君臣の別れもまた**断腸**の一つだ。……ああ、きょうばかりは、何度思い止まろうかと迷ったか知れぬ。」

[2]徐庶は、駒を早めていた。

今なお、[3]玄徳の恩に、情に、うしろ髪を引かれながら――。

（注）

1 **骨肉**　肉親。

2 **徐庶**　後漢末期から三国時代の魏にかけての武将・政治家。

3 **玄徳**　後漢末期から三国時代の武将、蜀漢の初代皇帝。



吉川英治　明治二十五（一八九二）年～昭和三十七（一九六二）年。神奈川県の生まれ。

●新聞記事

大機小機

朝三暮四の経済政策

先日、経済産業研究所のセミナーで「日本経済低成長からの脱却」という話を聞いた。興味深かったのは最近話題の現代貨幣理論（ＭＭＴ）と、一昨年話題になったシムズ理論（ＦＴＰＬ）の話だ。

２つの理論は正反対のことを言っている。ＭＭＴ理論では、財政をもっと出してもインフレにならないから景気のために財政出動すべきだという。シムズ理論では、財政をもっと出せばインフレになるからデフレ脱却のために財政出動すべきだという。

財政出動すべきだというのは同じだが、かたやインフレにならないからといい、かたやインフレになるという。それがまかり通るのは、どちらも「理論（Ｔｈｅｏｒｙ）」と言っているが、実前提の置き方にもなるからだ。

講師が「モノ」として挙げたのは、経済学。価値を労働だけだと、資本家の搾取からの搾取にその不正義を要になるのだと

そのように通むげだが、の「理論」の経済成長は導う。ケインズ復の「理論」「理論」では済成長のためにいのか聞かれアニマルスピリ精神）と答え要は財政出動的に景気は良にはつながら

『日本経済新聞』（二〇一九年七月十三日）

◆故事成語を「五・七・五」で表現する

「故事」とは文字どおり「昔のこと、古いこと」も指すが、「故実や典故となること」も指す。「成語」とは「人々が長い間使っている、簡潔で精巧な、一定の型を持つ単語の組み合わせもしくは短い句」と定義できる。漢字文化の長い歴史の中で蓄積された英知であり、われわれの言語活動を豊かにできるこれらの言葉を、より身近に感じてみよう。

課題 故事成語を一つ選び、意味と由来を調べ、「五・七・五」にして発表し、互いの作品を鑑賞し合おう。

1 故事成語を一つ選び、意味と由来を調べよう。

①漢和辞典や故事成語辞典、資料集を参照し、故事成語を一つ選ぶ。

②意味・もととなった話（エピソード）を辞典やインターネット、資料集で調べる。

2 「五・七・五」を作ろう。

①もととなった話の特徴的な点を見つける。

②意味・状況・由来が伝わる「五・七・五」を心がける。

例 「朝三暮四」猿たちは　暮れの四つに　目が行かず

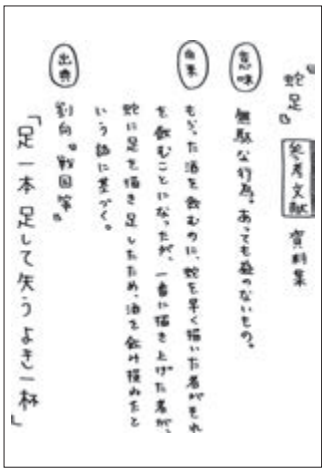
「呉越同舟」君と僕　呉越同舟　試験前

「五十歩百歩」チョコ一個　君は母から　僕は義理

3 調べたことをまとめよう。

選んだ故事成語とその意味、もととなったエピソード、**2**で作成した「五・七・五」を紙一枚にまとめる。

例



4 グループを作り、相互評価を行おう。

3でまとめた紙を互いに読み合い、評価をする。

2 史伝

- 史伝の背景を理解し、漢文の世界に親しむ。
- 史伝に描かれた登場人物の言動・心情・考え方や生き方を学び、自己の生き方の糧にする。
- 史伝の登場人物の紹介文を書く。

十八史略
先従隗始
鶏口牛後
管鮑之交
臥薪嘗胆

古典に関する文章
中国英傑伝（海音寺潮五郎）

単元の言語活動 3
登場人物の魅力を紹介する



越王句践
絵の中央に越王句践が配され、その周りに、「臥薪嘗胆」にまつわるさまざまなエピソードが描かれている。

十八史略

曽先之

先従レ隗始メヨ

燕人立二太子平一為レ君。[*]是為二昭王一。弔レ死問レ生、卑辞厚レ幣、以招二賢者一。問二郭隗一曰、斉因二孤之国一乱、而襲破レ燕。孤極知二燕小一不レ足二以報一。誠得二賢士一与共レ国、以雪二先王之恥一。孤之願也。先生視二可者一。得二身事レ之」。

隗曰「古之君、有下以二千金一使上二涓人一求中千里馬一者。買二死馬骨五百金一而返。君怒。涓人曰『死馬

1 **燕**　戦国時代の大国。現在の河北省にあった。
2 **昭王**　前三一一年～前二七九年在位。
3 **弔死問生**　戦死者を弔い、生存者を慰問する。
4 **卑辞厚幣**　へりくだった言葉遣いをし、多くの進物を用意する。
5 **郭隗**　生没年未詳。燕の賢人。昭王の臣。燕王の師となった。
6 **斉**　春秋戦国時代の大国。現在の山東省にあった。
7 **孤**　私。諸侯の謙称。
8 **報**　仕返しをする。
9 **先王**　斉に殺された昭王の父、燕王噲のこと。
10 **可者**　適当な人物。
11 **涓人**　君主のそば近くに仕え、日常の世話をする者。
12 **千里馬**　一日に千里を走る名馬。

且買レ之、況生者乎。馬今至矣』。不二期年一千里ノ馬
至レ者三。*今王必欲レ致レ士、先従レ隗始。況賢二於隗一
者、豈遠二千里一哉」。
*於レ是、昭王為レ隗改二築宮一、師レ事レ之。於レ是、士争
趨レ燕。

（春秋戦国・燕）5

13 期年　まる一年。

14 致士　優れた人物を招く。

問「先従レ隗始。」とは、誰が誰に何を求めたのか。

15 於是　こうして。そこで。

君　不足　可　期年　今　従　於
於是

使二〜一…（使役）〜且…、
況—乎（抑揚）豈二〜一哉（反語）

深い学びのために

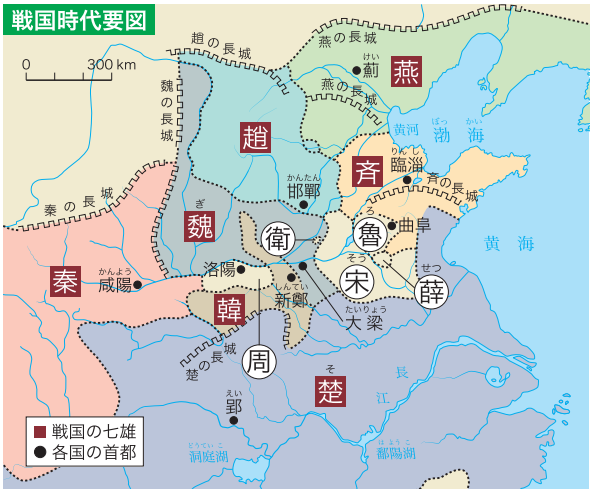
学習のポイント　1 昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめてみよう。

言葉と表現　1 「先従レ隗始」の本来の意味と、現在使われている意味の違いを調べてみよう。

言語活動　1 郭隗の弁舌の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

鶏口牛後

秦人恐レ喝諸侯、求レ割レ地。有二洛陽人一蘇秦。遊二説秦恵王一。不レ用。乃往説二燕文侯一、与レ趙従親。燕資レ之、以至レ趙。説二粛侯一曰「諸侯之卒、十倍於秦。并レ力西向、秦必破レ矣。為二大王一計、



1 **秦人** ここでは、秦王の意。「秦」は、春秋戦国時代の大国。現在の甘粛省、陝西省にまたがっていた。

2 **洛陽** 現在の河南省洛陽市。

3 **蘇秦** 生年未詳～前三二七年。戦国時代の遊説家。

問 **「遊説」とは、どのようなことをするのか。**

4 **恵王** 前三三七年～前三一一年在位。

5 **燕文侯** 前三六一年～前三三三年在位。「燕」は、一三四ページ注1参照。

6 **趙** 戦国時代の大国。現在の山西省、河北省、河南省にまたがっていた。

7 **従親** 南北に同盟を結ぶこと。「従」は「縦」の意で、南北を指す。「合従」ともいう。

8 **資之** 蘇秦に（遊説の）資金を与える。

9 **粛侯** 趙の王。前三四九年～前三二六年在位。

10 **卒** ここでは、兵士の意。

11 **矣** 一二〇ページ注19参照。

莫レ若二六国12従親一、以擯13レ秦。粛侯乃資レ之、以約二諸侯一。蘇秦以二鄙諺14一説二諸侯一曰、「寧為二鶏口一、無レ為二牛後一。」於レ是六国従合15。

（春秋戦国・趙）

12 六国　斉・楚・燕・韓・魏・趙。
13 擯　（押し出して）のけ者にする。
14 鄙諺　世間で言い習わされていることわざ。
15 従合　「従親」と同じ。

＊遊説与卒矣

▼説二〜一従親（使役）　莫レ若二〜一（比較）　寧〜無レ…（選択）

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

学習のポイント　1 春秋戦国時代・戦国の七雄・諸子百家について、辞書・インターネット・資料集などを利用し、調べてみよう。

言葉と表現　1「鶏口牛後」「合従連衡」という言葉を、それぞれ辞書で調べてみよう。
2「寧ろ」を用いた短文を作ってみよう。

言語活動　1 蘇秦の説得の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

管鮑之交ハリ

斉[1]ハ姜姓ナリ。至リテ二桓公[2]ニ一覇[3]タリ二諸侯ニ一。五覇[4]ハ桓公ヲ為スレ始メト。名ハ小白。兄ノ襄公[5]無道ナリ。群弟恐ル二禍ひノ及バンコトヲ一。子糾[6]奔ルレ魯[7]ニ。管仲[8]傅[9]タリレ之ニ。小白奔ルレ莒[10]ニ。鮑叔[11]傅タリレ之ニ。襄公為リ二弟無知[12]ノ所トレ弑[13]スル、無知モ亦為ル二人ノ所トレ殺ス。斉人召シテ二小白ヲ於莒一ヨリ而シテ魯モ亦発シテレ兵ヲ送ルレ糾ヲ。管仲嘗テ遮リ二莒ノ道ヲ一、射テ二小白ヲ一中ツ二帯[14]鉤ニ一。小白先ヅ至リテレ斉ニ而立ツ。鮑叔牙薦メテ二管仲ヲ一為サシムレ政ヲ。公ハ置キテレ怨ミヲ而用キルレ之ヲ。

管仲字[15]ハ夷吾。嘗テ与二鮑叔一賈[16]ス。分カツニレ利ヲ多ク自ラ与フ。鮑叔不二以テ為サレ貪ト一。知レバ二仲ノ貧ナルヲ一也。嘗テ謀[17]リテレ事ヲ窮困ス。鮑叔不二

1 **斉**　一三四ページ注6参照。
2 **桓公**　斉の君主。前六八五年～前六四三年在位。
3 **覇**　諸侯の旗頭になる。
4 **五覇**　春秋時代の五人の覇者。
5 **襄公**　斉の君主。前六九七年～前六八六年在位。
6 **子糾**　襄公の弟。
7 **魯**　春秋時代の国。現在の山東省曲阜市一帯にあった。
8 **管仲**　生年未詳～前六四五年。斉の宰相。
9 **傅**　守り役となる。
10 **莒**　春秋時代の国。現在の山東省莒県にあった。
11 **鮑叔**　生没年未詳。斉の家臣。「鮑叔牙」ともいう。
12 **無知**　襄公の叔父の子。
13 **弑**　殺す。臣下が主君を、子が親を殺す。身分の下の者が上の者を殺すこと。
14 **帯鉤**　帯を締めるための金具。

問　**「置レ怨」とは、どのような意味か。**

15 **字**　成人した男子が本名のほかに付ける呼び名。
16 **賈**　商いをする。
17 **謀事**　（管仲が鮑叔のために）物事を画

以テ為レ愚。知レバ時ニ有レ利ト不レ利ト也。嘗テ三タビ戦ヒ三タビ*走ル。鮑叔不レ以テ為レ怯フト。知レバ仲ニ有レ老母一也。仲曰ハク、「生ムレ我ヲ者ハ父母、知ル我ヲ者ハ鮑子[18]也」ト。

桓公九[19]合シ諸侯ヲ、一[20]匡セシハ天下ヲ、皆仲之謀ナリ。一ニモ*則チ仲[21]父ホ、二ニモ則チ仲父トイヘリ。

（春秋戦国・斉）5

策した。

18 **鮑子** 鮑叔のこと。「子」は、ここでは男子の尊称。

19 **九合** 集め合わせる。

20 **一匡** 天下を統一し、乱れを正す。

21 **仲父** 管仲のこと。「父」は父のように尊敬できる人物に付ける。

＊嘗 字 自 以為 走 則

▼為レ〜所レ…（受身） 薦メテ〜レ…シム（使役）

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント 1 管仲の三つの行動における鮑叔の評価と、その理由をまとめてみよう。

◆言葉と表現 1 「管鮑之交」とは、どのような関係か、説明してみよう。

2 「謀る」「図る」「計る」「測る」「量る」「諮る」の意味の違いを調べてみよう。

◆言語活動 1 管仲が鮑叔に、鮑叔が管仲に抱く心情を、本文に即してまとめてみよう。そのうえで、管仲と鮑叔は、それぞれどのような人物として描かれているか、分かりやすく説明してみよう。

臥薪嘗胆

［臥薪］

呉王闔廬、挙二伍員一、謀二国事一。員字子胥、楚人伍奢之子。奢誅而*、員奔レ呉、以二呉兵一入レ郢。闔廬傷而死。子夫差立。子胥復事レ之。夫差志レ復レ讎、朝夕臥二薪中一、出入使二人呼一曰、「夫差、而忘二越人之殺一而父一邪」。周敬王二十六年、夫差敗二越于夫椒一。越王*

人物関係図

国名	呉		越	
年号	臣	君主	臣	君主
前514	子胥（謀臣）	闔廬―×夫差		
前496	伯嚭―（宰相）			
前495				
前473	内通			句践―×
前465			文種（重臣・内政） 范蠡（重臣・軍事）	

×＝死亡

1 **呉**　春秋時代の大国。現在の江蘇省にあった。
2 **闔廬**　呉の六代目の君主。前五一四年～前四九六年在位。
3 **挙**　一一九ページ注12参照。
4 **伍員**　生年未詳～前四八四年。楚の人。
5 **楚**　一二六ページ注1参照。
6 **伍奢**　生年未詳～前五二二年。楚の臣。
7 **誅**　罪をとがめて殺す。
8 **郢**　楚の都。現在の湖北省荊州市。
9 **越**　春秋時代の大国。現在の浙江省にあった。
10 **夫差**　呉の七代目の君主。前四九五年～前四七三年在位。
11 **而**　お前。「汝」と同じ。
12 **周敬王二十六年**　前四九四年。
13 **夫椒**　江蘇省の南西、太湖の中にある山。
14 **句践**　越の二代目の君主。前四九六年～前四六五年在位。
15 **会稽山**　浙江省紹興市の南にある山。
16 **妾**　女性の召し使い。
問 **子胥が、「不可。」と言ったのは、なぜか。**
17 **太宰**　官名。宰相。
18 **伯嚭**　生年未詳～前四七三年。楚の

句践[14]、以二余兵一棲二会稽山一、請為レ臣、妻為レ妾。子胥言、「不可。太宰伯嚭[18]受二越賂一、説二夫差一赦レ越。



蘇州の虎丘雲岩寺塔
（虎丘は、呉王闔廬の墓と伝えられる。）

［嘗胆］

句践反レ国、懸二胆於坐[19]一、臥即仰レ胆嘗レ之、曰「女[20]

人。呉に亡命し、闔廬・夫差に仕え、宰相となった。

19 坐臥　寝起きする自分の部屋。

20 女　お前。「汝」と同じ。

＊誅復而于請即

▼挙二〜一謀二…一（使役）使二〜一…（使役）〜邪（疑問）説二〜一赦レ…（使役）



忘レ会稽之恥一邪。」挙二国政一属二大夫種一而与二范蠡一治レ兵、事レ謀レ呉。

太宰嚭譖二子胥一26恥レ謀不レ用27怨望。夫差乃賜二子胥一属二鏤之剣一。子胥告二其家人一曰、「必樹二吾墓一呉ヲ。呉三戦三北。夫差上レ姑蘇一、亦請二成於越一。范蠡不レ可。夫差曰、「吾無レ以見二子胥一。」為二幎冒一乃死。

（春秋戦国・呉）

21 **属**　任せる。「嘱」と同じ。
22 **大夫**　諸侯の重臣。
23 **種**　生没年未詳。越の功臣であった文種のこと。
24 **范蠡**　生没年未詳。句践の重臣。
25 **事**　専念する。
26 **譖**　中傷する。
27 **怨望**　恨む。「怨」も「望」も、恨むの意。
問 **「賜二子胥属鏤之剣一。」とあるが、夫差が、子胥に「属鏤之剣」を与えたのは、なぜか。**
28 **属鏤之剣**　名剣の名。
29 **櫝**　木の名。ひさぎ。棺の材料として用いられた。
30 **自剄**　自分で自分の首をはねる。
31 **鴟夷**　酒を入れる馬皮製の袋。
32 **祠**　ほこら。
33 **江上**　長江のほとり。
34 **生聚**　人口を増やし、物資を蓄えて、国力を充実させる。
35 **教訓**　兵を訓練する。
36 **周元王四年**　前四七三年。
37 **姑蘇**　姑蘇台。姑蘇山にあった夫差の宮殿の名。姑蘇山は現在の江蘇省蘇


越王句践の剣

州市にある。
38 **成**　講和。
39 **幎冒**　死者の顔に掛ける四角の布。
＊江上　北

深い学びのために

学習のポイント

1 夫差が「臥薪」するに至った経過とその結果、句践が「嘗胆」するに至った経過とその結果を、それぞれまとめてみよう。
2 夫差の子胥に対する気持ちの変化を分かりやすく整理し、発表してみよう。

言葉と表現

1 「臥薪嘗胆」の意味を調べてみよう。
2 四字熟語を創作し、発表してみよう。また、その作品の意味と使い方も解説してみよう。

言語活動

1 夫差が句践に敗れたのはなぜか、話し合ってみよう。

十八史略　七巻。元の曽先之の編著。『史記』以下の十八種の史書を参考に、太古から宋（そう）代までの歴史を簡潔にまとめたもの。

曽先之　一二四一年頃～一三三一年頃。宋末元初の人。

古典に関する文章

中国英傑伝

海音寺潮五郎

呉の権臣、伍子胥の策略によって闔廬が呉王となったころ、楚から呉に伯嚭が亡命してきた。楚に父を殺された伯嚭は、楚を恨み、呉によって復讐しようと考えて来たのである。その伯嚭を伍子胥は受け入れ、大夫に推薦する。

闔廬は伯嚭を受け入れて、大夫とした。

子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし、志を同じくしているので、最も親しく交際し、闔廬へもよくとりなした。恐らく、闔廬が伯嚭を大夫にしたのも、子胥のこのとりなしによるのであろう。

その頃のある日、呉の大夫の一人披離という者が、子胥を自宅に招待して宴をひらいたが、宴後、客の散じつくしたあと、声をひそめて、子胥に言った。

「卿は伯嚭殿とずいぶん親しくしておいでのようでござるが、何か特別なわけがあるのでござるか。」

何かわけありげな相手の様子をいぶかしく思いながらも、子胥は答える。

「拙者は楚に父と兄とを殺され、伯嚭は父を殺されています。讎を同じくしているわけです。立場を同じくしています。ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。卿は船乗り共が水上で歌っている、こんな唄をお聞きになったことはありませんか。

胸痛めば、胸やむ人のいとほしく
貧しければ、貧しき人のいとほしく
おびえ立つ鳥は、ともに飛び立ち
同じ瀬に集まり
同じ瀬にともに流さる
1胡馬は北風にいななき
2越鳥は南に向かひて巣くふ
人は皆われに似たるを愛し
同じことを思ふをいとほしむ
3(同病相憐れみ、同憂相救ふ、4驚翔する鳥は相随ひ

て、瀬下の水に集まり、因つてまた倶に流され、胡馬は北風を望みて立ち、越燕は日に向かひて熙ぶ、誰かその近き所を愛せざらんや、その思ふ所を悲しまざらんや。）

これが拙者の伯嗣にたいする気持ちです。」

披離は憮然とした様子になったが、なお言う。

「ごもっともです。しかし、拙者は貴殿のためになお申したい。伯嗣は警戒すべき人物のように、拙者には見えます。」

「どう警戒せよと言われるのでしょう。」

「あの人は鷹のような目をし、虎のごとき歩きぶりをします。拙者の経験では、こんな人間は功名心旺盛で、残忍で、功を独占し、殺を嗜む性質があります。」

「そうですか。しかし、拙者にはそう見えません。」

子胥は承服せず、益々親しみ、閨廬にとりなして、重く用いさせたと、[6]呉越春秋は伝えている。

披離の忠告はあたっていたのだ。ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。

（注）

1 **胡馬**　北方の胡の国に産した馬。
2 **越鳥**　南方の越の国の鳥。
3 **同病相憐れみ、…**　『呉越春秋』闔閭内伝の一節の書き下し文。
4 **驚翔**　驚いて飛び立つ。
5 **熙**　楽しむ。好む。
6 **呉越春秋**　呉と越、二国の興亡史。「春秋」とは、歴史の意味。

学習のポイント

1 「唄」（一四四・下7～一四五・上4）について、

(1)「同じこと」（一四四・下15）とは、具体的にどのようなことをいうか、説明してみよう。

(2)（　　）内の書き下し文を現代語訳し、発表してみよう。

2 伍子胥は伯嗣に対して、どのような思いを持っていたか、本文に即してまとめてみよう。

海音寺潮五郎　明治三十四（一九〇一）年～昭和五十二（一九七七）年。小説家。鹿児島県の生まれ。歴史の真実を伝える史伝文学の復興者として知られる。本文は『中国英傑伝』（昭和四十六（一九七一）年刊）によった。

◆登場人物の魅力を紹介する

『十八史略』（一四三ページ）とは、三皇五帝の伝説時代から南宋（なんそう）末に至るまでの中国の歴史の要点を、時代を追って読み物風にまとめた通史である。そこには歴史を切り開いた躍動的な人物の個性的な生き方や奥深い考え方が示され、人としていかに生きるべきかなど、多くのことが学べる書物でもある。

日本には室町時代に渡来し、江戸時代には『唐詩選』・『論語』と共に初学者の必読書として流行した。現在でも、歴史小説の題材になるなどして多くの読者を魅了している。

課題 この教科書掲載の「史伝」教材の中から、紹介したいと思う人物一名を選び、その人物の魅力を紹介する文章を、四百字～五百字程度で書いてみよう。

1 紹介する人物一名を選び、その人物の魅力を探ろう。

①その人物の、ものの考え方や生き方、おもしろかった場面や言動などを多面的に分析し、その魅力を探り出す。

②辞書・インターネット・資料集などでその人物の略歴やエピソード・人物像などを調べ、分析の参考にする。

③探り出した人物の魅力を、箇条書きにしてまとめる。

2 紹介する人物の魅力を、効果的に伝えるための構想を練り、紹介文を書き上げよう。

①人物の魅力を伝えるために、表現のしかたを工夫する。

・読み手や聞き手が引きつけられる題名や見出しを考える。

・人物の魅力を伝える印象深い話題などをまとめる。

・適切な構成や展開を考え、構成メモを作成する。

②①を踏まえて、人物紹介文を書き上げる。

③①を踏まえて、書き上げた人物紹介文を、推敲（すいこう）する。

3 人物紹介文を、発表し合おう。

①グループを作り人物紹介文を発表し合い、相互評価する。

②相互評価をもとに、人物紹介文を加筆訂正する。

③加筆訂正した人物紹介文の自己評価を行う。

3 詩文

- 漢詩のきまりと表現の特色について学び、漢詩の世界に親しむ。
- 漢文の簡潔で整然とした表現と構成に注意しながら読み味わう。
- 描かれた状況や心情を考えながら、それぞれの漢詩文を読み味わう。
- 漢詩文の日本語・日本文学への影響を考察する。

詩

絶句　四季
送別
望郷

律詩

日本漢詩

漢詩の手引き

文　雑説（韓愈）

春夜宴二桃李園一序（李白）

古典に関する文章

名月――八月の詩（一海知義）

単元の言語活動 4

漢詩漢文の表現の特徴をつかむ

唐詩関連地図
唐詩に関連する地名や名跡をあげた。



絶句

四季

•春暁

孟浩然

春眠不レ覚レ暁ヲ
処処聞二啼鳥一
夜来風雨ノ声
花落知ル多少
*

（『唐詩選』）

参考

春あけぼの
春あけぼのの　うすねむり
まくらにかよう　鳥の声
風まじりなる　夜べの雨
花ちりけんか　庭もせに
（『鶯の卵』　土岐善麿）

江南ノ春

杜牧

千里鶯啼緑映レ紅
水村山郭酒旗ノ風
南朝四百八十寺
多少ノ楼台煙雨ノ中

（『三体詩』）

孟浩然　六八九年～七四〇年。一説に、名は浩、字は浩然。盛唐の詩人。

1 処処　あちらこちらで。

2 夜来　昨夜。「来」は時間を表す語に付く助字。

3 知多少　いったいどれほど…だろうか。「多少」は、「どれほど」の意。疑問を表す。

問 作者は、この詩をどのような状態でいるときに詠んだのか。

杜牧　八〇三年～八五三年。字は牧之。晩唐の詩人。

4 江南　長江の南岸一帯。

5 水村　水辺の村。

6 山郭　山辺の町。

7 酒旗　居酒屋の目印の旗。

8 南朝　江南の建康（現在の江蘇省南京市）を都とした宋・斉・梁・陳の四代の王朝をいう。

9 多少　ここでは、多くの、の意。

10 煙雨　煙るように降る雨。霧雨。

秋風引[11]　劉禹錫

何処秋風至　蕭蕭送雁群
朝来入庭樹　孤客最先聞

（『唐詩選』）

江雪[15]　柳宗元

千山鳥飛絶　万径人蹤滅
孤舟蓑笠翁　独釣寒江雪

（『唐詩三百首』）

深い学びのために

学習のポイント　1 それぞれの詩の押韻を確認してみよう。

言葉と表現　1 次の漢字がどのように使い分けられているか、漢和辞典で調べてみよう。
(1) 覚・憶　(2) 聞・聴

言語活動

1 季節と心情の関係について、それぞれの詩を比較し、話し合ってみよう。

劉禹錫　七七二年～八四二年。字は夢得。中唐の詩人。
11 秋風引　秋風のうた。「引」は、「うた」の意。
12 蕭蕭　もの寂しい様子や音の形容。
13 朝来　今朝がた。
問 「入二庭樹一」の主語は何か。
14 孤客　独りぼっちの旅人。

柳宗元　七七三年～八一九年。字は子厚。中唐の詩人。
15 江雪　川辺の雪景色。
16 千山　多くの山々。
17 万径　全ての小道。
18 人蹤　人の足跡。
19 蓑笠翁　蓑と笠をつけた老人。
問 「蓑笠翁」とは、誰のことか。

＊多少　客
何処（レノ ヨリカ）～（疑問）

送別

王維

送元二使安西

渭城朝雨浥軽塵
客舎青青柳色新
勧君更尽一杯酒
西出陽関無故人

（『三体詩』）
5

勧酒　于武陵

勧君金屈巵
満酌不須辞
花発多風雨
人生足別離

（『唐詩選』）
10

参考

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

（『厄除け詩集』井伏鱒二）

王維　七〇一年頃～七六一年。字は摩詰。盛唐の詩人。

20 元二　王維の友人。伝未詳。「二」は排行（一族同世代の兄弟・いとこなどの年齢の順位）を示す。

21 安西　現在の新疆ウイグル自治区庫車県。安西都護府が置かれ、西域の政治や軍事の要所であった。

22 渭城　現在の陝西省咸陽市。渭水を挟んで長安の対岸にあった町。唐代の長安では、旅立つ人をここまで見送る風習があった。

23 客舎　旅館。

問「勧君」に込められた作者の心情は、どのようなものか。

24 陽関　現在の甘粛省敦煌市西南にあった関所。中国と西域を区切る関所として知られていた。

于武陵　生没年未詳。名は鄴。武陵は字。一般に字で呼ばれている。晩唐の詩人。

25 金屈巵　取っ手の付いた黄金製の杯。

問「満酌」とは、どのようなことか。

26 不須…　「…しないでほしい」の意。懇願を表す。

27 足　多い。

望郷

涼州詞[28]　王翰

葡萄美酒夜光杯[29]　欲飲琵琶馬上催[30]
酔臥沙場君莫笑[31]　古来征戦幾人回[32]

（『唐詩三百首』）

静夜思　李白

牀前看月光　疑是地上霜[34]
挙頭望山月　低頭思故郷

（『唐詩選』）

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント　1 それぞれの詩の「起承転結」の構成について、確認してみよう。

❖言葉と表現　1 次の漢字がどのような意味を持つか、漢和辞典で調べてみよう。
(1)尽（一五〇・4）　(2)辞（一五〇・8）　(3)催（一五一・3）

❖言語活動　1 それぞれの詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、どのような違いがあるか、話し合ってみよう。

王翰　六八七年頃～七二六年頃。字は子羽。盛唐の詩人。
28 涼州詞　涼州から流行した歌曲の名。「涼州」は、現在の甘粛省一帯の地で、西北国境警備の要であった。
29 夜光杯　夜でも光り輝く玉の杯。
30 琵琶　西域の弦楽器。馬上で演奏された。
31 沙場　戦場となった砂漠。
32 征戦　遠征して戦う。

李白　七〇一年～七六二年。字は太白。盛唐の詩人。「詩仙」と称される。
33 牀　寝台。
34 疑是…　「…ではないかと思う」の意。推量を表す。

＊城　客舎　故人　看

▼幾人　～（反語）

律詩

春望　杜甫

国破山河在　城春草木深
感時花濺涙　恨別鳥驚心
烽火連三月　家書抵万金
白頭掻更短　渾欲不勝簪

（『唐詩三百首』）

杜甫　七一二年～七七〇年。字は子美。盛唐の詩人。「詩聖」と称される。

35 春望　春の眺望。

36 国破　都は破壊された。「国」は、ここでは、首都の意。安禄山の乱により、反乱軍に占領された都（長安）の混乱をいう。

37 城　城壁で囲まれた長安のまち。

38 感時　時代のありさまに心を痛める。

39 恨別　妻子と離れ離れになったことを悲しむ。

40 烽火　敵の襲来を告げる合図ののろし。

問「烽火」は、何を象徴しているのか。

41 家書　家族からの手紙。

42 抵万金　大金に相当する。

43 渾　全く。

44 欲　…しそうだ。

45 簪　冠を留めるかんざし。



西安城（長安城）の城壁

八月十五日夜、禁中独直、

対レ月憶二元九一　白居易

銀台金闕夕沈沈　独宿相思在二翰林一

三五夜中新月色　二千里外故人心

渚宮東面煙波冷　浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不二同見一　江陵臥病湿二足秋陰一

（『白氏文集』）

深い学びのために

学習のポイント　1 律詩の標準的な形式を確認し、それぞれの詩と比較してみよう。

言葉と表現　1 対句表現を抜き出し、どのような対になっているか、単語ごとに確認してみよう。

言語活動

1 杜甫と白居易の当時の境遇と時代背景を調べ、二つの詩を比較して、その違いがどのように表れているか、発表してみよう。

白居易　七七二年～八四六年。字は楽天。中唐の詩人。

46 八月十五日夜　旧暦中秋の名月の夜。

47 禁中　宮中。「禁」は、天子の居所。

48 直　宿直する。

49 元九　元稹。「九」は排行。作者の親友で、このとき江陵（現在の湖北省荊州市）に左遷されていた。

50 銀台金闕　宮中の美しい高殿や門。

51 夕沈沈　夜がしんしんと更ける。

52 翰林　翰林院。天子の詔勅や上奏文を扱う宮中の役所。作者は当時、翰林学士の位にあった。

53 三五夜　十五夜。

54 新月　昇り始めた月。

問 「二千里外故人心」とは、誰の、どのような心のことを言うのか。

55 渚宮　元稹のいる江陵の地にあった古代の宮殿。

56 浴殿　翰林院の東南にあった浴堂殿。

57 鐘漏　時を告げる鐘と水時計。

58 卑湿　土地が低く、湿気が多い。

＊欲勝相猶

日本漢詩

富士山

石川丈山

仙客来遊雲外巓[59]
雪如紈素一煙懸
*
神竜棲老洞中淵[60]
白扇倒懸東海天

（『新編覆醤集』）

5

烏児塞宮[62]

成島柳北

想曾鳳輦幾回過[63]
来与淑姫長晤歌[64][65]
錦帳依然人不見[66]
玻璃窓外夕陽多[67]

（『航西日乗』）

10



マリー・アントワネット
（ルイ 16 世の王妃としてヴェルサイユ宮殿に住んだ。）

石川丈山　一五八三年～一六七二年。名は重之、号は丈山・詩仙堂。江戸時代初期の漢詩人。来日した朝鮮使節から「日東（日本）の李杜」と称揚された。

59 仙客　鶴に乗った仙人。

60 神竜　神秘的な竜。

61 紈素　扇に貼る白い練り絹地。

成島柳北　一八三七年～一八八四年。名は惟弘、号は柳北。江戸の生まれ。幕府の儒官として仕え、明治維新後は在野のジャーナリストとして活躍した。

62 烏児塞宮　ヴェルサイユ宮殿。ルイ十四世によってパリ郊外に建てられた。

63 鳳輦　天子の乗る車。

64 淑姫　しとやかで美しい妃。

65 晤歌　顔を合わせて歌う。『詩経』「東門之池」に「彼美淑姫、可与晤歌」とある。

66 錦帳　錦のとばり。

67 玻璃　ガラス。

＊如

深い学びのために

学習のポイント　1 それぞれの詩の主題は何か、考えてみよう。

言葉と表現　1 次の語について、それぞれどのようなイメージを読者に与えるか、話し合ってみよう。
(1)仙客（一五四・3）　(2)神竜（一五四・3）　(3)鳳輦（一五四・7）　(4)玻璃（一五四・10）

言語活動　1 富士山やヴェルサイユ宮殿を漢詩の題材とすることの効果について話し合い、発表してみよう。

唐詩選　七巻。明の李攀竜の編といわれる。唐詩を詩体別に分けて編集したもの。江戸時代以後の日本で広く読まれた。

三体詩　六巻。南宋の周弼編。唐詩の中から、七言絶句・七言律詩・五言律詩のみを選んで編集したもの。

唐詩三百首　六巻。清の孫洙編。代表的な唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。

白氏文集　七十一巻。白居易が自らの詩文を集めて編集したもの。『白氏長慶集』とも呼ばれ、日本の平安文学に大きな影響を与えた。

新編覆醤集　前集四巻、続集十六巻。石川丈山の詩文集。

航西日乗　成島柳北による日記体の欧米旅行記。旅行中に書かれた漢詩を多く載せる。

漢詩の手引き

1 近体詩のきまり

唐詩は中国の古典文学の精華といわれている。古くから作られてきた古体詩に対して、唐代には、**近体詩**と呼ばれる新しい詩形が確立された。その近体詩は、**絶句**と**律詩**とに大別される。

- 詩
  - 古体詩（句数に制限がない）
    - 四言古詩（一句四文字）
    - 五言古詩（一句五文字）
    - 七言古詩（一句七文字）
    - 雑言古詩（一句の字数不定）
  - 近体詩
    - 絶句（四句から成る）
      - 五言絶句（一句五文字）
      - 七言絶句（一句七文字）
    - 律詩（八句から成る）
      - 五言律詩（一句五文字）
      - 七言律詩（一句七文字）

1 絶句

四句から成り、一句の字数が五言（五文字）であるか七言（七文字）であるかによって、**五言絶句**と**七言絶句**とに分けられる。

四句をそれぞれ**起**（ある内容をうたい起こす）・**承**（継承・展開する）・**転**（転換し、変化を持たせる）・**結**（全体を結びまとめる）の順序に構成するのがよいとされる。

2 律詩

八句から成り、やはり**五言律詩**と**七言律詩**がある。二句ずつを一単位として聯（れん）と呼び、一首は四つの聯で構成され、それぞれ首聯（あたま）・頷聯（がんれん）（あご）・頸聯（けいれん）（くび）・尾聯（びれん）（お）と呼ばれる。

四つの聯の構成は、絶句の**起承転結**の構成法に準じ、特に、頷聯と頸聯には**対句**を用いる。対句とは、構成が同じで、意味内容も互いに対応する二つの句をいう。

なお、律詩の規則に従って十句以上の長編となるものを排律（長律）と呼ぶことがある。

3 押韻

詩は、本来歌ったり口ずさんだりするものであるから、音声の美しさが重視され、同じ響きを持つ語を句末に置くことが古くから行われた。これを**押韻**（韻を踏む）という。五言詩では偶数句末に押韻し、第一句末に押韻してもよい。七言詩では第一句と偶数句末に押韻するのが原則だが、第一句末には押韻しないこともある。

〈押韻のきまり〉（●は押韻）

五言絶句（第一句末に押韻してもよい。）

起句　○○○○○
承句　○○○○●
転句　○○○○○
結句　○○○○●

七言律詩（第一句末は押韻しないこともある。）

首聯　○○○○○○●
　　○○○○○○●
頷聯　○○○○○○○　句
　　○○○○○○●　対
頸聯　○○○○○○○　句
　　○○○○○○●　対
尾聯　○○○○○○○
　　○○○○○○●

4 平仄（ひょうそく）

中国語には元来、一字一字の発音に声調（音程の高低）があり、平声（ひょうせい）と仄声（そくせい）に二分される。近体詩では詩の音調を美しく整えるため、この平声と仄声の組み合わせが厳しく規則化された。これを平仄という。

2 唐詩の流れ

唐代（六一八年～九〇七年）の詩は、文学史の上で四つの時期に区分される。**初唐**は、唐王朝の始まりからの約百年間で、前代の修辞に重きを置いた詩風から脱皮して、若々しく力強い詩が生み出されるようになった時代である。続く約五十年間は**盛唐**と呼ばれ、唐の国力が最高潮に達した時期で、王維・孟浩然（もうこうねん）・李白（りはく）・杜甫（とほ）など、多くの大詩人が活躍した。しかし、安禄山（あんろくざん）の乱（七五五年）を境に国力は急速に衰え、次の**中唐**の約七十年間は、社会矛盾に目を向けた詩が作られたり、従来は詩に用いられなかったような表現を追求する傾向が強まったりした。この時期の詩人には、韓愈（かんゆ）・柳宗元・白居易などがいる。唐が滅亡へと向かう**晩唐**の約七十年間は、詩の爛熟（らんじゅく）期に当たり、杜牧（とぼく）・李商隠（りしょういん）などの詩人が現れた。

雑説[1]

韓愈

世有伯楽[2]、然後有千里馬[3]。千里馬常有、而伯楽不常有。故雖有名馬、祇辱於奴隷人[4]之手、駢死[5]於槽櫪[6]之間、不以千里称也。

馬之千里者、一食或尽粟[7]一石[8]。食馬者、不知其能千里而食也。

是馬也、雖有千里之能、食不飽、力不足、才[9]美不外見。且欲与常馬等、不可得。安求其能千里也。

1 **雑説**　文体の一種。比喩などによって自分の意見を述べた文。

2 **伯楽**　馬の鑑定の名人。

3 **千里馬**　一三四ページ注12参照。

4 **奴隷人**　身分の低い使用人。

5 **駢死**　（平凡な馬と）首を並べて死ぬ。

6 **槽櫪之間**　かいばおけの間。「槽」「櫪」は、いずれも、かいばおけ。

7 **粟**　穀物の総称。

8 **一石**　「石」は容量の単位。当時の一石は約六〇リットル。

9 **才美**　才能や資質の優れていること。

策レ之不レ以ニ其10道一食レ之、*不レ能レ尽ニ其材一11。鳴レ之不レ能レ通ニ其意一。執レ策而臨レ之曰、「天下無レ馬。」

▼鳴呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。

（『唐宋八家文読本』）

10 **其道**　名馬を扱うのにふさわしいやり方。

11 **材**　「才」と同じ。

問 **この「馬」とは、どのような馬のことか。**

＊千里馬　故雖於以食其不能

▼不ニ常〜一（否定）　祇〜（限定）　安〜也（反語）　嗚呼〜（詠嘆）　〜邪（疑問）　〜也（疑問）

深い学びのために

学習のポイント　1 本文の構成を、分かりやすく図にしてまとめてみよう。

言葉と表現　1 本文中の「其」を全て抜き出して現代語訳し、意味の違いについて分類してみよう。

言語活動　1 作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか、話し合ってみよう。

韓愈　七六八年〜八二四年。中唐の詩人・文章家。字は退之。号は昌黎。唐宋八大家の一人。

唐宋八家文読本　三十巻。清の沈徳潜の編。唐宋の名文家といわれる八人の散文を集めたもの。

春夜宴二桃李園一序[1]

李白

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。[4] 而浮生若レ夢。為レ歓幾何。古人秉レ燭夜遊、良有レ以也。況陽春召レ我以二煙景一、大塊仮レ我以二文章一。[6][7][8]

5



桃李園図屏風（川端玉章筆）

1 **序** 文体の一種。物事の次第を順序立てて述べる文。
2 **逆旅** 旅館。「逆」は迎えるの意。
3 **光陰** 時間の流れ。年月。
4 **百代之過客** 永遠の旅人。
問 **「浮生若レ夢。」とは、どのような意味か。**
5 **古人秉燭夜遊** 漢代の古詩に「昼短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一」とある。
6 **煙景** かすみたなびく春景色。
7 **大塊** 大地。大自然。ここでは、万物の創造者。
8 **仮** 貸し与える。
9 **序天倫之楽事** 肉親の間の楽しみを繰り広げる。
10 **群季** 大勢の年少者たち。
11 **恵連** 謝恵連。三九七年～四三三年。六朝時代の宋の詩人。謝霊運のいとこ。
12 **康楽** 謝霊運。三八五年～四三三年。当代随一の詩人で、祖父の爵位を継いで康楽公に封ぜられた。
13 **幽賞** 心静かに風景をめでる。
14 **高談** 世俗を離れた高尚な談論。

我以文章会桃李之芳園、序天倫之楽事。群季俊秀、皆為恵連。吾人詠歌、独慚康楽。幽賞未已、高談転清。開瓊筵以坐華、飛羽觴而酔月。不有佳作、何伸雅懐。*如詩不成、罰依金谷酒数。

（『古文真宝』）

15 **瓊筵** 玉を編んで作ったような美しいむしろ。立派な宴席を指す。

16 **羽觴** すずめが羽を広げた形の杯。

17 **金谷酒数** 晋の石崇が別荘の金谷園で大宴会を催した際、参会者に詩を作らせ、できない者には罰として大杯で酒三杯を飲ませた故事を指す。

＊ 夫者若如

▼ 幾何（反語） 況〜（抑揚）
独〜（限定） 何〜（反語）

深い学びのために

学習のポイント

1 この文章の文体上の特色を、字数や対句などの点からまとめてみよう。

言葉と表現

1 本文中に用いられている比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。

2 歴史上の人名や地名を本文中から抜き出し、それらが使われている意味について考えてみよう。

言語活動

1 松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分（一〇〇・2）と比較して、気づいたことを発表してみよう。

李白 一五一ページ参照。

古文真宝 前集十巻。後集十巻。宋末元初の黄堅（生没年未詳）の編といわれる。戦国時代から宋までの詩文を集めたもの。

古典に関する文章

名月——八月の詩

一海知義（いっかいともよし）

さて、仲秋の名月をうたった漢詩の中で、日本人に最もよく知られて来たのは、白楽天の次の句だろう。

三五夜中　新月の色
二千里外　故人の心

当時詩人は、みやこ長安にいた。そして左遷されて湖北省の江陵にいた親友元稹[1]に思いをはせて、この句を作る。詩題を「八月十五日夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶う」という。

この句はわが国の『源氏物語』[2]須磨の巻にも引かれている。

月いとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりとおぼし出でて、（みやこの）殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心。」と誦したまへる、例の、涙もとどめられず。

（月が本当に明るく美しく輝いて出てきたので、〈光源氏は〉今夜は十五夜であったよとお思い出しになって、宮中殿上の間での詩歌管弦の宴が恋しく思われて、今頃はみやこのあの方この方が物思いにふけっておいでであろうよと想像なさるにつけても、月の顔ばかりをおのずと見つめ続けていらっしゃる。〈光源氏〉「二千里外故人心。」と声に出して吟じられると、例によって涙も抑えられない。）

かつて私は『源氏』のこの一節について、次のようにのべたことがある。

「名月をながめて、白楽天が想うのは、親友元稹のことであり、源氏が想うのは、都にのこして来た女たちのことである。それは、主として男性の文学であった中国古典詩と、女性の文学である『源氏』とのちがいを示している、といえなくもない。なお、白詩のこの句は、『源氏』成立後数年、藤原公任[3]の『和漢朗詠集』[4]（一〇一三年成立）に採られて、さらにひろく知られるようになった。」

ところで句中にいう「二千里」とは、どれほどの距離をさすのか。唐代の一里は約五六〇メートルだとされ、二千里は一一〇〇キロほどになる。地図上で測ってみると、たしかに長安

（現在の西安）と江陵は一千キロほど離れている。これを日本に当てはめれば、ほぼ東京・下関間か。

かく一千キロも離れた土地にいる二人が、同時に眺めることができる。それが天上の月である。このことが遠く離れた二人の心を、一つに結びつける。

だが、親友元稹もまた同じ時間に、同じこの月を眺めているのだろうか。

さきの二句は、全八句中の第三、四句だが、詩は末尾二句に至って、次のようにうたう。

猶お恐る　清光　同じくは見ざるを
江陵は卑湿にして　秋陰足る

元稹君、きみがいま居る江陵は、土地が卑くて湿気の多い所だと聞いている。そして秋になっても、陰りがちな日がつづくということだ。

遠く離れ離れになった二人が、せめて今宵はこの清らかな光を、空を仰いで共に眺めたいのだが、……。それもかなわぬ願いなのだろうか。

（注）

1 **元稹**　一五三ページ注49参照。
2 **『源氏物語』**　七一ページ注1参照。
3 **藤原公任**　九六六年～一〇四一年。学芸に長じ、和歌・漢詩・音楽に才能を発揮した。
4 **『和漢朗詠集』**　藤原公任が漢詩文の秀句や和歌の優れたものを主題ごとに分類して編んだ詞華集。

❖学習のポイント

1 月を見て遠く離れた人や場所を思う文学作品にはどのようなものがあるか、調べてみよう。

2 漢詩（漢文）と和歌（古文）で、月の描かれ方や作品の背景にどのような共通点と相違点があるか、五六ページ「単元の言語活動3」も参考にして、比較してみよう。

一海知義　昭和四（一九二九）年～平成二十七（二〇一五）年。中国文学者。奈良県の生まれ。陶淵明・陸游から夏目漱石・河上肇まで研究の対象は広く、『漢詩一日一首』『漢詩入門』など、優れた入門書やエッセイも多い。本文は『漢詩逍遥』（平成十八（二〇〇六）年刊）によった。なお、『源氏物語』の現代語訳は本書掲載にあたり、原文に追加した。

◆漢詩漢文の表現の特徴をつかむ

漢詩や漢文には、対句や反語などの特徴的な表現方法があり、訓読を経由して、日本語の文章にも取り込まれている。また、『万葉集』以来、日本の文学も、主題や比喩など、漢詩文からさまざまな文学的手法を学んできた。一方で、漢詩文にはない表現を追求する和の意識も生まれ、こうした和漢の対比や融合によって、独自の表現や文学が形作られた。日本語・日本文学の豊かな歴史は、和と漢の二つの流れによって育まれたといえる。

課題 漢詩や漢文の表現方法にはどのような特徴があるか、和歌や俳句、さらに現代日本語の文章などと比較してまとめ、発表してみよう（次の1・2・3は、1と3、2と3のように分担してもよい）。

1 漢詩らしい表現の特徴について考えてみよう。
①この単元の漢詩から、漢詩らしいと感じられる句もしくは聯（れん）を一つ選ぶ。
②選ばれた句（聯）について、なぜ漢詩らしいと感じられるのか、この教科書に掲載されている和歌と比較しながら発表し、話し合う。

2 漢文特有の言い回しや比喩の特徴について考えてみよう。
①この単元の漢文から、漢文らしいと思われる言い回しや比喩を一つ選ぶ。
②選ばれた言い回しや比喩の中に現代日本語の実用文や論説文に取り込まれているものがあるか、話し合う。

3 漢詩や漢文の表現方法が日本語・日本文学にどのように生かされているか、あるいはどのように異なっているか、この教科書掲載の漢詩の和訳（一四八ページ・一五〇ページ）も参考にして、まとめて発表してみよう。
①生かされている点と異なっている点について、一つずつ例をあげる。
②あげられた例を分類して、漢詩や漢文の表現の特徴について、図表にしてまとめ、発表する。

4 思想

- 『論語』を学ぶことによって、自己のものの見方・考え方を豊かにする。
- 日本における『論語』の受容を理解する。
- 『論語』を引用しながら自己の主張をまとめる。

論語

学問　六章
政治　四章
人生　八章

慎思録（貝原益軒）
笑話出思録（乾篤軒）

古典に関する文章

知るということ（金谷治）

単元の言語活動 5

『論語』の言葉を今に生かす



杏壇礼楽図（きょうだん）

孔子が祖国に帰り学校を開き、杏壇（孔子が弟子に学問を教えた所）で弟子に詩書礼楽を教えている様子が描かれている。

論語

学問

子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎」。（学而）

子曰、「温故而知新、可以為師矣」。（為政）

子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆」。（為政）

子曰、「由、誨女知之乎。知之為知之、不知為不知、是知也」。

1 子　男子に対する敬称。ここでは、先生の意。『論語』では、多くの場合、孔子を指す。
2 時　折に触れて。機会あるごとに。
3 説　喜ばしい。うれしい。「悦」と同じ。
問 「人不知」とは、どのようなことを言っているのか。
4 慍　心に不満を持つ。むっとする。
5 君子　一一九ページ注9参照。
6 温故　伝承や古典をよく研究して習熟する。「温」は「たづネテ」とも読む。
7 知新　現代の問題を理解する。
8 罔　暗い。道理を理解できない。
9 殆　危ない。（独断に陥る）危険がある。
10 由　孔子の門人。前五四二年～前四八〇年。姓は仲、名は由、字は子路。
11 誨　教える。教え諭す。
12 女　一四一ページ注20参照。

知。是知也*」。（為政）

子曰「不憤13不啓14。不悱15不発16。挙一隅不以三隅反17、則不復18也」。（述而）

子曰「譬如為山。未成一簣19、止吾止也。譬如平地。雖覆一簣、進吾往也」。（子罕）

政治

子曰「為政以徳、譬如北辰20居其所而衆星共21之」。（為政）

13 憤　いきりたつ。（理解しようとして）やっきになる。
14 啓　開く。（理解の）きっかけを与える。
15 悱　（言葉で表現できず）もどかしがる。
16 発　あける。糸口を開く。
17 反　反応する。
18 一簣　もっこ一つ分の土。「簣」は、もっこ。土を運ぶための竹籠。
19 北辰　北極星。
20 居其所　（動かずに）自らの場所にいる。
21 共　（北極星を中心にして）周りを回る。

* 子自君子則也
不二亦〜一乎（詠嘆）〜乎（疑問）


杏壇

子曰、「道[22]之以政、斉之以刑、民免而無恥。道之以徳、斉之以礼、有恥且格。」

（為政）

子貢問政。子曰、「足食、足兵、民信之矣。」子貢曰、「必不得已而去、於斯三者何先。」曰、「去兵。」子貢曰、「必不得已而去、於斯二者何先。」曰、「去食。自古皆有死。民無信、不立。」

（顔淵）

季康子問政於孔子。孔子対曰、「政者正也。子帥以正、孰敢不正。」

（顔淵）

22 道　先に立って導く。
23 政　ここでは、法律の意。
24 斉　ととのえる。秩序立てる。
25 刑　刑罰。
26 礼　礼儀。
27 格　善に至る。
28 子貢　孔子の門人。前五二〇年頃～前四五六年頃。姓は端木、名は賜。
29 食　食べ物。食糧。
30 兵　戦の備え。軍備。
31 民信之　人民に信頼の心を持たせる。
32 必　どうしても。

問 「二者」が指すものは何か。

33 季康子　春秋時代の魯の大夫（大臣）。生年未詳～前四七七年。
34 対　（目上の人に）お答えする。
35 帥　先頭に立って人々を導く。

人生

子曰、「巧言令色[36][37]、鮮矣仁[38]。」（学而）

曽子曰、「吾日三[39]省吾身。為人謀而不忠[40]乎。与朋友交而不信乎。伝不習[41]乎。」（学而）

子曰、「吾十有五而志于学。三十而立[42]。四十而不惑。五十而知天命[43]。六十而耳順[44]。七十而従心所欲、不踰矩[45]。」（為政）



孔子像

36 巧言　言葉を巧みに飾る。
37 令色　表情を巧みに取り繕う。
38 仁　人間の本心にある広い愛。
39 曽子　孔子の門人。前五〇五年～前四三六年頃。姓は曽、名は参、字は子輿。
40 忠　真心を尽くす。
41 不習　習熟していないこと。
42 立　（学問や思想について）自らの立場が確立する。
43 天命　天が与えた使命。
44 耳順　何事を聞いても、その道理がすぐに理解できる。
45 矩　人の道。行為の規準。

＊道　已

▼何～（疑問）　無レ～不レ…（仮定）
　孰～（反語）　敢不レ～（反語）
　～乎（疑問）

子曰、「知レ之者不レ如二好レ之者一、好レ之者不レ如二楽レ之者一。」（雍也）

子在二川上一曰、「逝者如レ斯夫。不レ舎二昼夜一。」（子罕）

葉公語二孔子一曰、「吾党有二直躬者一。其父攘レ羊、而子証レ之。」孔子曰、「吾党之直者、異二於是一。父為レ子隠、子為レ父隠。直在二其中一矣。」（子路）

子貢問曰、「有二一言一而可二以終身行一之者一乎。」子曰、「其恕乎。己所レ不レ欲、勿レ施二於人一。」（衛霊公）

46 **逝者**　過ぎゆくもの。時の流れなどをいう。

47 **舎**　とどまる。休む。

48 **葉公**　楚の葉（現在の河南省葉県）という土地の長官。生没年未詳。姓は沈、名は諸梁、字は子高。

49 **党**　村里。

50 **直躬**　正直者の躬。人の呼称。

51 **攘**　盗み取る。自分の所に紛れ込んできたものを、自分のものにすること。

52 **証**　証言する。

53 **恕**　思いやり。他人を大切にすること。

問 **「己所レ不レ欲」とは、どのようなことか。**



子在川上（范曽筆）

子曰「過而不レ改、是謂レ過矣。」

（衛霊公）

＊夫　恕　勿

▼不レ如ニ〜一（比較）　〜　夫（詠嘆）
〜　乎（疑問）

深い学びのために

学習のポイント

1 本文を音読し、印象に残った章を暗唱してみよう。

2 ［学問］の各章から、孔子の学問に対する態度や方法をまとめてみよう。

3 ［政治］の各章から、孔子が政治において重要だと考えていたのはどのようなことか、話し合ってみよう。

4 ［人生］の各章から、孔子の人間の生き方に対する考え方をまとめてみよう。

言葉と表現

1 次の各部分を、傍線部に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1)不レ憤不レ啓。（一六七・2）　(2)知レ之者不レ如ニ好レ之者一（一七〇・1）

2 「吾十有五而志ニ于学一。」（一六九・5）の章を出典とする、年齢を表す語をあげてみよう。

言語活動

1 ［学問］［政治］［人生］の各章から、それぞれ好きな一章を選び、そこに示されている孔子の学問観・政治観・人生観について、話し合ってまとめてみよう。

論語　十巻。二十編。春秋時代末期の孔子（孔丘）とその弟子たちの言行録。孔子は、古い秩序が崩れ、新しい秩序はまだ確立していない混乱と不安の渦巻く時代に、人間の善意と愛情に基づく「仁」を根本として、平和な社会を築こうとした。

慎思録

貝原益軒

恭黙思レ道、是所二以自得一之工夫。孟子曰、「思ハバ則チ得レ之、不レ思ハ則チ不レ得。」故ニ学者之自得与レ否者、因ニ克念与レ不ニ克念一也。思之於ニ学功一也、其益大ナル乎哉。論語曰、「学而不レ思ハ則チ罔シ。」聖人以ニ学与レ思対言者、誠有レ以也。

（巻一）

深い学びのために

学習のポイント 1 孟子の言葉を踏まえて、筆者はどのようなことを主張しているか、考えてみよう。

2 この文章で筆者が最も重視していることは何か、本文中からそれを示す語を抜き出してみよう。

1 **恭黙** 慎み深く沈黙する。
2 **自得** 学問や真理を自分で体得する。
3 **工夫** 手段。方法。
4 **孟子** 前三七二年頃～前二八九年頃。戦国時代の思想家。名は軻、字は子輿。
5 **思則得之** 思索すれば道理を体得できる。『孟子』告子上編の言葉。
6 **克念** 思念することができる。
7 **学功** 学問上の効果。
8 **論語** 一七二ページ参照。
9 **学而不思則罔** 『論語』為政編の言葉。一六六ページ参照。
10 **聖人** ここでは、孔子を指す。

＊所以 学者 也
▼～乎哉（詠嘆）

慎思録 六巻。貝原益軒の著。儒学の書や道徳・倫理・教育などに関する考えを述べたもの。

言葉と表現

言語活動

1 次の各部分を、傍線部に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。

(1) 是所レ以自得レ之工夫。（一七二・1）　(2) 其益大乎哉。（一七二・3〜4）

1 この文章の表現上の特徴はどのような点にあるか。特に主張の展開との関連で効果を上げている点について、話し合ってみよう。

笑話出思録

乾篤軒[5]

一壊衲振レ錫誦二仏経一、而募[4]化於儒家ノ門外一。主人罵レ之曰、「爾胡為立二中華文教之門一、誦[5]夷狄虚誕之言一。宜二速去一。」僧完爾而忽止レ誦二仏経一、而誦二論語学而之聖語一。主人知二其不一レ可レ去、与二一掬米一曰、「爾実所謂巧言令色之徒歟。」僧受レ米拝曰、「鮮矣仁。」[7]

[10]

1 壊衲　僧衣。ここでは、それをまとった物乞いの僧。
2 錫　僧侶の持つ杖。錫杖。
3 仏経　仏典。お経。
4 募化　布施を求める。
5 夷狄虚誕之言　異民族のでたらめな言葉。
問「中華文教之門」「夷狄虚誕之言」は、それぞれ何を指して言ったものか。
6 完爾　にっこり笑う。「莞爾」に同じ。
問 主人が「爾実所謂巧言令色之徒歟。」と言ったのは、なぜか。
7 巧言令色・鮮矣仁　『論語』学而編の言葉。一六九ページ参照。

＊ 爾　宜　所謂

▼ 胡為レ〜（疑問）　〜歟（疑問）

貝原益軒　寛永七（一六三〇）年〜正徳四（一七一四）年。江戸時代前期の儒学者。筑前（現在の福岡県）の人。名は篤信、号は益軒。

深い学びのために

学習のポイント　1「鮮矣仁」（一七三・11）は、ここではどのような意味に転用されているか、考えてみよう。

言葉と表現　1「完爾」（一七三・8）の「爾」のように、状態を表す接尾辞にはほかにどのようなものがあるか。ふだん使用している言葉から探し、漢和辞典などで確認してみよう。

言語活動　1この文章のおもしろさはどこにあるか、意見を出し合ってみよう。

笑話出思録　一巻。乾篤軒の編。江戸時代に民間に流布していた笑話を漢訳した短文を編集したもの。

乾篤軒　艸喬（そうきょう）先生なる人物の門人という。伝未詳。

古典に関する文章

知るということ

金谷（かなや）　治（おさむ）

「学びて時に之（これ）を習う、亦説（またよろこ）ばしからずや」というのは、学ぶことの喜びをのべた『論語』の巻頭のことばである。知識がひろがり、習熟して深まっていくのは、たしかに嬉（うれ）しいことにちがいない。『論語』の全体がそうした学びをすすめているのだが、じつは孔子自身が学びの人であった。「私は生まれつきの知者ではない」、ひたすらに勉学をつづけてきたのだと、孔子はいう。「学びて厭（いと）わず」という孔子の述懐も有名である。「私ほどの好学の人はそうはあるまい」とさえ自負している。高みからの強制ではない孔子のこの姿はすがすがしく爽やかである。

では、学んで知るとはどういうことか。『論語』にはすばら

10

しいことばがある。「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知るなり」。わかったこと、理解できたことと、そうでないこととを、はっきり区別すること、それが知るということだという。私はこのことばを合理主義の鉄則だとも考えている。わかったこととわからないこととを区別して、ここまではわかった、ここからがわからないと、はっきり言えるようでなければ、ほんとうの知る（認識）にはならない。どこがわからないかと先生に聞かれて答えられないのは、初めからよく理解できていないからだ。

知るということは、このように確実鮮明にものを切りとることである。そして、知った世界の確実なひろがりがあれば、その反面で、知らない世界のひろがりもわかってくるはずだ。ものを切りとった喜びだけでは終わらない。残された未知の世界も広大だと知って、そこに畏れを抱くことだ。世界が広くなるということは、そのことをも含めていうのである。知識の獲得を喜ぶだけでは、高慢な衒学者（ペダンティスト）1になりかねない。

孔子がもっとも強調したのは、人の道としての仁の徳であった。「仁の徳を選択できないでいる者は、知者とはいえない」と孔子はいっている。知ることは仁徳実現の前提として重視されているのである。理性的な認識だけを無条件に貴んでいるのではない。情報氾濫の今日的な状況からすると、何を知るべきか、あいまいなことに迷わされないで正確な情報を選択することが重要だということは、すぐにわかるだろう。情報社会になって、かえって知るということがむずかしくなってきたというのも、皮肉なことである。

（注）
1 衒学者　学識があるのをひけらかす人物。

学習のポイント

1 筆者は、『論語』の言葉を踏まえて、「知る」とはどのようなことだと述べているか、本文中の語を用いて説明してみよう。

2 『論語』の「之を知るを之を知ると為し、…」（一七五・上1～2）という言葉は、現代社会においてどのような意義を持つと考えられるか、本文を参考にして話し合ってみよう。

金谷治　大正九（一九二〇）年～平成十八（二〇〇六）年。中国研究者。三重県の生まれ。専門は、中国古代思想史。『論語』や『孟子』などの優れた訳業でも知られる。著書に『秦漢思想史研究』『管子の研究』などがある。本文は『論語と私』（平成十三（二〇〇一）年刊）によった。

◆『論語』の言葉を今に生かす

『論語』の簡潔で含蓄に富んだ言葉は、それぞれの時代において人々の思索にさまざまな示唆を与えてきた。ここでは、これまでの学習を踏まえて、心に響いた『論語』の一節を引用しながら、『論語』の言葉を現代の私たちの言葉として活用してみよう。

課題 学習した『論語』の本文の中から気に入った一文または一句を選び、それを引用しながら学問や人生・政治・社会に対する自己の主張をまとめてみよう。

1 『論語』の語句を生かした主張を考えよう。

①『論語』の文章の中から心に響いた一文または一句を選び、それによってどのような主張をするかを考える。

②選んだ『論語』の語句について、出典の文脈を離れて、新たに意味を付け加えることができるかどうか考える。

2 論旨の展開と引用との関係を考えよう。

①A『慎思録』(一七二ページ)とB『笑話出思録』(一七三ページ)を読んで論旨の展開と引用との関係の違いを確認し、自分の執筆する文章では、AとBのどちらのタイプを選択するのか検討する。

3 文章の構成を考えよう。

①引用する『論語』の語句と述べたい主張をそれぞれ別のカードや付箋に書き出し、さらに導入・展開・結論の各部分の内容を短文にしてカードや付箋に書き出す。

②短文を書き付けたカードや付箋を並べ替えながら文章化する内容を取捨選択し、文章の構成を考える。

③各自が出来上がった構成案を報告する。

④他者の発表を参考に、自分の作成した構成案を再考する。

4 『論語』の語句を生かして、主張を文章にまとめよう。

①構成案に従って、自己の主張を文章にまとめる。

②引用した『論語』の語句と主張がかみ合っているかを確認し、主張の展開により効果的な引用となるよう推敲(すいこう)する。

参考 **明治期の文語文と口語文**

明治の新時代に入り、さまざまな個性的な表現が出現したが、それらは伝統的な文語文から、新しい口語文体への大きな変遷であった。**樋口一葉**は日本の古典への造詣から、庶民の喜怒哀楽を、会話を地の文に組み込みながら雅俗折衷体で描き出す。和歌の伝統にも通ずるこなれた文体は、過渡期の時代を見事に浮かび上がらせた。**北村透谷**は、西洋文学やキリスト教の影響を受けつつも、その表現には漢文学の教養がうかがえ、当時の若者の言語世界のあり方が示されている。自己の内部の奥深さを見つめつつも、積極的に社会に向かって表現を拡大しようとする動きは、**清水豊子**の感情を力強く表現する演説体の文章にもつながっている。手紙も「候」文が普通であったころから、時代は「話すように書く」という動きが高まり、「言文一致」が唱えられた。以前からの人々の生きた言葉の動きは、伝統的な話芸の世界にも残され、それを記録する速記術の開発により、**三遊亭円朝**が幕末から高座にかけていた人情噺の「牡丹灯籠」も、書物の形で広く親しまれるようになった。最初は古めかしい表現も散見される**二葉亭四迷**の『浮雲』も、「第三篇」まで書き進めるうちにロシア文学や円朝の影響のもと、心理を見据え、その機微を緻密に描く文体を持つように成長し、二葉亭による清新な翻訳作品とともに、多くの読者に影響を与えた。

大つごもり　初出『文学界』明治二十七（一八九四）年

行ちがへに三之助、此処と聞きたる白銀台町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかと竈の前に泣き伏したるお峯が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま這入つても叱られはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父さんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづ〳〵待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に余

念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、……若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拝みまする神さま仏さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど比金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して帰したる始終を、見し人なしと思へるは愚かや。

▼樋口一葉　明治五（一八七二）年～明治二十九（一八九六）年。小説家。本文は『樋口一葉全集』第一巻（昭和四十九（一九七四）年刊）によった。

お峯は、大恩ある伯父から借金を頼まれるが、奉公の身で自由にならない。引用は、家から子供が使いに来て切羽詰まり、奉公先の家の引き出しから金を盗んでしまう場面。人物の発話と地の文を続ける雅俗折衷体で、最後の一文などに語り手の存在感がある。

我牢獄

初出『女学雑誌』明治二十五（一八九二）年

現に於ける我が悲恋は雪風凜々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりも激しかるべし。然り、我は已でに冬の寒さに慣れたり、慣れしと云ふにはあらねど我はこれに怖るゝ心を失ひたり、夏の熱さにも我は我が腸を沸かす如きことは無くなれり、唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が恋なり、恋ゆゑに悩ゆるにあらず牢獄の為に悶ゆるなり、我は籠中にあるを苦しむよりも我が半魂の行衛の為に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は恋愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむるもの則ち恋愛なり、而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち嘲たしむるのみ。

春や来しと覚ゆるなるに我牢室を距ること数歩の地に黄鳥の来鳴くことありて我耳を奪ひ我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に帰り恋人の家に到る思ひあらしむ、その声を我恋人の声と思ふて聴く時に恋人の姿は我前にあり、一笑して我を悩殺する昔日の色香は見えず、愁涙の蒼頬に流れて紅ひ闌干たるを見るのみ。

▼北村透谷　明治元（一八六八）年～明治二十七（一八九四）年。詩人・評論家。本文は『明治の文学』第16巻（平成十四（二〇〇二）年刊）によった。

自由民権運動に挫折してキリスト教に入信、ロマン主義的傾

向が強い。引用では、勇壮な漢文訓読調の文体によって、世俗的価値にとらわれる自らの分裂をハムレットの悲劇になぞらえ、幸田露伴（雷音洞主）による「恋愛」の克服とは対照的な考え方によって、自由な内的世界を希求している。

敢て同胞兄弟に望む　初出『興和之友』明治二十二（一八八九）年（草稿）

廿三年国会開設の暁ニハ国会議員たらん事を予期するの紳士もあるを憶ふに、これらの人々ハ必竟人権の重んずべきを知れバこそ自由を主張するならん。立憲政体を企図せしならん。しかして人とハ男女を概括するの名称なるハ万々知悉するところならん。しからバ則ち男権女権に論なく共にその権利を拡張するハ当然ならずや、今一歩を仮して論ぜばよしや女権の拡張を計るまでニハ至らずとも、これを浸害するの行為ハ勉めて避けざるべからざるにあらずや。しかるに今得意然揚々乎として弱者の肉を食ひ我が姉妹の繊弱に乗してその抑圧を逞ふせんとするこれあに諸君のいわゆる男子らしき行ひならんや。今仮りに諸君が採るところの主義の表を作らば／（すべて人の権利は同一なりしかれども婦女の権は男子より小なり）／といふが如し。これあに論理に適したるものならんや。人の権は同一なりといハハ、男女を一様と観念せざるべからざるにあらずや。我が兄弟は我が姉妹よりも高等の教育を受け、あつぱれなる議論家もあり奥妙の理を極めたる大見識家もありながら、かくのごとく誤りたる論理を是認さるるハ、便宜のためか、私情の故か、もし婦女は器械なり玩弄物なり故に汝等の権利は例外なりといふにあらば、妾また何をかいはん。

▼清水豊子　慶応四（一八六八）年～昭和八（一九三三）年。自由民権運動の女性活動家。号は紫琴。本文は『紫琴全集』全一巻（昭和五十八（一九八三）年刊）によった。

当時はそれぞれの主張を演説によって聴衆に広めており、引用も演説口調の文体。自由民権運動が人権を求めるなら、同じく「人」である女性を除外すべきでなく、抑圧は改めるべきだと、特に男性に向かって男女同権を訴えている。

怪談牡丹灯籠　初出 明治十七（一八八四）年刊

新三郎は止せばいゝに念仏を唱へながら蚊帳を出て　窃と戸の節穴から覗いて見ると　毎時の通り牡丹花の灯籠を下げて来が先へ立ち　後には髪を文金の高髷に結ひ上げ　秋草色染の振袖に燃へる様な緋縮緬の長襦袢　其綺麗な事云ふばかりもなく　綺麗ほど猶怖く　これが幽霊かと思へば萩原は此世からなる焼熱地獄に墜ちたる苦みです　萩原の家は四方八方に御札が貼てあるので二陰鬼が臆して後へ下がり米「嬢様とても入れません　萩原様は御心変りが遊ばしま

して　昨晩の御言葉と違ひ貴嬢を入ないやうに戸締りが付きましたから　迚も入る事は出来ませんからお諦め遊ばしませ　心の変つた男は迚も入れる気遣ひはありません　心の腐た男はお諦めあそばせ

と慰むれば

嬢「あれ程迄に御約束をしたのに　今夜に限り戸諦りをするとは　男の心と秋の空　かわりはてたる萩原様の御心が情ない　米や　どうぞ萩原様に逢せてをくれ　逢せてくれなければ私しは帰らないよ

▼三遊亭円朝　天保十（一八三九）年～明治三十三（一九〇〇）年。落語家。本文は『円朝全集』第一巻（平成二十四（二〇一二）年刊）によった。

「怪談牡丹灯籠」は人情噺。引用は、円朝が演じたものを速記術で書き取った口演速記（明治十七（一八八四）年刊）による。萩原新三郎は、恋人お露と女中お米が幽霊であると知り、二人の来訪を拒む。人物の心情が臨場感のある語りで表現されている。

新編**浮雲**　初出『都の花』明治二十二（一八八九）年

慕はれるのが何となく快いので有らうが、それにもまた自分ハ心附いてゐまい。之を要するに、お勢の病ハ外から来たばかりでハなく、内からも発したので、文三に感染れて少し畏縮た血気が今外界の刺激を受けて一時に暴れだし、理性の口をも閉ぢ、認識の眼を眩ませて、おそろしい力を以て、さま〴〵の醜態に奮見するので有らう。若し然うなれば、今がお勢の一生中で尤も大切な時、能く今の境界を渡り課せれば、此一時にさま〴〵の経験を得て、己の人と為りをも知り、所謂放心を求め得て始て心で此世を渡るやうにならうが、若し躓けばもうそれまで、倒た儘で、再び起上る事も出来まい。物のうちの人となるも此一時、人の中の物となるも亦此一時、今が浮沈の潮界、尤も大切な時で有るに、お勢ハ此危い境を放心して渡ツてゐて何時眼が覚めようとも見えん。

此儘にしてハ置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眼つた本心を覚まさなければならん、が、しかし誰がお勢のために此事に当らう？

▼二葉亭四迷　元治元（一八六四）年～明治四十二（一九〇九）年。小説家・翻訳家。本文は『二葉亭四迷全集』第一巻（昭和五十九（一九八四）年刊）によった。

人情本や落語、ロシア文学を通して言文一致体を模索、写実小説の祖となる。官吏の文三は下宿先のお勢に想いを寄せるが失職、お勢は処世術にたけた同僚の昇へ心変わりする。「第三篇」の引用部分では、文三の思考・心情へと寄り添い同化していく語りを試みている。

＊（　）で読みを補った。

1 近代 1

◇近代日本文学への入門的な短編を通して、内容や展開を的確に捉えることを学ぶ。
◇異なる作風の小説を比較して、それぞれの作品の特色をつかむ。
◇舞台設定・構成・描写に注目する。

羅生門

芥川龍之介

◆読み比べ◆羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語（『今昔物語集』巻二十九第十八）

城の崎にて

志賀直哉

◇単元の言語活動 1

フィクションの特性を話し合う
——小説の世界を観察し、思い切って参加する——



大正中期の銀座
右手に市電、左手に玩具店が見える。

羅生門

芥川龍之介

初出『帝国文学』大正四（一九一五）年十一月

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、[1]羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々[2]丹塗りの剝げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、[3]朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする[4]市女笠や[5]揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかというと、この二、三年、京都には、地震とか[6]辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで[7]洛中のさびれ方は一とおりではない。[8]旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味

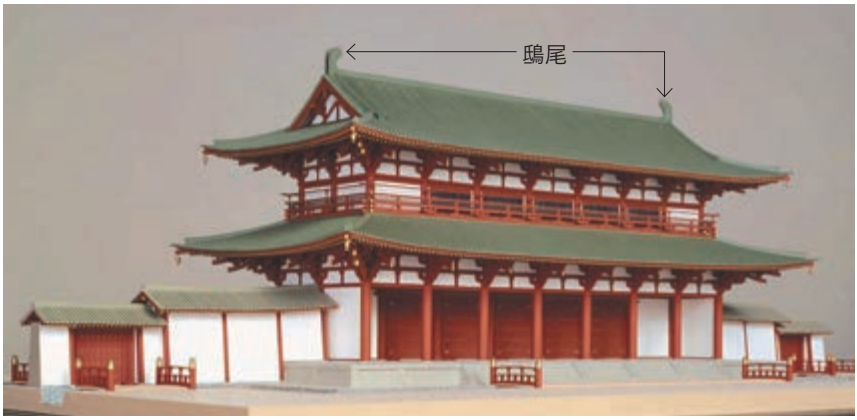
1 羅生門　平安京の正門に当たり、朱雀大路の南端にあった門。羅城門のこと。

2 丹塗り　丹（赤土または赤色の絵の具）を用いた赤い塗装。

3 朱雀大路　平安京を南北に貫通する中央通り。

4 市女笠　漆塗りの中高の菅笠。市場で物を売る女（市女）が用いたので、こう呼んだ。ここでは、それをかぶった女を指す。

5 揉烏帽子　柔らかに揉んでしわのある烏帽子。ここでは、それをかぶった男を指す。



羅城門の復元模型（実物の大きさは東西約 32 m）

を悪がって、この門の近所へは*足踏みをしないことになってしまったのである。

その代わりまた鴉（からす）がどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾（しび）[9]の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなるときには、それがごまをまいたように、はっきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。——もっとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、鴉の糞（くそ）が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、*洗いざらした紺の襖（あお）[10]の尻を据えて、右の頬にできた、大きなにきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。



左、市女笠の女
右、揉烏帽子の男
（「粉河寺縁起（こかわでらえんぎ）」より）

6 辻風 つむじ風。旋風。

7 洛中 都の中。京の市中。

8 旧記 古い記録。ここでは、鴨長明（かものちょうめい）『方丈記』第五段における養和年間（一一八一～一一八二）の大飢饉を叙した一節を指す。四三ページ注1参照。

9 鴟尾 宮殿や仏殿などの棟の両端に取り付けられた飾り。

10 襖 あわせ（表裏を合わせて作った衣服）。

＊ 一とおり 足踏み
洗いざらし

●作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇[11]を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一とおりならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」というよりも、「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、*途方に暮れていた。」というほうが、適当である。そのうえ、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalisme[12]（サンチマンタリスム）に影響した。申[13]（さる）の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めてくる。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍[14]（いらか）の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、●手段を選んでいる*暇（いとま）はない。選んで

問「作者は…書いた。」の一文には、どのような効果があるか。

11 **暇を出された** 勤めを解雇された。

12 **Sentimentalisme**（フランス語）。ここでは、感傷的な気分の意。

13 **申の刻下がり** 午後四時過ぎ。「申の刻」は午後三時から五時のこと。

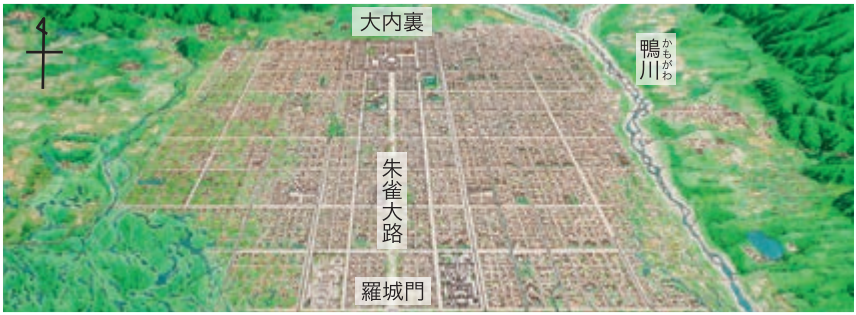
14 **甍** 瓦ぶきの屋根。

問「手段を選んでいる暇はない」とは、「下人」のどのような状況を述べているか。

いれば、築土[15]の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着[*]した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」の片[*]をつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶[16]が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱に止まっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫[17]に重ねた、紺の襖



平安京（南北 5.2km，東西 4.5km）

15 **築土**　土塀。



問 **「この局所」とは、どのようなことを指しているか。**

16 **火桶**　木をくりぬいて作った火鉢。



17 **山吹の汗衫**　山吹色（黄色）をした、ひとえ（裏をつけずに仕立てた服）。汗取りの着物。

＊ 途方に暮れる　暇はないあげく　手段を選ばない　片をつける



月岡芳年画「羅城門渡辺綱鬼腕斬之図」

の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えのない、人目にかかるおそれのない、一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしごが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰に提げた聖柄(ひじりづか)[18]の太刀が鞘走(さやばし)り[19]らないように気をつけながら、わら草履(ぞうり)を履いた足を、そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみ

18 **聖柄の太刀**　柄(つか)の部分が木地(きじ)のままで飾りをつけていない太刀。

19 **鞘走らないように**　刀身が抜けてしまわないように。

問 **「一人の男」とは、誰か。また、このような表現をしたのは、なぜか。**

を持ったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた。それが、はしごを二、三段上ってみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々にくもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、やもり[20]のように足音を盗んで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上り詰めた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、幾つかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つとも分からない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男も交じっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におし[21]のごとく黙っていた。

問 「それ」は、どのようなことを指しているか。

20 **やもり** 爬虫類（はちゅうるい）ヤモリ科の小動物。壁などに吸いつく。体長約一二センチメートル。



21 **おし** 口をきくことができない人。差別的な表現として、現在では使われない。

＊ **息を殺す** 高をくくる

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。[22]檜皮色（ひわだいろ）の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「[23]頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子の[24]しらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。

――いや、この老婆に対するといっては、語弊（*）があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがこの下人に、

問「ある強い感情」とは、具体的にはどのようなことか。

22 **檜皮色**　檜（ひのき）の樹皮のような赤黒い色。



23 **頭身の毛も太る**　異常な恐ろしさの形容。『今昔物語集』巻二十七にある表現。

24 **しらみ**　シラミ科の昆虫の総称。人や動物の肌に寄生して血を吸う。

問「激しい憎悪」とは、どのようなものか。

さっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、あらためて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出していたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くか分からなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけですでに許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。*

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたのは言うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩(いしゆみ)[25]にでも弾(はじ)かれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人を突きのけていこうとする。下人はまた、それを行か

問 「それだけで」とは、どのようなことを指しているか。

25 弩　ばねを利用して矢や石を射る武器。



* 語弊がある　とうに

すまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、初めから、分かっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわな*震わせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように[26]執拗く黙っている。これを見ると、下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声を和らげてこう言った。

「俺は検非違使[27]の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ今時分、この門の上で、何をしていたのだか、それを俺に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見

26 執拗く　執念深く。

問「この意識は、…冷ましてしまった。」とあるが、なぜか。

27 検非違使　平安時代に都の治安維持の任に当たった役人。

問わざわざ「役人」であることを否定して、「旅の者」と名乗ったのは、なぜか。

守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように動かした。細い喉で、とがった喉仏の動いているのが見える。そのとき、その喉から、鴉の鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしょうと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな侮蔑といっしょに、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、蟇のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことであろ。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいというて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくしたことであろ。されば、今また、

問「平凡なのに失望した」のは、なぜか。



28 蟇 ひきがえる。体長一〇～一五センチメートル。
29 なんぼう どんなにか。
30 四寸 「寸」は長さの単位。一寸は約三センチメートル。
31 太刀帯の陣 「太刀帯」は、平安時代の東宮坊（皇太子に奉仕する役所）の役人で、皇太子を護衛した。「陣」は、その役人の詰め所。
32 往んだわ 行ったわ。
33 疫病 流行病。
34 菜料 おかずの材料。
35 じゃて だから。

＊
わなわな 冷ややか
口ごもる 現に

わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大体こんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。そのときのこの男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

問「大体こんな意味」とあるのは、なぜか。

問「この男には欠けていた勇気」とは、どのような勇気か。

問「この老婆を捕らえたときの勇気」とは、どのような勇気か。

「では、俺が引剝(ひは)ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剝ぎ取った檜皮色の着物を脇に抱えて、瞬く間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光を頼りに、はしごの口まで、はっていった。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞき込んだ。外には、ただ、黒洞々(こくとうとう)たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

問「では」は、どのような内容を受けているか。

36 引剝ぎ　追い剝ぎ。

37 黒洞々たる夜　黒々と奥深い闇の夜。

＊大目に見る　嘲る　念を押す



芥川龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）明治二十五（一八九二）年～昭和二（一九二七）年。小説家。東京都の生まれ。『羅生門』に続き発表した『鼻』が夏目漱石(そうせき)に激賞された。現実を理知と叙情で再構成する短編を多く発表した。作品に『戯作(げさく)三昧』『地獄変』『舞踏会』『トロッコ』『河童(かっぱ)』『歯車』などがある。本文は『芥川龍之介全集』第一巻（平成七（一九九五）年刊）によった。

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

◇学習のポイント

1 この小説の構成を四つの場面に分け、それぞれの場面での「下人」の心理の移り変わりを整理してみよう。

2 老婆の話から、老婆の、自己の行為についての弁明の要点を二点にまとめてみよう。

3 髪を抜かれている女と老婆の行為には、どのような共通点と相違点があるか、考えてみよう。

4 「下人」の「勇気」とはどのようなものか、本文に沿って整理してみよう。

5 小説内に登場する「作者」について、

(1) 「作者」とはどのような人物か、考えてみよう。

(2) こうした「作者」が登場することで、小説全体にどのような効果が生まれるのか、「旧記の記者」（一八八・9）と比較しながら考えてみよう。

◇言葉と表現

1 次の「分」の意味・用法を辞書で調べてみよう。

(1) 何分かの後（一八六・7）

(2) 六分の恐怖と四分の好奇心（一八八・8）

(3) 一分ごとに強さを増してきた（一八八・16）

2 「ほかならない」（一八四・5）「暇はない」（一八四・16）「語弊がある」（一八八・15）を用いて短文を作ってみよう。

3 本文中から動物を用いた比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。

4 本文中から「ばかり」を用いた箇所を全て抜き出し、その効果について考えてみよう。

◇言語活動

1 末尾の一文から想像される下人のその後の姿を、文章にまとめてみよう。

2 本文と『今昔物語集』巻二十九第十八「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語」（一九五ページ）を比較しながら、「下人」の行動について、肯定・否定の立場に分かれて議論してみよう。

◇漢字熟語

道端182　刻限183　格別184　衰微184　余波184　気色184
低回185　積極的185　肯定185　大儀185　夕闇185　無造作187
永久187　腐乱188　臭気188　嗅覚188　好奇心188　暫時188
憎悪188　未練189　合理的189　全然190　成就190　得意190
満足190　存外191　失望191　侮蔑191　先方191　冷然192

◆読み比べ◆ 羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語（『今昔物語集』）

今は昔、摂津の国のほとりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげくありきければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかつり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。盗人、「あやし。」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の、死にて臥したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる嫗の白髪白きが、その死人の枕上にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己は、己は。」と言ひて走り寄りければ、嫗、手惑ひをして、手を摺りて惑へば、盗人、「こは何ぞの嫗の、かくはしゐたるぞ。」と問ひければ、嫗、「己があるじにておはしましつる人の失せ給へるを、あつかふ人のなければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と嫗の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。さてその上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の、葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。（巻二十九第十八）

（本文は『新編日本古典文学全集』によった。）

今昔物語集　説話集。作者未詳。十二世紀前半の成立。

1 **摂津の国**　現在の大阪府北西部と兵庫県南東部。「せっつ」。
2 **朱雀**　朱雀大路。
3 **山城**　現在の京都府南部。ここでは、都の外、羅城門の南側を指す。
4 **やはらかかつり登りたりけるに**　そっとよじ登ったところ。
5 **連子**　縦または横に細木や竹を打ちつけた窓。
6 **心も得ねば**　納得がいかないので。
7 **鬼**　当時、羅城門には鬼が住むと考えられていた。
8 **死人**　ここでは、死者の霊、の意か。
9 **手惑ひ**　うろたえること。
10 **丈に余りて長ければ**　背丈以上に長いので。
11 **葬りなどえせぬ**　葬儀などできない死者。

城の崎にて

志賀直哉

初出『白樺』大正六（一九一七）年五月

1山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出かけた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんなことはあるまいと医者に言われた。二、三年で出なければ後は心配はいらない、とにかく要心は肝心だからと言われて、それで来た。三週間以上——我慢できたら五週間くらいいたいものだと考えて来た。

頭はまだ何だかはっきりしない。物忘れが激しくなった。しかし気分は近年になく静まって、落ち着いたいい気持ちがしていた。稲の穫り入れの始まる頃で、気候もよかったのだ。

一人きりで誰も話し相手はない。読むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往来だのを見ているか、それでなければ散歩で暮らしていた。散歩する所は町



当時の山の手線車両

1 **山の手線**　山手線。東京都区内を循環する鉄道線。

2 **後養生**　けがや病気などの後、完全に回復するよう静養に努めること。

3 **但馬**　但馬の国。現在の兵庫県北部。

4 **城崎温泉**　兵庫県豊岡市城崎町にある温泉。

5 **脊椎カリエス**　脊椎が結核菌に侵されて変形し、痛む病。かつては不治の病として恐れられた。

から小さい流れについて少しずつ上りになった道にいい所があった。山の裾を回っている辺りの小さなふち*になった所にやまめ[6]がたくさん集まっている。そしてなおよく見ると、足に毛の生えた大きな川がにが石のようにじっとしているのを見つけることがある。夕方の食事前にはよくこの道を歩いてきた。冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡を小さい清い流れについていくとき考えることはやはり沈んだことが多かった。寂しい考えだった。しかしそれには静かないい気持ちがある。自分はよくけがのことを考えた。一つ間違えば、今頃は青山[7]の土の下にあおむけになって寝ているところだったなど思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのままで。祖父や母の死骸が脇にある。それももうお互いに何の交渉もなく、——こんなことが思い浮かぶ。それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。いつかは



城崎温泉全景

6 やまめ　サケ科の淡水魚。体長約二〇センチメートル。



7 青山　東京都港区にある地名。ここでは、作者の家の墓所がある青山墓地のこと。

問「それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった」のは、なぜか。

＊ふち

そうなる。それがいつか？——今まではそんなことを思って、その「いつか」を知らず知らず遠い先のことにしていた。しかし今は、それが本当にいつか知れないような気がしてきた。自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、——中学で習った[8]ロード・クライブという本に、クライブがそう思うことによって激励されることが書いてあった。実は自分もそういうふうに危うかった出来事を感じたかった。そんな気もした。しかし妙に自分の心は静まってしまった。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。

自分の部屋は二階で、隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が[9]羽目になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい。[10]虎斑の大きな太った蜂が天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目の[11]あわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根に下りた。そこで羽や触角を前足や後足で丁寧に調えると、少し歩き回るやつもあるが、すぐ細長い羽を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んでいく。植え込みのや[12]つでの花がちょうど咲きかけで蜂はそれに群がっていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出はいりを眺めていた。

ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足を腹の下に

8 **ロード・クライブ**　Lord Clive　イギリスの歴史家・政治家マコーレーが書いたクライブ卿（一七二五年～一七七四年）の伝記。一八四〇年刊。クライブ卿はイギリスの軍人・政治家。

問 **「感じたかった」と過去形で表現されているところに、どのような思いが表れているか。**

9 **羽目**　家の外装として、板を縦または横に並べて平らに張ったもの。

10 **虎斑**　虎の毛皮のような、黄褐色と黒のまだら模様。

11 **あわい**　物と物との間。

12 **やつで**　常緑低木で、大きなつやのある葉が、掌状に七つまたは八つに裂けている特徴がある。

ぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へ垂れ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巣の出はいりに忙しくその脇をはい回るが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きているものという感じを与えた。その脇に一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずにうつむきに転がっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを与えるのだ。それは三日ほどそのままになっていた。それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。他の蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは寂しかった。しかし、それはいかにも静かだった。

問 「いかにも」という語の多用には、どのような効果があるか。

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。蜂の死骸はもうそこになかった。今も巣の蜂どもは元気に働いているが、死んだ蜂は雨どいを伝って地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじっとしていることだろう。外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは死骸はそこにじっとしているだろう。それともありにひかれていくか。それにしろ、それはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全く動くことがなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。自分は13『范（はん）の犯罪』という短編小説をその少し前に書いた。范という中国人が過去の出来事だっ

13『范の犯罪』 大正二（一九一三）年十月、発表。

＊調える

た結婚前の妻と自分の友達だった男との関係に対する嫉妬から、そして自身の生理的圧迫もそれを助長し、その妻を殺すことを書いた。それは范の気持ちを主にして書いたが、しかし今は范の妻の気持ちを主にし、しまいに殺されて墓の下にいる、その静かさを自分は書きたいと思った。



城崎温泉街と大谿川（おおたに）

「殺されたる范の妻」を書こうと思った。それはとうとう書かなかったが、自分にはそんな要求が起こっていた。その前からかかっている長編[14]の主人公の考えとは、それは大変違ってしまった気持ちだったので弱った。

蜂の死骸が流され、自分の眼界から消えて間もないときだった。ある午前、自分は円山川（まるやま）[15]、それからそれの流れ出る日本海などの見える東山公園[16]へ行くつもりで宿を出た。「一の湯」[17]の前から小川は往来の真ん中を緩やかに流れ、円山川へ入る。ある所まで来ると橋だの岸だのに人が立って何か川の中のものを見ながら騒いで

14 **長編**　『暗夜行路』のもとになった未完の作品のこと。

15 **円山川**　兵庫県中部に源を発し、豊岡盆地を貫流して日本海に注ぐ川。

16 **東山公園**　温泉町の東の端にある、城崎の風景を一望できる公園。

17 **一の湯**　城崎温泉にある共同浴場の一つ。

いた。それは大きなねずみを川へ投げ込んだのを見ているのだ。ねずみは一生懸命に泳いで逃げようとする。ねずみには首の所に七寸[18]ばかりの魚串が刺し通してあった。頭の上に三寸ほど、喉の下に三寸ほどそれが出ている。ねずみは石垣へはい上がろうとする。子供が二、三人、四十くらいの車夫[19]が一人、それへ石を投げる。なかなか当たらない。カチッカチッと石垣に当たって跳ね返った。見物人は大声で笑った。ねずみは石垣の間にようやく前足をかけた。しかし入ろうとすると魚串がすぐにつかえた。そしてまた水へ落ちる。ねずみはどうかして助かろうとしている。顔の表情は人間に分からなかったが動作の表情に、それが一生懸命であることがよく分かった。ねずみはどこかへ逃げ込むことができれば助かると思っているように、長い串を刺されたまま、また川の真ん中のほうへ泳ぎ出た。子供や車夫はますますおもしろがって石を投げた。脇の洗い場の前で餌(え)をあさっていた二、三羽のあひるが石が飛んでくるのでびっくりし、首を伸ばしてきょろきょろとした。スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。あひるは頓狂な顔をして首を伸ばしたまま、鳴きながら、せわしく足を動かして上流のほうへ泳いでいった。自分はねずみの最期を見る気がしなかった。ねずみが殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子が妙に頭についた。自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った。自分が願っている静かさの前に、ああいう苦しみのあることは恐ろしい

18 七寸　一九一ページ注30参照。

19 車夫　人力車を引くことを職業とする人。

問「動作の表情」とは、どのようなことか。

問「寂しい嫌な気持ちになった」のは、なぜか。前の部分の「寂しい」気持ち（一九七・5、15）と対比して考えてみよう。

ことだ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいう動騒[20]は恐ろしいと思った。自殺を知らない動物はいよいよ死にきるまではあの努力を続けなければならない。今自分にあのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。自分はやはりねずみと同じような努力をしはしまいか。自分は自分のけがの場合、それに近い自分になったことを思わないではいられなかった。自分はできるだけのことをしようとした。自分は自身で病院を決めた。それへ行く方法を指定した。もし医者が留守で、行ってすぐに手術の用意ができないと困ると思って電話を先にかけてもらうことなどを頼んだ。半分意識を失った状態で、いちばん大切なことだけによく頭の働いたことは自分でも後から不思議に思ったくらいである。しかもこの傷が致命的なものかどうかは自分の問題だった。しかし、致命的のものかどうかを問題としながら、ほとんど死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であった。「フェータル[21]なものか、どうか？　医者は何と言っていた？」こうそばにいた友に聞いた。「フェータルな傷じゃないそうだ。」こう言われた。こう言われると自分はしかし急に元気づいた。興奮から自分は非常に快活になった。フェータルなものだともし聞いたら自分はどうだったろう。その自分はちょっと想像できない。自分は弱ったろう。しかしふだん考えているほど、死の恐怖に自分は襲われなかったろうという気がする。そしてそう言われてもなお、自分は助かろうと思い、何かしら努力をしたろう

20 動騒　暴れ騒ぎ回ること。

21 フェータル　fatal（英語）。致命的な。生命にかかわる。

という気がする。それはねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない。で、またそれが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分で願うところが、そう実際にすぐは影響はしないものに相違ない、しかも両方が本当で、影響した場合は、それでよく、しない場合でも、それでいいのだと思った。それはしかたのないことだ。

そんなことがあって、またしばらくして、ある夕方、町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていった。山陰線[22]のトンネルの前で線路を越すと道幅が狭くなって道も急になる、流れも同様に急になって、人家も全く見えなくなった。もう帰ろうと思いながら、あの見える所までというふうに角を一つ一つ先へ先へと歩いていった。物が全て青白く、空気の肌触りも冷え冷えとして、物静かさがかえって何となく自分をそわそわとさせた。大きな桑の木が道端にある。向こうの、道へ差し出した桑の枝で、ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。風もなく流れの他は全て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。自分は不思議に思った。多少怖い気もした。しかし好奇心もあった。自分は下へ行ってそれをしばらく見上げていた。すると風が吹いてきた。そうしたらその動く葉は動かなくなった。原因は知れた。何かでこういう場合を自分はもっと知っていたと思った。

問「両方」とは、何と何を指しているか。

22 山陰線　山陰本線。山陰地方を縦貫する鉄道。

＊相違ない　肌触り　物静か

だんだんと薄暗くなってきた。いつまで行っても、先の角はあった。もうここらで引き返そうと思った。自分は何気なく*脇の流れを見た。向こう側の斜めに水から出ている半畳敷きほどの石に黒い小さいものがいた。いもり[23]だ。まだぬれていて、それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れている。自分はそれを何気なく、しゃがんで見ていた。自分は先(せん)ほどいもりは嫌いでなくなった。とかげは多少好きだ。やもり[24]は虫の中でも最も嫌いだ。いもりは好きでも嫌いでもない。十年ほど前によく蘆(あし)の湖(こ)[25]でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まっているのを見て、自分がいもりだったらたまらないという気をよく起こした。いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、そんなことを考えた。その頃いもりを見るとそれが思い浮かぶので、いもりを見ることを嫌った。しかしもうそんなことを考えなくなっていた。自分はいもりを驚かして水へ入れようと思った。不器用に体を振りながら歩く形が思われた。自分はしゃがんだまま、脇の小まり[26]ほどの石を取り上げ、それを投げてやった。自分は別にいもりを狙わなかった。狙ってもとても当たらないほど、狙って投げることの下手な自分はそれが当たることなどは全く考えなかった。石はコツといってから流れに落ちた。石の音と同時にいもりは四寸ほど横へ跳んだように見えた。いもりは尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思って見ていた。最初石が当たっ

5　10　15

23 いもり　両生類イモリ科の小動物。体長約二〇センチメートル。淡水にすみ、形はとかげに似ている。



24 やもり　一八七ページ注20参照。

25 蘆の湖　神奈川県の箱根山にある火口原湖。芦(あし)ノ湖(こ)。

26 小まり　小さい球。

たとは思わなかった。いもりの反らした尾が自然に静かに下りてきた。すると肘を張ったようにして傾斜に堪えて、前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むと、いもりは力なく前へのめってしまった。尾は全く石についた。もう動かない。いもりは死んでしまった。自分はとんだことをしたと思った。虫を殺すことをよくする自分であるが、その気が全くないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。もとより自分のしたことではあったがいかにも偶然だった。いもりにとっては全く不意な死であった。自分はしばらくそこにしゃがんでいた。いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がなってその心持ちを感じた。かわいそうに思うと同時に、生き物の寂しさをいっしょに感じた。自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。自分は寂しい気持ちになって、ようやく足元の見える道を温泉宿のほうに帰ってきた。遠く町外れの灯が見え出した。死んだ蜂はどうなったか。その後の雨でもう土の下に入ってしまったろう。あのねずみはどうしたろう。海へ流されて、今頃はその水膨れのした体をごみといっしょに海岸へでも打ち上げられていることだろう。そして死ななかった自分は今こうして歩いている。そう思った。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は

問「生き物の寂しさ」とは、どのようなことか。

＊何気なく　肘を張る

遠い灯を感ずるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手に働く。それがいっそうそういう気分に自分を誘っていった。

●三週間いて、自分はここを去った。それから、●もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。

問「三週間いて」とは、どのような心情を表しているか。

問「もう三年以上になる」という時間の経過の記述は、どのような効果を付け加えているか。



志賀直哉（しが なおや）明治十六（一八八三）年～昭和四十六（一九七一）年。小説家。宮城県の生まれ。明治四十三（一九一〇）年、武者小路実篤らと『白樺』を創刊。対象や人間の気分などを観察し続け、簡潔な言葉で表す、写実的な作品が多い。作品に『網走まで』『和解』『小僧の神様』『暗夜行路』などがある。本文は『小僧の神様 他十篇』（平成十四（二〇〇二）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 死んだ蜂について「地面へ流し出されたことであろう」（一九九・11）「どこかでじっとしていることだろう」（一九九・12）「死骸はそこにじっとしているだろう」（一九九・13）と推量で語られていることと、ねずみの死の場合の描写を対比し、両者への筆者の向き合い方の特徴を考えてみよう。

2 動物の死をめぐる三つの出来事に対し、筆者はそれぞれ死がどのようなものだと感じているか、本文に即してまとめてみよう。

3 「眺めていた」（一九八・15）「見つけた」（一九八・16）「見えなくなった」（二〇三・8）など、視覚に関する表現を抜き出してみよう。また、聴覚や触覚など、ほかの感覚に関する表現はどの程度あるかを確認し、筆者が世界を捉える方法の特徴を考えてみよう。

4 「いつか」（一九七・16）「何かしら」（一九八・7）「こういう場合」（二〇三・15）など、内容が詳しく説明されない表現を抜き出してみよう。また、「想像できない」（二〇二・14）の直後に「…だったに相違ない」（二〇三・1）と述べるなど、行為や判断の方向が揺れる表現も抜き出し、なぜ、このような表現になるのか、考えてみよう。

言葉と表現

1 本文中から擬音語や擬態語を抜き出し、その効果について考えてみよう。

2 「今自分にあのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。…それへ行く方法を指定した。」（二〇二・3〜6）という部分を読んで、筆者が自身を指すのに使う「自分」の特徴を考えてみよう。

言語活動

1 自分の見たものや感じたことを効果的に表現するために、どのような構成上の工夫をしているか話し合ってみよう。

漢字熟語

致命傷 196　要心 196　肝心 196　往来 196　死骸 197　恐怖 197
激励 198　触角 198　丁寧 198　退屈 198　冷淡 199　拘泥 199
外界 199　嫉妬 200　生理的 200　圧迫 200　助長 200　頓狂 201
最期 201　運命 201　静寂 202　留守 202　不思議 202　興奮 202
快活 202　傾斜 205　偶然 205　不意 205　視覚 205

◆フィクションの特性を話し合う
――小説の世界を観察し、思い切って参加する――

この単元では、短編小説が流行し定着する大正期に発表された、特色に富む二編を読んだ。『羅生門』では、「下人」の揺れ動く善悪の価値基準について、『城の崎にて』では、「自分」の生と死をめぐる認識の深化について考えた。

課題 小説などのフィクションを通して、私たちは、効果的に常識的な道徳観や認識を問い直していくことが多い。効果的になるのはなぜなのか。構成や描写について、具体例を挙げながら話し合ってみよう。

1 フィクションの舞台設定や人物設定に注目しよう。

①『羅生門』と『城の崎にて』の舞台設定について、それぞれどのような点が工夫されているのか、小説の内容を振り返りながら考える。

②『羅生門』と『城の崎にて』の主人公（「下人」「自分」）について、小説の始まり近くで示される設定をまとめ、読者にどのような展開を期待させるのか、考える。

2『羅生門』と『城の崎にて』について、印象に残った場面や気になる語り口を抜き出し、それぞれの表現の特徴を比較することで、小説の内容と表現のつながりを考えてみよう。

3『羅生門』の末尾は「下人の行方は、誰も知らない。」であり、『城の崎にて』の末尾は「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」である。こうした締め括り方は読者に何を投げかけるのだろうか。それぞれの小説がどのような先入観を問い直したのかとかかわらせて、考えてみよう。

4 小説などのフィクションの効果を考えるための方法として、模擬裁判を行ってみよう。語り手に導かれた読み方を受け取るだけでなく、自分の視点で捉えてみれば、積極的に小説の世界を問い直せるのではないだろうか。そうした読みの実践として、検察官・弁護士・裁判官（陪審員）に分かれ、小説を調書に見立てて、登場人物の言動などを吟味し、原告・被告それぞれに寄り添いながら議論に参加してみよう。

①『羅生門』　原告＝「老婆」　被告＝「下人」

②『城の崎にて』　原告＝「いもり」　被告＝「自分」

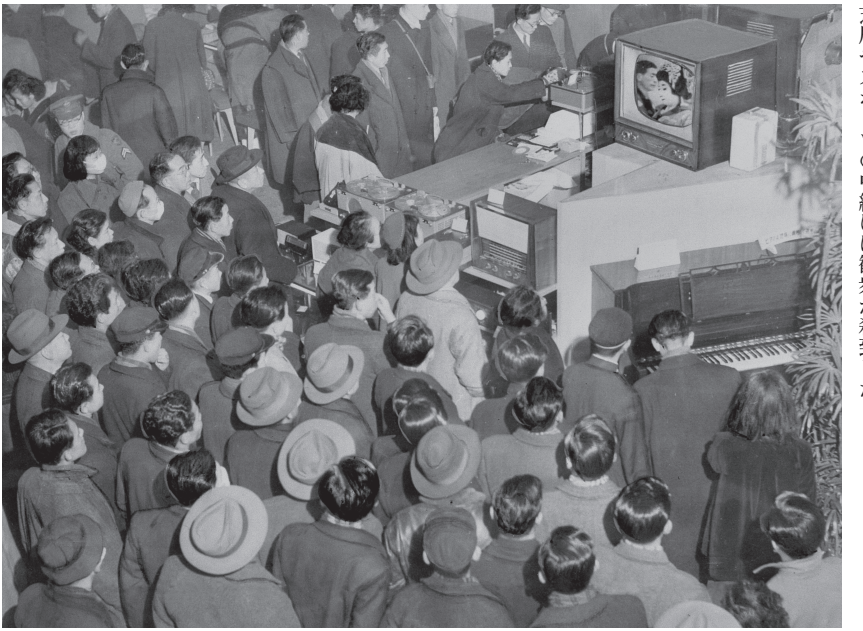
2 近代 2

- 小説や随想の表現の仕方・特色をつかみ、自分のものの見方・考え方、感じ方を深める。
- 作品の成立した時代や背景について調べ、作品をさまざまな角度から考える。
- 人称・時制に注目する。

待つ 太宰　治
うそとパン 幸田　文
写真班 梅崎春生

単元の言語活動 2

作家の工夫を意識して文章を書く
――文学が伝えているのは、ストーリーだけではない――



街頭テレビに群がる人々
芝居やスポーツの中継には観衆が殺到した。

待つ

太宰治（だざいおさむ）

初出『女性』昭和十七（一九四二）年六月

[1]省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎えにまいります。誰とも、分からぬ人を迎えに。

市場で買い物をして、その帰りには、必ず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰を下ろし、買い物籠を膝に乗せ、ぼんやり改札口を見ているのです。上り下りの電車がホームに到着するごとに、たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやって来て、一様に怒っているような顔をして、[2]パスを出したり、切符を手渡したり、それから、そそくさと脇目も振らず歩いて、私の座っているベンチの前を通り駅前の広場に出て、そうして思い思いの方向に散って行く。私は、ぼんやり座っています。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。胸が、どきどきする。考えただけでも、背中に冷や水をかけられたように、ぞっとして、息が詰まる。けれども私は、やっぱり誰かを待っているのです。いったい私は、毎日ここに座って、誰を待っているのでしょう。どんな人を？　いいえ、私の待っているものは、人間でないかもしれない。私は、人間を嫌

1 省線　鉄道省の管轄にあった鉄道網。

2 パス　pass（英語）。ここでは、定期券。

いです。いいえ、怖いのです。人と顔を合わせて、お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を、*いい加減に言っていると、なんだか、自分ほどのうそつきが世界中にいないような苦しい気持ちになって、死にたくなります。そうしてまた、相手の人も、むやみに私を警戒して、*当たらず障らずのお世辞やら、もったいぶったうその感想などを述べて、私はそれを聞いて、*相手の人のけちな用心深さが悲しく、いよいよ世の中が嫌で嫌でたまらなくなります。世の中の人というものは、お互い、こわばった挨拶をして、用心して、そうしてお互いに疲れて、一生を送るものなのでしょうか。私は、人に逢(あ)うのが、嫌なのです。だから私は、よほどのことでもない限り、私のほうからお友達の所へ遊びに行くことなどは致しませんでした。家にいて、母と二人きりで黙って縫い物をしていると、いちばん楽な気持ちでした。けれども、いよいよ大[3]戦争が始まって、周囲がひどく緊張してまいりましてからは、私だけが家で毎日ぼんやりしているのが大変悪いことのような気がしてきて、何だか不安で、ちっとも落ち着かなくな



『女性』表紙（装丁：阿部合成（あべごうせい））

問 「苦しい気持ち」になるのは、なぜか。

3 大戦争　ここでは、アジア太平洋戦争のこと。

＊
一様に　そそくさと　脇目も振らず　冷や水をかける　息が詰まる　いい加減　当たらず障らず　もったいぶる

りました。身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ちなのです。私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまったのです。

家に黙って座っていられない思いで、けれども、外に出てみたところで、私には行くところが、どこにもありません。買い物をして、その帰りには、駅に立ち寄って、ぼんやり駅の冷たいベンチに腰かけているのです。どなたか、ひょいと現れたら！　という期待と、ああ、現れたら困る、どうしようという恐怖と、でも現れたときにはしかたがない、その人に私の命を差し上げよう、私の運がそのとき決まってしまうのだというような、諦めに似た覚悟と、その他さまざまのけしからぬ空想などが、異様に絡み合って、胸がいっぱいになり窒息するほど苦しくなります。生きているのか、死んでいるのか、分からぬような、白昼の夢を見ているような、何だか頼りない気持ちになって、眼前の、人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまうのです。ああ、私はいったい、何を待っているのでしょう。ひょっとしたら、私は大変淫らな女なのかもしれない。大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設けて、自身の軽はずみな空想を実現しようと、何かしら、よい機会をねらっているのかもしれない。ここに、こうして座って、ぼんやりした顔をしているけれども、胸の中では、不埒な計画がちろちろ

問「自信を失ってしまった」のは、なぜか。

問「不埒な計画」と言っているのは、なぜか。

燃えているような気もする。

いったい、私は、誰を待っているのだろう。はっきりした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争が始まってからは、毎日、毎日、お買い物の帰りには駅に立ち寄り、この冷たいベンチに腰をかけて、待っている。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、怖い。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいったい、私は誰を待っているのだろう。旦那さま。違う。恋人。違います。お友達。嫌だ。お金。まさか。亡霊。おお、嫌だ。

もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの。何だか、分からない。たとえば、春のようなもの。いや、違う。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やっぱり、違う。ああ、けれども私は待っているのです。*胸を躍らせて待っているのだ。眼(め)の前を、ぞろぞろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠を抱えて、細かく震えながら一心に一心に待っているのだ。私を忘れないでくださいませ。毎日、毎日、駅へお迎えに行っては、むなしく家へ帰ってくる二十の娘を笑わずに、どうか覚えておいてくださいませ。その小さい駅の名は、わざとお教え申しません。お教えせずとも、あなたは、いつか私を見かける。

（十七年一月）

問 「私」が「あなた」にわざと教えないのは、なぜか。

＊ 身を粉にする　けしからぬ　軽はずみ　不埒　胸を躍らせる



太宰　治（だざい　おさむ）　明治四十二（一九〇九）年～昭和二十三（一九四八）年。小説家。青森県の生まれ。自虐に満ちた饒舌体で若者の苦悩に寄り添い、戦時下には女性独白体や古典のパロディなど多様な表現を試みた。戦後、『斜陽』がブームとなった。作品に『道化の華』『富嶽百景』『走れメロス』『お伽草紙』『人間失格』などがある。本文は『太宰治全集6』（平成十（一九九八）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 「大戦争」が始まる前と後で、「私」の心情にはどのような変化が生まれているのか、考えてみよう。

2 小説内で「私」が提示している「待つ」対象を順番に抜き出し、その変化について考えてみよう。

3 第四段落の「あなた」と第五段落の「あなた」が指す内容の違いについて考えてみよう。

言葉と表現

1 「私」が直前の発言を否定する表現や、反復される「…ない」という表現を抜き出し、その多様な否定的表現がもたらす効果について考えてみよう。

2 改行が少なく、長い文章と短い文章が交互に繰り返されているが、その効果について考えてみよう。

言語活動

1 時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、考えてみよう。

2 「私」が何を待っているかが明確でないのはなぜか、「私」の気持ちと、作者の立場の両面から考えてみよう。

漢字熟語

到着 210　戸口 210　切符 210　挨拶 211　世辞 211　覚悟 212　空想 212
異様 212　窒息 212　白昼 212　眼前 212　口実 212　実現 212　機会 212
旦那 213　亡霊 213

導入の問い　食べ物にまつわる苦い思い出はありますか。

うそとパン

幸田文（こうだあや）

初出『高校コース』昭和三十（一九五五）年七月

誰しもお弁当の味を知らないものはない。そしてそれがなかなか複雑な味のものであることも、みんなが知っていると思う。*待ちかねて開けるお弁当なら、愉（たの）しくておいしいに決まっているけれど、食べなくても承知している味もある。おなかは減っていて食べたいのだけれど弁当は持っていない、持っていないとは体裁が悪くて人に言えないから、*痩せ我慢に「腹痛で絶食だ」などとごまかす。そんな場合などの味は、食べないでも十分に分からせられる恨めしい味である。

私（わたし）の若いときは、今ほど激しい世相でもなかったらしいが、それでもやはり、学費・生活費に差し支える家もたくさんあって、*気の毒な学生もいた。私は両親がいて、割合に恵まれた学生生活をしていたので、弁当なしになることはなかったのだが、いわば自分の甲（か）斐性（いしょう）なし●意気地なし、あるいは、わがままと言うべきものから、弁当なしを経験した。つまり朝早く起きられないのである。弁当を詰めるだけの、時間の余裕をみて起きることができなかった結果なのである。学校と私の家との距離は遠くて、一時間半はかかる。八時

問 「甲斐性なし」「意気地なし」とは、ここではどういうことか。

＊
待ちかねる　痩せ我慢
差し支える　気の毒

始まりだったので、学校に間に合うには、六時半に家を出ねばならず、したがってその前に食事をこしらえて、弟にも食べさせ弁当を詰めてやり、自分も身繕い[1]などをすれば、どんなに手早くしても五時半には起きることになる。その五時半がつらいのだった。父親[2]の経済状態は女中[3]なしの程度であり、母親が病気持ちの弱い体で、女手は私一人ときては、いきおい登校前の家事雑用がかかってくる。*とにもかくにも、弟には是非お弁当を持たせようと思う気持ちがあるので、これは無理にもこしらえるが、自分はおひる抜きの空腹のほ



女学校の風景

1 **身繕い**　身なりを整えること。

2 **父親**　幸田露伴。慶応三（一八六七）年～昭和二十二（一九四七）年。作者解説参照。

3 **女中**　よその家に雇われて、家事の手伝いなどをする女性のこと。

うが遅刻よりまだしもである。ひっそりと全校の生徒が着席している朝礼の講堂へ、ことりことりと靴の音を忍んではいるほど情ないことはない。父母は私の体力と労働力を信じているから、弁当なしのことなどてんで気がついていないが、私は実はその信用を裏切って、眠さに負けていたし、しばしば弁当抜きを繰り返していた。

そんなことは友達には知られたくなし、十二時になると校庭へ抜けていく私に、「どうしたの？」と案じてくれる人へは、いい加減にうそを取り繕う。友達を偽ることはできても、簡単に偽れないのはおなかの虫[4]だった。この虫はぐうと鳴き、きゅうと訴えて、私の不届きを暴露しようとする正直な虫なのである。うそをつけば自然と意地っ張りになるものらしい。私は腹の虫に抵抗して、ますますふがいない弁当なしを取り繕う意地を張った。伸子さんという人がいた。常に一緒にいるというほどの特別なかよしではなかったが、気持ちのいい人だった。「どうしたの？」と訊いてくれた。私は例のとおり、うそ返事をする。

「そんなら食べないほうがいいわね。」と素直である。私は簡単にだまされた伸子さんを、ちょっと滑稽に思った。

すると、その後しばらくして、「今日も食べないの？」と言う。私は例のとおり。

「私のお弁当、決しておなかにさわらないお弁当なの。一緒に半分ずつ食べない？」

問 「いい加減にうそを取り繕う」のは、どのような気持ちからか。

4 おなかの虫　空腹時におなかが鳴ることを、腹の中に虫がいて、それが鳴くものとして言う。

＊
いきおい　とにもかくにも　まだしも　てんで　取り繕う　偽る　不届き　意地っ張り　ふがいない　さわらない

「だって食べたくないもの。」

「それがね、ちょっと食べればもっと食べたくなるお弁当なのよ。」

何度押し問答しても、伸子さんはいささかも退くけはいがない。ただ、「おなかにさわらない」「割合おいしい」というだけで、そのほかを言わず、愉しそうに誘うのである。なかよし同士のしつこい会話の形で言っているけれど、動かしがたい気持ちを含ませて繰り返し誘っていることは、もはや確実である。私はその誘いに乗りたい。けれども、それに乗れば、これまでのうそや取り繕いは一挙にばれることになる。だから強情を張った。でも、伸子さんは私よりも少し強かった。微笑と強情とでは、強情が負けるのである。

そのお弁当は、焼いたパンヘバタ[5]と白い砂糖を塗ったものだったが、一目でそれが丁寧にこしらえてあることが分かった。端々までバタと砂糖は丹念に行き渡っていた。「ほら、おいしいでしょう?」という、私が彼女から予期した言葉は、予期外れで、伸子さんは一言も言わず、私が食べ終えたとき、

「うちのお母さんがきっと喜ぶわ。」と言った。

私はぎょっとした。「だって、どうしてあなたのお母さんが?」

「こんなに、ちょいちょいおなかが悪いのは、何かわけがあるはずだと思うと言って、あなたのこと心配しているのよ。」

問「微笑と強情とでは、強情が負ける」のは、なぜか。

問「私はぎょっとした。」とあるが、なぜか。

5 バタ　butter(英語)。バター。

パンはこのところずっと、伸子さんの一人前より余計に用意されていたものらしい。私はこの親子の*怜悧な、そして温かい気持ちに打たれて、弁当なしのうそを*粉々に崩さずにはいられなかった。

その日からもう三十何年になる。伸子さんも私もお互いに忙しいので、訪い尋ねは、時たましかできないが、ずっと変わらない友情が続いている。あのときのパンは、三十年の間中、私を励まし続けている。私のような者のところへも、時には、空腹のうそをつく人が来ないでもない。私はじいっとそういう人を見つめていて、それから*折をうかがって、バタと砂糖の、あのパンを薦める。そのたびに、あのときの伸子さんの微笑を思い浮かべるのだし、伸子さんのお母さんが、一言も、私が弁当を持ってこない理由の詮索だてを、伸子さんにさせなかった、その行き届いた注意深さを尊く思い出すのである。私の娘は、バタと砂糖を塗ったパンのことを、「母さんのパン」と言うし、「伸子さんのパン」とも言っている。

問 「怜悧な」「温かい気持ち」とは、どのようなものか。

問 「母さんのパン」「伸子さんのパン」という表現には、どのような思いが込められているか。

＊押し問答　いささか　怜悧　粉々　折をうかがう



幸田　文（こうだ　あや）　明治三十七（一九〇四）年～平成二（一九九〇）年。随筆家・小説家。東京都の生まれ。父は小説家・考証家の幸田露伴。幼くして母、姉を亡くし、露伴に家事全般を厳しく教育される。露伴の死を書いた随筆『雑記』『終焉』で作家として文壇に立つ。清新な作風で多くの随筆・小説を書いた。代表作に『流れる』『崩れ』などがある。本文は、『幸田文全集5』（平成七（一九九五）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 第一段落から「味」という言葉を抜き出し、それぞれの「味」について説明してみよう。

2 「私」は家庭内でどのような役割を果たしているか、また、そこから読み取れる「私」の性格を考えてみよう。

3 「私」が素直に友達に甘えられないのはどうしてか、2も踏まえて考えてみよう。

4 「行き届いた注意深さ」（二一九・10）とはどのようなものか、説明してみよう。

言葉と表現

1 「おなかの虫」（二一七・7）のように、「虫」を使った慣用表現を調べ、短文を作ってみよう。また、それらに共通する虫のイメージはどのようなものか、考えてみよう。

2 「私のような者」（二一九・6）を具体的に表す表現を、本文中から抜き出してみよう。

言語活動

1 時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、考えてみよう。

2 回想形式で書かれていることは、作品にどのような奥行きを与えているか、考えてみよう。

漢字熟語

体裁215　絶食215　世相215　余裕215　抵抗217　素直217　滑稽217
強情218　砂糖218　端々218　丹念218　予期218　余計219　詮索219

導入の問い　あなたの持ち物があなたのものであると、どのように証明できますか。

写真班

梅崎春生（うめざきはるお）

初出『新潮』昭和三十一（一九五六）年二月

玄関のブザー[1]が重苦しく鳴り響いた。二度短く、三度目は長く。茶の間でモリソバを平らげていた彼は、心臓をどきんとさせ、慌てて箸を置いてよたよたと立ち上がった。彼は自宅のこのブザーの音をほとんど聞いたことがない。ふだんの日は勤めに出ているし、日曜日には来訪者はめったになかったのだから。しかしどうもこのブザーの音は心臓に響く。玄関のブザーと書いたが、玄関にあるのは押しボタンであって、ブザーの音源は台所に取り付けてある。茶の間は台所の隣にあるのだ。このブザーはずっと前の日曜日、見知らぬ電気屋がやって来て、半ば強制的に取り付けていったものだ。取り付け終わって電気屋は言った。電池代だけはおマケにしときます。おマケだって？　電池代だけがおマケだって？　ブザーの響きの充満した台所を、彼は腹を立てながら擦過し、玄関に飛び出した。腹立ちの対象はもちろんブザーそれ自身とそれを取り付けた電気屋。それにそれを許容した自分自身もだ。玄関の扉を押し開けると、そこに見知らぬ男が二人立っていた。一人は四十前後の赤ら顔[*]の男で、どういうつもりか、一握りの赤茶けたような鬚（ひげ）を、顎の下に生

1 ブザー　buzzer（英語）。ここでは、家の中にいる人に、来客を音だけで知らせる装置。

問「ブザーの音をほとんど聞いたことがない。」から、「彼」にとってブザーがどのようなものだと分かるか。

* 赤ら顔

やしていた。も一人はそれより少し若い、頭をイガクリ[2]坊主に刈った男で、肩から重そうに大きな写真機をぶら下げている。彼が玄関の扉を内側から押すとたんにブザーの音は鳴り止んだ。ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。

「こんにちは。」

今までボタンを押していた指で、顎鬚は自分の鳥打ち帽[3]のひさしを上方に弾いた。

「写真を撮らせてもらいに来ましたよ。」

「写真？」彼はいぶかしく、またいらだたしげに反問した。「僕の写真をですか。僕はそんなものを頼まないですよ。」

「あなたの写真じゃありませんよ。」

顎鬚はにやりと笑い、玄関の土間[4]にずいと入ってきた。イガクリも体を斜めにして、片足だけを踏み入れた。二人まるまる収容するには土間は狭すぎるのだ。そしてイガクリがぼんやりした声で言った。

「小さな玄関だなあ。」

「近頃の建築はどこでも玄関が小さいのだよ。」顎鬚がたしなめるように言って、再び顔を彼に向けた。「あなたの写真じゃなくて、家の写真ですよ。」

「家を写して何になる？」えたいの知れぬ狼狽を感じて彼は天井を見上げたり壁を見回

2 **イガクリ坊主**　短く丸刈りにした髪型。栗のイガのようであるところから呼ばれる。

3 **鳥打ち帽**　ひさしをつけた平たい軽便な帽子。ハンチング。



4 **土間**　家の中で、床を張らず、土足で入れる部分。居室とは区別される。二二六ページ写真参照。

問 **「えたいの知れぬ狼狽を感じ」たのは、なぜか。**

したりした。「それに僕は……。」

「いや、お心使いは無用です。」顎鬚はポケットから名刺をさっと取り出し、彼が手を出さないのに、それをしゃにむに彼の掌に握らせ、イガクリを目顔で促した。「さあ。」

二人の男は一斉に腰をかがめて、ごそごそと靴のひもを解き始めた。押し付けられた名刺に急いで彼は視線を走らせた。「金融公庫住宅資料調査社写真班・多々良太郎」多々良というのが顎鬚男なのだろう。その顎鬚が靴を脱いでのそのそと上がって来た。押しとどめる間もなかった。続いてイガクリが上がって来た。脱ぎ捨てられた靴で狭い土間は靴だらけになった。彼は余儀なく台所まで後退りした。

廊下も狭いので、後退しないわけにいかない。後退する彼を追い詰めるように顎鬚も歩を進め、台所にまで達すると立ち止まり、イガクリを顧みた。

「おもしろいところに台所があるな。」

「そうだねえ。」イガクリは写真機を肩から下ろしながら、吟味するようにきょろきょろとした。

「ふん。こちらが茶の間か。」

「ここを撮るか。」顎鬚が両手の親指と人さし指

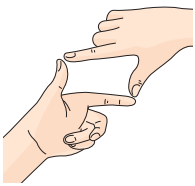


昭和 30 年代の家

5 目顔　目つきや顔の表情。

6 金融公庫　政府が出資して作った金融機関。

7 両手の親指と人さし指を使用して…動かした　枠を通して風景などを眺め、写真の構図を決める動作。



＊
たしなめる　狼狽
しゃにむに　後退り

を使用して四角なワクを作り、それを自分の顔の前であちこち動かした。「台所から茶の間を見通すか。」

「ちょっと待って。」彼は慌てて口を入れた。「写真を撮るって、そりゃあ、あんたちょっと……。」

「大丈夫ですよ。」顎鬚がいやにはっきりした声を出した。「あなたを撮るのではなく、家を撮るのだ。家というものは、撮られても減りはしない。それにわたくしたちは命ぜられて、家を撮影する責任がある。それでお給金をもらっているんですからねえ。だから家は撮影される義務がある。」

顎鬚がしゃべっている間に、イガクリは金属製の三脚をどこからか取り出して、ガチャガチャと脚を引き伸ばした。顎鬚は言葉を続けた。

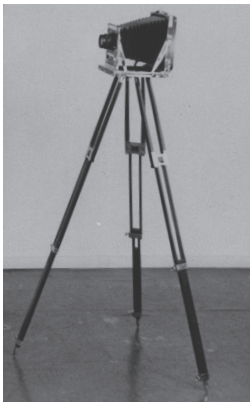
「そこでわたしたちは家を撮って回っている。撮るのは家だけですよ。なに、この家が公庫から融資を受けていることは判っていますよ。我々は公庫の名簿で調べてきたんですからな。おい、用意できたか。」

イガクリはしきりに手足や機械を動かした。

「家にその義務があれば、自然家の持ち主にも義務がある。」

「義務というと、写される義務？」

15



写真機と三脚

「あんた自身には写される義務はないですよ。そりゃ先刻から何度も説明した。」顎鬚はいらいらして掌を打ち合わせた。「なぜかと言うと、あんたはまるまるあんただからだ。ところがこの家はそうでない。」

「すると、あなたがたは、いや、あなたがたの、この調査社というのは――」何か言おうと思うのだが、言うことが見つからないので、彼は手の名刺に目をうろうろとさせた。「これは住宅金融公庫の、[8]外郭団体か何かですか？」

「外郭団体であるか外郭団体でないか、というお尋ねですね。」もうこれ以上質問は許さぬといったきつい口調で、顎鬚が念を押した。「ではお答えします。外郭団体ではありません！」

あまりにもピタリとした答え方だったので、彼は二の句が継げずたじろいだ。その隙にイガクリはもう写真機を三脚の上に据え付け、[9]ファインダーをのぞいたり、横を向いてせき払いをしたりしている。肩や背中から急に力が抜けていくような感じで、彼はそのまま茶の間のほうにまた二三歩後退した。（靴を脱がさなきゃよかったんだ）いまいましい気持ちで彼はそう思った。（この間の電気屋だってそうだった。ごめんください、ごめんくださいと言うもんだから、玄関に出て行ってみたら、もうそいつは靴を片一方脱いでいやがった）それも日曜日のことであった。電気屋はもう少し怒っているらしく、まだ三十にならぬ若い男だったが、目を吊り上げて、唇の端に泡を少し出していた。そいつはいきり

8 **外郭団体**　国や官公庁の外部にありながら、それらから援助を受けて補完的な活動をする団体。

9 **ファインダー**　finder（英語）。ここでは、構図や焦点の調節を見るためのカメラの窓。

問 **「肩や背中から急に力が抜けていくような感じ」は、事態に対する「彼」のどのような感じ方を表しているか。**

＊
口を入れる　念を押す
二の句が継げない　目を吊り上げる　いきり立つ

立った声を出した。

「あんたは何度僕に、ごめんください、を言わせるつもりですか？」

「ごめん、ごめん。」と彼は謝った。「奥の間にいたから、つい聞こえなかったんです。」

「奥の間？」電気屋は軽蔑したような声を出した。「たかが十四五坪[10]程度のコマギレ住宅に、奥の間も控えの間もありますかいな。こりゃ家の構造が悪いんですよ。玄関の声は奥に通らず、ほとんど外に散るようになっている。これでは玄関の役目を全然果たしていない。ベルを付けなさい。ベルかブザー。ベルかブザーを付けるのは、もうあなたの義務ですよ。」

「あなたはどなた？」彼はうんざりして訊(たず)ねた。「どういうご用件です？」

「僕は電気器具屋です。」電気屋は胸のポケットから、ハガキぐらいもある大きな名刺を抜いて差し出した。「この家ではブザーですな。ベルを取り付けるには家が小さすぎる。」

「で、ご用件は？」

「ブザーの取り付けですよ。」電気屋はいらだたしげに言って、残った足の踵(くびす)も靴から引っ張り出した。上(あ)がり框(がまち)[11]に片足かけた。「うちのブザーは性能がいいんで評判なんですよ。故障は起きないし、音色はいいし。」

「ブザー？　誰がブザーを――。」彼はちょっと頭が混乱して、口をもぐも



上がり框と土間（奥にチャブ台が見える）

10 **十四五坪**　坪は、土地や部屋の広さを示す単位。一坪は、一辺が六尺の正方形の面積で、約三・三一平方メートル。二六八ページ注1参照。

11 **上がり框**　玄関から家に上がる段差の部分にある横木。

ぐさせた。「そ、それは、取り付けてもいいが、値段……。」

「値段のことなんか言っている場合じゃないですよ。」電気屋の残った足も上に上がってきた。電気屋は彼より三寸ばかり背が高かった。「ブザーを付けなきゃ、来訪者が皆迷惑するじゃありませんか。ね、そうでしょう。現に僕がさっき何度、ごめんください、と言わせられたと思います?」

「そ、それは判るが、つまり君が、ごめんくださいを連呼したのは、つまり、ブザーを売りつけるために――。」彼の顔は少し赤くなった。何が何だかよく判らなくなってきたからだ。「でも、僕はブザーやベルの音は嫌いなんだ。」

「なぜ?」

「ごめんください、という声を聞けば、来訪者のおおよその性格が見当つくけれど、ブザーやベルはそういうわけにはいかない。ね、そうでしょう。」背の高い電気屋を奥に通すまいと、狭い廊下に立ち塞がるようにして、彼は必死に抗弁した。「友達のブザーも、押し売りのブザーも、保険勧誘人のブザーも、音色は一つだ。性格がない。扉を開けるまでそいつの正体は見当がつかない。そんなのは僕は厭(いや)だね。ごめんください、のほうがよっぽどいい。」

「何を言ってんですか、あなたは。」電気屋は失笑して、右手を伸ばして彼の肩を押すよ

問「現に僕がさっき何度、…思います?」には奇妙な理屈が含まれている。それはどのようなことか。

問「ブザーやベルの音は嫌い」なのは、「彼」がどのようなコミュニケーションを望んでいるからか。

＊うんざりする　踵

うにした。「いくらごめんくださいのほうがいいと言っても、あなたに聞こえなきゃ意味がないじゃないですか。第一あなたは身勝手ですよ。ごめんくださいの連呼で来訪者を疲労させ、疲労させたあげくに正体を見当つけようと言う。トクをするのはあなただけじゃないですか。」

彼は肩を押されて二三歩後退りした。電気屋は手を緩めず、彼について前進した。そしてとうとう彼は台所まで押し戻され、うやむやのうちにブザーを取り付けられてしまったのだ。その自分の引き下がり方が、今のこの写真屋の場合とそっくりだと思ったとき、彼は茶の間に戻りながら身をよじりたくなるようないまいましさを感じた。

（つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは――）彼はしょぼしょぼとチャブ台[12]の前に座り、箸を取り上げながら考えた。（つまりこちらがはっきりしていないためだ。この家がはっきりと自分のものであるという自覚、そいつがこの俺にないためだ）

半年前にこの家を建てたとき、それもやっとの思いで建てたときから、その不安定なものが彼につきまとって離れない。それには理由もあった。家を建てた費用の約三分の一は住宅公庫からの借入金であったし、残余の二分の一は彼が勤めている会社からの借金で、そのまた残余の二分の一は親類や先輩からの借金であった。彼が自分で出したのは、総額の六分の一にすぎなかった。そのことが当初から彼の意識にまつわり、彼の物腰を落ち着

12 **チャブ台**　四本足の食事用テーブル。足が折り畳めるようになっているものが多い。西洋から入って来たテーブルが、日本家屋に合うよう改良されたもの。



かなくさせている。すべての因がそこにあるようであった。この家が彼の所有物であるというより、自分がこの家の付属物であるような、[13]棟木とかガラス窓とか下駄箱、そんなものと等価値のものであるような気がいつも彼にはしている。（この家がはっきりと俺のものでないとすれば、いったいこれは誰のものだろう？）

彼は箸をソバにつけた。ソバは伸びてぐちゃっとくっつき合っていた。その二筋三筋を引き剝がして口に持っていく。ひどくまずい。まずいけれども食べ残すわけにはいかないような気持ちが別にある。彼はまた箸をソバに伸ばした。台所でファインダーをのぞいていたイガクリが、首をかしげてうんざりした声を出した。

「目障りだなあ。どけてくれませんか。」

「僕をどけろと言うんですか。」彼はソバをつまんだままむっとした顔を台所に向けた。やはり少し声が高くなった。

「あんたじゃありませんよ。」顎鬚がなだめるように目尻にしわを寄せて言った。「こいつが言っているのは、そのモリソバのことですよ。」

「そうだ。そうだ。」イガクリがうなずいた。「公庫住宅写真集にモリソバが写っていては具合が悪い。」

彼は肩をそびやかして何か言い返そうとした。が、すぐに肩を元の高さに戻した。ソバ

問「自分がこの家の付属物であるような」気がするのは、なぜか。

13 棟木　屋根の一番高いところに水平に取り付ける木材。



問「僕をどけろと言うんですか。」と勘違いしたのは、どのような気持ちになっていたからか。

＊
身勝手　身をよじる
いまいまし　まごまご
しょぼしょぼ　目障り

のザルを持って立ち上がった。次の間に足を踏み入れた。部屋はもうこれだけしかない。そこをはみ出るともう庭になる。狭い庭には庭樹（にわき）がたくさん繁（しげ）っている。彼は部屋の真ん中に座り、ぼんやりした目で庭を見回す。何か不法なことが行われているが、その正体がはっきりつかめない。これが夢なら、何かの拍子にふっと判ってしまうのだが、夢じゃないからそううまくはいかない。カチッとシャッターの音がした。低い声で二人が台所で何か相談し合っている。彼はさっとそちらを振り向き、また顔を元に戻して、思い切ったようにまずい残りソバを箸でつまみ上げた。伸びて団子状に固まっているので、それは容易につまみ上げることができる。彼はそれを全部無理やりに口の中に押し込んだ。目を白黒させながらそれをかんだ。二人の写真班は何かこそこそ話し合いながら、台所から茶の間に移動し、そのまま彼のいる部屋に侵入してきた。真ん中に座っている彼を無視して、二人は立ったままガラス戸越しに庭のほうをしげしげと眺めている。

「ずいぶんごちゃごちゃと樹が生えているねえ。」

「そうだねえ。まるで植木市みたいだな。」

彼はまるで自分自身が光を発さない光源体みたいな感じになり、そいつをぶち破るために何か叫び出そうとしたが、口いっぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど声にならなかった。

問「光を発さない光源体みたいな感じ」とは、どのようなことか。

＊目を白黒させる



梅崎春生（うめざき はるお）　大正四（一九一五）年～昭和四〇（一九六五）年。小説家。福岡県の生まれ。戦時中の海軍での体験を描いた『桜島』『日の果て』で、第一次戦後派の代表的存在となる。戦争を背景とした人間の不安や虚無感を描いたが、ユーモアある作品も手がけた。ほかに『ボロ家の春秋』『幻化』など。本文は『梅崎春生全集3』（昭和五十九（一九八四）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 作中人物がどう呼ばれているか確認してみよう。それは、人物がどのように捉えられているからか、彼らの言動と合わせて考えてみよう。

2 「小さな玄関だなあ」（二二二・13）「おもしろいところに台所があるな」（二二三・12）「ずいぶんごちゃごちゃと樹が生えているねえ」（二三〇・12）などの写真班の家に対する評価は、なぜ「彼」を不安にさせるのか、考えてみよう。

3 「彼」の家の特徴を整理し、「彼」がどのように家を入手したかをまとめ、自分のものだと言い切れないことに、どのような事情がかかわっているか、考えてみよう。

4 写真班のエピソードと、電気屋のエピソードは、どのような関係になっているか、内容の類似や相違、語られる順番などから整理してみよう。また、両者が描かれることには、どのような効果があるだろうか。

5 「ソバ」が出てくる箇所を抜き出し、どのようなことを表しているか、考えてみよう。

言葉と表現

1 「親指」「足」「肩」など、体の部位で作中人物の動きが表されている部分を探してみよう。それらは、どのような印象を読者に与えるだろうか。

言語活動

1 時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、話し合ってみよう。

2 自分の行為が他人に決められていると思うのは、どのような場面か、話し合ってみよう。

漢字熟語

来訪者 221　充満 221　擦過 221　許容 221　収容 222　給金 224
融資 224　先刻 225　外郭 225　軽蔑 226　音色 226　抗弁 227
失笑 227　連呼 228　残余 228　等価値 229　拍子 230

◆作家の工夫を意識して文章を書く
――文学が伝えているのは、ストーリーだけではない――

この単元では、戦時から日常が立て直される時期までの小説と随想、三編を読んだ。それぞれの文章において、時代や人間関係の範囲によって、他人からの働きかけは不快であったり、うれしいことであったりした。それらは、いずれも作家自身の体験であるか否かにかかわらず、書き方の工夫によって効果的に表現されていた。

課題 他人からの働きかけが、うれしい場合、あるいは違和感がある場合を思い浮かべて、文章を書いてみよう。自分で書いてみることで、作家の書き方の工夫を実感してみよう。

1 『待つ』を振り返り、一人称の語りの特徴を考えてみよう。「私」は、周囲とは異なる考え方を持っている。それを表す際に、一人称だとどういう点が効果的か。

2 『うそとパン』を振り返り、『待つ』の一人称との違いを考えてみよう。
①「 」内の伸子(のぶこ)さんの言葉の意図を「私」が推測している部分、捉え損ねている部分を抜き出してみる。これは、一人称の視点がどのようなものだからだろうか。
②①は、㋐過去の事件当時の「私」の考え方、㋑当時を解説できる大人になった「私」の意識、どちらを優先していることによるか、また、そのことの効果は何か。

3 『写真班』を、漫画にするとしたら、または、コントとして演じるとしたら、どんなものになるだろうか。それを通して、『写真班』のおもしろさはどこにあるか、また、三人称を採用しているのはなぜか、考えてみよう。

4 課題にあるとおり、文章のテーマを構想してみよう。自分の体験でなくても、見聞きしたエピソードや、想像でも構わない。それは、読者にストレートに伝えてよい事柄か、遠回しにするべき事柄か考えたうえで、1〜3のどれかを意識して実際に文章にしてみよう。出来上がったものについて、グループを作り、互いに感想を述べ合ってみよう。

3 現代

- 現代の小説を読み、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方をつかむ。
- 現代の社会・文化について、批評する能力を身につける。
- 比喩・象徴に注目する。

青が消える　村上春樹
離さない　川上弘美

単元の言語活動 3

話し合うと何が起こるか確かめる
――あなたにとって大切なものは何ですか――



渋谷のスクランブル交差点
多くの若者が集まってくる。

青が消える

村上春樹（むらかみはるき）

アイロンをかけているときに、青が消えた。青はだんだんかすんで薄くなっていって、それからすっかり消えてしまった。ちょうど機械のバッテリー[1]があがってしまったときみたいに。あるいはまるでオーケストラの指揮者が演奏の途中で気を変えて、突然指揮棒を振るのをやめてしまったみたいに。メロディーが中断したあとも、いくつかの楽器はまだ名残惜しそうに断片的な音を出していたが、それもやがて力なく消えて、あとには居心地の悪い沈黙だけが残った——という風に。

そのときアイロンをかけていたのはたまたま青とオレンジのストライプ[2]のシャツだったので、青が消えたことに僕はすぐに気づいた。最初は——同じ立場に置かれたら誰だってきっとそう思うはずだ——自分の目がどうかしてしまったのだろうと思った。神経を集中してじっとひとつのところを見ていたせいで、視力が一時的に狂ってしまったのだろうと。僕はアイロンのスイッチを切り、そのシャツを持ってもっと明るい部屋に移動した。そしてソファーに腰をおろしてしばらく目を閉じ、何度か深呼吸をし、それから目を開けて

初出　一九九二年、イギリス・フランス・イタリア・スペイン各国を代表する新聞の別冊に同時発表された。日本語版は『村上春樹全作品 1990〜2000 ①』平成十四（二〇〇二）年。

1 **バッテリーがあがる**　過重な負荷により、バッテリーが機能しなくなる。「バッテリー」（battery 英語）は蓄電池のこと。

2 **ストライプ**　stripe（英語）。縞（しま）。縞模様。

シャツをもう一度よく見てみた。でも同じことだった。そこにはもう青は存在しなかった。僕が手にしているのは、オレンジと白のストライプのシャツだった。かつて青であった部分は、棍棒で殴られて記憶を失ってしまったようなとりとめのない白にとって換わられていた。

僕はそのシャツを長いあいだ身動きひとつせず眺めていたのだが、どれだけ眺めたところで青はもう戻ってはこなかった。僕は寝室のクローゼット[3]の中を見てみることにした。僕はそこにいくつかの青の服を持っていた。青いシャツや、青いネクタイや、青いスーツ。淡い青から深い青まで、僕は青という色が昔から好きだったし、みんなも僕には青がよく似合うと言った。でもそこにはもう青はなかった。それらはみんな白いシャツや白いネクタイや白いスーツに変わっていた。僕は引き出しの中も覗いてみた。そこには青いTシャツがあり、青い靴下があり、青いセーターがあり、青いスカーフがあるはずだった。でもそこでも事情は同じだった。それらはみんな、まるで歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白に染まっていた。

それから僕は書斎に行って、引き出しからハワイに旅行したときの写真アルバムを出してみた。そこには僕とガールフレンドが、水着姿で海岸に寝ころんでいる写真がたくさん入っているはずだった。白いビーチ、青い海、椰子の木。僕らは去年そこに二人で旅行に

問「とりとめのない白」とは、どういうことか。

3 クローゼット　closet（英語）。押し入れ。戸棚。

問「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」という表現には、どのような心情が込められているか。

＊名残惜しい　とりとめのない

行ったのだ。でもそこにはもう青い海の姿はなかった。サングラスをかけてマイタイ[4]のグラスを手ににっこりと笑っている僕らの背後にあるのは、まるでシベリアの氷原のような茫漠（ぼうばく）とした白い広野だった。

青が消えてしまったのだ。

でもそれに対してどう対処すればいいのか、僕には見当もつかなかった。僕はひとりぼっちだった。そしてそれは1999年の大晦日（おおみそか）の夜だった。新しいミレニアム[5]を迎える記念すべき夜だった。世界中の人間はひとり残らずみんなどこかのパーティーにでかけていた。家に残ってひとりでシャツにアイロンをかけている人間なんて僕くらいのものだ。僕は少し前にガールフレンドと喧嘩（けんか）別れをして、それでものすごく落ち込んでいたから、とてもパーティーにでかける気になんてなれなかったのだ。年号が2000年になったからといっていったい何が変わるというのだ、と僕は思った。そんなものただの日付の違いにすぎないじゃないか。カレンダーを一枚めくるというだけのことじゃないか。それで世界が何か変わるっていうわけでもないんだ。くだらない。

そんなわけで僕はひとりで家に閉じこもって、他にやることもないからシャツにアイロンをかけていた。そして青が消えたのだ。

僕は青の消滅について何かの情報が得られないものかと、何人かの友人に電話をかけて

4 マイタイ　maitai（英語）。カクテルの一種。原義はタヒチ語で「最高」の意。

5 ミレニアム　millennium（英語）。千年紀。千年間。

問「くだらない。」という「僕」の気持ちの原因は、どのようなものか。

みたのだが、誰もつかまらなかった。最後に仕方なく、別れたガールフレンドのアパートに電話をかけてみた。電話には知らない男が出た。どうやら僕のガールフレンドの部屋では賑(にぎ)やかなパーティーが繰り広げられているようだった。ロック・ミュージックが大きな音でかかっていた。そしてそれにも負けないくらいの大声で人々が語り合っていた。僕はその男に向かって大きな声で僕のガールフレンドを出してくれといった。

「楽しんでいるところを邪魔して悪いんだけど、ちょっと確かめてほしいことがあるんだ」と僕は彼女に言った。「ひょっとして、君のまわりで青が消えていないかな?」

「青ってなによ?」と彼女は半分*喧嘩腰で言った。

「色の青だよ」と僕は説明した。「海の青、空の青。実はさっきアイロンをかけている途中でシャツの青が突然消えちゃったんだ。シャツだけじゃなくて、家中の青という青がみんな消えちゃったんだ。でもそれが僕の家の中のことだけなのかどうか、わからないんだ。だから君のところはどうなのか知りたかったんだ。青がそこにまだあるかどうか」

「用事はそれだけなの?」

「そう」と僕は言った。

「あなたってどうしてそんなに*辛気臭い人生を送らなくちゃならないの?」と彼女は言った。「よく考えてごらんなさいよ。今日は二十世紀最後の夜なのよ。一生に一度あるかな

問「半分喧嘩腰で言った。」とあるが、なぜか。

* 茫漠　喧嘩腰　辛気臭い

いかのことなのよ。だから世の中の人はみんな目一杯楽しんでいるんじゃない。耳を澄ませてごらんなさい。みんなが楽しんでいる音が聞こえるでしょう？　なのにどうしてあなたはわざわざこんなときに、青がどうした、アイロンがどうしたなんてロクでもない話を私に聞かせなくちゃならないのよ。青がなくなって、それがどうだっていうのよ。なんでそんなことで私のところにわざわざ電話してこなくちゃならないのよ。どうして他人の楽しみにいちいち水をささなくちゃならないのよ」

そして彼女は電話を切った。

僕はコートを着込み、外に出てみた。ぴりっと寒くはあるけれど、雲ひとつない気持ちの良い冬の夜だった。時計は十一時半を指していた。僕は家を出るとまっすぐにブルーラインの地下鉄の駅まで行ってみた。ブルーラインは何もかもがブルーでできている。電車もブルーだし、切符もブルーだし、駅員の制服もブルーだし、駅の壁だってブルーなのだ。そうしておけばこの立体迷路のような東京の地下鉄で乗客が迷うこともないだろうというのが、彼らの言い分だった（もちろん何をしようとみんな結局迷ったのだが）。でも今では、ブルーラインの何もかもが白に変わっていた。白い電車が白い壁の中を走り、白い制服を着た駅員が白い切符を売っていた。それは僕に古い記録映画で見た[6]スターリングラードの冬季攻防戦を思い出させた。

6 スターリングラードの冬季攻防戦　一九四二年のドイツとソ連（現在のロシア）との戦いのこと。スターリングラードは旧ソ連の都市。ヴォルゴグラードの旧称。

「青はいったいどうしたんですか？」、切符売り場の近くで機械の修理をしていた白い駅員に僕は聞いてみた。「青にいったい何が起こったのですか？」

「政治のことは私に聞かないでください。私はただの駅員です」と駅員は早口で言った。

「ということは、これは政治のせいだと言うんですか？　政治のせいで青がなくなったんですか？」と僕は聞いてみた。

「だから政治のことは私に聞かないでくれと言っているじゃありませんか」と彼は言った。そして彼は被っていた白い帽子を手に取って、それを床に投げつけた。「あなたは私にいったい何を求めているんですか。私は何も知りません。そういうことはもっと偉い人に聞いてください。中央コンピューターに聞いてください。私は青のことなんてこれっぽっちも知らないんですよ。私はただ言われたとおりに働いているだけです」

僕はあきらめて、べつの青を探してみることにした。パブロ・ピカソ[7]の画集があれば〈青の時代〉のページを探せるんだがなと思った。でももちろん大晦日の夜には書店は開いていない。あるいはアメリカかフランスの旗を探してもよかった。そうすれば青が世界にまだ残っているかどうかわかるはずだ。しかし東京のいったいどこに行けばアメリカかフランスの旗が見られるのだろう？

時計は十一時四十五分を指していた。時計の針を見ているうちに、僕の不安はだんだん

問 駅員が「早口で言った」のは、なぜか。

7 パブロ・ピカソ　Pablo Picasso 一八八一年～一九七三年。スペインの画家。青を基調にした作品を集中的に描いた時期を「青の時代」という。

＊
目一杯　ロクでもない
水をさす　攻防戦

高まってきた。こんな風に青という色を失ったまま――そして僕以外の誰ひとりそれについてとくに心配もしていない（僕にはそう思えた）まま――新しいミレニアムに入ってしまったら、なんだかすごくよくないことが起こるんじゃないかという気がしたのだ。

僕はクレジット・カードを使って公衆電話から内閣総理府広報室に電話をかけ、総理大臣を呼び出してみた。もちろん総理大臣が本当に電話に出てくるわけではない。国民の疑問や苦情に、総理大臣がひとつひとつ個人的に答えてくれるコンピューター・システムをN社が新しく作り上げて、実用化されたのだ。声も合成だが、本当に総理大臣の声に聞こえる。

「青はまことに美しい色であります、岡田さん」と総理大臣の声は静かに言った。「ご存じでしょうか。私の好きな短歌にこういうものがあります。『白鳥（8しらとり）は哀（かな）しからずや／空の



東京タワー付近の夜景

8 **「白鳥は哀しからずや…」** 若山牧水の短歌。二六九ページ参照。

9 **ウラニウム** uranium（英語）。放射性元素の一つ。核燃料の原料。ウラン。

10 **コミュニズム**

青／海のあをにも染まずただよふ』、なんという美しい短歌でしょう、岡田さん」

「ねえ総理大臣、青がなくなってしまったんですよ」と僕は電話に向けて怒鳴った。

「かたちのあるものは必ずなくなるのです、岡田さん」と総理大臣は言い聞かせるように僕に言った。「それが歴史なのですよ、岡田さん。好き嫌いに関係なく歴史は進むのです。石油だってなくなります。[9]ウラニウムだってなくなります。[10]コミュニズムだってなくなります。[11]オゾン層だって、二十世紀だって、[12]ジョン・レノンだって、神様だってなくなります。[13]スイング・ジャズだって、[14]LPレコードだって、人力車だってなくなります。岡田さん、どうして青がなくなってはいけないのですか、岡田さん。明るい面に目を向けなさい。何かがひとつなくなったら、また新しいものをひとつ作ればいいじゃありませんか。その方が経済的だし、それが経済なのですよ、岡田さん」

僕はわけのわからないままどこまでも通りを歩いた。やがて町中の時計が十二時を打った。みんなが一斉に歓声をあげ、歌を歌ったり、物を投げたり、抱き合ったり、[15]シャンパンを抜いたりした。新しいミレニアムがやってきたのだ。誰も消えた青のことなんか気にしてはいなかった。

でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。**そしてそれは僕が好きな色だったのだ。**

5 10 15

communism（英語）。共産主義。

11 オゾン層 大気中でオゾンを多く含む層。現在、フロンガス等の排出によるオゾン層の破壊が環境問題となっている。

12 ジョン・レノン John Lennon 一九四〇年～一九八〇年。イギリスのロックグループ、ビートルズのメンバーの一人。

13 スイング・ジャズ swing jazz（英語）。躍動的なリズム感を伴うジャズの演奏法。

14 LPレコード CD以前のアナログレコード。

問 **「どこまでも通りを歩いた。」とあるが、「僕」のどのような気持ちを表しているか。**

15 シャンパン champagne（フランス語）。フランスのシャンパーニュ地方で生産される発泡性のワイン。



村上春樹（むらかみ はるき）　昭和二十四（一九四九）年〜。小説家。京都府の生まれ。現代社会における人間の生き方を軽妙な比喩表現を交えて描く。『ノルウェイの森』がベストセラーとなり、『海辺のカフカ』はアジア圏初のフランツ・カフカ賞を受賞した。『ねじまき鳥クロニクル』『1Q84』『騎士団長殺し』などの話題作のほか、ノンフィクションも手掛けている。本文は『村上春樹全作品①』（平成十四（二〇〇二）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 場面展開を区切って、「僕」の行為をまとめてみよう。

2 「僕」の心情が変化していく過程を考えてみよう。

3 「総理大臣」の言う「それが歴史なのですよ」（二四一・4）「それが経済なのですよ」（二四一・10）の意味を話し合ってみよう。

4 「僕」にとって「青」とはどういうものだったのか、「**でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは僕が好きな色だったのだ。**」（二四一・15）とある太字体の箇所を参考にして、考えてみよう。

言葉と表現

1 「青が消えた」（二三四・1）ことを、「ちょうど機械の…という風に」（二三四・2〜6）のように、三通りの比喩で表現してみよう。

2 「水をさす」（二三八・6）のように「水」を用いた慣用的用法を集めてみよう。

3 「攻防戦」（二三八・16）のように、「…戦」となる三字熟語・二字熟語を集めてみよう。

言語活動

1 この小説の設定が1999年の大晦日であることには、どのような意味があるか、考えてみよう。

2 この小説における「青」と「ミレニアム」の関係を、ほかの例に置き換えて、考えてみよう。

漢字熟語

名残 234　断片的 234　居心地 234　歳月 235　書斎 235　背後 236
対処 236　見当 236　消滅 236　邪魔 237　制服 238　迷路 238
結局 238　帽子 239　公衆 240　合成 240　経済的 241
一斉 241　歓声 241

導入の問い 「離さない」というタイトルから、どのようなストーリーを想像しますか。

離さない

川上弘美（かわかみひろみ）

旅先で妙なものを手に入れた、とエノモトさんが言ってきたのが二か月ほど前だった。

画家兼高校教師のエノモトさんは、わたしの部屋の真上の部屋に住んでいる。地区の自治会の役員を同期につとめたのがきっかけで、それ以来話すようになった。おいしいコーヒーいれますよ、と、ときどき電話をかけてくる。階段をとんとんのぼり、エノモトさんの部屋に行っておいしいコーヒーをごちそうになる。世間話をしばらくしてからまた階段をとんとん下り、自分の部屋に戻る。そのくらいの仲である。

エノモトさんの部屋はわたしの部屋とまったく同じつくりなのに、ずいぶん印象が違う。男所帯にしては整理がいっているが、画（え）の道具やらエノモトさんの趣味のカメラやらそれらの分野の雑誌やらが部屋じゅうに置かれている。わたしの部屋よりもぜんたいに輪郭がくっきりしているような感じで、それが面白かった。

エノモトさんのいれてくれるコーヒーは「おいしい」と言うだけのことがあるものだった。手動のミル[1]で豆を挽（ひ）き、布で漉（こ）す。あたためたコーヒーカップにゆっくりと注ぐ。香りも味もたいへんよろしきものなのである。それなので、エノモトさんから「コーヒー」の電話があると、わたしは多少の用があってもうっちゃって[*]階段をとんとんのぼるというわけなのだった。

初出 『マリ・クレール』平成十（一九九八）年五月

1 ミル　mill（英語）。コーヒーの豆を挽く器具。

問 「そのくらいの仲である。」という表現から、どのようなことが分かるか。

＊ うっちゃる

そのエノモトさんからの「おいしいコーヒー」の誘いが、最近はないのである。二か月前、妙なものを手に入れたという電話をエノモトさんがしてきて以来、誘いがない。妙なものとは何なのか、エノモトさんは話さなかった。そのうちいずれね、とエノモトさんは言ったのだったか。桜が咲きはじめていた。わたしの部屋の前にも大きな桜の木が生えていて、風が吹けば花びらがベランダに散りかかってくる。

エノモトさんの部屋からは桜の木のてっぺんが見えるにちがいなかった。桜はまだ咲き満ちておらず、それでも強い風に会えばいくらかの花びらを散らせる。ベランダの花びらを拾ってきて、水を入れた皿に浮かしてみた。ほんのりと薄ももいろに色づいた花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。そんなこんなしているうちに、エノモトさんから電話がかかってきた。よかったら相談に乗ってもらえないか、とエノモトさんは言ったのだ。階段をとんとんのぼり、402号室のベルを押した。

扉を開けたとたんに何かの匂いがした。何の匂いだろうかと思いながら靴を脱ぎ、部屋を見まわした。雑誌、棚に大事におさめられたカメラ、画架、描きかけの画、いつものエノモトさんの部屋である。

「コーヒーいれましょう」とエノモトさんは言い、台所に立った。しばらくすると部屋に慣れて、最初に感じた匂いが何なのかますますわからなくなる。匂いがあったかどうかもわからなくなる。

「さささ、どうぞどうぞ」とエノモトさんはコーヒーカップを両手に持って台所から出てきた。少し痩せたか。

エノモトさん、元気だった？　と聞くと、エノモトさんは眉を寄せながら、

「元気といえば元気、元気でないといえば元気でない」と答え、笑った。

「これじゃ答えになってないね」そう言って、笑った。わたしも一緒に笑い、コーヒーを飲んだ。コーヒーはこのたびもたいそうよろしかった。

おいしいですね、と言うと、エノモトさんは頷き、すぐに、「二か月前ね」と始めた。エノモトさんはもったいぶる*質ではないのだ。少し下を向きかげんに座りながら、エノモトさんはこんなことを喋った。

二か月前、南方に旅をした。海沿いに南下していったのだ。

帰る前の日に、漁村の小さな民宿に泊まった。いつも旅の最後の日には寝つかれないことが多くて、その日も波の音を聞きながら長く起きていた。すっかり目が冴えてしまったので、真夜中起き出して、海岸を歩いた。海岸沿いの道路にある電灯が浜を照らしていた。遠くの波打ち際に漁の網が投げ出してあった。どこか座れるところがないかと歩いているうちに、いつの間にか網のあるところまで来た。ぼんやり網を眺めると、網の中に何かがいるのに気がついた。中のものは動かない。まぐろよりは小さく、鯛よりは大きい。尾ひれが長い。ひれから腹にかけては大きな虹色のうろこに覆われている。腹から上にはうろこがない。白く、なめらかな、皮膚である。長い髪が上半身に巻きつき、髪の隙間から豊かな胸が見える。あちらを向いているので顔の造作はわからない。耳が髪の間からつきだしていた。こまかな虹色のうろこが、耳にもある。息をしているのかどうかと思って顔の見える側にまわってみた。目も口も固く閉じられている。白い柔らかい石に、刃物で切れ込みを入れたような目と口だった。鼻は、その石を少し練って高みをつけ薄くととのえたようか。しばらくじっと見ていると、肩が上下していることがわかった。生きているらしい。生きている、それは人魚であるらしかった。人間の大人の三分の一ほどの大きさの、それは人魚なのだった。

　手に入れたものって、それじゃ、人魚なの？　驚いてわたしは叫んだ。

「そうなんだよ」とエノモトさんは言い、髭をしごいた。あの、人魚って、そんなに小さなものなの。聞くと、

「ほかの人魚はどうだか知らないけどねえ」とエノモトさんは答えた。

　二人でなんとなく顔を見合わせ、それ以上何を聞いていいのかわからなくなってわたしが黙っていると、エノモトさんは浴室の扉を開け、わたしを招き入れた。

　人魚がいた。浴槽の三分の一くらいの高さに張られた水の中を、人魚が泳いでいた。端まで行ってくるりと反対側を向き、違う端まで行くとまた反対側に向く。何回でもそれを繰り返す。ゆっくりと、人魚は、浴槽の中を往復しているのだった。潮の匂いが強かった。さきほど玄関で感じたのは、

＊もったいぶる

この潮の匂いだったのだろう。人魚は長い髪を水の中にゆらめかせながら、こちらを見ることなく、往復を繰り返していた。

「こういうわけなんで」とエノモトさんが言った。

そういうわけか、と答えたが、何が「わけ」なんだか、人魚はわたしたちが入っていってからずっと往復しつづけている。ずっとこういうふうに泳いでるの？　聞くと、エノモトさんは頷き、

「腹が減ってないときはたいがいね」と答えた。

人魚、と言いかけたがやめにして、このひと、とわたしは言いなおした。人魚が人語を解するかどうかわからなかったが、自分が人間以外のものに「人間」と呼び捨てにされたら気分悪かろうと思ったからである。「このひと」という指示が適切であるかどうかは難しいところだが。

このひと、ずっといるの？

「いるよ、ぼくが連れて帰って以来」エノモトさんは言い、浴槽の横に置いてある盥から鯵を一匹取り出して、人魚に手渡した。

人魚は泳ぎを止め、鯵の頭としっぽを両手でおさえた。浴槽の壁に寄りかかり、ちょうどハーモニカを吹くような様子で、鯵の頭からしっぽまでを口でなぞる。一回なぞるごとに鯵はきれいに削ぎとられてゆく。なんとも優雅な食べかただった。一片も食べ残すことなく、水を汚すこともなく、人魚は鯵を食べつくした。もう一匹渡すと、同じようにして食べる。五匹も食べただろうか。いつまでも人魚が鯵を食べるところを見ていたかったが、エノモトさんはそれ以上は渡さなかった。最後の一匹を食べてしまうと、人魚はふたたび浴槽を往復しはじめた。エノモトさんが浴室を出ていったので、わたしもしぶしぶ浴室を後にした。人魚のそばを離れたくなかった。

「出てきたくなかったでしょ」二杯めのコーヒーをいれてくれてから、エノモトさんが言った。

え？　と聞き返すと、

「浴室から」エノモトさんは言った。

そういえばそうだったかも。答えるうちに、人魚のそばを離れたくなかった気分をはっきりと思い出した。

「どうやらそういうものらしい」いにしえの昔から、人魚はそういうものと決まっているし、などとエノモトさんは言い、人魚がいかに人を惹きつけて離さないかをしばらく説明

した。

二か月前の夜、エノモトさんは人魚を網からはずし、民宿の部屋に連れ帰ったのだ。あんがい人魚は軽かった。水で濡らした布でくるんだ人魚をビニール袋に入れ、エノモトさんはそのまま人魚を家まで連れてきてしまったのだという。交番に届けるなりなんなりすればいいようなものを、なぜ連れて帰ってしまったのか、そのときにはエノモトさんにはわからなかった。連れ帰るのが不自然であるということにも気がついていなかった。ただ、どうしても連れて帰りたく、いくら軽いといっても大きな荷物になる人魚を袋に詰めて連れてきてしまったのだ。

交番に届けるものなの？　と聞くと、エノモトさんは顔をしかめ、

「ぼくは真面目に話してるんだから、真面目に聞いてよ」

と言った。

真面目に聞いてますよ、真面目に拾得物の処理方法について考えてるんだわよ。わたしも言ったが、エノモトさんはわたしの言葉にはとりあわず、話を続けた。

最初は、人魚の泳ぐ様子や魚を食べる様子が面白くて離れがたいのだと思っていた。ところがそのうちに、勤めに出るのがおっくうになってきた。朝魚をやると、もういけない。そのままずっと浴室に座りこんでいたくなる。ようやくの思いで勤めに出るが、働いている間じゅう、人魚のことが気にかかってしょうがない。一刻も早く終業時間がきてほしいと切望してしまう。生徒にものを教えていても昼飯を食べていても職員会議に出ていても、気はそぞろ*である。飛ぶように家に帰って浴室に行く。人魚はただ泳いでいるばかりなのだが、泳いでいる姿から目が離せない。画を描こうと思って画布に向かっても、すぐに浴室に足が向いてしまう。一日に何十回も浴室を覗く。そのうちに浴室に入りびたりになった。眠るときと食事のとき以外は浴室にいる。人魚のそばにいれば落ちつくのだ。人魚のそばで本を読んだり仕事をしたりする。

しばらくはその状態で満足していたが、ある朝どうしても人魚から離れることができなくて、欠勤してしまった。そのときから今まで五回も欠勤している。このままではいけない

問「人魚、と言いかけたが…言いなおした」ことから、「人魚」をどのような存在として捉えていることが分かるか。

＊そぞろ

と思い、きみに相談することにした。
でも今はエノモトさん気もそぞろじゃないじゃない。わたしが言うと、エノモトさんは、
「必死にそういうふりしてるんだよ」と答えた。
「ほんとは今も人魚のそばに行きたくてしょうがない」
エノモトさんがそう言ったとたんに、わたしも浴室に行きたくてしかたなくなった。いてもたってもいられなくなった。どうしてそれほど人魚のそばに行きたいのかさっぱりわからないのだが、いてもたってもいられない。
しばらく二人でコーヒーを飲む様子をしていたが、二人ともコーヒーなどぜんぜん味わっていなかった。先に立ち上がったのがエノモトさんで、直後にわたしも足を踏み出した。二人で、争うように、浴室へ向かった。人魚はすいすい泳いでいた。*涼しげな様子で、浴槽の中を往復していた。
お願いだから預かってほしい、このままでは自分はだめになってしまう。そう繰り返すエノモトさんの願いを何回でも断ったが、最後は断りきれなかった。いちばんいいのは人魚を海に帰すことだということをエノモトさんもわたしも知っていたが、二人とも知らないふりをしていた。これだけしか人魚に触れていないわたしがこのありさまなのだから、エノモトさんはどんなかと思うと、少しばかりぞっとした。最後は預かることになってしまった。
浴槽に水を満たして待っていると、エノモトさんが人魚を袋に入れて運んできた。袋から、人魚をするりと水に放つ。人魚はすぐに浴槽を泳ぎはじめた。エノモトさんのところにいるのと、ちっとも変わりがない。
さ、出ましょ。お茶でもいれるわよ。わたしがそう言っても、エノモトさんは浴槽の横から動こうとしない。エノモトさんの手を引っぱったが、それでも動こうとしない。
わたしが預かったんだから。そうわたしが言うと、エノモトさんはゆっくりと顔をあげた。
エノモトさんがわたしを睨(にら)んだ。目に、光がない。光のない目で、何を考えているんだか、エノモトさんはじっとわたしを睨んだ。いつまでも黙って睨んでいる。
どうしたの、エノモトさん。問いかけても、エノモトさんは黙っている。
ね、ここから出ましょ。夕飯でも一緒にどう。
それでもエノモトさんは黙っている。黙って、わたしを睨んでいる。怖くなって、先に浴室を出た。扉越しに耳を澄ま

せたが、人魚が浴槽の中を泳ぎまわる水音がするばかりだ。一時間待っても、エノモトさんは出てこなかった。部屋の中はしんとしていて、人魚のたてる水音ばかりが浴室の壁越しに響く。音をぜんぜんたてないのに、エノモトさんの気配が部屋じゅうに濃く漂っている。二時間たっても三時間たっても、エノモトさんは出てこなかった。あきらめて眠ろうとしたが、眠れるものではなかった。真夜中、突然大きな音がしたかと思うと、浴室の扉が開き、エノモトさんがころがるように出てきた。うわあ、というような声をあげながら、エノモトさんはわたしの部屋から走り出ていった。人魚を連れていったかと思い浴室を覗いたが、人魚はそこにいた。顔を横向きにして、ふわふわとはんぶん水に浮いている。自然にしていると、浮くらしい。コップに浮かせた桜の花びらのように、ふわりと水に浮きながら、人魚は眠っていた。

たしかに人魚から離れるのはつらかった。毎朝鰺か鰯(いわし)か鯖(さば)を人魚に食べさせて、そのあとに会社に行かねばならないのが特につらかった。

人魚を預けられてから数日が過ぎたが、エノモトさんから連絡はなかった。最後に聞いた「うわあ」というエノモトさんの声が何回でも耳によみがえった。あれは何の声だったのか。わたしはいつもと変わりなく会社に行き家に帰り食事をとり眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め人魚のそばになるべく長く座り眠った。会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め人魚のそばになるべく長く座り人魚と共に眠った。

いつの間にか、わたしはエノモトさんと同じ状態になっていた。エノモトさんは夜眠るときには人魚から離れたと言っていたが、たぶん嘘(うそ)だった。食事をとるのだって、きっと浴室の中だったにちがいない。食事の支度をする時間が惜しくて、できあい[2]のものをわたしは買うようになった。掃除をしないので、部屋の中がほこりっぽくなってきた。カーテンも

＊涼しげ

2 できあい 注文を受けてから作るのではなく、すでに作ってあるもののこと。ここでは惣菜(そうざい)などを指す。

問 **「エノモトさん」は、なぜ、「わたし」に相談したのか。**

問 **「このありさま」とは、具体的にどのような状態を指すか。**

問 **人魚を「最後は預かることになってしまった」のは、なぜか。**

問 **「エノモトさんと同じ状態」とは、どういう状態か。**

ろくにあけず、洗濯もめったにせず、ただ浴室の中にいつづけた。椅子や毛布や食器を持ち込んで、浴室で暮らした。外に出ているときの記憶があまりなかった。誰と喋っても面白くなかった。電話が鳴っても出なかった。ただ、人魚だけを眺めて暮らした。これではいけないとときどき思ったが、すぐに思わなくなった。誰とも喋りたくなかったが、エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした。人魚が浴槽の中を泳ぐのを眺め、そのまま眠り、朝になるとふらふらと会社に行った。これではいけないと思う回数は次第に減っていった。エノモトさんが来たのは、これではいけないとぜんぜん思わなくなったころだった。人魚を預かってからたったの一週間後だった。

どしどし、と叩く音がした。ベルなど押さずに、直接扉を強く叩いてくる。ほうっておいても、止まない。しばらく浴室で息をひそめていたが、あまり長く続くので、浴室から出た。インターフォンで、どなたですか、と聞いた。扉を叩く音は止み、

「エノモトです」という声がした。

扉を開けると、エノモトさんが立っていた。

どうしたの、と言ったわたしの目は、おそらく人魚を預けに来て浴室から出なくなったときのエノモトさんの光のない目と同じだったことだろう。

どうしたの。

「人魚を取りに来た」

どうして。

「どうしてって、もともと預けただけだったし」

まだ、いいじゃないの。

まだ、と言いながら、わたしは後じさっていた。お茶でもいれましょう、と言いながら、足は浴室に向かっていた。エノモトさんは見のがさず、わたしの前に立ちはだかった。

「車、借りて来たから」エノモトさんが言った。

え、車？

「海に帰す」

そう言い放ち、エノモトさんはわたしを押しのけて浴室に入った。人魚を水の中から抱きあげ、いつの間に手にしていたのか、黒い大きなビニール袋に入れた。

だめ。だめよ。わたしは叫んでいた。袋をエノモトさんから取り返そうとした。しかしエノモトさんの力は強い。

「黒いから中が見えない。見なければ、いくらかいい。ぼくだって長くそばにいればまた元に戻ってしまうから。急ぐ

よ」エノモトさんは早口で言いながら、片手でわたしの手を引き、片手で人魚の入った袋をさげ、エレベーターに乗りこんだ。見たことのない緑色の車が道の端に停めてある。トランクに人魚の袋をしまい、エノモトさんはエンジンをかけた。

トランクなんかに入れたら、かわいそうじゃない。わたしが言うと、エノモトさんは、

「すぐに着くから大丈夫」と言った。

だめ。やめてよ。だめよ。エノモトさんの腕をひっぱりながらわたしが言ったとたんに車が走り始めた。

「腕、ひっぱると事故しちゃうよ。ちゃんとシートベルト締めて」エノモトさんにてきぱき*と言われ、わたしはいやいやシートベルトを締めた。そのまま、海まで走った。

どこの海岸なのか、海岸沿いの土手には桜の並木があった。風はほとんどないのに、花びらがひっきりなしに散る。葉桜になっている木もあった。エノモトさんは人魚の入った袋を持ち、早足で波打ち際に向かう。うららかな日だった。鷗[3]が河口から何羽も飛んでくる。日の光はさほど強くないのだが、海面がいやにまぶしい。海岸に人影はない。長く波に洗われたらしく輪郭のあいまいになった貝がいくつも落ちている。波の音を聞いていると、眠くなってくる。せっぱつまっているのに、眠くなる。

エノモトさんは決然とした足どりで歩いてゆく。

エノモトさん。呼びかけたが、振り向かない。

エノモトさーん。声を波に消されないように大きく呼びかけるが、そのまま歩いていってしまう。

水際で、エノモトさんは袋を下ろした。ていねいに口を開く。開いたとたんに水が砂浜に漏れ出る。水はそのまま砂に吸いこまれた。

帰すの、ほんとうに。エノモトさんのそばに走り寄って、わたしは泣きそうになりながら言った。

「帰す」エノモトさんは言った。しかし、その声はさきほど来の声よりも少し弱々しかった。

やめようよ。わたしが言うと、エノモトさんは目をしばた

3 鷗 カモメ科の鳥の総称。海岸などにすむもののほかに、冬鳥として日本に渡来する種もある。

* 後じさる てきぱき

問 「エノモトさん」の「人魚を取りに来た」という言葉から、どのようなことが分かるか。

いた。

「やめない」もっと弱々しい声である。

いいじゃない、別に悪いことしてるんじゃないし。わたしは誘う口調で言った。自分のどこからこんな声が出るのかわからなかった。

「まあそうだが」エノモトさんのまなざしが落ちつかない。よく晴れてるし、このまま散歩して帰ろう。人魚も一緒に。甘い声だった。自分の声ではないみたいだった。いけない、こんな声を出してはいけない、と思ったが、やめられない。

「そうかもしれない」エノモトさんは催眠術にかかったみたいにぼんやりとした口調になっている。

いけない、いけない。そう思うのだが、声にならない。人魚は帰さなければいけない。そう言おうとするのだが、声が出ない。人魚は砂に横たわっている。からだ全体を砂にあずけるようにして、ぐったりと横たわっている。何を言うわけでもなく、どんな動作をするわけでもなく、しかしその人魚からわたしたちは離れられない。

「帰す」エノモトさんが絞りだすような声で言った。

口を開くとさきほどの甘い声が出てしまいそうなので、わたしは懸命に*歯を食いしばった。

無言で、エノモトさんと一緒に人魚をかかえ、水の中に入った。靴が濡れたが、かまっていられなかった。エノモトさんが尾ひれをつかみ、わたしは脇に両手をさし入れ、二人して人魚をかかえた。膝より上が水に漬かるあたりで、エノモトさんは、

「ここらにしよう」と言った。

「せえの」とエノモトさんは掛け声をかけた。こんなときに悠長な声を、と思ったが、何回エノモトさんが「せえの」と言っても、二人の手は人魚から離れないのだった。

むつかしいわよ。わたしが言うと、エノモトさんは少し笑った。•エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした。

せえの、と、今度はわたしが言い、ついに人魚を海に放り投げた。虹色のうろこをきらめかせながら、人魚はとぽんと波間に沈み、そのまましばらく姿を見せない。

帰したね。そうエノモトさんに向かって言ったとたん、人魚がわたしたちの間にぽっかりと顔を出した。驚いて海中に尻餅をついた。肩まで水に漬かり、服も何もかもがびしょ濡れになった。

人魚は、しばらくわたしの顔を見ていた。エノモトさんの

ほうは見ない。わたしだけを見ている。こんなに人魚の顔を真近で見たのは、初めてだった。白磁[4]に切れ込みを入れたような目がわたしをじっと見ている。

やっぱり離れられない、とわたしは知らずに言おうとしていた。

離れられない。

その刹那、人魚が口を開いた。赤く薄いくちびるを開いた。

「離さない」

人魚は言った。

はっきりと響く声で、人魚は言った。

わたしの顔を見据えて、人魚は言った。

エノモトさんがいつか出した、うわあ、という声が、わたしの口からももれ出た。

うわあ、と言いながら、わたしは海岸に向かって走った。水の抵抗があるうえに、服も濡れているので、思うような速さで走れない。夢の中で走っているような感じだった。エノモトさんがわたしの手を引いてくれている。なにがなんだかわからぬまま、走っていた。ようやく浜に上がって荒い息を吐いていると、もう一度背後から、

「離さない」

という声が聞こえた。

耳をふさぎ、砂に顔をうずめた。

どのくらいそうやっていただろうか、顔をあげるとエノモトさんが目の前にしゃがんでいて、わたしの体には毛布がかけられてあった。

人魚はいつの間にか去っていた。沖に漁船が見える。

桜が、海岸にまで飛んできていた。砂の上に、花びらがうすく積もっていた。淡雪のようだった。濡れたわたしの髪にも、服にも、桜の花びらがついていた。しばらく散る桜を眺めていた。エノモトさんと一緒にしゃがんで、降りそそいでくる桜の花びらを、眺めていた。

4 **白磁**　純白の磁器。素地が白いものに、無色の釉薬（ゆうやく）をかけ、高温で焼いたもの。

＊ 歯を食いしばる

問 **「エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした」のは、なぜか。**

問 **人魚が「わたしだけを見ている」のは、なぜか。**

問 **「やっぱり離れられない」と思ったのに、人魚に「離さない」と言われて、「わたし」が逃げたのは、なぜか。**

翌日からしばらく高熱を出して、体調がようやく元に戻ったころには、桜はすっかり散っていた。エノモトさんに電話をして、礼を言った。

「おいしいコーヒーいれますよ」とエノモトさんが言うので、階段をのぼってエノモトさんの部屋に行った。葉桜になった桜の木のてっぺんが、エノモトさんの部屋の窓から見えた。

「これからの季節はね、葉が出そろって、鳥がよく来るようになるよ」コーヒーをいれながら、エノモトさんが言った。

鳥か。鳥はいいな。わたしがぼんやりと答えると、エノモトさんは笑った。

「人魚よりはいいよね」そう言って、笑った。

人魚、なんだったんだろう。つぶやくと、エノモトさんは真面目な顔をして、

「魅入られたね」と答えた。*

エノモトさん、どうして人魚を帰すことができたの。聞くと、エノモトさんは、

「きみだって、最後は帰せたじゃない」と答えた。

風が吹いて、桜の枝が揺れた。海岸で見た桜を思い出した。

人魚のすがたかたちも、人魚から離れたくないという気持ちも、はっきりとは思い出せなかった。桜が散る様子ばかりを克明に覚えているのだった。

エノモトさんも、人魚にあの言葉言われた？　と聞くと、エノモトさんは頷いた。

「きみの部屋に人魚を預けに行って、浴室に閉じこもっていた、あのときに、言われた」エノモトさんは静かな声で言った。

わたしたちはしばらく黙ってコーヒーをすすった。

「ずっと離さないでいるだけの強さがぼくにはなかったのかな」やがて、エノモトさんはしみじみした口調で言った。

それはわたしもそうだったのかもしれない。ひっそりと答え、わたしは窓の外に視線を向けた。

うすみどりの若葉が、どの木からも芽吹いていた。風が新緑を揺らしていた。わたしたちはいつまでもそれぞれに窓の外を眺めていた。

問「離さないでいるだけの強さ」とは、どのようなものか。

＊魅入る



川上弘美（かわかみ ひろみ） 昭和三十三（一九五八）年～。小説家・俳人。東京都の生まれ。短い淡々とした言葉で、現実世界と異世界の交流を描く作品が多い。高校の生物科教員を経て、『神様』で新人賞を受賞。主な作品に『蛇を踏む』『溺れる』『センセイの鞄』などがある。東日本大震災を受け、平成二十三（二〇一一）年に『神様 2011』を発表。本文は、『神様』（平成十（一九九八）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 人魚が「モノ」として捉えられている表現と、そうでない表現を文中から探してみよう。

2 「エノモトさん」と「わたし」の日常が、人魚を預かってから、どのように変化していったか、それぞれについてまとめてみよう。

3 人魚を海に帰しに行ってからの、「エノモトさん」と「わたし」の様子を「声」に着目して抜き出し、気づいたことをまとめてみよう。

4 作品の中で何度も取り上げられる「モノ」が果たす役割を考えてみよう。（例：コーヒー）

言葉と表現

1 本文中から「離さない」「離れられない」のような、「離…」という語を抜き出し、それぞれの語の持つ印象について、話し合ってみよう。

2 1で抜き出した語を使って、短文を作ってみよう。

言語活動

1 本文の描写をもとに、「人魚」の絵を描いてみよう。

2 人魚は、世界各国でこれまで、どのように描かれてきたのか、伝説・小説や図像を調べてみよう。

漢字熟語

同期 243　世間話 243　印象 243　男所帯 243　輪郭 243　手動 243
画架 244　民宿 245　虹色 245　皮膚 245　隙間 245　造作 245
浴槽 245　優雅 246　真面目 247　拾得物 247　支度 249　掃除 249
催眠術 252　懸命 252　尻餅 252　背後 253　克明 254

◆話し合うと何が起こるか確かめる
――あなたにとって大切なものは何ですか――

この単元では、様々な形態で小説が発表された現代の作品を二編読んだ。二編とも、何かに執着したときの周囲との関係の変化を扱っていた。

課題 自分だけが大切に思っていること、かけがえがないと思っていることを他人と語り合ったとき、どのようなことが起きるだろうか、確かめてみよう。

1 『青が消える』では「青」、『離さない』では「人魚」のことを、主人公が誰かと語り合ったときの相手のかかわり方はどのようなものであったか、それぞれの作品について考え、比較してみよう。

2 次の項目について、一般的な人間の生活にとって大切だと思う順に、1～10の順位をつけてみよう。jは自分で一つ設定してみよう。

a 家族　b 友人　c お金　d 仕事　e 趣味
f 健康　g 教育　h 安全　i 自然　j（　　）

3 グループを作り、グループ内で順位をつけてみよう。jを一つに絞る必要はない。順位を数値化したり、多数決で決めたりするのではなく、話し合いで決めよう。その話し合いの過程で分かったことや気づいたことを発表してみよう。

4 j（　　）に、「青」「人魚」が入ったとき、話し合いはどうなるだろうか。そこから、文学作品はどのようなことを表現するのが得意か、考えてみよう。

5 自分だけが、大切に思っていること、かけがえがないと思っていることを一つ挙げてみよう。

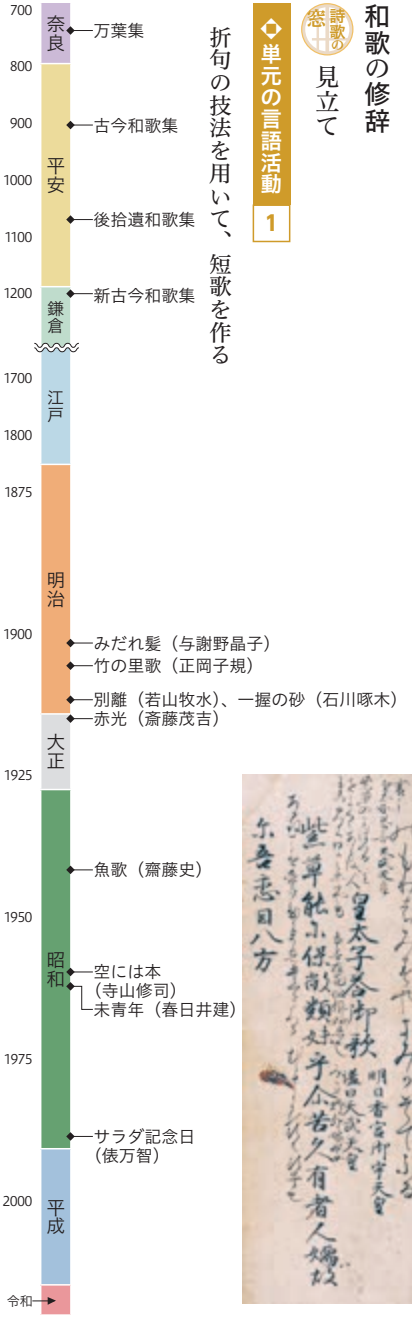
6 5について、グループで語り合ってみよう。語り合うことで、どのようなことが起きたか、確かめてみよう。

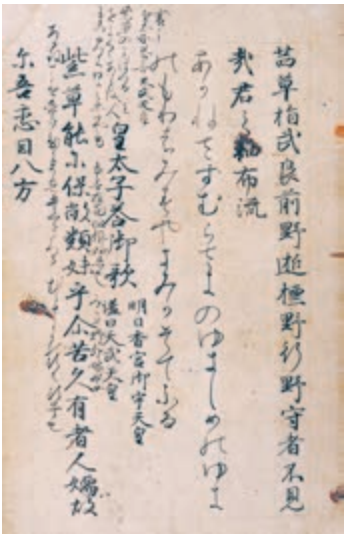
1 和歌・短歌

- 古代から現代にまで続く、和歌・短歌の形式を理解し、その代表的作品を読み味わう。
- 和歌・短歌に特徴的な表現の技法を理解し、語感を磨く。
- 本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌で表現する。

和歌
短歌
和歌の修辞
詩歌の窓 見立て

単元の言語活動 1
折句の技法を用いて、短歌を作る





元暦（げんりゃく）校本万葉集
平安時代に書写された『万葉集』。万葉仮名と変体仮名が並記されている。

和歌

万葉集

額田王

（巻一・雑歌）

1天皇、2蒲生野に3遊猟するときに、額田王の作る歌

4あかねさす5紫野行き6標野行き野守は見ずや君が袖振る

皇太子の答ふる御歌

大海人皇子

（巻一・雑歌）

7紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも*

柿本人麻呂

（巻一・雑歌）

8軽皇子、9安騎の野に宿らせるときに、柿本朝臣人麻呂が作る歌

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ10



額田王（安田靫彦筆）

額田王　生没年未詳。七世紀後半に活躍した。

1天皇　天智天皇（六二六年～六七一年）。

2蒲生野　現在の滋賀県近江八幡市付近の野。

3遊猟　ここでは、鹿の角や薬草を採る薬狩りを指す。行楽を伴う。

4あかねさす　「紫」を導く枕詞。

5紫野　根を染料とする紫草（ムラサキ科の多年草）を栽培する野。

6標野　一般の立ち入りを禁じた野。

大海人皇子　生年未詳、六八六年没。天智天皇の弟で、後の天武天皇。

7紫　ここでは、紫草のこと。花は白い。



紫草

柿本人麻呂　生没年未詳。七世紀から八世紀初めに活躍した。

8軽皇子　文武天皇（六八三年～七〇七年）。

9安騎の野　現在の奈良県宇陀市一帯の野。

山部宿禰赤人、富士の山を望む歌　　山部赤人

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振りさけ見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は

（巻三・雑歌）

反歌

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける　（巻三・雑歌）

山上憶良臣、宴をまかる歌　　山上憶良

憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ　（巻三・雑歌）

東歌　　作者未詳

多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のここだかなしき

（巻十四・相聞）

10 かぎろひ　明け方の陽光。
山部赤人　生没年未詳。八世紀前半に活躍した。
11 分かれし時ゆ　分かれた（神代の）時代から。「ゆ」は起点や経由地を表す上代の格助詞。
12 神さびて　神々しくて。
13 駿河　六一ページ注10参照。
14 い行きはばかり　進みあぐね。
15 時じく　いつも。
16 田子の浦　現在の静岡県静岡市清水区の海岸。
山上憶良　六六〇年～七三三年頃。
問「憶良らは」の歌は、どこで切れるか。
17 ら　接尾語。ここでは、へりくだる意を表す。
18 東歌　東国地方の歌。庶民的な発想・表現を持つ歌が多い。
19 多摩川　現在の東京都西部を経て東京湾に注ぐ川。
20 手作り　手織りの布。
21 ここだ　たいそう。「ここら」の古形。
＊ 憎し

二十五日に作る歌一首[22]

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

大伴家持（おほとものやかもち）（巻十九）

父母が頭かきなで幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる[23][24]

防人歌（さきもりうた）（巻二十）

古今和歌集

春立ちける日詠める

袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風やとくらむ[25]

紀貫之（きのつらゆき）（巻一・春上）

桜の花の散るを詠める

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ[26]

紀友則（きのとものり）（巻二・春下）

大伴家持　七一八年頃～七八五年。

22 二十五日　天平勝宝五（七五三）年二月二十五日。

防人歌　「防人」は、現在の九州北部の辺境の地の防衛のために、主に東国から派遣された兵士。

23 幸くあれて　「幸くあれと」の東国方言。達者でいろと。

24 言葉ぜ　「言葉ぞ」の東国方言。

紀貫之　八〇ページ参照。

25 袖ひちて　袖も濡れるほどにして。

問 **「袖ひちて」の歌には、幾つの季節が表現されているか。**

紀友則　生年未詳～九〇五年頃。『古今和歌集』撰者の一人。

26 ひさかたの　「天」「空」「光」を導く枕詞。

題知らず　　よみ人知らず

27五月待つ28花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

（巻三・夏）


橘の花

秋立つ日、詠める

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

（巻四・秋上）

冬の歌とて詠める

29ちはやぶる神代も聞かず30竜田川31から紅に水くくるとは32

在原業平

（巻五・秋下）

山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば

源宗于

（巻六・冬）

題知らず

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

小野小町

（巻十二・恋二）

27**五月待つ**　五月を待っているかのように咲いている。
28**花橘**　ミカン科の常緑小高木。花は初夏に咲き、白色で香り高い。
問**「昔の人」とは、どのような人か。**

藤原敏行　生年未詳～九〇一年。九〇七年没とも。

在原業平　八二五年～八八〇年。六歌仙の一人。
29**ちはやぶる**　「神」を導く枕詞。
30**竜田川**　現在の奈良県北西部を流れ、大和川に注ぐ川。
31**から紅**　唐紅。韓紅。濃い紅色。
32**くくる**　くくり染めにすること。

源宗于　生年未詳～九三九年。

小野小町　生没年未詳。九世紀半ば頃に活躍した。六歌仙の一人。
問**「思ひつつ」とあるが、何をか。**

33五節の舞姫を見て詠める

34天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

良岑宗貞

（巻十七・雑上）

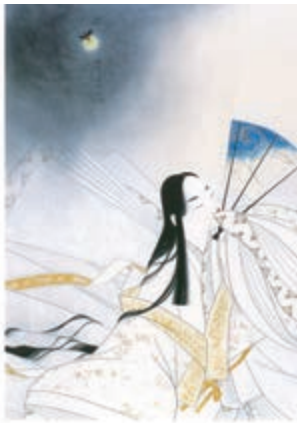
後拾遺和歌集

男に忘られて侍りけるころ、35貴船に参りて、御手洗川に蛍の飛び侍りけるを見て詠める

和泉式部

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

（巻二十・雑六）



和泉式部（佐多芳郎筆）

新古今和歌集

男ども詩を36作りて歌に合はせ侍りしに、水郷の春望といふことを

後鳥羽上皇

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ

（巻一・春上）

良岑宗貞　八一六年～八九〇年。出家して遍昭と名乗る。六歌仙の一人。

33五節の舞姫　陰暦十一月に行われた豊明節会で舞う少女。

34雲の通ひ路　天と地をつなぐ、雲の中の通路。

和泉式部　二四ページ注1参照。

35貴船　現在の京都市左京区鞍馬貴船町にある、貴船神社。

後鳥羽上皇　一一八〇年～一二三九年。承久の乱に敗れ、隠岐（現在の島根県隠岐島）に流された。

36詩を作りて…侍りしに　元久二（一二〇五）年六月の「元久詩歌合」。

37水郷の春望　「水辺の里の春の眺望」という意味の題。

38水無瀬川　現在の大阪府三島郡島本町を流れ、淀川に注ぐ川。

宮内卿　生没年未詳。後鳥羽上皇の女房。

39千五百番歌合　建仁二（一二〇二）年～三年に後鳥羽上皇主催で行われた、史上最大の歌合。

問「跡まで見ゆる」とあるが、何の跡が、何によって分かるのか。

39 千五百番歌合に、春歌

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

宮内卿（巻一・春上）

題知らず

40 誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔の人となりなば

藤原俊成（巻三・夏）

41 西行法師勧めて、百首歌詠ませ侍りけるに

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

藤原定家（巻四・秋上）



藤原定家（『新三十六歌仙画帖』）

43 摂政太政大臣家歌合に、湖上の冬の月

44 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月

藤原家隆（巻六・冬）

藤原俊成　一一一四年～一二〇四年。『千載和歌集』の撰者。

40 誰かまた…　『古今和歌集』の「五月待つ」（二六一ページ参照）の歌の本歌取り。

藤原定家　一一六二年～一二四一年。俊成の子。『新古今和歌集』撰者の中心的存在。

41 西行　一一一八年～一一九〇年。俗名は佐藤義清。

42 苫屋　粗く織ったむしろで屋根などを覆った粗末な小屋。

藤原家隆　一一五八年～一二三七年。

43 摂政太政大臣家歌合　正治元（一一九九）年冬、藤原良経の家で行われた歌合。

44 志賀の浦　琵琶湖の西岸で、現在の滋賀県大津市唐崎付近。

45 遠ざかりゆく　本歌の「さ夜ふくるまにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」（『後拾遺和歌集』冬・快覚法師）を踏まえた表現。

＊あくがる

百首歌の中に、忍ぶる恋を

式子内親王（しょくしないしんわう）

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする　（巻十一・恋一）

東（あづま）の方へ修行し侍りけるに、富士（ふじ）の山を詠める

西行

風になびく富士の煙（けぶり）の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな[46]　（巻十七・雑中）

式子内親王　一一四九年～一二〇一年。後白河天皇の皇女。

西行　二六三ページ参照。

46 思ひ　「思ひ」の「ひ」に「火」を掛け、「煙」の縁語。

万葉集　二十巻。四千五百首余りを収める。現存する日本最古の歌集。奈良時代後期、大伴家持によってまとめられたといわれている。内容の上から雑歌・相聞・挽歌（ばんか）の三つに大別され、八世紀半ばまでの長歌と短歌を中心に、旋頭歌（せどうか）などの歌体も見られる。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

古今和歌集　二十巻。約千百首を収める。醍醐（だいご）天皇の勅命（ちょくめい）により、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）、壬生忠岑（みぶのただみね）が延喜五（九〇五）年に撰進（せんしん）した、最初の勅撰和歌集。四季・恋・雑などを中心に、整然とした構成と、自然と貴族生活にかかわる洗練された美意識を持ち、以後の和歌集の規範となった。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

後拾遺和歌集　二十巻。約千二百二十首を収める。白河天皇の命により、藤原通俊（みちとし）が、応徳三（一〇八六）年に撰進した、四番目の勅撰和歌集。女性歌人の歌を多く集める。本文は『新日本古典文学大系』によった。

新古今和歌集　二十巻。約千九百八十首を収める。後鳥羽上皇の命により、源通具（みちとも）、藤原有家（ありいえ）、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経（まさつね）が、元久二（一二〇五）年に撰進した、八番目の勅撰和歌集。上皇自身も積極的に編集に関与している。貴族文化の復興を目指し、本歌取りなど多様な技巧を駆使した精妙な美意識に特徴がある。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

和歌の修辞

和歌には、幾つかの表現の決まり事（修辞）がある。それぞれ、言葉と言葉の間に、意味的な結び付きにとどまらない特別な関係を生み出すように用いられる。いずれも作者の感動や思いを、より深く伝えることを可能にしている。

1 枕詞（まくらことば）

特定の語を導き出すための修飾語で、五音から成る。古くからの言い伝えなどを利用してできたもので、その枕詞が導き出す語は決まっている。「あしひきの―山」「たらちねの―母」など、多数ある。通常、現代語訳しない。

例 あかねさす 紫（むらさき）野行き標野（しめの）行き野守（のもり）は見ずや君が袖振る（二五八・3）

◆「あかねさす」が、「紫」を導く枕詞。

2 序詞（じょことば）

枕詞と同じように、ある語を導き出すための七音以上の語句。その歌ごとに工夫されて、音やイメージの連想からある語が導き出される。具体的な事柄や風景から、作者の心情を説得的に伝える。通常、現代語訳する。

例 多摩川にさらす手作り さらさらになにそこの児（こ）のここだかなしき（二五九・11）

◆「多摩川にさらす手作り」が、「さらさらに」を導く序詞。

3 掛詞（かけことば）

同音異義語を利用して、一つの語に複数（通常は二つ）の意味を持たせる技法。一方の意味は自然などの景物、もう一方は心情にかかわるものであることが多い。作者の心と具体物が重なり、奥行きのある歌となる。一首の中に、二つの文脈が存在することになり、それぞれ現代語訳する。

例 山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草も かれ ぬと思へば（二六一・9）

（枯れ／離れ）

◆「かれ」が、「枯れ」と「離れ」との掛詞で、冬の山里の風景と、孤独な心情とが一体となっている。

4 縁語

一つの語に関係の深い語を詠み込む技法。縁語によって、あたかも糸で縫い合わせるように、歌の心情や内容に統一感をもたらす効果がある。縁語の関係そのものは現代語訳しない。

例 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする（二六四・2）

◆「絶え」「ながらへ」「弱り」が、「緒」の縁語。

5 見立て

ある事物を、別の事物になぞらえる技法。比喩の一種であるが、表現したい事物の、現実とは思えぬ美しさを強調したいときに用いる。花を雪や雲に、月を霜や氷に見立てる例などがある。

例 ちはやぶる神代も聞かず竜田川（たつたがは）から紅に水くくるとは（二六一・7）

＝紅葉

◆「竜田川の水面の紅葉」を「くくり染め」に見立てている。

6 本歌取り

有名な古歌（本歌）の表現や内容の一部を取り入れて、新しい歌を作る技法。本歌が想起されることによって、内容に深みが増し、しかも新鮮味が生じることになる。

例 本歌

さ夜ふくるままにみぎはや凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波（『後拾遺和歌集』）

↓

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出（い）づる有明（ありあけ）の月（二六三・8）

◆本歌から、冬の夜の湖面が水際から凍っていき、波がしだいに遠ざかっていくという内容を取り入れている。その一方で、「志賀の浦や」の歌は、月を新たに登場させて新味をもたらし、また感覚のうえでも、聴覚から視覚へと主眼を転換させている。

和歌の修辞は、表現したい内容からは遠回りしているように見えるかもしれない。しかし実際には、誰もがよく知っている具体的な事物を媒介とすることで、作者が描こうとした情景や作者の思いを、多くの人々が共有できる効果があるのである。

詩歌の窓

見立て

ある事物を別の事物になぞらえる見立ては、文学に限らず、絵画や芸能などの幅広い分野で使われている。ここでは、さまざまな事物を架空の貝に見立てた『絵本見立仮譬尽』（竹杖為軽編、天明三（一七八三）年刊）[1]を例に、文学と絵画が融合した見立てを読み解いてみよう。次に引用するのは「た貝」という貝について述べた箇所である。何を貝に見立てているか、分かるだろうか。挿絵も見ながら考えてみてほしい。

た貝

駿州田子の浦の名物にして、異国にても是を賞美す。六月を旬とす。正月二日の夜、此形を夢見る時は。富士の山ほど金を持つ也。

（駿河（現在の静岡県）の田子の浦の名物で、外国でもこれを褒めたたえる。六月が旬である。一月二日の夜にこれを夢に見れば、富士山ほどの金に恵まれる。）

田子の浦うつる浪間のしら雪をわけてた貝をみるふじの山

[2]秦野玖呂面

（田子の浦の波間に映る白雪、その白雪を分けて見れば、とりわけその高さに目を奪われる富士の山である。）



た貝（絵本見立仮譬尽）

正解は「富士山」である。六月には富士山の山開きがあり、初夢に富士山を見ると縁起がよいとの俗信もあった。「た貝」は富士山が日本一「高い」ことを掛けた洒落で、挿絵には富士山が二枚貝のように描かれている。富士山と貝という無関係の二つの物が、形の類似という一点で結ばれているのである。

私たちの身の回りにも、見立ての発想をもった表現は生きている。例えば、おから（豆腐を作るときに出る大豆のかす）の別名を「うのはな」というが、これはおからの白さをウツギの花（うのはな）に見立てた言い方である。

（注）

1・2竹杖為軽・秦野玖呂面　ともに江戸の狂歌師。狂歌は和歌と同形式の韻文で、滑稽味があり、洒落や機知に富む。

短歌

くれなゐの二尺[1]伸びたる薔薇（ばら）の芽の針やはらかに春雨のふる

正岡子規（まさおかしき）

いちはつ[2]の花咲きいでて我目（わがめ）には今年ばかりの春行（ゆ）かんとす

与謝野晶子（よさのあきこ）

清水（きよみづ）へ祇園（ぎをん）[4]をよぎる桜月夜（さくらづきよ）[3]こよひ逢（あ）ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君

5

正岡子規　一八六七年～一九〇二年。愛媛県の生まれ。歌集に『竹の里歌』、句集に『寒山落木』など。

1 二尺　「尺」は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

2 いちはつ　アヤメ科の多年草。五月頃、茎を出し、紫または白の花をつける。



問「今年ばかりの春」とは、どのような意味か。

与謝野晶子　一八七八年～一九四二年。大阪府の生まれ。歌集に『みだれ髪』『舞姫』など。

3 清水　京都府京都市東山区の清水寺を指す。

4 祇園　京都府京都市の代表的な繁華街。八坂神社付近。

問「桜月夜」とは、どのような情景か。

若山牧水（わかやまぼくすい）

白鳥（しらとり）は哀（かな）しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

幾山河越（いくやまかはこ）えさり行かば寂しさの終（は）てなむ国ぞ今日も旅ゆく

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

ふるさとの訛（なまり）なつかし
停車場（ていしゃば）[5]の人ごみの中に
そを聴（き）きにゆく

石川啄木（いしかわたくぼく）

若山牧水　一八八五年～一九二八年。宮崎県の生まれ。歌集に『海の声』『別離』など。

問「哀しからずや」に込められた思いは、どのようなものか。

石川啄木　一八八六年～一九一二年。岩手県の生まれ。歌集に『一握の砂』『悲しき玩具』など。

5 停車場　ここでは、上野駅を指す。当時、東北方面への列車が発着した。

のど赤き玄鳥(つばくらめ)ふたつ屋梁(はり)にゐて足乳根(たらちね)の母は死にたまふなり



玄鳥

斎藤茂吉(さいとうもきち)

最上川(もがみ)逆白波(さかしらなみ)のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

斎藤茂吉　一八八二年～一九五三年。山形県の生まれ。歌集に『赤光』『あらたま』など。

6 玄鳥　つばめ。スズメ目ツバメ科の鳥。

7 屋梁　「梁」に同じ。

8 足乳根の　「母」を導く枕詞(まくらことば)。

9 最上川　山形県を南北に貫流し、日本海に注ぐ川。

問 「逆白波」とは、どのような波か。

野に捨てた黒い手袋も起き上がり指指に黄な花咲かせだす

水滴よりつめたく断を下すものわれの背筋に添ひて流れつ

齋藤史(さいとうふみ)

齋藤史　一九〇九年～二〇〇二年。東京都の生まれ。歌集に『魚歌』『ひたくれなゐ』など。

5

ふるさとの訛(なま)りなくせし友といてモカ珈琲(コーヒー)はかくまでにがし

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

太陽が欲しくて父を怒らせし日よりむなしきものばかり恋ふ

母にはじまり無限の人を並べたる不滅の列にわたしはをらず

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

寺山修司(てらやましゅうじ)

春日井建(かすがいけん)

俵万智(たわらまち)

寺山修司　一九三五年～一九八三年。青森県の生まれ。歌集に『空には本』『田園に死す』など。

10 モカ珈琲　コーヒーの種類。

問 「霧ふかし」には、どのような状況が表されているか。

春日井建　一九三八年～二〇〇四年。愛知県の生まれ。歌集に『未青年』『行け帰ることなく』など。

俵万智　一九六二年～。大阪府の生まれ。歌集に『サラダ記念日』『チョコレート革命』など。

問 短歌の中に「　」を使用することには、どのような効果があるか。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 句切れに注意しながら、それぞれの歌を音読してみよう。

2 「紫の」の歌（二五八・5）は、「あかねさす」（二五八・3）の歌と呼応している。どのように呼応しているのか、考えてみよう。

3 「誰かまた」の歌（二六三・四）と、その本歌である「五月待つ」の歌（二六一・2）を比較し、本歌取りの効果について説明してみよう。

4 「ふるさとの訛りなくせし」の歌（二七一・2）が踏まえている歌を、この教科書掲載歌の中で指摘し、その手法の効果について説明してみよう。

5 「和歌」の中で、係り結びを用いている歌を指摘し、現代語に訳してみよう。

6 「短歌」の中で、助詞「や」「よ」「ぞ」「かも」を用いている歌を指摘し、それらの働きに留意して、作者の心情を読み取ってみよう。

◇言葉と表現

1 次の枕詞について、そのイメージを話し合ってみよう。

(1) あかねさす（二五八・3）
(2) ひさかたの（二六〇・9）
(3) ちはやぶる（二六一・7）
(4) 足乳根の（二七〇・2）

2 1 で話し合った枕詞のほかに、どのような枕詞があるか、調べてみよう。

◇単元の言語活動 1

◆折句の技法を用いて、短歌を作る

日本に現存する最古の歌集『万葉集』の成立は、奈良時代後期の八世紀とされている。その時期から現在に至るまで、約一三〇〇年の長きにわたり、さまざまな歌が詠まれてきた。時代の変化とともに、言葉の表現や歌作上の技法などに変化は見られるが、表出された人々の心には、時代を超えて共感できるものがたくさんある。

長い伝統に培われた歌の形式を学びながら、それぞれの時代に生きた人々と心情を分かち合うことができれば、私たちの感性は研ぎ澄まされ、情趣を解する、より豊かな心へと導かれることだろう。こうした観点から、心に浮かぶ気持ちや発見したことなどを歌として表現することに挑戦してみよう。

歌を詠むに当たって、正岡子規とその知人で京都に住む愚庵(ぐあん)和尚とのやりとりが参考になる。

子規は愚庵から柿を贈られた際、次の歌を受け取った。

正岡はまさきくてあるか柿の実のあまきとも言はずしぶきとも言はず

「正岡は無事でいるのだろうか。私が贈った柿の実を甘いとも渋いとも言ってこない」という内容である。後日、子規は次の歌を返した。

柿の実のあまきもありぬ柿の実のしぶきもありぬしぶきぞうまき

「柿の実は甘いのもあり渋いのもあり、渋いのがおいしかった」というものだ。諧謔(かいぎゃく)も交えた子規のこのような日常的で平易な歌の詠み方は画期的と受け止められた。歌を詠む折は自分の思いを率直に表現することから始めるとよい。

課題 今まで学んできた歌を参考にしながら、折句の技法を用いて、短歌を作ってみよう。

1 歌は、どのようなテーマで詠まれているのだろうか。各自で自由にテーマを立て、この教科書掲載歌の中から、そのテーマに沿った歌を四〜五首、抜き出してみよう。

(例)「春の歌」「秋の歌」「冬の歌」「恋の歌」「色彩が印象的な歌」「孤独を詠んだ歌」「父母を詠んだ歌」など。

2 1で抜き出した歌の中から、特に好きな歌一首を選び、心情を表現するために、どのような工夫がされているの

か、確かめてみよう。

3 次の手順に従い、感じたことや発見したことを、折句を用いて、短歌にしてみよう。

①『伊勢物語』の「東下り」（六〇〜六三ページ）を参照し、折句の技法を確認する。

②詩歌や日常の言葉の中から五音の語を選んで、下表の(1)の欄に一字ずつ書き入れる。

（例）・うめのはな（梅の花）・かしわもち（柏餅）・むしのこえ（虫の声）・ふゆやすみ（冬休み）など、季節や行事にかかわるもの

・自分が住んでいる町の名前や自分の名前など、自身に関連するもの

・地名・人名・植物名・動物名など

③歌の内容を考えながら、下表の(1)の欄に記入した文字から始まる五音・七音の語を、(2)の欄に幾つか書き入れる。

④歌の内容を考えながら、第一句から第五句まで、それぞれに適切な語を選択し、一首の歌に仕上げる。

⑤グループを作り、各自が折り込んだ語と、短歌によって表現した心情について話し合う。

⑥各自が作成した短歌の中で、わかりにくい部分があったら、互いに指摘し、修正する。

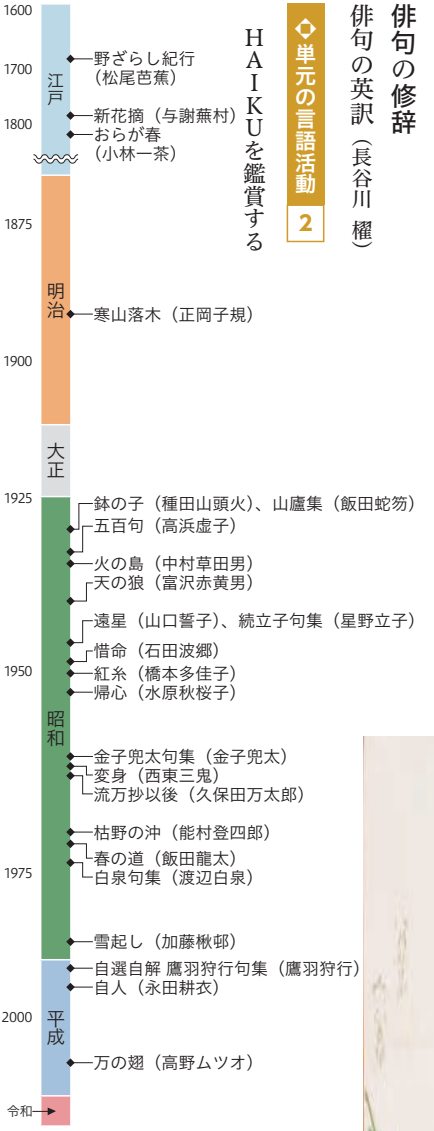
	第一句	第二句	第三句	第四句	第五句
	5音	7音	5音	7音	7音
(1)					
(2) (1)の欄の文字から始まる語					

参考 ▼W杯（サッカーのワールドカップ）を特集したNHKの番組の仕掛けが話題になった。横書きの新聞番組表を縦に読んでみると「日本ガンバレW杯」の文字が現れる。（中略）▼こうした言葉遊びを「折句」という。谷川俊太郎さんに「恋文」とも呼ばれる詩がある。〈あくびがでるわ／いやけがさすわ／しにたいくらい／てんでたいくつ／まぬけなあなた／すべってころべ〉▼各行の頭の語をつなげば「あいしてます」。これでもかというほどの悪態の中に愛の告白を忍ばせる。その落差が絶妙。詩人の技にはかぶとを脱ぐ。（「西日本新聞」二〇一四・六・二一「春秋」より）

2 俳諧・俳句

- 俳諧から近現代の俳句へと続く形式を理解し、その代表的作品を読み味わう。
- 俳諧・俳句に特徴的な表現の技法を理解し、語感を磨く。
- 俳句の英訳を読み、互いの解釈の違いについて話し合う。

俳諧
俳句
俳句の修辞
俳句の英訳（長谷川 櫂）
単元の言語活動 2
HAIKUを鑑賞する





水引草（『草花帖』）
正岡子規自筆のスケッチ

俳諧

かれ枝に烏（からす）のとまりけり秋の暮（くれ）

松尾芭蕉（まつをばせう）



発句画賛（芭蕉・許六（きょりく）画）

1 大津に至る道、山路をこえて

山路来て何やらゆかしすみれ草（ぐさ）*

2 病中吟

旅に病んで夢は枯野（かれの）をかけめぐる

5

松尾芭蕉　一〇七ページ参照。

問 「秋の暮」が句の最後に置かれることで、どのような効果が生まれているか。

1 大津　現在の滋賀県大津市。

2 病中吟　元禄七（一六九四）年十月八日、旅先の難波（なにわ）（現在の大阪市の古称）で病中に詠んだ句。四日後に没し、最後の句となった。

春の海ひねもすのたりのたりかな

●五月雨や大河を前に家二軒

牡丹散つてうち重なりぬ二三片

有明や浅間[3]の霧が膳をはふ●

十二月二十四日、故郷[4]に入る

これがまあつひの栖か雪五尺[5]

蛙[6]戦ひ見にまかる、四月二十日なりけり

痩せ蛙まけるな一茶これにあり

与謝蕪村

小林一茶

問「五月雨や」の句は、どのような情景を描いているか。

与謝蕪村　一七一六年～一七八三年。撰集に『此ほとり』『夜半楽』、俳諧句文集に『新花摘』など。

小林一茶　一七六三年～一八二七年。句日記に『父の終焉日記』、俳諧句文集に『おらが春』など。

3 浅間　浅間山。現在の群馬県と長野県との境にある山。

問「霧が膳をはふ」とは、どのような様子か。

4 故郷　信濃の国柏原（現在の長野県上水内郡信濃町）のこと。

5 五尺　二六八ページ注1参照。

6 蛙戦ひ　多くの蛙が集まり、争って交尾するさま。蛙が戦っているように見えることからこのように言う。

＊ゆかし

俳句

いくたびも雪の深さを尋ねけり

遠山（とほやま）に日の当（あた）りたる枯野（かれの）かな

うしろすがたのしぐれ[1]てゆくか

たましひのたとへば秋[2]のほたるかな

正岡子規（まさおかしき）

高浜虚子（たかはまきょし）

種田山頭火（たねださんとうか）

飯田蛇笏（いいだだこつ）

正岡子規　二六八ページ参照。

高浜虚子　一八七四年～一九五九年。愛媛県の生まれ。句集に『虚子句集』『五百句』など。

種田山頭火　一八八二年～一九四〇年。山口県の生まれ。句集に『草木塔』、遺稿集に『愚を守る』など。

1 しぐれて　しぐれに包まれて。「しぐれ」は、晩秋から初冬に降る通り雨。

飯田蛇笏　一八八五年～一九六二年。山梨県の生まれ。句集に『山廬集（ざんろしゅう）』『椿花集（ちんかしゅう）』など。

2 秋のほたる　立秋の後も光を放つ蛍。

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり　久保田万太郎

滝落ちて群青世界とどろけり　水原秋桜子

雪はげし抱かれて息のつまりしこと　橋本多佳子

白梅や天没地没虚空没[3]　永田耕衣

秋の暮大魚の骨を海が引く　西東三鬼[5]

万緑の中や吾子の歯生え初むる　中村草田男

久保田万太郎　一八八九年～一九六三年。東京都の生まれ。句集に『道芝』、小説に『末枯』など。

問「いのちのはてのうすあかり」とは、どのようなものか。

水原秋桜子　一八九二年～一九八一年。東京都の生まれ。句集に『葛飾』『霜林』など。

問「群青世界」とは、どのような世界か。

橋本多佳子　一八九九年～一九六三年。東京都の生まれ。句集に『海燕』『紅糸』など。

永田耕衣　一九〇〇年～一九九七年。兵庫県の生まれ。句集に『加古』『驢鳴集』など。

3 虚空　何もない空間。

西東三鬼　一九〇〇年～一九六二年。岡山県の生まれ。句集に『旗』『夜の桃』など。

中村草田男　一九〇一年～一九八三年。中国福建省厦門の生まれ。句集に『長子』『万緑』など。

炎天の遠き帆やわがこころの帆

蝶墜ちて大音響の結氷期

囀りをこぼさじと抱く大樹かな

4百代の過客5しんがりに猫の子も

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

胸の上に雁ゆきし空残りけり

山口誓子　一九〇一年～一九九四年。京都府の生まれ。句集に『凍港』『激浪』など。

問「炎天の遠き帆」とは、どのような情景か。

富沢赤黄男　一九〇二年～一九六二年。愛媛県の生まれ。句集に『天の狼』『蛇の笛』など。

星野立子　一九〇三年～一九八四年。東京都の生まれ。句集に『立子句集』『実生』など。

加藤楸邨　一九〇五年～一九九三年。東京都の生まれ。句集に『寒雷』『まぼろしの鹿』など。

4 **百代の過客**　一〇〇ページ注1参照。

5 **しんがり**　最後尾。

能村登四郎　一九一一年～二〇〇一年。東京都の生まれ。句集に『咀嚼音』『天井華』など。

石田波郷　一九一三年～一九六九年。愛媛県の生まれ。句集に『鶴の眼』『酒中花』など。

戦争が廊下の奥に立つてゐた　渡辺白泉（わたなべはくせん）

6彎曲（わんきょく）し火傷（かしょう）し7爆心地のマラソン　金子兜太（かねことうた）

一月の川一月の谷の中　飯田龍太（いいだりゅうた）

胡桃（くるみ）割る胡桃の中に使はぬ部屋　鷹羽狩行（たかはしゅぎょう）

8陽炎（かげろう）より手が出て握り飯摑（つか）む　高野ムツオ 5

渡辺白泉　一九一三年～一九六九年。東京都の生まれ。句集に『渡辺白泉全句集』など。

金子兜太　一九一九年～二〇一八年。埼玉県の生まれ。句集に『少年』『東国抄』など。

6彎曲　弓形に曲がること。

7爆心地　ここでは、原爆が投下された長崎県長崎市を指す。

飯田龍太　一九二〇年～二〇〇七年。山梨県の生まれ。句集に『百戸の谿（ひゃっこのたに）』『忘音』など。

鷹羽狩行　一九三〇年～二〇二四年。山形県の生まれ。句集に『誕生』『十五峯（じゅうごほう）』など。

高野ムツオ　一九四七年～。宮城県の生まれ。句集に『陽炎の家』『万の翅（まんのはね）』など。

8陽炎　地表近くの空気が日射によって温められ、炎のようにゆらゆらと立ち上る現象。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 各作品の季語と季節を確認し、季語のある句とない句の印象の違いについて、考えてみよう。

2 季語のある句について、季語の果たす役割を考え、発表してみよう。

3 印象に残った句を選び、言葉に託された風景や、作者の心情を想像してみよう。

◇言葉と表現

1 作品中の切れ字「や」「かな」「けり」の働きについて調べてみよう。

俳句の修辞

1 五七五定型と自由律

俳句はもともと、俳諧の発句と呼ばれ、俳諧の連歌（連句）の第一句が単独で独立したもので、五七五定型の音数律を持つのが基本である。近代に入って、その形式にとらわれない自由律俳句が現れた。

2 季語と季感

季語は、その句の季節を示すために詠み込まれる語である。季題とも呼ばれる。発句が季節の景物を詠み込むのを約束事としたことに由来する。季語がない句を無季（雑）句という。季語には、和歌以来の伝統的な美意識を反映しているものと、比較的、歴史の浅いものがある。また、季語の有無にかかわらず、季感（季節感）がある句とない句がある。

3 切れ字と切れ

俳句には切れ字が用いられることがある。切れ字は、そこで言い切った形になり、意味を完結させる、感動を示す、などの働きを持つ。「や」「かな」「けり」などが代表的である。また、切れ字の有無にかかわらず、そこで意味が切断される場合、「切れ」という。

俳句の英訳

長谷川 櫂

かれ枝に烏のとまりけり秋の暮　　芭蕉

芭蕉の句は明治以降、何人かの優れた翻訳者によって外国語に訳されている。[1] R・Hブライスもその一人。その代表的な著作『HAIKU』第三巻に「かれ枝に」の句の英訳が載っている。

Autumn evening;
A crow perched
On a withered bough.　　Bashō

ここで注目したいのは、第一に烏が一羽（A crow）であること。次に「秋の暮」（Autumn evening）が一句の冒頭に移されていること。芭蕉の原句は「かれ枝に烏のとまりけり」が先で「秋の暮」があとだった。ブライスはこれを英訳する際、「秋の暮」を先に出し、次いで「かれ枝に烏のとまりけり」（A crow perched / On a withered bough）をおいた。

なぜそうしたか。それはこの句の世界を正確に伝えようとしたからである。日本語の場合、回想の助動詞である切れ字「けり」の働きで、「かれ枝に烏のとまりけり」「秋の暮」という順であっても、秋の一日がとっぷりと夕暮れてきた、ふと気がつくと烏が枯れ枝にとまっているという意味になる。

ところが、英語では切れ字「けり」に相当する言葉がないから、もし原句のとおりの順に言葉を並べると、芭蕉が言おうとしたことは伝わらない。そこで「Autumn evening」から一句を始めたのではなかったか。

（注）

1 **R・Hブライス**　R.H. Blyth　一八九八年～一九六四年。日本文化研究者。イギリス生まれ。日本で長く英語・英文学を講じ、俳句を広く欧米に紹介した。

長谷川櫂　昭和二十九（一九五四）年～。俳人。熊本県の生まれ。新聞の俳壇撰者も務め、俳論・日本文化史論などの著作も多い。句集に『虚空』『柏餅』など。本文は『古池に蛙は飛びこんだか』（平成二十五（二〇一三）年刊）によった。

◇単元の言語活動 2

◆HAIKUを鑑賞する

「俳句」とは、五・七・五の十七音節を基本とする短詩型の名称である。歴史的には、五・七・五と七・七を複数連続して詠む「連歌」や「連句」の第一句である「発句」が、室町時代中期以降、単独でも詠まれるようになったことに由来し、江戸時代には、その傾向が顕著になった。「俳句」という呼称は、明治時代中期、正岡子規の俳句革新運動によって、完全に一句独立した詩型の名称として定着した。十九世紀後半には、ヨーロッパで流行した「ジャポニスム」（日本趣味）の一つとして、海外にも紹介された。現在では、日本語以外の言語でも盛んに詠まれるようになっている。

「俳句の英訳」（二八三ページ）文中のブライスは、俳句を西洋世界に伝えた人物の一人である。長谷川によれば、英訳に当たって、単純に日本語から英語の言葉に置き換えるのではなく、語順を入れ替えて、原句の意図を表現する工夫が施してあるという。ブライスがどのように英訳したのか、なぜ、そのように英訳したのか、俳句の英訳について、考えてみよう。

課題 「俳句の英訳」文中の「かれ枝に」の句の英訳を、改めて現代日本語に訳してみよう。

1 本文を読み、ブライスの英訳と日本語の原句との違いを確認してみよう。

2 英和辞典を使って、ブライスの英訳を日本語に訳し直してみよう。

3 グループを作り、それぞれの日本語訳と、本文中の解釈「秋の一日がとっぷりと夕暮れてきた、ふと気がつくと烏が枯れ枝にとまっている」と共通するところ、違うところを比較し、話し合ってみよう。

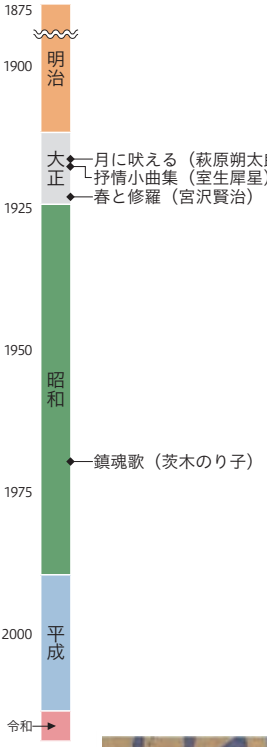
4 3の訳と原句を比較し、助動詞「けり」の働きによって、十七音の句の中に、文字数以上の表現の広がりがあることを確認してみよう。

5 和英辞典を使って、ブライスの英訳とは異なる英訳を考えてみよう。

3 近現代詩

- 近現代の詩が、古典詩歌の文化的蓄積の上に成立していることを理解する。
- 各作品を、表現上の特色や工夫に留意しながら読み味わう。
- 詩と散文との違いに注目し、詩的な言語とはどういうものか考える。

小景異情 室生犀星
およぐひと 萩原朔太郎
永訣の朝 宮沢賢治
汲む （参考）茨木のり子



単元の言語活動 3
文語定型詩と口語自由詩を読み比べる



萩原朔太郎『月に吠える』の口絵校合摺り
田中恭吉作の木版画「画稿より」

小景異情

室生犀星（むろうさいせい）

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土[1]の乞食（かたゐ）となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ

1 異土　故郷でない土地。異郷。

問「帰るところにあるまじや」とあるが、理由として、どのようなことが考えられるか。

そのこころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや



室生犀星（むろう さいせい） 明治二十二（一八八九）年～昭和三十七（一九六二）年。詩人・小説家。石川県の生まれ。大正四（一九一五）年、萩原朔太郎・山村暮鳥と『卓上噴水』を創刊。詩集に『愛の詩集』『抒情小曲集』、小説に『幼年時代』『杏つ子』などがある。本文は、（その一）～（その六）の六章から成る詩のうちの（その二）で、『定本 室生犀星全詩集 第一巻』（昭和五十三（一九七八）年刊）によった。

およぐひと

萩原朔太郎（はぎわらさくたろう）

およぐひとのからだはななめにのびる、
二本の手はながくそろへてひきのばされる、
およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる、
およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ、
およぐひとのたましひは水のうへの月をみる。

5

問 「心臓」を「こころ」、「瞳」を「め」と読ませることには、どのような効果があるか。



萩原朔太郎（はぎわら さくたろう） 明治十九（一八八六）年～昭和十七（一九四二）年。詩人。群馬県の生まれ。大正五（一九一六）年、室生犀星（むろうさいせい）と『感情』を創刊。詩を定型の韻律や意味の説明から解放し、鋭い感覚を口語に移す独自のスタイルを定着させた。詩集に『月に吠（ほ）える』『青猫』『氷島』などがある。本文は『萩原朔太郎詩集』（昭和五十（一九七五）年刊）によった。

永訣の朝

宮沢賢治

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
（あめゆじゆとてちてけんじや）[1]
うすあかくいつさう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる
（あめゆじゆとてちてけんじや）
青い蕈菜[2]のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつぽうだまのやうに

1 **あめゆじゆとてちてけんじや**　「雨雪を取ってきてください」の意。病床の妹から作者への言葉。岩手県花巻地方の方言。

2 **蕈菜**　スイレン科の多年草。古くから食用としてなじみ深い。

問 **「ふたつのかけた陶椀」という表現から、どのようなことが分かるか。**

このくらいみぞれのなかに飛びだした
（あめゆじゆとてちてけんじや）
蒼鉛[3]いろの暗い雲から
みぞれはびちよびちよ沈んでくる
ああとし子[4]
死ぬといふいまごろになつて
わたくしをいつしやうあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから
（あめゆじゆとてちてけんじや）
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽、気圏[5]などとよばれたせかいの

3 蒼鉛　ビスマス。金属元素の一つ。鉱石は、やや赤みを帯びた銀白色をしている。

4 とし子　作者の二歳年下の妹の通称。戸籍名は宮沢トシ。大正十一（一九二二）年十一月二十七日、二十四歳で病没した。

5 気圏　地球を取り囲む気体の存在している範囲。大気圏。

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
…ふたきれのみかげせきざい[6]に
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系[7]をたもち
すきとほるつめたい雫（しづく）にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ
（Ora Orade Shitori egumo[8]）
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あぁあのとざされた病室の

6 **みかげせきざい**　一般には御影石（みかげいし）といい、花崗岩（かこうがん）質の石材のこと。

7 **二相系**　みぞれが氷（固体）の相と水（液体）の相との二つの相から成り立っていること。

8 **Ora Orade Shitori egumo**　「私は私で独り行きます」の意。妹の言葉（方言）をローマ字で表記している。

くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
（うまれでくるたて[9]
　こんどはこたにわりやのごとばかりで
　くるしまなあよにうまれてくる）
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

問「やさしくあをじろく燃えてゐる」とは、「いもうと」のどのような様子を表しているか。

9 うまれでくるたて…うまれてくる
「また人に生まれてくるときは、こんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてきます」の意。妹の言葉。



宮沢賢治（みやざわ けんじ） 明治二十九（一八九六）年～昭和八（一九三三）年。詩人・児童文学者。岩手県の生まれ。高等農林学校時代に詩作を始め、農学校教師として、郷土の風土に密着しつつ、農民生活を真摯な態度で歌い上げた。作品に『春と修羅』（詩集）、『注文の多い料理店』『銀河鉄道の夜』（童話）などがある。本文は『新校本 宮澤賢治全集 第二巻』（平成七（一九九五）年刊）によった。

参考

人生の〈救い〉としての詩

詩が扱う主題には、生命や愛の賛歌だけではなく、人生の暗い面、はかない面を取り扱ったものがたくさんあります。しかし、悲しみの歌でも、それが生活の奥底に触れ、人間性の真実につながっておれば、私たちを強く感動させます。

言うまでもなく私たちの人生は、喜ばしいことや楽しいことばかりではありません。むしろそうした輝かしい瞬間は移ろいやすくはかないものであって、つらいこと、悲しいことがいくらでもあることを、誰しも経験しております。したがって、私たちの詩も、そのような人生の暗い面から多くの素材を見いだし、生活の真実を啓示しようとします。

ある意味では、われわれが本当に一人の友を求め、心の慰めを必要とするのは、人生に幻滅を感じたときだと言えるでしょう。

私たちは、決定的最終的な救いが、この世に存在しえないことを知っております。人間の生活にとって、最終的なものはありえず、いつでも〈救い〉は瞬間的なものにすぎません。それが、生存の宿命というものではないでしょうか。

そうとすれば、私たちは苦痛や困難、あるいは幻滅によって、自己破壊の道をたどることなく、それから生長してゆくようにしなければなりません。詩は、そのような人間のために、最良の友となることができます。

（鮎川信夫『日本の抒情詩』より）

鮎川信夫 大正九（一九二〇）年～昭和六十一（一九八六）年。詩人・評論家。アジア・太平洋戦争の経験を踏まえて、現代を生きる人間にとって本質的な救いとなるべき詩の可能性を追求した。本文は『鮎川信夫著作集 第三巻』（昭和五十（一九七五）年刊）によった。

汲む

茨木のり子

大人になるというのは
すれっからし[1]になることだと
思い込んでいた少女の頃
立居振舞(たちいふるまい)*の美しい
発音の正確な
素敵な女のひとと会いました
そのひとは私の背のびを見すかしたように
なにげない話に言いました

初々しさが大切なの
人に対しても世の中に対しても

1すれっからし　さまざまな経験を経たために、世間ずれして、悪賢くなること。また、その人。

人を人とも思わなくなったとき
堕落が始(はじま)るのね　堕(お)ちてゆくのを
隠そうとしても　隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし
そして深く悟りました

大人になってもどきまぎしたっていいんだな
ぎこちない挨拶　醜く赤くなる
[2]失語症　なめらかでないしぐさ
子供の悪態にさえ傷ついてしまう
*頼りない生牡蠣(がき)のような感受性
それらを鍛える必要は少しもなかったのだな
年老いても咲きたての薔薇(ばら)　柔らかく
外にむかってひらかれるのこそ難しい

2 **失語症**　ここでは、緊張などの心理的な原因で言葉がうまく話せない状態を指す。

* 立居振舞　見すかす　悪態

あらゆる仕事
すべてのいい仕事の核には
震える弱いアンテナ[3]が隠されている　きっと……
わたくしもかつてのあの人と同じくらいの年になりました
たちかえり
今もときどきその意味を
ひっそり汲むことがあるのです

問「震える弱いアンテナが隠されている」とは、どういうことか。

3 アンテナ　antenna（英語）。電磁波を送信したり受信したりする装置。



茨木のり子（いばらぎ　のりこ）　大正十五（一九二六）年～平成十八（二〇〇六）年。詩人。大阪府の生まれ。同人誌『櫂』を川崎洋と創刊。平明な言葉を用い、明るさを失わず、人間の自立的な生き方を人々に喚起した。詩集に『自分の感受性くらい』『倚りかからず』などがある。「汲む」は『鎮魂歌』（昭和四十（一九六五）年刊）の中の一編で、本文は『茨木のり子詩集』（昭和四十四（一九六九）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 室生犀星「小景異情」（二八六〜二八七ページ）において、「ふるさと」と「みやこ」はどのような関係にあるか、作者の生きた時代なども参考にして話し合ってみよう。

2 萩原朔太郎「およぐひと」（二八八ページ）では、全体的に平仮名表記が多用されているが、それがどのような効果をもたらしているか、考えてみよう。

3 宮沢賢治「永訣の朝」（二八九〜二九二ページ）において、「いもうと」への思いと「みぞれ」や「雪」との描写は、どのように関連しているか、まとめてみよう。

4 茨木のり子「汲む」（二九四〜二九六ページ）において、「大人になる」ことと「初々しさ」とはどのような関係にあるか、作者の考えの変化を中心にまとめてみよう。

5 詩の中で用いられている比喩や反復などの表現技法を抜き出し、それらが、それぞれの作品の文脈の中で、どのような効果を持つか、考えてみよう。

❖言葉と表現

1 「涙ぐむ」（二八六・7）の接尾語「ぐむ」には、どのような意味と働きがあるか、調べてみよう。

2 動詞「汲む」（二九六・7）について、詩の中で使われているのと同じ意味での使い方になるよう、短文を作ってみよう。

◆文語定型詩と口語自由詩を読み比べる

近代以降の詩の最も大きな特徴は、五・七・五・七・七という古典的な形式に縛られなくなったことである。近代以降の詩人たちは、音数律による安定したリズムとは別種の口語的なリズムや、通常の散文には見られない特徴的な表記を用いて、一連の言葉を精彩ある詩として輝かせる工夫を凝らしてきた。一方で、もともとなじみ深い古典的な修辞技法や題材を取り入れることで、かえって新しい時代感覚を際立たせる詩も多く生み出されている。日本の古典詩歌の豊かな文化的蓄積は、その延長線上に優れた作品を成立させたり、また詩的表現を革新しようとする原動力になったりしているのである。この教科書に掲載されている四編の詩が、詩歌の歴史とどのような関係を結び、どのようにして散文とは違う表現世界を形作っているのかを考えてみよう。

課題 文語定型詩と口語自由詩を読み比べ、それぞれの特徴や詩的効果について、話し合ってみよう。

1 文語定型詩である室生犀星「小景異情」（二八六〜二八七ページ）を読み、和歌や短歌との違い、また口語自由詩との違いについて、話し合ってみよう。

①この詩は、故郷への思いをうたっている。この教科書掲載の古典詩歌の中から、故郷への思いを詠んだ作品を探し、どのように詠まれているか、確認する。

②この詩を口語的に書き直してみて、朗読したときのリズムや内容上の印象、また読後感がどのように変わるか、話し合う。

2 口語自由詩である宮沢賢治「永訣の朝」（二八九〜二九二ページ）を読み、口語表現や表記上の工夫がどのような詩的効果を生んでいるか、話し合ってみよう。

①この詩に用いられている平仮名や片仮名、ローマ字などの表記をほかの表記に書き換えた場合、言葉の印象がどう変わるか、確認する。

②この詩の特徴の一つに方言の使用があるが、詩歌や芸能において方言が用いられた例を探し、その表現効果について考える。

おわりに

大人にはわからない日本文学史

高橋源一郎（たかはしげんいちろう）

初出『大人にはわからない日本文学史 ことばのために』平成二十一（二〇〇九）年

ずいぶん昔のことです。

わたしは、かなり遅れて（解散直前になって）[1]ビートルズのファンになりました。わたしの周りで、音楽に「うるさい」友達は、ビートルズが来日する前からファンでした。そういうことはよくあることじゃないでしょうか。

わたしは映画の『ビートルズがやって来る／ヤア！ ヤア！ ヤア！』を見て（もちろん初公開されたときよりずっと後になってのことです）、「こりゃ、すごい！」と思いました。スタイルも、センスも、曲も、何もかもが、です！

そして、友人たちに「ビートルズってすごいんだね？」と言いました。すると、友人たちは、すっかりわたしをバカにして「おまえ、いったい、いつの時代に生きてんだよ。」と言ったのです。

1 **ビートルズ** The Beatles 一九六〇年代から七〇年に活躍したイギリス出身の四人組のロックバンド。斬新な楽曲やファッションは世界の若者を熱狂させ、社会現象になった。初来日は一九六六年。『ビートルズがやって来る／ヤア！ヤア！ヤア！』は、一九六四年公開。

わたしはビートルズの過去の名曲を聴き、レコードを買い、「こんな偉大な人たちと同じ時代に生きていて良かった！」と思いました。そして、ついに、あの日がやってきたのです。つまり、「ビートルズの新曲」がラジオで（わたしにとって）初めて放送される日が。

わたしは、ラジオの前で正座し、激しく緊張したまま、その瞬間を待っていたのでした。おそらく、「[2]玉音放送」を聞いた日本人たちも同じ気持ちだったに違いありません。

やがて、アナウンサー（[3]DJだったかもしれません）が簡単に曲を紹介すると、最後に「ビートルズの新曲です。」と言いました。

そして、ピアノの音が流れ始めました。それは「[4]レディ・マドンナ」という曲でした。

わたしは何とも言えぬ複雑な、そして大きな感動に駆られていました。そのせいで、きちんと曲を聴く余裕などありませんでした。

わたしは「レディ・マドンナ」という新曲を聴いたことにではなく、「歴史的瞬間」に



映画「ビートルズがやって来る
ヤァ！ ヤァ！ ヤァ！」ポスター

2 **玉音放送**　ここでは、一九四五年八月十五日に、昭和天皇が、アジア・太平洋戦争終結を国民に伝えた放送を指す。

3 **DJ**　ディスク・ジョッキー（disc jockey 英語）の略。ここでは、音楽の選曲・解説やおしゃべりをしながら、ラジオ番組を進行する人。

4 **「レディ・マドンナ」**　一九六八年、発表の楽曲。

問 **「感動」とは、どのような感動か。**

問 **自分のことを「すごく単純」というのは、なぜか。**

5 **ベートーヴェン**
Ludwig van Beethoven　一七七〇年～一八二七年。ドイツの作曲家。

6 **モーツァルト**
Wolfgang Amadeus Mozart　一七五六年～一七九一年。オーストリアの作曲家。

7 **ダ・ヴィンチ**　Leonardo

立ち会ったことに感動していたのです。

それは、わたしが生まれて初めて「歴史」というものに触れた瞬間でした。

今思えば、わたしは、すごく単純な少年でした。

音楽というものは（よく知らないけど）、ベートーヴェン[5]やモーツァルト[6]といった過去の偉大な作曲家が過去に作ったものであり（だから、ビートルズは例外でした）、絵というものは（よく知らないけど）、ダ・ヴィンチ[7]やゴッホ[8]といった過去の偉大な画家が描いたものだ、と思っていました。

ついでに言うなら、文学というものは（読んだことはないけれど）、トルストイ[9]やゲーテ[10]やセルバンテス[11]やドストエフスキー[12]や夏目漱石[13]といった過去の偉大な作家が書いたものだ、と思っていました（もしかしたら、それは正解かもしれませんが）。

じゃあ、新しい音楽や新しい絵や新しい文学というものは、どこにあるんでしょう。

そんなこと知ったことか、というのが、わたしの唯一の考えだったのです。あるかもしれないけど、それはつまらないものに決まってる、とさえ思っていたのです。いったい、どうして、わたしはそんなことを考えるようになったのでしょう。

おそらく、それは、わたしが学校で受けた歴史教育のせいだったのです。

5 da Vinci　一四五二年～一五一九年。イタリア・ルネッサンス期の画家、彫刻家・科学者。

6 ゴッホ　Vincent van Gogh　一八五三年～一八九〇年。オランダの画家。

7 トルストイ　Lev N. Tolstoi　一八二八年～一九一〇年。ロシアの文学者。

8 ゲーテ　Johann Wolfgang von Goethe　一七四九年～一八三二年。ドイツの文学者・科学者・政治家。

9 セルバンテス　Miguel de Cervantes Saavedra　一五四七年～一六一六年。スペインの小説家。

10 ドストエフスキー　Fyodor M. Dostoevskii　一八二一年～一八八一年。ロシアの小説家。

11 夏目漱石　一八六七年～一九一六年。日本の文学者。

古代から中世、そして近代へ。「歴史」の中ではたくさんの事件が起こる。たくさんの偉大な人たち（ナポレオン[14]に織田信長[15]（おだのぶなが））が、次々現れて、新しい時代を作ってゆく。

ところが、「現代」に近づくほど、「歴史」の授業は*加速度的につまらなくなってくる。偉大なものも、立派なものも、おもしろいものも、どんどん少なくなってきて、ついにはゼロになる。わたしは、「歴史」とはそういうものだと思うようになりました。つまり、昔ははやっていたけど、現在に近づくほど*さびれてくるものだと。

おもしろそうなものは、いつも過去にある。

立派なものや価値のあるものは、いつも過去にある。

それが、幼いわたしに、いつの間にか備わった考え方でした。

この「歴史」というものに関する独特の考え方は、わたしが作り出したものではありません。人類が、自分がしてきたことを整理し、理解するために、作り出した[16]ノーベル賞級の発明だったのです。

「現在」とは自分のことです。

少し古い「過去」とは父親（や母親）であり、もっと古い「過去」は祖父（や祖母）なのかもしれません。

父親（や母親）は、自分よりずっといろいろなことを知っているし、力もある。そして、

14 **ナポレオン** Napoléon Bonaparte 一七六九年～一八二一年。フランス第一帝政の皇帝。

15 **織田信長** 一五三四年～一五八二年。戦国・安土桃山時代の武将。

16 **ノーベル賞** スウェーデンのアルフレッド・ノーベルの遺産を基にした、世界的な賞。物理学、化学、生理学・医学、文学、平和、経済学の部門がある。

問 **父母や祖父母のたとえから、著者は距離感と立派さの関係をどのように捉えていることが分かるか。**

祖父（や祖母）になると、想像できないぐらいいろいろな経験をした、立派な人だ。そんなふうに、人々は考え、「歴史」もそういうものだと考えることにしたのではないでしょうか。

けれど、今では、父親（や母親）や祖父（や祖母）への敬意はすっかりなくなってしまいました。「歴史」がなくなった、と言われているのは、もしかしたら、そのせいなのかもしれません。

もう一つ、これとは全く別の考え方も存在します。

最も古い「過去」は産まれたばかりの赤ちゃんみたいなものだ。何もかもが新しく、新鮮で、みずみずしさに満ちている。ちょっと古い「過去」になると、その赤ちゃんは成長して、青年になり、さらに大人になる。傷つき、自分の可能性を疑い、でも、少しずつ、経験を積んでゆく。そして、最後に「現在」に到達する。ボロボロで*老いさらばえた姿になって。

一見、正反対に見える、「歴史」に関する、この二つの考え方には、実は共通点が存在します。

それは、どちらも、時間というものは*「不可逆的」だと考えている、ということです。どんなに激しく求めても、「過去」は戻ってはこないのです。しかし、本当に、そうな

* 加速度的　さびれる　老いさらばえる　不可逆的

のでしょうか？

わたしはもう半世紀以上も、たくさんの本を、とりわけ小説を読んできました。「現在」の小説を、ちょっと「過去」の小説を、それから、ものすごく「過去」の小説を。そして、ある日、わたしは突然、あることに気づいたのです。

それらの小説たちが、僕が聞いてきた評判とは、*えらく違ったものであることに、です。その「評判」というのは、「文学史」という、「文学」に関する「歴史」の中での評判でした。「文学史」という「歴史」の中で、例えば、「過去」の小説たちは、時には、敬愛すべき祖父（や祖母）のように、時には、みずみずしい赤ちゃんのように、取り扱われてきました。どちらにせよ、遠い「過去」の出来事、というか、遠い「過去」に、もう死んでしまった知らない作家が書いた作品であることに変わりはなかったのです。

なんか違う、とわたしは思いました。

それらは、祖父（や祖母）ではなく、赤ちゃんでもなく、よく知っている友達のような気がしたのです。

わたしは、文学をよく知っている人たちに、こう言いました。

「『過去』なんてないんじゃないかな。五十年前も、百年前も、みんな今と同じようなこ

とを考えて小説を書いていたんじゃないかな。小説は、進歩もしてないし、退化もしてないし、要するに、あまり変わってないんじゃないかな。なんか、そんな気がする。」

すると、その人たちは、こう答えたのです。

「なに、子どもみたいなこと言ってるんだい。『文学史』を読んでみなよ。そんなこと、どこにも書いてないぜ。」

わたしは、ずいぶん久しぶりに「文学史」というものを読んでみました。確かに、その人たちの言うとおりだったのです。

わたしが、自分で「文学史」を書こうと思ったのは、そのときが最初だったかもしれません。

わたしは、「過去」の小説を、その「評判」から取り戻そうと思いました。陳列されているガラスの棚から脱走するよう、説得してみることにしました。要するに、「過去」で眠っているのをやめ、起きて、現在に遊びにくるよう言ったのです。

そして、「現在」の小説には、その逆に、「過去」に行って、「過去」の小説と遊んでくるよう命じたのでした。

「歴史」というものは、鑑賞するために壁に掛けられた絵ではありません。なんと言うか、

問「確かに、その人たちの言うとおりだったのです」から、筆者のどのような思いが読み取れるか。

問「説得してみる」「眠っている」「遊びにくる」などの表現から、筆者が「過去」の小説をどのように捉えていることが分かるか。

＊えらく

それを使って、誰も考えたことのないヘンテコなものを作り出せるオモチャみたいなものではないでしょうか。いや、そうであるべきなのです。

問「いや」という否定から、どのような状況や筆者の考えが読み取れるか。



高橋源一郎（たかはし げんいちろう） 昭和二十六（一九五一）年〜。小説家。広島県の生まれ。日本文学の作家や作品を題材に想像を膨らませるなど、既成の概念を超える小説とともに、評論でも活躍している。『さようなら、ギャングたち』『日本文学盛衰史』（小説）、『文学がこんなにわかっていいかしら』（評論）など。本文は『大人にはわからない日本文学史』（平成二十一（二〇〇九）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1 筆者が学校で学んだと述べている「歴史」についての二つの考え方とはどのようなものか、整理してみよう。

2 1の二つの考え方の共通点は何か、考えてみよう。

3 筆者にとって、「歴史」とはどのようなものか、以下の点について、整理してみよう。

(1)「現在」と「歴史」の関係をどのように考えているか。

(2)「過去」の小説とどのような関係を結びたいと考えているか。

言葉と表現

1 次の言葉の意味・用法を辞書で調べてみよう。

(1)うるさい（二九九・3） (2)さびれる（三〇二・6）

(3)老いさらばえる（三〇三・11）

2 次の言葉の意味・用法を辞書で調べ、それを使って、時間の感じ方に関わる短文を作ってみよう。

(1)加速度的（三〇二・3） (2)不可逆的（三〇三・15）

漢字熟語

公開 299　瞬間 300　余裕 300　単純 301　例外 301

唯一 301　立派 302　価値 302　独特 302　想像 303

経験 303　敬意 303　可能性 303　突然 304　評判 304

進歩 305　退化 305　陳列 305　鑑賞 305

◇単元の言語活動

◆「自分の文学史」を作る

この単元では、「文学史」という「歴史」について書かれた文章を読んだ。既に存在する「文学史」は誰かによって書かれたものである。自分は、どの作品にどのような価値を見いだし、どのような「文学史」を作るのか、答えは一つではない。

課題 古典から現代までの文学（詩歌・漢文を含む）の中から、自分が良いと思うものを選び、「自分の文学史」を作ってみよう。

1 古典から現代までの文学（詩歌・漢文を含む）の中から、興味を持ったものを三つ以上選び、それぞれの作品を読み直して、概要（あらすじ）をまとめてみよう。

2 それぞれの作品について、良いと思う点・自分が引き付けられる点を中心に据えて、推薦文を書いてみよう。

3 グループを作り、順番に、自分の選んだ作品とその概要（あらすじ）・推薦文を発表してみよう。発表後、順番に質問し、作品の内容や良さについて相互に理解を深めよう。

4 発表と質問を踏まえて、概要（あらすじ）・推薦文について加筆・修正し、各作品にキャッチフレーズをつけ、「自分の文学史」をまとめてみよう。

付録

- 文法要覧
- 日本文学史年表
- 重要古語の解説および索引
- 漢文の基本句形
- 漢文の重要単語
- 常用漢字表
- 常用漢字表　付表
- 読書のすすめ
- 参考図録

文法要覧

文語・口語動詞活用表

文語

活用の種類	下に続く語の例	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
		—ず	—けり —たり —て	言い切り	—こと —とき	—ど —ども	命令の言い切り
四段	カ行 咲く	か a	き i	く u	く u	け e	け e
	ガ行 脱ぐ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	サ行 流す	さ	し	す	す	せ	せ
	タ行 待つ	た	ち	つ	つ	て	て
	バ行 遊ぶ	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ行 読む	ま	み	む	む	め	め
	ラ行 散る	ら	り	る	る	れ	れ
	ハ行 言ふ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ

口語

活用の種類	下に続く語の例	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		—ない —う —よう	—ます —た —て	言い切り	—こと —とき	—ば	命令の言い切り
五段	カ行 咲く	か・こ a・o	き・い i	く u	く u	け e	け e
	ガ行 脱ぐ	が・ご	ぎ・い	ぐ	ぐ	げ	げ
	サ行 流す	さ・そ	し	す	す	せ	せ
	タ行 待つ	た・と	ち・っ	つ	つ	て	て
	バ行 遊ぶ	ば・ぼ	び・ん	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ行 読む	ま・も	み・ん	む	む	め	め
	ラ行 散る	ら・ろ	り・っ	る	る	れ	れ
	ワ・ア行 言う	わ・お	い・っ	う	う	え	え

上二段									上一段								下一段	ラ変	ナ変
ラ	マ	バ	タ	ダ	ガ	カ	ヤ	ハ	マ	ハ	ナ	カ	ワ	ヤ			カ	ラ	ナ
降る	試む	滅ぶ	落つ	閉づ	過ぐ	起く	悔ゆ	強ふ	見る	干る	似る	着る	居る	射る			蹴る	あり	死ぬ
お	こころ	ほろ	お	と	す	お	く	し	(み)	(ひ)	(に)	(き)	(ゐ)	(い)			(け)	あ	し
り	み	び	ち	ぢ	ぎ	き	い	ひi	み	ひ	に	き	ゐ	いi			けe	ら	な
り	み	び	ち	ぢ	ぎ	き	い	ひi	み	ひ	に	き	ゐ	いi			けe	り	に
る	む	ぶ	つ	づ	ぐ	く	ゆ	ふu	みる	ひる	にる	きる	ゐる	いi			ける	り	ぬ
るる	むる	ぶる	つる	づる	ぐる	くる	ゆる	ふる	みる	ひる	にる	きる	ゐる	いi			ける	る	ぬる
るれ	むれ	ぶれ	つれ	づれ	ぐれ	くれ	ゆれ	ふれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	ゐれ	いれ			けれ	れ	ぬれ
りよ	みよ	びよ	ちよ	ぢよ	ぎよ	きよ	いよ	ひよ	みよ	ひよ	によ	きよ	ゐよ	いよ			けよ	れ	ね

上一段																			
ラ	マ	バ	タ	ザ	ガ	カ	ア	ア	マ	ハ	ナ	カ	ア	ア			ラ	ラ	ナ
降りる	試みる	滅びる	落ちる	閉じる	過ぎる	起きる	悔いる	強いる	見る	干る	似る	着る	居る	射る			蹴る	ある	死ぬ
お	こころ	ほろ	お	と	す	お	く	し	(み)	(ひ)	(に)	(き)	(い)	(い)			け	あ	し
り	み	び	ち	じ	ぎ	き	い	い	み	ひ	に	き	い	いi			ら・ろ	ら・り・っ	な・のに・ん
り	み	び	ち	じ	ぎ	き	い	い	み	ひ	に	き	い	いi			り・っ		
りる	みる	びる	ちる	じる	ぎる	きる	いる	いる	みる	ひる	にる	きる	いる	いi			る	る	ぬ
りる	みる	びる	ちる	じる	ぎる	きる	いる	いる	みる	ひる	にる	きる	いる	いi			る	る	ぬ
りれ	みれ	びれ	ちれ	じれ	ぎれ	きれ	いれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	いれ	いi			れ	れ	ね
りろ・りよ	みろ・みよ	びろ・びよ	ちろ・ちよ	じろ・じよ	ぎろ・ぎよ	きろ・きよ	いろ・いよ	いろ・いよ	みろ・みよ	ひろ・ひよ	にろ・によ	きろ・きよ	いろ・いよ	いろ・いよi			れ	れ	ね

サ変	カ変	下二段																
サ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ワ	ヤ	ハ	ア		
す 念ず	来(く)	流る	改む	比ぶ	経(ふ)	兼ぬ	撫づ	捨つ	混ず	寄す	逃ぐ	受く	飢う	越ゆ	考ふ	得(う)		
ねん（す）	（く）	なが	あらた	くら	（ふ）	か	な	す	ま	よ	に	う	う	こ	かんが	（う）		
せ	こ	れ	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	ゑ	え	へ	え	e	
し	き	れ	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	ゑ	え	へ	え	e	
す	く	る	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	ゆ	ふ	う	u	
する ずる	くる	るる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる	ゆる	ふる	うる	u	
すれ ずれ	くれ	るれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ	ゆれ	ふれ	うれ	u	
せよ ぜよ	こ・こよ	れよ	めよ	べよ	へよ	ねよ	でよ	てよ	ぜよ	せよ	げよ	けよ	ゑよ	えよ	へよ	えよ	e	

サ変	カ変	下一段																
サ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ア	ア	ア		
する 念ずる	来る	流れる	改める	比べる	経る（へ）	兼ねるか	撫でるな	捨てるす	混ぜるま	寄せるよ	逃げるに	受けるう	飢えるう	越えるこ	考えるかんが	得る（え）		
ねん（す）	（く）	なが	あらた	くら														
せ・し・さ じ・ぜ	こ	れ	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	え	え	え	e	
し	き	れ	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	え	え	え	e	
する ずる	くる	れる	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	える	える	える	e	
する ずる	くる	れる	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	える	える	える	e	
すれ ずれ	くれ	れれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ	えれ	えれ	えれ	えれ	e	
しろ・せよ じろ・ぜよ	こい	れろ・れよ	めろ・めよ	べろ・べよ	へろ・へよ	ねろ・ねよ	でろ・でよ	てろ・てよ	ぜろ・ぜよ	せろ・せよ	げろ・げよ	けろ・けよ	えろ・えよ	えろ・えよ	えろ・えよ	えろ・えよ	e	

◆文語・口語形容詞活用表

文語	種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	ク活用	白し	しろ	(く) から	く かり	し ○	き かる	けれ ○	○ かれ
	シク活用	美し	うつく	(しく) しから	しく しかり	し ○	しき しかる	しけれ ○	○ しかれ

口語	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	白い	しろ	かろ	く かっ	い	い	けれ	○
	美しい	うつくし						

◆文語・口語形容動詞活用表

文語	種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	ナリ活用	静かなり	しづか	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
	タリ活用	堂々たり	だうだう	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

口語	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
	静かだ	しずか	だろ	だっ で に	だ	な	なら	○

接続	助動詞の種類	主な意味	活用						活用の型	接続する語の種類
			未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形		
未然形	受身（うけみ） 尊敬 可能 自発	受身（…れる・…られる） 尊敬（…なさる・お…になる） 可能（…できる） 自発（自然と…れる）	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段型（自発、可能に命令形はない）	四段、ナ変、ラ変動詞の未然形
			られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ		右以外の動詞の未然形
	使役 尊敬	使役（…せる・…させる） 尊敬（…なさる・お…になる）	せ	せ	す	する	すれ	せよ	下二段型	四段、ナ変、ラ変動詞の未然形
			させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ		右以外の動詞の未然形
			しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ		活用語の未然形
	打消（うちけし）	打消（…ない）	ず	ざり	ず	ぬ ざる	ね ざれ	ざれ	特殊型	
	推量	推量（…だろう）意志（…（よ）う）仮定（…としたら）婉曲（えんきょく）（…ような）適当（…のがよい）勧誘（…のがよい・…てください）	む 〈ん〉	○	む 〈ん〉	む 〈ん〉	め	○	四段型	
			むず 〈んず〉	○	むず 〈んず〉	むずる 〈んずる〉	むずれ 〈んずれ〉	○	サ変型	
		反実仮想（もし…としたら…だろうに）実現不可能な願望（…ばよかったのに）ためらい（…（よ）うかしら）	ましか （ませ）	○	○	ましる	ましか	○	特殊型	活用語の未然形
	打消推量	打消推量（…ないだろう） 打消意志（…まい・…ないつもりだ）	じ	○	じ	じる	じ	○	特殊型	
	願望	願望（…たい・…てほしい）	まほし	まほしく まほしから まほしかり	まほし	まほしき まほしかる	まほしけれ	○	形容詞シク活用型	
連用形	過去	過去（…た）	き	○	き	し	しか	○	特殊型	活用語の連用形（カ変、サ変は未然形にも接続）
		詠嘆（…（た）ことよ）	（け）	○	けり	ける	けれ	○	ラ変型	
	完了	完了（…た・…てしまった） 強意（確述）（きっと…・たしかに） 並列（…たり…たり）	つ	て	つ	つる	つれ	てよ	下二段型	活用語の連用形
			ぬ	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ変型	
		完了（…た・…てしまった） 存続（…ている・…てある）	たり	たり	たり	たる	たれ	たれ	ラ変型	

連		終止形								その他	連体形・体言	
推量	願望	推量				伝聞推定	打消推量			完了	比況	断定	
けむ〈けん〉	たし	べし	らむ〈らん〉	らし	めり	なり	まじ	なり	たり	り	ごとし	たり	なり
過去推量（…ただろう） 過去の原因推量（どうして…たのだろう） 過去の伝聞（…たそうだ・…たとかいう） 過去の婉曲（…たような）	願望（…たい・…てほしい）	推量（…だろう） 意志（…〈よう〉） 可能（…ことができる） 当然（…べきだ・…はずだ） 適当（…のがよい） 命令（…なさい）	現在推量（今ごろ…ているだろう） 現在の原因推量（どうして…のだろう） 現在の伝聞（…そうだ・…とかいう） 現在の婉曲（…ような）	推定（…ようだ・…らしい）	推定（…ようだ・…ように見える） 婉曲（…ようだ）	伝聞（…そうだ・…とかいう） 推定（…ようだ・…らしい）	打消推量（…ないだろう） 打消意志（…まい） 不可能（…できそうもない） 打消当然（…はずがない） 不適当（…ないのがよい） 禁止（…てはならない）	断定（…だ・…である） 存在（…にある・…にいる）	断定（…だ・…である）	比況（…ようだ・…と同じだ） 例示（…たとえば…ようなものだ）	完了（…た） 存続（…ている・…てある）		
○	（たく） たから	（べく） べから	○	○	○	○	（まじく） まじから	なら	たら	ら	（ごとく）	たら	なり
○	たく たかり	べく べかり	○	○	（めり）	なり	まじく まじかり	なり に	たり と	り	ごとく	たり	なり
けむ〈けん〉	たし	べし	らむ〈らん〉	らし	めり	なり	まじ	なり	たり	り	ごとし	たり	なり
けむ〈けん〉	たき たかる	べき べかる	らむ〈らん〉	らし	める	なる	まじき まじかる	なる	たる	る	ごとき	たる	なる
けめ	たけれ	べけれ	らめ	らし	めれ	なれ	まじけれ	なれ	たれ	れ	○	たれ	なれ
○	○	○	○	○	○	○	○	なれ	たれ	れ	○	たれ	なれ
四段型	形容詞ク活用型	形容詞ク活用型	四段型	特殊型	ラ変型	ラ変型	形容詞シク活用型	形容動詞ナリ活用型	形容動詞タリ活用型	ラ変型	形容詞ク活用型	形容動詞タリ活用型	形容動詞ナリ活用型
				活用語の終止形（ラ変型活用語には連体形）				体言、活用語の連体形、助詞、副詞			体言、活用語の連体形、助詞	体言	
											四段活用動詞の已然形（命令形という説もある）、サ変動詞の未然形		

接続	助動詞の種類	主な意味		活用						活用の型	接続する語の種類
未然形	れる	受身 尊敬 可能 自発	未然形	れ	れ	れる	れる	れれ	れろ れよ	下一段型 （可能、自発に命令形はない）	五段活用動詞の未然形、サ変動詞の未然形「さ」
			連用形	れ	れ	れる	れる	れれ			右以外の動詞・助動詞「せる」「させる」の未然形、サ変の未然形「せ」
			終止形	れる	れる	れる	れる	れる			
			連体形	れる	れる	れる	れる	れる			
			仮定形	れれ	れれ	れれ	れれ	れれ			
			命令形	れろ れよ	れろ れよ	れろ れよ	れろ れよ	れろ れよ			
	せる	使役	未然形	せ	せ	させ	させ	させ		下一段型	五段活用動詞の未然形、サ変動詞の未然形「さ」
			連用形	せ	せ	させ	させ	させ			右以外の動詞の未然形
			終止形	せる	せる	させる	させる	させる			
			連体形	せる	せる	させる	させる	させる			
			仮定形	せれ	せれ	させれ	させれ	させれ			
			命令形	せろ せよ	せろ せよ	させろ させよ	させろ させよ	させろ させよ			
	ない	打消	未然形	なかろ	なかろ	なかろ	なかろ	なかろ		形容詞型	動詞・動詞型活用の助動詞の未然形
			連用形	なく なかっ	なく なかっ	なく なかっ	なく なかっ	なく なかっ			
			終止形	ない	ない	ない	ない	ない			
			連体形	ない	ない	ない	ない	ない			
			仮定形	なけれ	なけれ	なけれ	なけれ	なけれ			
			命令形	○	○	○	○	○			
	ぬ(ん)	打消	未然形	○	○	○	○	○		特殊型	五段活用動詞・形容詞・形容動詞・その同型の助動詞などの未然形 右以外の動詞・助動詞「(ら)れる」「(さ)せる」の未然形（サ変動詞は未然形の「し」）
			連用形	ず	ず	ず	ず	ず			
			終止形	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)			
			連体形	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ぬ(ん)			
			仮定形	ね	ね	ね	ね	ね			
			命令形	○	○	○	○	○			
	う	推量 意志 勧誘	未然形	○	○	○	○	○		特殊型	活用語の連用形
			連用形	○	○	○	○	○			
			終止形	う	う	う	う	う			
			連体形	う	う	う	う	う			
			仮定形	う	う	う	う	う			
			命令形	○	○	○	○	○			
	よう	推量 意志 勧誘	未然形	○	○	○	○	○		特殊型	動詞・助動詞「(ら)れる」「(さ)せる」の連用形
			連用形	○	○	○	○	○			
			終止形	よう	よう	よう	よう	よう			
			連体形	（よう）	（う）	（よう）	（よう）	（よう）			
			仮定形	○	○	○	○	○			
			命令形	○	○	○	○	○			
	た	過去 完了 存続	未然形	たろ	たろ	たろ	たろ	たろ		特殊型	動詞・助動詞「(ら)れる」「(さ)せる」の連用形
			連用形	○	○	○	○	○			
			終止形	た	た	た	た	た			
			連体形	た	た	た	た	た			
			仮定形	たら	たら	たら	たら	たら			
			命令形	○	○	○	○	○			
	たい	希望	未然形	たかろ	たかろ	たかろ	たかろ	たかろ		形容詞型	動詞・助動詞型活用の助動詞の連用形、形容詞・形容動詞・助動詞「ない」「たい」の語幹
			連用形	たく たかっ	たく たかっ	たく たかっ	たく たかっ	たく たかっ			
			終止形	たい	たい	たい	たい	たい			
			連体形	たい	たい	たい	たい	たい			
			仮定形	たけれ	たけれ	たけれ	たけれ	たけれ			
			命令形	○	○	○	○	○			
	たがる	希望	未然形	たがろ	たがろ	たがろ	たがろ	たがろ		五段型	動詞・動詞型活用の助動詞の連用形
			連用形	たがり たがっ	たがり たがっ	たがり たがっ	たがり たがっ	たがり たがっ			
			終止形	たがる	たがる	たがる	たがる	たがる			
			連体形	たがる	たがる	たがる	たがる	たがる			
			仮定形	たがれ	たがれ	たがれ	たがれ	たがれ			
			命令形	○	○	○	○	○			
	ます	丁寧	未然形	ませ ましょ	ませ ましょ	ませ ましょ	ませ ましょ	ませ ましょ		特殊型	動詞・動詞型活用の助動詞の連用形
			連用形	まし	まし	まし	まし	まし			
			終止形	ます	ます	ます	ます	ます			
			連体形	ます	ます	ます	ます	ます			
			仮定形	ますれ	ますれ	ますれ	ますれ	ますれ			
			命令形	○	○	○	○	○			
	そうだ	様態	未然形	そうだろ	そうだろ	そうだろ	そうだろ	そうだろ		形容動詞型	動詞・形容詞・一部の助動詞の終止形、体言、形容動詞語幹、格助詞「の（体言の代用）」「まで」「だけ」などの副助詞
			連用形	そうで そうに	そうで そうに	そうで そうに	そうで そうに	そうで そうに			
			終止形	そうだ	そうだ	そうだ	そうだ	そうだ			
			連体形	そうな	そうな	そうな	そうな	そうな			
			仮定形	そうなら	そうなら	そうなら	そうなら	そうなら			
			命令形	○	○	○	○	○			
	らしい	推定	未然形	○	○	○	○	○		形容詞型	
			連用形	らしく らしかっ	らしく らしかっ	らしく らしかっ	らしく らしかっ	らしく らしかっ			
			終止形	らしい	らしい	らしい	らしい	らしい			
			連体形	らしい	らしい	らしい	らしい	らしい			
			仮定形	らしけれ	らしけれ	らしけれ	らしけれ	らしけれ			
			命令形	○	○	○	○	○			

終止	連体形・体言					
	断定				伝聞	打消推量
	だ	です	ようだ	比況	そうだ	まい
	断定	丁寧な断定	比況 例示 不確かな断定		伝聞	打消推量 打消意志
五段活用動詞・助動詞「たがる」「ます」の終止形、その他の動詞・助動詞「(さ)せる」「(ら)れる」の未然形	だろ	でしょ	ようだろ	○	そうで	○
活用語の終止形	だっ で	でし	ようだっ ようで ように	○	そうで	○
体言、「の(体言の代用)」などの格助詞、「だけ」「まで」などの副助詞	だ	です	ようだ	○	そうだ	まい
体言、格助詞「の(体言の代用)」「から」「だけ」「まで」などの副助詞	(な)	(です)	ような	○	○	まい
用言、一部の助動詞、助動詞「ぬ」「た」の連体形、格助詞「の」、連体詞「この、その、あの、どの」	なら	○	ようなら	○	○	○
	形容動詞型	特殊型	形容動詞型	特殊型	形容動詞型	特殊型

◆文語・口語助詞一覧表

種類	用法	文語	口語
格助詞	主に体言に付き、その文節が他の文節とどのような関係にあるかを示す。	が・の・を・に・にて・して・へ・と・より・から	が・の・を・に・へ・と・より・から・で・や
接続助詞	主に活用語に付き、その文節と他の語や文節との接続関係を示す。	ば・と・とも・ど・ども・で・て・して・つつ・ながら・が・を・に・ものゆゑ・ものから・ものを・ものの	ば・と・ても(でも)・て(で)・つつ・ながら・が・けれど(けれども)・のに・ので・ものの・から・たり(だり)・し
副助詞	種々の語に付き、副詞のようにある意味を添えることによって、下の用言を修飾する。	だに・すら(そら)・さへ・のみ・ばかり・まで・など(なんど)・し・しも	他を類推—も・すら・さえ・でも 限定—しか・だけ 程度—ばかり・ほど・くらい(ぐらい) 範囲—まで　例示—など　強意—こそ 主題の提示—は　並列—なり・やら・か
係助詞	文中の語を強調したり、文末の語にかかって、強意・疑問・反語の意味を添えたりする。	は・も・ぞ・なむ(なん)・や(やは)・か(かは)・こそ	
終助詞	文末で用いられ、禁止や詠嘆などさまざまな意味を添える。	な(禁止)・そ・なむ(なん)・ばや・にしが・にしがな・てしが・てしがな・もがな・がな・か・かな・かも・な(詠嘆)・かし	禁止—な　疑問—か・かしら・の 詠嘆—な(なあ)・わ・こと 念押し—ぞ(ぜ)・ね(ねえ)・さ・よ 強意—とも　呼びかけ—や　理由—もの
間投助詞	文節の終わりに置かれて、詠嘆や呼びかけなどの意味を添える。	を・や・よ	ね・さ・よ

種類	語	意味・用法	接続
格助詞	が・の	主格（…が） 連体修飾格（…の） 同格（…で） 体言の代用（…のもの） 比喩（…のように）※「の」のみの用法。	
	を	動作の対象（…を） 動作の起点（…を） 経過する時・場所（…を・…を通って）	
	に	場所・時間（…に・…で） 方向・帰着点（…に・…へ） 変化の結果（…に・…と） 動作の対象（…に） 原因・理由（…によって・…のために） 目的（…ために） 受身の相手・使役の対象（…に） 比較の基準（…より・…に比べて） 添加（…（の）うえに）	主に体言、活用語の連体形
	にて	場所・時間（…で・…のときに） 資格・状態（…で・…として） 手段・方法・材料（…で） 原因・理由（…によって・…のために）	
	して	手段・方法（…で・…によって） 動作をともにする相手（…とともに） 使役の対象（…に・…に命じて）	
	へ	動作の方向（…へ）	
	と	動作をともにする相手（…と・…とともに） 変化の結果（…と・…に） 比較の基準（…と・…と比べて） 比喩（…のように）	

接続助詞								格助詞		
つつ	て・して	で	ど・ども	と・とも	ば			から	より	
動作の反復（…しては、また…して） 動作の継続（…し続けて・…ていて） 二つの動作の並行（…ながら）	単純接続（…て） 原因・理由（…ので） 逆接の確定条件（…のに・…けれども）	打消接続（…ないで）	逆接の確定条件（…けれども・…だが・…のに） 逆接の恒常条件（…たとえ）…ても・…ても必ず）	逆接の仮定条件（…たとえ）…ても）	順接の確定条件 原因・理由（…ので・…から） 順接の確定条件 偶然条件（…と・…ところ） 順接の確定条件 恒常条件（…と必ず・…といつも）	順接の仮定条件（もし…ならば）	手段・方法（…で）	原因・理由（…のために・…ので）	動作の起点（…から） 経過する場所（…を・…を通って）	引用（…と・…というので） 並列（…と）
動詞・助動詞の連用形	活用語の連用形	活用語の未然形	活用語の已然形	活用語の終止形	活用語の已然形	活用語の未然形				

ながら	そのままの状態（…のままで） 二つの動作の並行（…ながら） 逆接の確定条件（…のに・…けれども）	動詞・助動詞（動詞型活用・「ず」）の連用形・体言など
が	単純接続（…が） 逆接の確定条件（…けれど・…が・…のに）	
を・に	逆接の確定条件（…けれども・…のに） 順接の確定条件（原因・理由）（…ので・…から） 単純接続（…と・…が・…ところ）	活用語の連体形
ものの ものを ものから ものゆゑ	逆接の確定条件（…のに・…けれども）	
だに	最小限の限定（せめて…だけでも） 類推（…でさえ）	種々の語
すら〈そら〉	類推（…でさえ）	
さへ	添加（…まで〈も〉）	
のみ	限定（…だけ・…ばかり）強意（特に…・とりわけ…）	
ばかり	限定（…だけ） およその程度・範囲（…ほど・…くらい）	
まで	範囲・限度（…まで） 程度（…ほど・…くらいに）	
など〈なんど〉	例示（…など）引用（…などと）婉曲（…など）	
し・しも	強意（訳に反映できないこともある）	
は	提示して強調（…は）区別して強調（…は）	種々の語
も	似たものを列挙（…も） 同類のものの存在を暗に示す（…でも） 強意（…も）	
ぞ なむ〈なん〉	強意（訳に反映できないこともある） ※結びは連体形。	

や〈やは〉 か〈かは〉	疑問（…か） 反語（…か、いや…ない） ※結びは連体形。	
こそ	強意（…こそ）（訳に反映できないこともある） ※結びは已然形。	活用語の終止形（ラ変型には連体形）
な〈禁止〉	禁止（…〈する〉な）	活用語の連用形（カ変、サ変動詞には未然形）
そ	禁止（…〈する〉な） ※単独でも使うが、多く「な〈副詞〉…そ」で禁止の意を表す。	
なむ〈なん〉	他に対する願望（…てほしい）	活用語の未然形
ばや	自己の願望（…たいなあ）	
てしが てしがな にしが にしがな	自己の願望（…たいものだ）	活用語の連用形
もがな がな	願望（…があればなあ・…てほしいなあ）	種々の語
か・かな・かも	詠嘆（…〈だ〉なあ）	体言、活用語の連体形
な〈詠嘆〉	詠嘆（…〈だ〉なあ）	文末
かし	詠嘆（…〈だ〉なあ） 念押し（…よ・…ね）	文末
を	詠嘆（…〈だ〉なあ） 強意（訳に反映できないこともある）	種々の語
や・よ	詠嘆（…〈だ〉なあ）呼びかけ（…よ）	

（重要作品・事項は太字にした。＊印は年代未詳あるいは不確定のもの）

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
上代	和銅	七一三				前八〇〇 イリアス・オデュッセイア（ホメロス）＊
奈良時代	五					前七世紀 詩経・書経＊
	養老	七一七				論語＊
	四					孟子（孟軻）＊
	天平勝宝三	七五一	懐風藻			楚辞（屈原）＊
						前二〇〇 旧約聖書＊
						前二二 淮南子（劉安）＊
						前九七 史記（司馬遷）＊
						礼記＊
						戦国策（劉向）＊
						八二 漢書（班固）＊
						三九七 新約聖書
						五世紀 世説新語（劉義慶）＊
						六一 コーラン（マホメット）
						前一〇〇 殷滅び、周興る＊
						前七五 洛陽に遷都（東周）
						春秋時代始まる
						前五七―前四八 釈迦＊
						前五二頃―前四七九 孔子
						前四〇三 戦国時代始まる
						前三七―前二八九 孟軻＊
						前二四〇―前二六 屈原＊
						前二二 秦の始皇帝、中国を統一
						前一〇一 前漢高祖即位
						前四五―前八六 司馬遷＊
						二二〇 後漢滅び、三国時代、晋、南北朝時代と続く
						三六五―四二七 陶潜
						五八九 隋中国を統一
						六一八 隋滅び、唐興る
						六八九―七四〇 孟浩然
						七〇一―七六一 王維＊
						七〇一―七六二 李白
						七一二―七七〇 杜甫
						七五五 安禄山の乱
				古事記（太安万侶）	五世紀初め頃、王仁が『論語』などを伝来したという	
				風土記の編集を命ず	六世紀半ば頃、仏教が伝わる	
				日本書紀（舎人親王ら）	六四五 大化の改新	
						七一〇 平城京に都を定める
						七五二 東大寺大仏開眼

	古代 中古 平安時代	中世 鎌倉時代
天平宝字三	七五九	
延喜五	九〇五	
承平五	九三五	
天延二	九七四	
寛和元	九八五	
長徳二	九九六	
寛弘四	一〇〇七	
五	一〇〇八	
七	一〇一〇	
長和元	一〇一二	
天喜三	一〇五五	
康平三	一〇六〇	
応徳三	一〇八六	
元永二	一一一九	
嘉応元	一一六九	
文治三	一一八七	
六	一一九〇	
元久二	一二〇五	
建暦二	一二一二	
建保元	一二一三	
承久元	一二一九	
三	一二二一	
建長四	一二五二	

万葉集 七五年の大伴家持の歌が最後の歌＊

古今和歌集（紀貫之ら）＊

和漢朗詠集（藤原公任）＊

後拾遺和歌集（藤原通俊）

梁塵秘抄（後白河院）＊

千載和歌集（藤原俊成）

山家集（西行）＊

新古今和歌集（藤原定家ら）

金槐和歌集（源実朝）＊

竹取物語＊ **伊勢物語**＊

土佐日記（貫之）＊ 大和物語＊

蜻蛉日記（藤原道綱母）＊

往生要集（源信）

宇津保物語＊ 落窪物語＊

枕草子（清少納言）＊

和泉式部日記（和泉式部）＊

源氏物語（紫式部） 一部流布＊

紫式部日記（紫式部）＊

日本霊異記（景戒）＊

栄花物語＊

堤中納言物語の中の一編成る

更級日記（菅原孝標女）＊

大鏡＊ 今昔物語集＊

方丈記（鴨長明） 無名抄（長明）＊

保元物語＊ 平治物語＊

平家物語 原形成るか＊

宇治拾遺物語＊

十訓抄

七九四 **平安京に遷都**

平仮名の発明＊

八四四 遣唐使を廃止

九三五―九四〇 平将門の乱

一〇一七 藤原道長太政大臣となる

一〇五一―一〇六二 前九年の役

一〇八三―一〇八七 後三年の役

一〇八六 院政を開始

一一五六 保元の乱

一一五九 平治の乱

一一八五 平家滅亡、**鎌倉幕府開く**

一二二一 承久の変

一二七九 元、南宋を滅ぼす

一二九九 東方見聞録（マルコ・ポーロ）

七七二―八四六 白居易

七七三―八一九 柳宗元

八四六 白氏文集（白居易）＊

九〇七 唐滅び、五代始まる

九六〇 宋興る

九七七 太平広記（李昉ら）

一〇三六―一一〇一 蘇軾

一〇五〇 ロランの歌＊

一〇八四 資治通鑑（司馬光）

アラビアン・ナイト＊

一一三七 宋遷都し、南宋成立

ニーベルンゲンの歌＊

一二五〇 三体詩（周弼）

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
中世 鎌倉時代	建長五	一二五三		正法眼蔵（道元）＊		古文真宝（黄堅）＊
	六	一二五四		古今著聞集（橘成季）	一二七四 文永の役	十八史略（曽先之）＊
	弘安三	一二八〇		歎異抄（唯円）＊	一二八一 弘安の役	一三〇七―一三一一 神曲（ダンテ）
	元徳二	一三三〇		十六夜日記（阿仏尼）＊		
	元弘元	一三三一		**徒然草**（兼好）＊	一三三三 建武の新政	
中世 南北朝時代	延元四	一三三九		神皇正統記（北畠親房）		
	暦応二	一三三九				
	正平四	一三四九	風雅和歌集（光厳上皇）＊			
	貞和五	一三四九		増鏡＊		
	正平一一	一三五六	菟玖波集（二条良基ら）			
	延文元	一三五六		太平記＊ 曽我物語＊		
	文中二	一三七三				
	応安六	一三七三			一三九二 南北朝合一	
	永和一	一三七五	新続古今和歌集（飛鳥井雅世）	**風姿花伝**（世阿弥） 義経記＊		
	応永七	一四〇〇				
中世 室町時代	永享一	一四二九				
	明応四	一四九五	新撰菟玖波集（宗祇ら）	御伽草子 この頃作られる＊	一四六七―一四七七 応仁の乱	
	永正一五	一五一八	閑吟集			
	天文八	一五三九	新撰犬筑波集（宗鑑）＊			
中世 安土（あづち）・桃山時代	元和九	一六二三	守武千句（荒木田守武）	醒睡笑（安楽庵策伝）	一五九五 鉄砲伝来	
近世	寛延元	一七四八		**好色一代男**（井原西鶴）	一五九四 キリスト教伝来	
	一五	一七〇二		日本永代蔵（西鶴）	一五八二 本能寺の変	
	一六	一七〇三		世間胸算用（西鶴）	一六〇三 江戸幕府開く	
	元禄四	一六九一	**猿蓑**（去来・凡兆）	**おくのほそ道**（松尾芭蕉）	一六三七 島原の乱	
	五	一六九二		**曽根崎心中**（近松門左衛門）	一六三九 鎖国令	
	一五	一七〇二		仮名手本忠臣蔵（竹田出雲ら）	一七〇二 赤穂浪士の討ち入り	
	一六	一七〇三			一七一六 享保の改革	
	寛延元	一七四八				一七三九 唐宋八家文読本

時代		
近世	江戸	安永五 一七七六
		寛政九 一七九七 新花摘（与謝蕪村）刊
		一〇 一七九八
		享和二 一八〇二
		文化六 一八〇九
		一一 一八一四
		一三 一八一五
		文政二 一八一九 おらが春（小林一茶）
		八 一八二五
		天保三 一八三二
		万延元 一八六〇
近代	明治時代	明治三 一八七〇
		四 一八七一
		五 一八七二
		一一 一八七八
		一五 一八八二 新体詩抄（外山正一ら）
		一六 一八八三
		一七 一八八四
		一八 一八八五 寒山落木（正岡子規）
		二〇 一八八七
		二一 一八八八
		二二 一八八九 於母影（森鷗外ら訳）
		二三 一八九〇
		二四 一八九一 蓬萊曲（北村透谷）
		二八 一八九五
		三〇 一八九七 若菜集（島崎藤村）
		三二 一八九九
		三三 一九〇〇

雨月物語（上田秋成）刊
古事記伝（本居宣長）完成
東海道中膝栗毛一八〇九（十返舎一九）刊
浮世風呂一八一三（式亭三馬）刊
南総里見八犬伝一八四二（曲亭馬琴）刊
蘭学事始（杉田玄白）
東海道四谷怪談（鶴屋南北）初演
春色梅児誉美一八三三（為永春水）刊
三人吉三廓初買（河竹黙阿弥）初演
西国立志編一八七一（中村正直訳）
安愚楽鍋一八七二（仮名垣魯文）
学問のすすめ一八七六（福沢諭吉）
八十日間世界一周一八八〇（川島忠之助訳）
経国美談一八八四（矢野竜渓）
怪談牡丹灯籠（三遊亭円朝）
当世書生気質一八八六・小説神髄一八八六（坪内逍遥）
浮雲一八八九（二葉亭四迷）
あひびき（四迷訳）
二人比丘尼色懺悔（尾崎紅葉）
舞姫（鷗外）
五重塔一八九二（幸田露伴）
たけくらべ一八九五・にごりえ（樋口一葉）
金色夜叉一九〇二（紅葉）
武蔵野（国木田独歩）
高野聖（泉鏡花）自然と人生（徳冨蘆花）

一七八七 寛政の改革
一八三七 大塩平八郎の乱
一八四一 天保の改革
一八五三 ペリー来航
一八五八 日米修好通商条約
一八六八 明治維新
一八七二 学制発布
一八七七 西南戦争
一八七九 自由民権運動高まる＊
政治小説の隆盛＊
文学革新と言文一致運動高まる＊
一八八七 国民之友創刊
一八八九 帝国憲法発布
一八九〇 第一回帝国議会召集
一八九一 早稲田文学創刊
一八九三 文学界創刊
一八九四―九五 日清戦争
一八九七 ホトトギス創刊
一九〇〇 明星創刊

（沈徳潜）
唐詩三百首（孫洙）＊
紅楼夢（曹雪芹）＊
一八〇八 ファウスト（ゲーテ）
一八三〇 赤と黒（スタンダール）
一八六四 戦争と平和一八六九（トルストイ）
一八六七 資本論一八九四（マルクス）
一八七九 人形の家（イプセン）カラマーゾフの兄弟一八八〇（ドストエフスキー）
一八八三 女の一生（モーパッサン）宝島（スチーブンソン）
一八八六 イリュミナシオン（ランボー）
一八九三 にんじん（ルナール）
一八九六 クオ・バディス（シェンケビッチ）

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
明治時代	三四	一九〇一	**みだれ髪**（与謝野晶子）	墨汁一滴（子規）	一九〇三　馬酔木創刊	一九〇四　桜の園（チェーホフ）ジャン・クリストフ―一九一二（ロマン・ロラン）
	三八	一九〇五	海潮音（上田敏訳）	**吾輩は猫である**―一九〇六（夏目漱石）	一九〇四―〇五　**日露戦争**	
	三九	一九〇六	白羊宮（薄田泣菫）　孔雀船（伊良子清白）	野菊の墓（伊藤左千夫）　**破戒**（藤村）　運命（独歩）　坊っちゃん・草枕（漱石）	自然主義最盛期＊	
	四〇	一九〇七	うた日記（鷗外）	**蒲団**（田山花袋）　平凡（四迷）	一九〇八　アララギ創刊	一九〇七　母（ゴーリキー）
	四一	一九〇八	有明集（蒲原有明）	三四郎（漱石）　新世帯（徳田秋声）	一九〇九　スバル創刊	一九〇九　狭き門（ジイド）
	四二	一九〇九	邪宗門（北原白秋）	それから（漱石）　田舎教師（花袋）	一九一〇　大逆事件	一九一〇　マルテの手記（リルケ）
	四三	一九一〇	別離（若山牧水）　一握の砂（石川啄木）	家―一九一一（藤村）　土（長塚節）　時代閉塞の現状（啄木）　刺青（谷崎潤一郎）	白樺・三田文学創刊　これ反自然主義の動き強まる	
	四四	一九一一	思ひ出（白秋）	**或る女**―一九一九（有島武郎）	一九一一　青鞜創刊	一九一一　辛亥革命起こる
大正時代	大正元	一九一二	**悲しき玩具**（啄木）	哀しき父（葛西善蔵）	一九一二　乃木希典殉死	一九一二　清滅び、中華民国成立
	二	一九一三	桐の花（白秋）　赤光（斎藤茂吉）	阿部一族（鷗外）　銀の匙―一九一五（中勘助）	一九一三　島村抱月芸術座創立	一九一三　息子と恋人（ロレンス）　失われた時をもとめて―一九二七（プルースト）
	三	一九一四	**道程**（高村光太郎）	大菩薩峠―一九四一（中里介山）	一九一四　第一次世界大戦始まる	一九一四　変身（カフカ）
	四	一九一五	切火（島木赤彦）　聖三稜玻璃（山村暮鳥）	**こころ**（漱石）　三太郎の日記（阿部次郎）		一九一五　ロシア革命
	五	一九一六	碧梧桐句集（河東碧梧桐）	入江のほとり（正宗白鳥）　最後の一句（鷗外）　**羅生門**（芥川龍之介）		一九一六　デミアン（ヘッセ）　月と六ペンス（モーム）　五・四運動
	六	一九一七	**月に吠える**（萩原朔太郎）	高瀬舟（鷗外）　鼻（龍之介）　明暗（漱石）		
	七	一九一八	**抒情小曲集**（室生犀星）	出家とその弟子―一九一七（倉田百三）　父帰る（菊池寛）　**城の崎にて**・和解（志賀直哉）　田園の憂鬱―一九一九（佐藤春夫）		
	一〇	一九二一	殉情詩集（春夫）	新しき村の生活（武者小路実篤）		
	一一	一九二二		**暗夜行路**―一九三七（直哉）		
	一二	一九二三	青猫（朔太郎）	藪の中（龍之介）		
	一三	一九二四	**春と修羅**（宮沢賢治）	蠅（横光利一）　山椒魚（井伏鱒二）		
	一四	一九二五	海やまのあひだ（釈迢空）	伸子―一九二六（宮本百合子）　**檸檬**・城のある町にて（梶井基次郎）　女工哀史（細井和喜蔵）		

近代　昭和時代（戦前・戦中）					
一五	一九二六	海の聖母（吉田一穂）	**伊豆の踊子**（川端康成）海に生くる人々（葉山嘉樹）	新感覚派の文学台頭＊　一九二五　ラジオ放送開始	一九二八　静かなるドン（ショーロホフ）三文オペラ（ブレヒト）
昭和三	一九二八		放浪記―一九三〇（林芙美子）	一九二六　円本時代始まる	
四	一九二九	軍艦茉莉（安西冬衛）	夜明け前―一九三五（藤村）蟹工船（小林多喜二）太陽のない街（徳永直）	一九二七　芥川龍之介自殺　一九二八　赤旗・戦旗創刊	一九二九　武器よさらば（ヘミングウェイ）
五	一九三〇	葛飾（水原秋桜子）測量船（三好達治）	**機械**（利一）聖家族（堀辰雄）	一九三一　**満州事変**　一九三二　五・一五事件	世界経済恐慌
八	一九三三	Ambarvalia（西脇順三郎）	若い人―一九三七（石坂洋次郎）　春琴抄（潤一郎）	一九三三　小林多喜二検挙、虐殺　国際連盟脱退	一九三三　人間の条件（マルロー）
九	一九三四	**山羊の歌**（中原中也）	文章読本（潤一郎）	文学界創刊	
一〇	一九三五	わがひとに与ふる哀歌（伊東静雄）	雪国―一九四七（康成）蒼氓―一九三九（石川達三）　私小説論（小林秀雄）	一九三四　四季創刊　一九三五　歴程創刊	
一一	一九三六	長子（中村草田男）	晩年（太宰治）**風立ちぬ**―一九三八（辰雄）	一九三六　二・二六事件	一九三六　風と共に去りぬ（ミッチェル）
一二	一九三七	萱草に寄す（立原道造）五百句（高浜虚子）	路傍の石（山本有三）旅愁―一九四六（利一）　濹東綺譚（永井荷風）	一九三七　**日中戦争始まる**	一九三八　嘔吐（サルトル）
一三	一九三八	在りし日の歌（中也）	麦と兵隊（火野葦平）		一九三九　怒りの葡萄（スタインベック）
一四	一九三九	鶴の眼（石田波郷）	**富嶽百景**（治）歌のわかれ（中野重治）		
一六	一九四一	智恵子抄（光太郎）	人生論ノート（三木清）	一九四一　太平洋戦争始まる	一九四二　文芸講話（毛沢東）
一七	一九四二	高志（木俣修）	山月記（中島敦）無常といふ事（秀雄）		異邦人（カミュ）
一八	一九四三		細雪―一九四八（潤一郎）	一九四五　**終戦**	一九四三　星の王子さま（サン・テグジュペリ）
現代　昭和時代（戦後）					
二一	一九四六	群鶏（宮柊二）	暗い絵（野間宏）なよたけ（加藤道夫）　死霊―一九九五（埴谷雄高）	一九四六　日本国憲法公布　当用漢字表・現代かなづかい告示	
二二	一九四七	旅人かへらず（順三郎）	夏の花（原民喜）斜陽（治）		
二三	一九四八	落下傘（金子光晴）定本蛙（草野心平）	虫のいろいろ（尾崎一雄）**人間失格**（治）　野火―一九五一（大岡昇平）風土―一九六八（福永武彦）	近代文学創刊　一九四七　六・三制教育実施　荒地創刊	一九四八　裸者と死者（メイラー）　一九四九　中華人民共和国成立
二四	一九四九	白き山（茂吉）	夕鶴（木下順二）千羽鶴―一九五一（康成）	一九四八　新制高校発足	
二五	一九五〇		風俗小説論（中村光夫）絵本（田宮虎彦）		一九五〇　朝鮮戦争起こる
二六	一九五一	原爆詩集（峠三吉）	**壁**（安部公房）炎の人（三好十郎）	一九五一　民間放送開始	

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
昭和時代（戦後）	昭和二七	一九五二	二十億光年の孤独（谷川俊太郎）	日本文壇史一六九（伊藤整）　真空地帯（宏）	一九五一　サンフランシスコ講和条約調印	一九五二　老人と海（ヘミングウェイ）
	二八	一九五三	他人の空（飯島耕一）	主題と変奏（吉田秀和）　驟雨（吉行淳之介）　潮騒（三島由紀夫）	一九五三　テレビ放送開始	一九五四　悲しみよこんにちは（サガン）　雪どけ一九五五（エレンブルグ）
	二九	一九五四	鮎川信夫詩集	太陽の季節（石原慎太郎）		
	三〇	一九五五	記憶と現在（大岡信）	雑種文化（加藤周一）　金閣寺（由紀夫）　楢山節考（深沢七郎）	一九五六　日本、国際連合に加盟	一九五七　アレクサンドリア・カルテット一九六〇（ダレル）
	三一	一九五六		天平の甍（井上靖）　死者の奢り（大江健三郎）　裸の王様（開高健）		
	三二	一九五七	亡羊記（村野四郎）	海辺の光景（安岡章太郎）		ソ連人工衛星打ち上げに成功
	三三	一九五八	谷川雁詩集	死の棘一九六五（島尾敏雄）　静物（庄野潤三）　忍ぶ川（三浦哲郎）		
	三四	一九五九		雁の寺（水上勉）		
	三五	一九六〇		楡家の人びと一九六四（北杜夫）　秀吉と利休一九六三（野上弥生子）　砂の女（公房）	一九六〇　大阪万国博覧会	一九六一　イワン・デニソビッチの一日（ソルジェニーツィン）
	三六	一九六一	言葉のない世界（田村隆一）	されどわれらが日々一（柴田翔）		
	三七	一九六二		氷点一九六五（三浦綾子）		
	三九	一九六四	死の淵より（高見順）	黒い雨一九六六（鱒二）　幻化（梅崎春生）　邪宗門一九六六（高橋和巳）	一九六四　第十八回オリンピック東京大会	一九六三　調書（ル・クレジオ）
	四〇	一九六五	音楽（那珂太郎）	沈黙（遠藤周作）　夏の砦（辻邦生）		
	四一	一九六六	鵜原抄（中村稔）	レイテ戦記一九七九（昇平）		一九六五　中国文化大革命始まる
	四二	一九六七	含紅集（吉野秀雄）	海市（武彦）　輝ける闇（健）	一九六八　川端康成ノーベル賞受賞	一九六七　百年の孤独（マルケス）
	四三	一九六八	表札など（石垣りん）	暗室（淳之介）　富士一九七二（武田泰淳）		
	四四	一九六九	花眼（森澄雄）	漱石とその時代ⅡⅠ（江藤淳）		一九六九　アメリカアポロ十一号、月面に着陸
	四五	一九七〇		劇的なる日本人（山崎正和）	一九七二　沖縄県復帰	
	四六	一九七一	感傷旅行（吉野弘）	恍惚の人（有吉佐和子）	日中国交回復	
	四七	一九七二		洪水はわが魂に及び（健三郎）	一九七三　石油危機による社会混乱	
	四八	一九七三		兎の眼（灰谷健次郎）		
	四九	一九七四				

現代

平成時代

年号	西暦
五〇	一九七五
五一	一九七六
五二	一九七七
五三	一九七八
五五	一九八〇
五七	一九八二
五八	一九八三
五九	一九八四
六一	一九八六
六二	一九八七
平成元	一九八九
二	一九九〇
六	一九九四
八	一九九六
九	一九九七
一〇	一九九八
一一	一九九九
一二	二〇〇〇
一四	二〇〇二
一五	二〇〇三
一六	二〇〇四
一七	二〇〇五

固い芽（清岡卓行）
夏の鏡（佐佐木幸綱）
足利（石原吉郎）
日々の地図（俊太郎）
星宿（佐藤佐太郎）
馬場あき子歌集
サラダ記念日（俵万智）
無頼の墓（福島泰樹）
夕陽に赤い帆（清水哲男）
辻征夫詩集成
倚りかからず（茨木のり子）
アメリカ（耕一）
河原荒草（伊藤比呂美）

時に佇つ（佐多稲子）
枯木灘—一九七七（中上健次）
僕って何（三田誠広）
吉里吉里人—一九八〇（井上ひさし）
兵隊宿（竹西寛子） コインロッカー・ベイビーズ（村上龍）
羊をめぐる冒険（村上春樹）
戦後史の空間（磯田光一） 破獄（吉村昭）
忠臣蔵とは何か（丸谷才一）
シングル・セル（増田みず子）
キッチン（よしもとばなな） ノルウェイの森（春樹）
仮往生伝試文（古井由吉）
志賀直哉（本多秋五） 夢使い（島田雅彦）
志賀直哉（阿川弘之）
季節の記憶（保坂和志） 信長（秋山駿）
敗戦後論（加藤典洋）
日蝕（平野啓一郎）
マロニエの花が言った（卓行）
羽根と翼（黒井千次）
海辺のカフカ（春樹） 8月の果て—二〇〇四（柳美里） 本格小説（水村美苗）
博士の愛した数式（小川洋子） 蹴りたい背中（綿矢りさ） 蛇にピアス（金原ひとみ）
エクソフォニー（多和田葉子）
父の肖像（辻井喬） 泥人魚（唐十郎） 私の昭和史（稔）
半島を出よ（龍） 告白（町田康）

一九七六 ロッキード事件
一九八一 常用漢字告示
一九八五 筑波科学万国博覧会
一九九四 大江健三郎ノーベル賞受賞
一九九五 阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件
一九九七 アララギ終刊
二〇〇四 新潟県中越地震
二〇〇五 「愛・地球博」開催 郵政民営化法案可決

一九七五 ベトナム戦争終わる
一九七七 中国文化大革命終わる
一九八〇 イラン・イラク戦争始まる
一九八六 ソ連チェルノブイリ原発事故
一九八九 共産主義国の自由化強まる
一九九〇 東西ドイツ統一
一九九一 湾岸戦争 ソ連邦解体・ロシア共和国成立
二〇〇一 アメリカで同時多発テロ発生
二〇〇三 イラク戦争
二〇〇四 スマトラ島沖地震

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
現代	平成一九	二〇〇七				世界金融危機
	二〇	二〇〇八				北京オリンピック
	二一	二〇〇九			民主党が大勝	アメリカ、オバマ政権発足
	二二	二〇一〇	生首（辺見庸）		改定常用漢字表告示	上海万博
	二三	二〇一一	詩の礫（和合亮一）		東日本大震災	
	二四	二〇一二			福島第一原発でメルトダウン・爆発発生	
	二五	二〇一三			自民党が総選挙で勝利	米・キューバ国交回復
	二六	二〇一四			STAP細胞事件	
	二七	二〇一五	薔薇断章（尾崎左永子）			
	二八	二〇一六	白寿（後藤比奈夫）		熊本地震	
	二九	二〇一七	遠音よし遠見よし（伊藤一彦）			カズオ・イシグロノーベル賞受賞
	三〇	二〇一八	六六魚（小島ゆかり）			
	三一	二〇一九				
	令和元					
				沖で待つ（絲山秋子）	ケータイ小説盛ん	
				虹の鳥（目取真俊）真鶴（川上弘美）		
				乳と卵（川上未映子）川の光（松浦寿輝）		
				日本語が亡びるとき（美苗）光の曼陀羅（安藤礼二）		
				1Q84 Book 1・2（春樹）掏摸（中村文則）		
				パンとペン（黒岩比佐子）漂砂のうたう（木内昇）		
				これはペンです（円城塔）		
				冥土めぐり（鹿島田真希）何者（朝井リョウ）abさんご（黒田夏子）		
				冬の旅（辻原登）		
				荒神（宮部みゆき）たまもの（小池昌代）『ボヴァリー夫人』論（蓮實重彦）九年前の祈り（小野正嗣）サラバ！（西加奈子）		
				献灯使（藥）火花（又吉直樹）羊と鋼の森（宮下奈都）		
				コンビニ人間（村田沙耶香）その姿の消し方（堀江敏幸）蜜蜂と遠雷（恩田陸）		
				騎士団長殺し（春樹）かがみの孤城（辻村深月）おらおらでひとりいぐも（若竹千佐子）		
				夏物語（未映子）むらさきのスカートの女（今村夏子）		

重要古語の解説および索引

①〈古文編〉〈詩歌編〉（和歌・俳諧）の本文で、＊印を付した「重要古語」の解説および索引である。
②配列は表記の五十音順によった。
③数字は本文のページを示す。ページの示しは、教材ごとの初出に限った。

あ行

暁（名）夜明け前。〈「あけぼの」より前の時間帯〉……36
飽く（動・四）①十分に満足する。②飽きて、その結果嫌になる。……75・77・79
あくがる（動・下二）①（ふらふらと）さまよい歩く。②（魂が）体から抜け出す。③（心を）奪われる。……262
あけぼの（名）夜が明けようとする頃。夜明け方。……101
あさまし（形・シク）①驚くばかりだ。意外だ。②興ざめだ。あきれた感じだ。情けない。……20・25
悪し（形・シク）①悪い。②不快だ。「悪し」は客観的基準に照らしてよくないさま、「わろし」は物事の外面に対する相対的なよくないという評価だという。……20・47・65・77
遊ぶ（動・四）①楽しんで心を慰める。②山野で狩りなどを楽しむ。③音楽・詩歌・舞などを楽しむ。④気楽に動き回る。……47・49・62・64
あだなり（形動）①実を結ばない。無駄だ。②誠意がない。③頼りにならない。……36
あてなり（形動）①身分が高い。高貴だ。②上品だ。……47
あな（感）〈驚いたり感動したりして〉ああ。まあ。……17・59
あはれ（感）ああ。なんとまあ。〈喜び・悲しみなどによって起こるしみじみとした感動を表す〉
（名）しみじみとした情趣。情愛。悲哀。同情。……20・79
あはれなり（形動）しみじみとしている。〈対象に応じて、「趣深い」「感慨深い」「いとしい」「気の毒だ」「悲しい」「寂しい」「はかない」などの気持ちを含む〉……36・67
あふ・逢ふ・合ふ・会ふ（動・四）①一つになる。②似合う。③出会う。④面会する。⑤結婚する。⑥〈補助動詞〉互いに…する。いっしょに…する。……16・21・36・62・64・69・75・91・100
あまた（副）①たくさん。②ひどく。非常に。……49・91・106
あまねし（形・ク）広く行き渡っている。……108
あやし（形・シク）①異常だ。珍しい。②不思議だ。③疑わしい。④見苦しい。⑤みすぼらしい。粗末だ。⑥身分が低い。……38・46・68・75
有明（名）①陰暦で十六日以後の、月が空にあるままで夜が明けようとする頃。②夜が明けてもまだ空に残っている月。〈「有明の月」の略〉……101
ありく（動・四）①あちこち動き回る。移動する。出掛ける。②〈補助動詞〉…して回る。〈足を一歩一歩運ぶの意の「あゆむ」と異なり、動き回るという気持ちが強い〉……34・67
いかが（副）①どう。どのように。どんなに。②〈反語〉どうして…か。③どうであろうか。……79
いかで（副）①どうして。どうやって。②〈反語〉どうして…か。③どうかして。ぜひ。……47
いかでか（連語）①〈疑問〉どうして…か。②〈反語〉どうして…か。③どうであろうか。……62
いかなる（連体）どのような。……68・90
いかに（副）①どのように。なぜ。②どんなにか。さぞ。③なんとまあ。④いくら（～でも）。……20・24・35・68・89・108

いたし〔形・ク〕①ひどい。②すばらしい。……48
いたづらなり〔形動〕①無駄だ。②もの足りない。③手持ぶさただ。④むなしい。……30・70
いづれ〔代名〕①どれ。どちら。②いつ。③どこ。……100・109
いと〔副〕①非常に。たいそう。②〈下に打消の語を伴って〉大して。それほど。……36・46・48・58・61・65・67・69・75・77・79
いときなし〔形・ク〕〈年齢、あるいは気立てが〉幼い。〔「いとけなし」とも〕……32
いとど〔副〕①ますます。②そうでなくてさえ。……32
いにしへ〔名〕過去。昔。……108
往ぬ〔動・ナ変〕①去る。行ってしまう。②時が経過する。時が移る。……65・67・69
言ふかひなし〔形・ク〕①言ってもしかたがない。②ふがいない。意気地がない。③取るに足りない。卑しい。④つまらない。下手だ。……64・79・90
います〔動・四・サ変〕①いらっしゃる。おいでになる。〈「あり・をり・行く・来」の尊敬語〉②〈補助動詞〉…ていらっしゃる。…ておいでになる。お…になる。お…なさる。……62
いみじ〔形・シク〕①甚だしい。並々でない。②大変だ。恐ろしい。③すばらしい。……49・58・67
いやし・卑し〔形・シク〕①身分が低い。②みすぼらしい。③下品だ。心が汚い。……47・109
いらふ〔動・下二〕返事をする。……16
失す〔動・下二〕①なくなる。消え去る。②死ぬ。……34・92・104
うつくし〔形・シク〕①〈肉親に対して〉かわいく思う。いとしい。②〈子供や小さい形のものが〉かわいらしい。愛くるしい。③美しい。④立派だ。……46・50
うつつ〔名〕①現実。②正気。③夢心地。……62
うるはしみす〔動・サ変〕むつまじくする。敬愛して仕える。親しみ愛する。……69
え〔副〕〈下に打消の語を伴って〉…できない。……32・58・69・80
おどろく・驚く〔動・四〕①はっと気づく。注意が引かれる。②目が覚める。眠りから覚める。③〈意外なことに〉びっくりする。……16・261
おのづから〔副〕①自然に。自然の成り行きで。ひとりでに。②偶然に。③万一。もしも。④時たま。……109
おはす〔動・サ変〕①いらっしゃる。おいでになる。〈「あり・をり・行く・来」の尊敬語〉②〈「おはし＋動詞」の形で〉お…になる。…なさる。③〈補助動詞〉…ていらっしゃる。…でいらっしゃる。……20・46・49・59
おぼえ・覚え〔名〕①人から思われること。寵愛。②世の評判・評価。③記憶。……25
おほかた〔副〕①大体。②〈下に打消の語を伴って〉全く（…ない）。……20
おぼしめす〔動・四〕お思いになる。お考えになる。〈「思ふ」の尊敬語〉……89
仰す〔動・下二〕①おっしゃる。〈「言ふ」の尊敬語〉②お命じになる。〈「命ず」の尊敬語〉……30
おぼす〔動・四〕お思いになる。〈「思ふ」の尊敬語〉……24・49
おぼゆ〔動・下二〕①思われる。感じる。②意識する。③思い出される。④似る。⑤思い出す。⑥記憶する。……37・49・89・109
おもしろし〔形・ク〕①趣深い。風流だ。②楽しい。愉快だ。興味深い。……61・67・108

か行

かかる〔連体〕こういう。このような。〈一説に「かかり」〔動・ラ変〕の連体形〉……25・62・77・79
かく〔副〕このように。そのように。……49・59・64・67・79・108
影〔名〕①光の当たらない所。②身を隠す所。③恵み。おかげ。④光。⑤姿。形。⑥光によって生ずる物の陰影。⑦面影。……37・78・101・259

かこつ〔動・四〕①他のせいにする。かこつける。②嘆く。不平を言う。……36
かしこし〔形・ク〕①恐ろしい。②畏れ多い。③利口だ。④優れている。⑤好都合だ。⑥〔副詞的に用いて〕ひどく。盛大に。……47
かたくなり〔形動〕①心がねじけている。偏屈だ。頑固だ。②物の情緒を解しない。教養がない。③見苦しい。……36
かたち〔名〕①外形。姿。②顔の外形。容貌。……47・59・67
かなし・悲し〔形・シク〕①いとおしい。かわいい。②心がひかれる。③悲しい。嘆かわしい。……49・65・68・69・79・259
がり〔名〕…のもとへ。…のいる所に。……68
聞こゆ〔動・下二〕①聞こえる。②世に知られる。うわさされる。③意味が分かる。④思われる。⑤匂う。⑥申し上げる。〔言ふ〕の謙譲語〕⑦〔手紙などを〕差し上げる。〔遣る〕の謙譲語〕⑧…(と)お呼びする。⑨〔補助動詞〕…申し上げる。……49・86・108
きは〔名〕①〔ものに〕接した所。ごく近い所。そば。②限界。極限。③程度。④家柄。身分。……32
清らなり〔形動〕①〔容姿などが〕輝くばかりに美しい。②〔服装などが〕華麗だ。……67
具す〔動・サ変〕①備わる。そろう。②備える。そろえる。③従う。連れ立つ。④従える。引き連れる。……88
口惜し〔形・シク〕①情けない。残念だ。②物足りない。不満だ。③卑しい。劣っている。……80・90
くまなし〔形・ク〕①暗い所がない。曇りや陰がない。②届かぬ所がない。残す所がない。③抜け目がない。……36
希有なり〔形動〕めったにない。……35
けうらなり〔形動〕清らかで美しい。〔きよらなり〕の変化した語〕……47
気色〔名〕①〔人や物の内面の表れとしての〕様子。態度。機嫌。②意向。③自然界のありさま。景色。④きざし。……65
心得〔動・下二〕①理解する。事情などを飲み込む。②用心する。……20・109
心憂し〔形・ク〕①心につらく思う。情けない。②不快だ。嫌だ。……67
心にくし〔形・ク〕①奥ゆかしい。心がひかれる。②気をもませる。気がかりだ。……65
心ばへ〔名〕①趣向。趣意。②性質。③心構え。……50
心もとなし〔形・ク〕①気がかりだ。じれったい。待ち遠しい。②不安だ。③はっきりしない。かすかだ。……24・77
ことわり〔名〕①道理。筋道。②訳。理由。……94

さ行

さながら①そのまま。②全て。全部。③あたかも。まるで。……20・32
さぶらふ〔「候ふ」とも〕〔動・四〕①お仕えする。②ございます。あります。おります。〔あり・をり〕の丁寧語〕③〔補助動詞〕…です。…でございます。…ます。……16・89
さらに〔副〕〔下に打消の語を伴って〕全然。決して。……67
さらば〔接〕①それならば。それでは。②そうだからといって。それなのに。……90
さるは〔接〕①それというのは。②そうはいうものの。③しかしながら。……79
しのぶ・忍ぶ〔動・四・上二〕①思い慕う。懐かしむ。②じっとこらえる。我慢する。③包み隠す。目立たないようにする。……36・67・264
しばし〔副〕少しの間。しばらく。……32・262
知ろしめす〔動・四〕①お治めになる。統治なさる。〔治む〕の尊敬語〕②理解なさる。お知りになる。〔知る〕の尊敬語〕……90
すずろなり〔形動〕①なんとなく…だ。②わけもなく…だ。やたら

…だ。③いいかげんだ。④かかわりない。⑤思いがけない。……61

た行

猛し〔形・ク〕①勇ましい。強気だ。②立派だ。優れている。③丈夫だ。……94

たてまつる・奉る〔動・四〕①差し上げる。献上する。〈「与ふ・贈る」の謙譲語〉②参上させる。③召し上がる。〈「食ふ・飲む」の尊敬語〉④お召しになる。〈「着る」の尊敬語〉⑤お乗りになる。〈「乗る」の尊敬語〉⑥〈補助動詞〉…申し上げる。…して差し上げる。……17・20・49・88

頼む〔動・四〕①信頼する。②頼みにする。あてにする。〔動・下二〕頼みに思わせる。あてにさせる。……65

たまふ・給ふ〔動・四〕①お与えになる。下さる。〈「与ふ・授く」の尊敬語〉②〈命令形の形で、他の動詞の代わりとして〉なさってください。…なさい。③〈補助動詞〉…なさる。お…になる。…してくださる。……16・20・30・46・48・59・68・69・89

頼り・便り〔名〕①頼み。よるべ。縁故。②よい機会。ついで。③便宜。都合。④具合。配置。⑤音信。消息。手紙。連絡。……64・79

契り〔名〕①約束。②前世からの因縁。③縁。ゆかり。④男女の深い関係。……36・49

契る〔動・四〕①約束をする。②男女の交わりをする。……69

つかうまつる（つかまつる）〔動・四〕①お仕え申し上げる。〈「仕ふ」の謙譲語〉②…し申し上げる。致す。〈「す」の謙譲語〉③致します。〈「す」の丁寧語〉……59・89

つかはす・遣はす〔動・四〕①御派遣になる。お遣わしになる。②お贈りになる。③派遣する。使いとして行かせる。④…しておやりになる。……24

つごもり〔名〕①月の下旬。②みそか。〈毎月の〉最終日。〈ただし十二月のみ「おほつごもり」〉……62

つつむ〔動・四〕遠慮する。気がねする。……48

つらし〔形ク〕①薄情だ。②苦痛だ。……79

つれづれなり〔形動〕①することもなく暇だ。手持ちぶさただ。②暇で物足りない。退屈だ。③物思いにふけってぼんやりとしている。しんみりとして寂しい。……38

つれなし〔形・ク〕①よそよそしい。そっけない。②無関心だ。変わりがない。何の変化もない。……68

疾し〔形ク〕①鋭利だ。よく切れる。②機敏だ。敏感だ。③〈速度・時期・進行などが〉はやい。……80・87

年ごろ〔名〕長年の間。数年来。多年。……20・32・50・64・67・75・90・108

とぶらふ〔動・四〕①訪れる。見舞う。②尋ねる。調べる。③死者を悼む。弔問する。供養する。……20

な行

な〔副〕〈文末の「そ」（禁止）とともに用いて〉禁止を表す。……17・65

なかなか〔名〕①中途。②中途半端。〔副〕①かえって。むしろ。②ずいぶん。③〈下に打消の語を伴って〉とても。どうしても。〔感〕いかにも。そのとおり。……109

ながむ〔動・下二〕①ぼんやりと物思いにふけりながら見やる。物思いにふける。②遠くを見る。眺める。……20・36・65・67

情け〔名〕①〈他者への〉心づかい。思いやり。②情趣・風情を理解する心。③愛情。恋心。恋情。……32・36

なほ〔副〕①やはり。依然として。②ますます。さらに。③再び。④〈漢文訓読調で、下に「ごとし」を伴って〉ちょうど。まるで。……36・62・67・79・88・101・108

憎し〔形・ク〕①気に入らない。②

醜い。③無愛想だ。④奇妙だ。感心だ。……258
ねむごろなり（ねんごろなり）〔形動〕①心の底から。念を入れて。②親しみ合って。懇意に。…69
のたまふ〔動・四〕①おっしゃる。お話しになる。〈「言ふ」の尊敬語〉②言い聞かせる。……49・88
ののしる〔動・四〕①声高く騒ぎ立てる。②うわさをする。評判をする。③勢いが盛んである。④声高く鳴く。音高く鳴る。⑤がみがみ言う。悪口を言う。……49・75・79

は行

果つ〔動・下二〕①終わる。②死ぬ。……32・69・74
侍り〔動・ラ変〕①〔身分の高い人のそばに〕お仕えする。〈「あり・をり」の謙譲語〉②あります。おります。ございます。〈「あり・をり」の丁寧語〉③〈補助動詞〉…ます。…です。…でございます。……49・103・262・263・264
日ごろ〔名〕①数日。②この頃。数日来。③ふだん。……89
本意〔名〕本来の意志。かねてからの望み・目的。……32・64

ま行

申す〔動・四〕①申し上げる。〈「言ふ」の謙譲語〉②お願いする。所望する。〈「願ふ・請ふ」の謙譲語〉③申します。言います。〈「言ふ」の丁寧語〉④…と申し上げる。〈「（世間の人々が）…と言ふ」の謙譲語〉⑤〈補助動詞〉お…申し上げる。……16・49・89・94
まうづ〔動・下二〕①〔神仏に〕お参りする。参詣する。②〔上位の人の所へ〕参上する。〈「行く・来」の謙譲語〉……49
まかる〔動・四〕①〔敬意を表すべき場所から〕退出する。引き下がる。②出掛ける。〈「行く」の謙譲語〉③死ぬ。④〈連用形を他の動詞の上に添えて〉お…する。…ます。……36・49・90・259・277
まことに〔副〕本当に。実に。……109
まどふ・惑ふ〔動・四〕①迷う。②心が乱れる。③慌てる。うろたえる。④〈補助動詞〉ひどく…する。……47・60
まもる〔動・四〕①見守る。見定める。様子をうかがう。②守護する。……37
まぬらす・参らす〔動・下二〕①差し上げる。〈「与ふ」の謙譲語〉②〈補助動詞〉お…する。…申し上げる。……30
まゐる・参る〔動・四〕①〔神社や仏閣などに〕参詣する。②参上する。伺う。〈「行く・来」の謙譲語〉③入内する。④差し上げる。〈「与ふ」の謙譲語〉⑤…して差し上げる。…し申し上げる。〈「す」の謙譲語〉⑥お召しになる。召し上がる。〈「着る・飲む・食ふ」などの尊敬語〉…24・59・262
無常〔名〕①絶えず変化し永久不変でないこと。②死。…32・94
むつまじ〔形・シク〕①仲がよい。親しい。②慕わしい。懐かしい。……101
召す〔動・四〕①お呼びになる。〈「呼ぶ・招く」の尊敬語〉②役職に就かせる。③お取り寄せになる。〈「取り寄す」の尊敬語〉④特にかわいがる。⑤召し上がる。お召しになる。〈「食ふ・着る」などの尊敬語〉⑥〈連用形を他の動詞の上に添えて〉呼び寄せて…なさる。……30
めづ・賞づ〔動・下二〕①かわいがる。愛する。気に入る。②褒める。賞美する。③感心する。……21・47・78
めでたし〔形ク〕①魅力的だ。②立派だ。すばらしい。……30・59
望月〔名〕満月。……36
唐土（「唐土」とも）〔名〕①中国。②非常に遠い所の例え。……77

や行

やうやう〔副〕①だんだんと。②そろそろと。③やっとのことで。……46・59
やがて〔副〕①すぐに。早速。②そのまま。③とりもなおさず。言

うまでもなく。全く。④間もなく。そのうち。……34

やむごとなし（やんごとなし）〔形・ク〕①捨ておかれない。②大切である。③並々でない。重々しい。④身分が高貴である。……30

ゆかし〔形・シク〕①心がひかれる。見たい。聞きたい。知りたい。②慕わしい。懐かしい。恋しい。……276

世（よ）（の中（なか））〔名〕①過去・現在・未来の三世。特に、現世。この世。②時代。年代。③世間。世の中。社会。④統治者がその国を治める期間。また、その政治。⑤天皇。朝廷。⑥人の一生。⑦年齢。⑧世人。世評。⑨男女や夫婦の仲。……20・25・47・108

よし〔名〕①由緒。②手段。方法。③理由。④趣。⑤そぶり・様子。……16・74

よばふ〔動・四〕①何度も呼び続ける。②言い寄る。求婚する。……58

わ行

わざ・業（わざ）〔名〕①行い。②仕事。③技術。方法。……67

わたり〔名〕①辺り。一帯。②（人を間接的に指して）お方。人々。……34

わたる・渡（わた）る〔動・四〕①水などの上を越える。②通る。③行く。来る。④年月を過ごす。⑤通じる。⑥おありになる。⑦〈補助動詞〉ずっと…し続ける。一面に…する。……58・62・74・77・259

わづらふ〔動・四〕①思い悩む。②病気になる。③難儀する。…67

わびし・侘（わび）し〔形・シク〕①（思いどおりにならず）切ない。②寂しい。心細く頼りない。③つらい。苦しい。④つまらない。おもしろくない。⑤貧しい。……17・62・77・106

わぶ〔動・上二〕①気落ちする。②つらく思う。③寂しく暮らす。④悩み苦しむ。⑤落ちぶれる。⑥閑寂を楽しむ。⑦〈補助動詞〉しかねる。たやすく…できない。……62・69

わろし〔形・ク〕①よくない。②美しくない。みっともない。③下手だ。④下品だ。⑤貧しい。⑥不都合だ。……16・20・67

ゐる（率（ゐ））る〔動・上一〕引き連れる。……58

ゐる（居（ゐ））る〔動・上一〕①座る。②動かないでいる。③住む。④（雲・塵などが）かかる。⑤〈補助動詞〉ずっと…する。…ている。……16・46・48・58・61・65・67

をかし〔形・シク〕①興味がある。おもしろい。②風情がある。趣がある。③優れている。④美しい。愛らしい。⑤滑稽だ。…36

惜（を）しむ〔動・四〕①大切に思う。物惜しみする。②名残惜しい。……21・69・77

漢文の基本句形

①基本句形のうちの主要なものを示した。
②（　）内の数字は本文のページ、〈　〉内は出典を示す。

一　否定形（〜しない・〜でない・〜はない・〜するな）

(1) 否定の助字（不・非・無・未など）を用いる。

数人飲レ之不レ足、一人飲レ之有レ余。（一一六）〈戦国策〉

未レ成、一人之蛇成。（一一六）〈戦国策〉

(2) 否定詞を重ねて用いる。（二重否定）

吾矛之利、於レ物無レ不レ陥也。〈韓非子・難一〉

土佐無二物不一レ有。〈先哲叢談〉

(3) 否定詞＋副詞の形で用いる。（部分否定）

千里馬常有、而伯楽不二常有一。（一五八）〈韓愈「雑説」〉

(4) 勿・莫などの否定の助字を用いて、禁止を表す。

己所レ不レ欲、勿レ施二於人一。（一七〇）〈論語〉

二　疑問形（〜か・何を〜か・どうして〜か・誰が〜か）

(1) 疑問詞（何・安・焉・誰・孰・何為・何如など）を用いる。

於二斯三者一何先。（一六八）〈論語〉

(2) 疑問の助字（乎・邪・也・哉・歟など）を文末に用いる。

与二若茅一、朝三而暮四。足乎。（一二八）〈列子〉

(3) 疑問詞＋疑問の助字

此何虫也。〈淮南子〉

(4) 否定の助字（不・否・未など）を文末に用いる。

視二吾舌一、尚在不。〈史記・張儀列伝〉

三　反語形（どうして〜か、いや〜ない）

(1) 疑問詞を用いる。

子安能為二之足一。（一二六）〈戦国策〉

(2) 疑問の助字を文末に用いる。

不仁者可二与言一哉。〈孟子・離婁上〉

(3) 疑問詞＋疑問の助字

安求二其能千里一也。（一五八）〈韓愈「雑説」〉

(4) 「豈」を用いる。

豈遠二千里一哉。（一三五）〈十八史略〉

(5) その他の形を用いる。

百獣之見レ我、而敢不レ走乎。〈戦国策・楚策〉

四　使役形（〜に〜させる）

(1) 使役の助字（使・令・教・遣など）を用いる。

出入使二人呼一曰、…（一四〇）〈十八史略〉

(2) 使役を暗示する文字（命・説・挙・遣など）を用いる。

説二燕文侯一、与レ趙従親。（一三六）〈十八史略〉

(3) 文脈から使役に読む。

見二信飢一、飯レ信。〈十八史略・西漢〉

五　受身形（〜される）

(1) 受身の助字（被・見など）を用いる。

信而見レ疑、忠而被レ謗。〈史記・屈原賈生列伝〉

(2) 「為〜所〜」の形を用いる。

襄公為二弟無知所一レ弑、…（一三八）〈十八史略〉

(3) 前置詞の働きをする置き字（於・乎）を用いる。
祇辱二 於奴隷人之手一、…（一五八）〈韓愈「雑説」〉
(4) 文脈から受身に読む。
遊二説秦 恵王一不レ用。（一三六）〈十八史略〉

六 比較形（～より～だ・～は～に及ばない）

(1) 前置詞の働きをする置き字（於・于・乎など）を用いる。
霜葉紅二於二月花一。〈杜牧「山行」〉
(2) 「如・若」などの助字を用いる。
莫レ若三六国従親、以擯レ秦。（一三七）〈十八史略〉

七 選択形（どちらかといえば～しても、～するな）

(1) 「寧～無～」の形を用いる。
寧 為二鶏口一、無レ為二牛後一。（一三七）〈十八史略〉

八 仮定形（もし～ならば・たとえ～としても）

(1) 仮定を表す副詞（如・若・苟・縦・仮令など）を用いる。
如詩不レ成、罰依三金谷酒数一。（一六一）〈李白「春夜宴二桃李園一序」〉
(2) 使役の助字（使・令など）を用いる。
使三我 有二雒陽負郭田二頃一、…〈史記・蘇秦列伝〉
(3) 「雖」を用いる。
雖レ覆二簣一、進、吾往也。（一六七）〈論語〉
(4) 文脈から仮定に読む。
数人 飲之不レ足、…（一二六）〈戦国策〉

九 抑揚形（～さえ～だから、まして～は、なおさら～だ）

(1) 「～且～況～乎」の形を用いる。
死馬 且買レ之、況 生者乎。（一三四）〈十八史略〉

十 限定形（ただ～だけだ）

(1) 限定の副詞（但・唯・徒・直・祇・独・纔など）を用いる。
祇辱二 於奴隷人之手一、…（一五八）〈韓愈「雑説」〉
(2) 限定の助字（已・耳・爾・而已・而已矣など）を文末に用いる。
書足三以記二名姓一而已。〈史記・項羽本紀〉
(3) 限定の副詞＋限定の助字
直不二百歩一耳。〈孟子・梁恵王上〉
(4) 文脈から限定に読む。
土階三等。〈十八史略・五帝〉

十一 累加形（ただ～だけではない）

(1) 否定の助字＋限定の副詞
不二唯 忘一レ帰、可二以終一レ老。〈白居易「与二微之一書」〉

十二 詠嘆形（ああ、～だなあ・なんと～ではないか）

(1) 感動詞（唉・噫・嗚呼・嗟呼など）を用いる。
嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。（一五九）〈韓愈「雑説」〉
(2) 詠嘆の助字（矣・乎・哉・夫など）を文末に用いる。
逝者如レ斯夫。不レ舎二昼夜一。（一七〇）〈論語〉
(3) 疑問詞「何」を用いる。
是何楚人之多也。〈史記・項羽本紀〉
(4) その他の形を用いる。
学而時習レ之、不二亦説一乎。（一六六）〈論語〉

漢文の重要単語

①漢文編の本文で＊印を付した「重要単語」を、音読みの五十音順にまとめた。主に本文中で用いられている用法の意味を示した。
②色数字は重要単語で取り上げたページ、黒字はその用法で使用されている初出のページを示した。
③「漢文の基本句形」で取り上げたものは →句形一【否定形】のように参照できるようにした。

一字の単語

已イ［やム］終わる。やめる。 161・168
以イ［ひきヰル］率いる。［もつテ・もつテス］…で。…によって。…を。…として。【手段・理由・対象・資格など】 119・158
矣イ［読まない］断定の語気を表す置き字。 120・136
為イ［ためニ］…のために。［たリ］…である。［つくル］作る。［なス］…とする。［なル］…となる。 137 118 126 134 119
于ウ［読まない］…に。…を。【場所・対象など】 137 140
亦エキ［また］…もまた。 128 128
焉エン［読まない］強調の語気を表す置き字。 120・128
［いづクンゾ］どうして…か（いや…ない）。→句形三【反語形】 122
於オ［読まない］…に。…を。…より。【場所・対象・起点】 120
［読まない］…より（も）。→句形六【比較形】 135
［読まない］…に…される。→句形五【受身形】 120・158
可カ［おイテ］…において。【場所・対象など】 134 168
［かナリ］よい。［きク］聞き入れる。［ベシ］…できる。 142 142
看カン［みル］見る。 151
其キ［そノ］その。（主部）［そノ］その。（属性） 158 119
［そレ］強調の語気を表す。 159
宜ギ［よろシク…ベシ］…するのがよい。 122・173
客キャク［かく］旅人。 149
今キン［いま］もし。［いまニ］すぐに。 135 135
君クン［きみ］君主。［きみ］あなた。 134 150
故コ［ふるシ］古い。昔のこと。［ゆゑニ］だから。 166 158
之シ［これ］これ。この。ここ。［の］…の。…が。…で。 120・128 119
子シ［し］あなた。［し］男子に対する敬称。先生。 126 166
字ジ［あざな］成人した男子が本名のほかに付ける呼び名。 138
而ジ［読まない］…て。…して。【順接】［しかシテ］そして。【順接】［なんぢ］お前。 120 120 138 140
自ジ［みづカラ］自分で。自分から。［より］…から。 138 140
爾ジ［なんぢ］お前。 166 173
者シャ［もの］人。もの。こと。［は］…は。 119 160
若ジャク［しク］及ぶ。→句形六【比較形】［ごとシ］…のようだ。［なんぢ］お前。 137 160 128
従ジュウ［したがフ］従う。［より］…から。 169 135
且ショ［かツ］その上。また。［まさニ…（ント）す］…しようとする。…しそうだ。 135 126
如ジョ［ごとシ］…のようだ。 154

[しク]及ぶ。→句形六【比較形】
[もシ]もし…ならば。→句形七【仮定形】 161 119

恕ジョ
[じよ]思いやり。他人を大切にすること。 170

将ショウ
[まさニ…(ント)す]…しようとする。…しそうだ。 122・128

勝ショウ
[たフ]たえる。 152

嘗ショウ
[かつテ]以前。 138

城ジョウ
[じやう]町。 150

食ショク
[しよく]食べ物。食事。 128

雖スイ
[いへどモ]たとえ…としても。→句形七【仮定形】 158

請セイ
[こフ]どうか…させてください。 126・141

走ソウ
[はしル]逃げる。 139

相ソウ
[あひ]互いに。 126

[あひ]動作の対象を表す。 153

即ソク
[すなはチ]…しては。…する度に。 141

則ソク
[すなはチ]…は。 139

[すなはチ]…ならば。 166

卒ソツ
[そつ]兵士。 136

乃ダイ
[すなはチ]そこで。 126

誅チュウ
[ちゆうス]罪をとがめて殺す。 140

道ドウ
[みち]正しい道理。 118

[みちびク]先に立って導く。 168

能ノウ
[のう]能力。 158

[よク]…できる。 126

夫フ
[かな]…だなあ。→句形十一【詠嘆形】 170

[そレ]そもそも。 160

復フク
[ふくス]報いる。 140

[ふたたび]二度と。 167

[また]再び。 140

勿ブツ
[なカレ]…してはいけない。→句形一【否定形】 170

北ホク
[にグ]逃げる。 142

未ミ
[いまダ…ず]まだ…ない。→句形一【否定形】 122・126

也ヤ
[か・や]…か。【疑問・反語・詠嘆】→句形三【反語形】 158

[なり]…である。 134・167

[や]…は。 128・172

猶ユウ
[なホ…(ノ・ガ)ごとシ]ちょうど…のようなものである。 122

[なホ]それでも。なお。 153

与ヨ
[あたフ]与える。 128

[と]…と。 136

[ともニ]一緒に。 134

欲ヨク
[よく]欲望。 128

[ほつス]…したいと思う。 135

[ほつス]…しそうだ。 152

二字以上の単語

不能
[あたハず]…できない。 159

遊説
[いうぜい]諸国を巡って、諸侯に自分の意見・政策の正当性を説得すること。 136

所謂
[いはゆる]世にいう。 173

江上
[かうじやう]長江のほとり。 142

客舎
[かくしや]旅館。 150

学者
[がくしや]学問をする者。 172

期年
[きねん]まる一年。 135

君子
[くんし]徳の高い人。優れた為政者。 119・166

於是
[ここニおイテ]こうして。そこで。 135

故人
[こじん]古くからの友人。 150

千里馬
[せんりのうま]一日に千里を走る名馬。 134・158

多少
[たせう]どれほど。多くの。 148

不足
[たらず]足りない。→句形一【否定形】 126・134

以為
[もつテ…トなス]…と思う。 172

所以
[ゆゑん]…するためのもの。 138

常用漢字表

この表は、「常用漢字表」（平成二十二年内閣告示）をもとに、常用漢字二一三六字を字音により五十音順に配列した。字音を取り上げていないものは訓により示した。漢字の下の片仮名は音、平仮名は訓（色字は送り仮名）、＊印は学年別漢字配当表に掲載されている漢字を示す。

あ

亜 ア
哀 アイ あわれ あわれむ
挨 アイ
愛* アイ
曖 アイ
悪* アク わるい
握 アク にぎる
圧* アツ
扱 あつかう
宛 あてる
嵐 あらし
安* アン やすい
案* アン
暗* アン くらい

い

以* イ
衣* イ ころも
位* イ くらい
囲* イ かこむ かこう
医* イ
依 イ エ
委* イ ゆだねる
威 イ
為 イ
畏 イ おそれる
胃* イ
尉 イ
異* イ こと
移* イ うつる うつす

う

右* ウユウ みぎ
宇* ウ
羽* ウ は はね
雨* ウ あめ あま
唄 うた
鬱 ウツ
畝 うね
浦 うら
運* ウン はこぶ
雲* ウン くも

え

永* エイ ながい
泳* エイ およぐ

お

汚 オ けがす けがれる けがらわしい よごす よごれる きたない
王* オウ
凹 オウ
央* オウ
応* オウ こたえる
往* オウ
乙 オツ
億* オク
憶 オク
臆 オク
虞 おそれ
屋* オク や
岡* おか
横* オウ よこ
奥 オウ おく
翁 オウ
桜* オウ さくら
殴 オウ なぐる
欧 オウ
旺 オウ
押 オウ おす おさえる
遠* エンオン とおい
鉛 エン なまり
塩* エン しお
演* エン
縁 エン ふち
艶 エン つや

か

化* カケ ばける ばかす
下* カゲ した もと しも さげる さがる くだる くだす くださる おろす おりる
穏 オン おだやか
温* オン あたたか あたたかい あたたまる あたためる
恩* オン
音* オンイン おと ね
卸 おろす おろし
俺 おれ

家* カ ケ カ いえ や
夏* カ ゲ カ なつ
架 カ かける かかる
科* カ
苛 カ
河* カ かわ
果* カ はたす はて はてる
価* カ あたい
佳 カ
花* カ はな
何* カ なに なん
仮* カ ケ かり
可* カ
加* カ くわえる くわわる
火* カ ひ ほ
蚊 か
課* カ
稼 カ かせぐ
箇 カ
歌* カ うた うたう
寡 カ
靴 カ くつ
禍 カ
暇 カ ひま
嫁 カ よめ とつぐ
過* カ すぎる すごす あやまつ あやまち
渦 カ うず
貨* カ
菓 カ
華 カ ケ はな
荷* カ に
怪 カイ あやしい あやしむ
改* カイ あらためる あらたまる
戒 カイ いましめる
快* カイ こころよい
会* カイ エ あう
灰* カイ はい
回* カイ エ まわる まわす
介 カイ
餓 ガ
雅 ガ
賀* ガ
芽* ガ め
画* ガ カク
我* ガ われ わ
瓦 ガ かわら
牙 ガ きば
壊 カイ こわす こわれる
潰 カイ つぶす つぶれる
解* カイ ゲ とく とかす とける
楷 カイ
塊 カイ かたまり
階* カイ
開* カイ ひらく ひらける あく あける
絵* カイ エ
械* カイ
皆 カイ みな
界* カイ
海* カイ うみ
悔 カイ くいる くやむ くやしい
拐 カイ
垣 かき
骸 ガイ
慨 ガイ
該 ガイ
蓋 ガイ ふた
慨 ガイ
街* ガイ まち
涯 ガイ
崖 ガイ がけ
害* ガイ
効 ガイ
外* ガイ ゲ そと ほか はず はずす はずれる
貝* かい
諧 カイ
懐 カイ ふところ なつかしい なつかしむ なつく なつける
柿 かき
格* カク コウ
革* カク かわ
拡* カク
角* カク かど つの
各* カク おのおの
獲 カク え
確* カク たしか たしかめる
閣* カク
隔 カク へだてる へだたる
較 カク
覚* カク おぼえる さます さめる
郭 カク
殻 カク から
核 カク
嚇 カク
滑 カツ コツ すべる なめらか
葛 カツ くず
割* カツ わる わり わわれる さく
渇 カツ かわく
喝 カツ
活* カツ
括 カツ
潟* カツ かた
掛 かける かかる かかり
顎 ガク あご
額* ガク ひたい
楽* ガク ラク たのしい たのしむ
岳 ガク たけ
学* ガク まなぶ
穫 カク
巻* カン まく まき
冠 カン かんむり
官* カン
肝 カン きも
完* カン
缶 カン
汗 カン あせ
甘 カン あま あまい あまえる あまやかす
刊* カン
干* カン ほす ひる
刈 かる
鎌 かま
釜 かま
株* かぶ
且 かつ
鞄 カツ
褐 カツ
寛 カン
勧 カン すすめる
閑 カン
間* カン ケン あいだ ま
款 カン
棺 カン
敢 カン
換 カン かえる かわる
堪 カン たえる
喚 カン
寒* カン さむい
貫 カン つらぬく
患 カン わずらう
勘 カン
乾 カン かわく かわかす
陥 カン おちいる おとしいれる
看* カン
韓 カン
観* カン
簡* カン
環 カン
館* カン やかた
還 カン
憾 カン
緩 カン ゆるい ゆるやか ゆるむ ゆるめる
監 カン
歓 カン
関* カン せき かかわる
管* カン くだ
慣* カン なれる ならす
漢* カン
感* カン
幹* カン みき

き

艦 カン
鑑 カン かんがみる
丸* ガン まる まるい まるめる
含 ガン ふく ふくむ ふくめる
岸* ガン きし
岩* ガン いわ
玩 ガン
眼* ガン ゲン まなこ
頑 ガン
顔* ガン かお
願* ガン ねがう

気* ケ キ
岐* キ
希* キ
忌 キ い いむ いまわしい
汽* キ
奇 キ
祈 キ いのる
季* キ
紀* キ
軌 キ
既 キ すでに
記* キ しるす
起* キ おきる おこる おこす

基* キ もと もとい
寄* キ よる よせる
規* キ
亀 キ かめ
喜* キ よろこぶ
幾 キ いく
揮* キ
期* ゴ キ
棋 キ
貴* キ たっとい たっとぶ とうとい とうとぶ
棄 キ
毀 キ
旗* キ はた
器* キ うつわ
畿 キ
輝 キ かがやく

機* キ はた
騎 キ
技* ギ わざ
宜 ギ
偽 ギ いつわる にせ
欺* ギ あざむく
義* ギ
疑* ギ うたがう
儀 ギ
戯 ギ たわむれる
擬 ギ
犠 ギ
議* ギ
菊 キク
吉 キチ キツ
喫 キツ
詰 キツ つめる つまる つむ

却 キャク
脚 キャク キャ あし
客* キャク カク
逆* ギャク さか さからう
虐 ギャク しいたげる
九* キュウ ク ここの ここのつ
久* キュウ ク ひさしい
及 キュウ およぶ および およぼす
弓* キュウ ゆみ
丘 キュウ おか
旧* キュウ
休* キュウ やすむ やすまる やすめる やすらう
吸* キュウ すう
朽 キュウ くちる
臼 キュウ うす

求* キュウ もとめる
究* キュウ きわめる
泣* キュウ なく
級* キュウ
糾 キュウ
急* キュウ いそぐ
宮* キュウ グウ ク みや
救* キュウ すくう
球* キュウ たま
給* キュウ
嗅 キュウ かぐ
窮 キュウ きわめる きわまる
牛* ギュウ うし
去* キョ コ さる
巨 キョ
居* キョ いる
拒 キョ こばむ

拠 キョ コ
挙* キョ あげる あがる
虚 キョ コ
許* キョ ゆるす
距 キョ
魚* ギョ うお さかな
御 ギョ ゴ おん
漁* ギョ リョウ
凶 キョウ
共* キョウ とも
叫 キョウ さけぶ
狂 キョウ くるう くるおしい
享 キョウ
京* キョウ ケイ
供* キョウ ク そなえる とも
協* キョウ

況 キョウ
峡 キョウ
狭 キョウ せまい せまる せばめる せばまる
挟 キョウ はさむ はさまる
恐 キョウ おそれる おそろしい
恭 キョウ うやうやしい
胸* キョウ むね むな
脅 キョウ おびやかす おびやかす おどす おどかす
強* キョウ ゴウ つよい つよまる つよめる しいる
教* キョウ おしえる おそわる
郷* キョウ ゴウ
境* キョウ ケイ さかい
橋* キョウ はし
矯 キョウ ためる

鏡* キョウ かがみ
競* キョウ ケイ きそう せる
響 キョウ ひびく
驚 キョウ おどろく おどろかす
仰 ギョウ コウ あおぐ おお せ
暁 ギョウ あかつき
業* ギョウ ゴウ わざ
凝 ギョウ こる こらす
曲* キョク まがる まげる
局* キョク
極* キョク ゴク きわめる きわまる きわみ
玉* ギョク たま
巾 キン
斤 キン

均* キン
近* キン ちかい
金* キン コン かね かな
菌 キン
勤* キン ゴン つとめる つとまる
琴 キン こと
筋* キン すじ
僅 キン わずか
禁* キン
緊 キン
錦 キン にしき
謹 キン つつしむ
襟 キン えり
吟 ギン
銀* ギン

く

区* ク
句* ク
苦* クくるしいくるしむくるしめるにがいにがる
駆 クかける かる
具* グ
惧 グ
愚 グおろか
空* クウそらあくあける から
偶 グウ
遇 グウ
隅 グウすみ
串 くし
屈 クツ
掘 クツほる

け

径* ケイ
系* ケイ
形* ケイギョウかたかたち
刑 ケイ
兄* ケイキョウあに
群* グンむれるむれむら
郡* グン
軍* グン
薫 クンかおる
勲 クン
訓* クン
君* クンきみ
繰 くる
熊* くま
窟 クツ

携 ケイたずさえるたずさわる
傾 ケイかたむくかたむける
軽* ケイかるいかろやか
景* ケイ
敬* ケイうやまう
蛍 ケイほたる
経* ケイキョウへる
渓 ケイ
掲 ケイかかげる
啓 ケイ
恵 エケイめぐむ
計* ケイはかるはからう
契 ケイちぎる
型* ケイかた
係* ケイかかるかかり
茎 ケイくき

欠* ケツかけるかく
桁 けた
激* ゲキはげしい
撃 ゲキうつ
劇* ゲキ
隙 ゲキすき
鯨 ゲイくじら
迎 ゲイむかえる
芸* ゲイ
鶏 ケイにわとり
警* ケイ
憩 ケイいこいいこう
稽 ケイ
憬 ケイ
慶 ケイ
詣 ケイもうでる
継 ケイつぐ

潔* ケツいさぎよい
月* ゲツガツつき
犬* ケンいぬ
件* ケン
見* ケンみるみえるみせる
券* ケン
肩 ケンかた
建* ケンコンたてるたつ
研* ケンとぐ
県* ケン

傑 ケツ
結* ケツむすぶゆうゆわえる
決* ケツきめるきまる
血* ケツち
穴* ケツあな

検* ケン
堅 ケンかたい
圏 ケン
険* ケンけわしい
健* ケンすこやか
軒 ケンのき
拳 ケンこぶし
剣 ケンつるぎ
兼 ケンかねる
倹 ケン

嫌 ケンゲンきらういや
献 ケンコン
絹* ケンきぬ
遣 ケンつかうつかわす
権* ケンゴン
憲* ケン
賢 ケンかしこい

言* ゲンゴンいうこと
弦 ゲンつる
限* ゲンかぎる
原* ゲンはら
現* ゲンあらわれるあらわす
舷 ゲン
減* ゲンへるへらす

懸 ケンかける かかる
玄 ゲン
幻 ゲンまぼろし
元* ゲンガンもと
験* ゲンゲン
顕 ケン
繭 ケンまゆ
鍵 ケンかぎ
謙 ケン

こ

己* コキおのれ
戸* コと
古* コふるいふるす
呼* コよぶ
固* コかためるかたまるかたい
股 コまた
虎 コとら
孤 コ
弧 コ
故* コゆえ
枯 コかれるからす
個* コ
庫* コク

厳* ゲンゴンおごそかきびしい
源* ゲンみなもと

後* ゴコウのちうしろあとおくれる
午* ゴ
呉 ゴ
互 ゴたがい
五* ゴいつついつつ
顧 コかえりみる
鋼 コ
鼓 コつづみ
誇 コほこる
雇 コやとう
湖* コみずうみ

悟 ゴさとる
娯 ゴ
碁 ゴ
語* ゴかたるかたらう
誤* ゴあやまる

交* コウまじわるまじえるまじるまざるまぜるかうかわす
甲 コウカン
広* コウひろいひろまるひろがるひろめるひろげる
巧 コウたくみ
功* コウク
孔 コウ
勾 コウ
公* コウおおやけおおやけ
工* コウク
口* コウクくち
護* ゴ

光* コウひかるひかりひかる
向* コウむくむけるむかうむこう

后* コウ
好* コウ このむ すく
江 コウ え
考* コウ かんがえる
行* コウ ギョウ アン いく ゆく おこなう
坑 コウ
孝* コウ
抗 コウ
攻 コウ せめる
更 コウ さら ふける ふかす
効* コウ きく
拘 コウ
肯 コウ
侯 コウ

厚* コウ あつい
恒 コウ
洪 コウ
皇* コウ オウ
紅* コウ くれない べに
荒 コウ あら あれる あらす
郊 コウ
香* コウ キョウ かおり かおる
候* コウ そうろう
校* コウ
耕* コウ たがやす
航* コウ
貢 コウ みつぐ
降* コウ おりる おろす ふる

高* コウ たか たかい たかまる たかめる
康* コウ
控 コウ ひかえる
梗 コウ
黄* コウ オウ き
喉 コウ のど
慌 コウ あわてる あわただしい
港* コウ みなと
硬 コウ かたい
絞 コウ しぼる しめる しまる
項 コウ
溝 コウ みぞ
鉱* コウ
構* コウ かまえる かまう
綱 コウ つな

稿 コウ
酵 コウ
興* コウ キョウ おこる おこす
衡 コウ
鋼* コウ はがね
講* コウ
購 コウ
乞 こう
号* ゴウ
合* ゴウ ガッ カッ あう あわす あわせる
拷 ゴウ
剛 ゴウ
傲 ゴウ
豪 ゴウ
克 コク
告* コク つげる

谷* コク たに
刻* コク きざむ
国* コク くに
黒* コク くろ くろい
穀* コク
酷 コク
獄 ゴク
骨* コツ ほね
込 こむ こめる
駒 こま
頃 ころ
今* コン キン いま
困* コン こまる
昆 コン
恨 コン うらむ うらめしい
根* コン ね
婚 コン

混* コン まじる まざる まぜる こむ
痕 コン あと
紺 コン
魂 コン たましい
墾 コン
懇 コン ねんごろ
さ
左* サ ひだり
佐* サ
沙 サ
査* サ
砂* サ シャ すな
差* サ さす
唆 サ そそのかす
詐 サ
鎖 サ くさり

才* サイ
座* ザ すわる
挫 ザ
再* サイ ふたたび
災* サイ わざわい
妻* サイ つま
采 サイ
砕 サイ くだく くだける
宰 サイ
栽 サイ
彩 サイ いろどる
採* サイ とる
済* サイ すむ すます
祭* サイ まつる まつり
斎 サイ
細* サイ ほそい ほそる こまか こまかい

菜* サイ な
最* サイ もっとも
裁* サイ たつ さばく
債 サイ
催 サイ もよおす
塞 サイ ソク ふさぐ ふさがる
歳 サイ セイ
際* サイ きわ
載 サイ のせる のる
埼* さい
在* ザイ ある
材* ザイ
剤 ザイ
財* ザイ
罪* ザイ つみ
崎* さき
作* サク つくる

削 サク けずる
昨* サク
柵 サク
索 サク
策* サク
酢 サク す
搾 サク しぼる
錯 サク
咲 さく
冊* サツ サク
札* サツ ふだ
刷* サツ する
刹 サツ セツ
拶 サツ
殺* サツ サイ セツ ころす
察* サツ
撮 サツ とる

擦 サツ する すれる
雑* ザツ ゾウ
皿* さら
三* サン みみ みつ つ
山* サン やま
参* サン まいる
蚕* サン かいこ
桟 サン
惨 サン ザン みじめ
産* サン うむ うまれる うぶ
傘 サン かさ
散* サン ちる ちらす ちらかす ちらかる
算* サン
酸* サン す
賛* サン

し

矢* シ やシ
市* シ いち
四* シ よ よつ よっつ よん
司* シ
史* シ
仕* シ ジ つかえる
氏* シ うじ
止* シ とまる とめる
支* シ ささえる
子* シ ス こ
士* シ
暫 ザン
斬 ザン きる
残* ザン のこる のこす

思* シ おもう
姿* シ すがた
肢 シ
祉 シ
枝* シ えだ
姉* シ あね
始* シ はじめる はじまる
刺 シ さす さざる
使* シ つかう
私* シ わたくし わたし
志* シ こころざす こころざし
伺 シ うかがう
至* シ いたる
糸* シ いと
死* シ しぬ
旨 シ むね

雌 シ めす
誌* シ
飼* シ かう
資* シ
詩* シ
試* シ こころみる ためす
嗣 シ
歯* シ は
詞* シ
紫* シ むらさき
視* シ
脂 シ あぶら
紙* シ かみ
恣 シ
師* シ
施 シ セ ほどこす
指* シ ゆび さす

持* ジ もつ
治* ジ チ おさめる おさまる おさまる なおす なおる
侍 ジ さむらい
事* ジ ズ こと
児* ジ ニ
似* ジ にる
自* ジ シ みずから
耳* ジ みみ
次* ジ シ つぐ つぎ
寺* ジ てら
字* ジ あざ
示* ジ シ しめす
諮 シ はかる
賜 シ たまわる
摯 シ

執 シツ シュウ とる
疾 シツ
室* シツ むろ
失* シツ うしなう
叱 シツ しかる
七* シチ なな なな なつ なの
軸 ジク
識* シキ
式* シャ シキ
鹿* ロク しか
璽 ジ
餌 ジ え さえ
磁* ジ
辞* ジ や める
慈 ジ いつくしむ
滋* ジ
時* ジ とき

煮 シャ にる にえる にやす
斜 シャ なな なめ
赦 シャ
捨* シャ すてる
射* シャ いる
者* シャ もの
舎* シャ
車* シャ くるま
社* シャ やしろ
写* シャ うつす うつる
芝 しば
実* ジツ み みのる
質* シツ シチ チ
漆 シツ うるし
嫉 シツ
湿 シツ しめる しめす

主* シュ ス ぬし おも
手* シュ て た
寂 シュク セキ さび さびしい さびれる
弱* ジャク よわい よわる よわまる よわめる
若* ジャク ニャク わかい もしくは
爵 シャク
釈 シャク
酌 シャク くむ
借* シャク かりる
尺* シャク
蛇 ジャ ダ へび
邪 ジャ
謝* シャ あやまる
遮 シャ さえぎる

需 ジュ
授* ジュ さずける さずかる
呪 ジュ のろう
受* ジュ うける うかる
寿 ジュ ことぶき
趣 シュ おもむき
種* シュ たね
腫 シュ は れる らす
酒* シュ さけ さか
珠 シュ
殊 シュ こと
首* シュ くび
狩 シュ かる かり
取* シュ とる
朱 シュ
守* シュ ス まもる もり

羞 シュウ
終* シュウ おわる おえる
袖 シュウ そで
修* シュウ おさめる おさまる
臭 シュウ くさい にお う
秋* シュウ あき
拾* シュウ ジュウ ひろう
宗* シュウ ソウ
周* シュウ まわり
秀 シュウ ひいでる
舟 シュウ ふね ふな
州* シュウ す
囚 シュウ
収* シュウ おさめる おさまる
樹* ジュ
儒 ジュ

柔 ジュウ ニュウ やわらか やわらかい
住* ジュウ すむ すまう
充 ジュウ あてる
汁 ジュウ しる
十* ジュウ ジッ と お
襲 シュウ おそう
蹴 シュウ け る
醜 シュウ みにく い
酬 シュウ
愁 シュウ うれえる うれい
集* シュウ あつまる あつめる つど う
衆* シュウ シュ
就* シュウ ジュ つく つける
週* シュウ
習* シュウ ならう

縮* シュク ちぢむ ちぢまる ちぢめる ちぢれる ちぢらす
粛 シュク
淑 シュク
宿* シュク やど やどる やどす
祝* シュク シュウ いわう
叔 シュク
縦* ジュウ たて
獣 ジュウ けもの
銃 ジュウ
渋 ジュウ しぶ しぶい しぶる
従* ジュウ ショウ したがう したがえる
重* ジュウ チョウ え おもい かさねる かさなる

準* ジュン
順* ジュン
循 ジュン
純* ジュン
殉 ジュン
准 ジュン
盾 ジュン たて
巡 ジュン めぐる
旬 ジュン シュン
瞬 シュン またたく
春* シュン はる
俊 シュン
術* ジュツ
述* ジュツ のべる
出* シュツ スイ でる だす
熟* ジュク う れる
塾 ジュク

助* ジョ たすける たすかる たすけ
如 ジョ ニョ
女* ジョ ニョウ おんな め
諸* ショ
緒 ショ チョ お
署* ショ
暑* ショ あつい
庶 ショ
書* ショ かく
所* ショ ところ
初* ショ はじめ はじめて はつ うい そめる
処* ショ
遵 ジュン
潤 ジュン うるおう うるおす うるむ

昇 ショウ のぼる
承* ショウ うけたまわる
招* ショウ まねく
尚 ショウ
肖 ショウ
抄 ショウ
床 ショウ とこ ゆか
匠 ショウ
召 ショウ めす
少* ショウ すくない すこし
升 ショウ ます
小* ショウ ちいさい こ お
除* ジョ のぞく
徐 ジョ
叙 ジョ
序* ジョ

勝* ショウ かつ まさる
訟 ショウ
紹 ショウ
章* ショウ
渉 ショウ
商* ショウ あきなう
唱* ショウ となえる
笑* ショウ わらう えむ
称 ショウ
祥 ショウ
症 ショウ
消* ショウ きえる けす
将* ショウ
宵 ショウ よい
昭* ショウ
沼 ショウ ぬま
松* ショウ まつ

障* ショウ さわる
彰 ショウ
詳 ショウ くわしい
照* ショウ てる てらす てれる
奨 ショウ
傷* ショウ きず いたむ いためる
象* ショウ ゾウ
証* ショウ
詔 ショウ みことのり
粧 ショウ
硝 ショウ
焦 ショウ こげる こがす こがれる あせる
焼* ショウ やく やける
晶 ショウ
掌 ショウ

剰 ジョウ
浄 ジョウ
城* ジョウ しろ
乗* ジョウ の る のせる
状* ジョウ
条* ジョウ
冗 ジョウ
丈 ジョウ たけ
上* ジョウ シャン うわ かみ あげる あがる のぼる のぼせる のぼす
鐘 ショウ かね
礁 ショウ
償 ショウ つぐなう
賞* ショウ
衝 ショウ
憧 ショウ あこがれる

食* ショク ジキ く う くらう たべる
拭 ショク ふく ぬぐう
色* ショク シキ いろ
醸 ジョウ かもす
譲 ジョウ ゆずる
錠 ジョウ
嬢 ジョウ
壌 ジョウ
縄* ジョウ なわ
蒸* ジョウ む す むれる むらす
畳 ジョウ たた む たたみ
場* ジョウ ば
情* ジョウ セイ なさけ
常* ジョウ つね とこ

辛 シン から い
身* シン み
芯 シン
臣* シン ジン
伸 シン の びる のばす のべる
申* シン もうす
心* シン こころ
尻 しり
辱 ジョク はずかしめる
職* ショク
織* ショク シキ お る
嘱 ショク
触 ショク ふれる さわる
飾 ショク かざる
殖 ショク ふえる ふやす
植* ショク う える う わる

診 シン みる
森* シン もり
進* シン すす む すすめる
紳 シン
深* シン ふか い ふか まる ふか める
針* シン はり
真* シン ま
浸 シン ひた す ひた る
振 シン ふる ふるう ふれる
娠 シン
唇 シン くちびる
神* シン ジン かみ かん こう
津 シン つ
信* シン
侵 シン おか す

寝 シン ねる・ねかす
慎 シン つつしむ
新* シン あたらしい・あらた・にい
審 シン
震 シン ふるう・ふるえる
薪 シン たきぎ
親* シン おや・したしい・したしむ
人* ジン・ニン ひと
刃 ジン は
仁* ジン・ニ
尽 ジン つくす・つきる・つかす
迅 ジン
甚 ジン はなはだ・はなはだしい
陣 ジン

尋 ジン たずねる
腎 ジン
須 ス
す
図* ズ・ト はかる
水* スイ みず
吹 スイ ふく
炊 スイ たく
垂* スイ たれる・たらす
帥 スイ
粋 スイ いき
衰 スイ おとろえる
推* スイ おす
酔 スイ よう
遂 スイ とげる
睡 スイ
穂 スイ ほ

随 ズイ
髄 ズイ
枢 スウ
崇 スウ
数* スウ・ス かず・かぞえる
据 すえる・すわる
杉 すぎ
裾 すそ
寸* スン
瀬 せ
是 ゼ
せ
井* セイ・ショウ いい
世* セイ よ
正* セイ・ショウ ただしい・ただす・まさ

生* セイ・ショウ いきる・いける・うまれる・うむ・おう・はえる・はやす・なま・き
成* セイ・ジョウ なる・なす
西* セイ・サイ にし
声* セイ・ショウ こえ・こわ
制* セイ
姓 セイ・ショウ
征 セイ
性* セイ・ショウ
青* セイ・ショウ あお・あおい
斉 セイ
政* セイ・ショウ まつりごと

星* セイ・ショウ ほし
牲 セイ
省* セイ・ショウ かえりみる・はぶく
凄 セイ
逝 セイ ゆく・いく
清* セイ・ショウ きよい・きよまる・きよめる
盛* セイ・ジョウ もる・さかる・さかん
婿 セイ むこ
晴* セイ・はれる・はらす
勢* セイ いきおい
聖* セイ
誠* セイ まこと
精* セイ・ショウ
製* セイ

静* セイ・ジョウ しずか・しずまる・しずめる
請 セイ・シン こう・うける
整* セイ ととのえる・ととのう
醒 セイ
税* ゼイ
夕* セキ ゆう
斥 セキ
石* セキ・シャク コク いし
赤* セキ・シャク あか・あかい・あからむ・あからめる
昔* セキ・シャク むかし
析 セキ
席* セキ

誓 セイ ちかう
隻 セキ
脊 セキ
惜 セキ おしい・おしむ
戚 セキ
跡 セキ あと
責* セキ せめる
積* セキ つむ・つもる
績* セキ
籍 セキ
切* セツ・サイ きる・きれる
折* セツ おる・おり・おれる
拙 セツ つたない
窃 セツ
接* セツ つぐ
設* セツ もうける
雪* セツ ゆき

摂 セツ
節* セツ・セチ ふし
説* セツ・ゼイ とく
舌* ゼツ した
絶* ゼツ たえる・たやす・たつ
千* セン ち
川* セン かわ
仙 セン
占 セン しめる・うらなう
先* セン さき
宣* セン
専* セン もっぱら
泉* セン いずみ
浅* セン あさい
洗* セン あらう

染* セン そめる・そまる・しみる・しみ
扇 セン おうぎ
栓 セン
旋 セン
船* セン ふね・ふな
戦* セン いくさ・たたかう
煎 セン いる
羨 セン うらやむ・うらやましい
腺 セン
詮 セン
践 セン
箋 セン
銭* セン ぜに
潜 セン ひそむ・もぐる
線* セン
遷 セン

選* セン えらぶ
薦 セン すすめる
繊 セン
鮮 セン あざやか
全* ゼン まったく・すべて
前* ゼン まえ
善* ゼン よい
然* ゼン ネン
禅 ゼン
漸 ゼン
膳 ゼン
繕 ゼン つくろう
そ
狙 ソ ねらう
阻 ソ はばむ
祖* ソ
租 ソ

素* ソ ス
措 ソ
粗 ソ あらい
組* ソ くむ くみ
疎 ソ うとい うとむ
訴 ソ うったえる
塑 ソ
遡 ソ さかのぼる
礎 ソ いしずえ
双 ソウ ふた
壮 ソウ
早* ソウ サッ はやい はやまる はやめる
争* ソウ あらそう
走* ソウ はしる
奏* ソウ かなでる
相* ソウ ショウ あい

荘 ソウ
草* ソウ くさ
送* ソウ おくる
倉* ソウ くら
捜 ソウ さがす
挿 ソウ さす
桑 ソウ くわ
巣* ソウ す
掃 ソウ はく
曹 ソウ
曽 ソウ ゾ
爽 ソウ さわやか
窓* ソウ まど
創* ソウ つくる
喪 ソウ も
痩 ソウ やせる
葬 ソウ ほうむる

装* ソウ ショウ よそおう
僧 ソウ
層* ソウ
総* ソウ
想* ソウ ソ
贈 ゾウ ソウ おくる
臓* ゾウ
即 ソク
束* ソク たば
足* ソク あし たりる たる たす
促 ソク うながす
則* ソク
息* ソク いき
捉 ソク とらえる
速* ソク はやい はやめる はやまる すみやか
側* ソク がわ
測* ソク はかる

憎 ゾウ にくむ にくい にくらしい にくしみ
蔵* ゾウ くら
贈 ゾウ ソウ おくる
賊 ゾク
属* ゾク
族* ゾク
俗 ゾク

泰 タイ
堆 タイ
袋 タイ ふくろ
逮 タイ
替 タイ かえる かわる
貸* タイ かす
隊* タイ
滞 タイ とどこおる
態* タイ
戴 タイ
大* ダイ タイ おお おおきい おおいに
代* ダイ タイ かわる かえる よ しろ
台* ダイ タイ
第* ダイ
題* ダイ

滝 タキ
沢 タク さわ
択 タク
卓 タク
拓 タク
託 タク
濯 タク
諾 ダク
濁 ダク にごる にごす
但 ただし
達* タツ
奪 ダツ うばう
脱 ダツ ぬぐ ぬげる
棚 たな
誰 だれ
丹 タン

旦 タン ダン
担* タン かつぐ になう
単* タン
炭* タン すみ
胆 タン
探* タン さぐる さがす
淡 タン あわい
短* タン みじかい
嘆 タン なげく なげかわしい
端 タン はし はた
綻 タン ほころびる
誕* タン
鍛 タン きたえる
団* ダン トン
男* ダン ナン おとこ
段* ダン

弾 ダン ひく はずむ たま
暖* ダン あたたか あたたかい あたたまる あたためる
談* ダン
壇 ダン タン
地* チ ジ
池* チ いけ
知* チ しる
値* チ あたい
恥 チ はじる はじ はじらう はずかしい
遅 チ おくれる おくらす おそい
致 チ いたす
痴 チ

断* ダン たつ ことわる

た

多* タ おおい
他* タ ほか
損* ソン そこなう そこねる
尊* ソン たっとい たっとぶ とうとい とうとぶ
孫* ソン まご
村* ソン むら
存* ソン ゾン
率* ソツ リツ ひきいる
卒* ソツ
続* ゾク つづく つづける
遜 ソン

帯* タイ おびる
退* タイ しりぞく しりぞける
胎 タイ
怠 タイ おこたる なまける
待* タイ まつ
耐 タイ たえる
体* タイ テイ からだ
対* タイ ツイ
太* タイ タ ふとい ふとる
駄 ダ
惰 ダ
堕 ダ
唾 ダ つば
妥 ダ
打* ダ うつ
汰 タ

ち

壇 ダン タン
談* ダン
暖* ダン あたたか あたたかい あたたまる あたためる
弾 ダン ひく はずむ たま
断* ダン たつ ことわる
地* チ ジ
池* チ いけ
知* チ しる
値* チ あたい
恥 チ はじる はじ はじらう はずかしい
遅 チ おくれる おくらす おそい
致 チ いたす
痴 チ

稚 チ

置* チ おく

綴 チ

竹* チク たけ

畜 チク

逐 チク

蓄 チク たくわえる

築* チク きずく

窒 チツ

秩 チツ

茶* チャ サ

着* チャク ジャク きる きせる つく つける

嫡 チャク

中* チュウ ジュウ なか

仲* チュウ なか

虫* チュウ むし

沖* チュウ おき

宙* チュウ

忠* チュウ

抽 チュウ

注* チュウ そそぐ

昼* チュウ ひる

柱* チュウ はしら

衷 チュウ

酎 チュウ

駐 チュウ

鋳 チュウ いる

著* チョ あらわす いちじるしい

貯* チョ

丁* チョウ テイ

弔 チョウ とむらう

庁* チョウ

兆* チョウ きざす きざし

町* チョウ まち

長* チョウ ながい

挑 チョウ いどむ

帳* チョウ

張* チョウ はる

彫 チョウ ほる

眺 チョウ ながめる

釣 チョウ つる

頂* チョウ いただく いただき

鳥* チョウ とり

朝* チョウ あさ

貼 チョウ はる

超 チョウ こえる こす

腸* チョウ

跳 チョウ はねる とぶ

徴 チョウ

嘲 チョウ あざける

潮* チョウ しお

澄 チョウ すむ すます

調* チョウ しらべる ととのう ととのえる

聴 チョウ きく

懲 チョウ こりる こらす こらしめる

直* チョク ジキ ただち に なおす なおる

捗 チョク

勅 チョク

沈 チン しずむ しずめる

珍 チン めずらしい

朕 チン

陳 チン

賃* チン

鎮 チン しずめる しずまる

つ

追* ツイ おう

椎 ツイ

墜 ツイ

通* ツウ ツ とおる とおす かよう

痛* ツウ いたい いたむ いためる

塚 つか

漬 つける つかる

坪 つぼ

爪 つめ つま

鶴 つる

て

低* テイ ひくい ひくめる ひくまる

呈 テイ

廷 テイ

弟* テイ ダイ デ おとうと

定* テイ ジョウ さだめる さだまる さだか

底* テイ そこ

抵 テイ

邸 テイ

亭 テイ

貞 テイ

帝 テイ

訂 テイ

庭* テイ にわ

逓 テイ

偵 テイ

停* テイ

堤 テイ つつみ

提* テイ さげる

程* テイ ほど

艇 テイ

締 テイ しまる しめる

諦 テイ あきらめる

泥 デイ どろ

的* テキ まと

笛* テキ ふえ

摘 テキ つむ

滴 テキ しずく したたる

適* テキ

敵* テキ かたき

溺 デキ おぼれる

迭 テツ

哲 テツ

鉄* テツ

徹 テツ

撤 テツ

天* テン あめ あま

典* テン

展* テン

点* テン

店* テン みせ

添 テン そえる そう

転* テン ころがる ころがす ころげる ころぶ

塡 テン

田* デン た

伝* デン つたわる つたえる つたう

殿 デン テン との どの

電* デン

と

斗 ト

吐 ト はく

妬 ト ねたむ

徒* ト

途 ト

都* ト ツ みやこ

渡 ト わたる わたす

塗 ト ぬる

賭 ト かける

土* ド ト つち

奴 ド

努* ド つとめる

度* ド タク たび

怒 ド いかる おこる

刀* トウ かたな

灯* トウ ひ

冬* トウ ふゆ

当* トウ あたる あてる

投* トウ なげる

豆* トウ ズ まめ

東* トウ ひがし

到 トウ

逃 トウ にげる のがす のがれる

倒 トウ たおれる たおす

凍 トウ こおる こごえる

唐 トウ から

島* トウ しま

桃 トウ もも

討* トウ うつ

透 トウ すく すかす すける

党* トウ

悼 トウ いたむ

盗 トウ ぬすむ

陶 トウ

塔 トウ
搭 トウ
棟 トウ むね むな
湯* トウ ゆ
痘 トウ
登* トウ のぼ-る
答* トウ こた-える こたえ
等* トウ ひと-しい
筒 トウ つつ
統* トウ す-べる
稲 トウ いね いな
踏 トウ ふ-む ふ-まえる
糖* トウ
頭* トウ ズ トウ あたま かしら
藤 トウ ふじ
闘 トウ たたか-う
騰 トウ
同* ドウ おな-じ
洞 ドウ ほら
胴 ドウ
動* ドウ うご-く うご-かす
堂* ドウ
童* ドウ わらべ
道* ドウ みち
働* ドウ はたら-く
銅* ドウ
導* ドウ みちび-く
瞳 ドウ ひとみ
峠 とうげ
匿 トク
特* トク
得* トク え-る う-る
督 トク
徳* トク
篤 トク
毒* ドク
独* ドク ひと-り
読* ドク トク トウ よ-む
栃* とち
凸 トツ
突 トツ つ-く
届* とど-ける とど-く
屯 トン
豚 トン ぶた
頓 トン
貪 ドン むさぼ-る
鈍 ドン にぶ-い にぶ-る

曇 ドン くも-る
井 どんぶり どん
な
那 ナ
奈* ナ
内* ナイ ダイ うち
梨* なし
謎 なぞ
鍋 なべ
南* ナン みなみ
軟 ナン やわ-らか やわ-らかい
難* ナン かた-い むずか-しい
二* ニ ふた ふたつ
に
尼 ニ あま

弐 ニ
匂 におう
肉* ニク
虹 にじ
日* ニチ ジツ ひ か
入* ニュウ い-る い-れる はい-る
乳* ニュウ ち ちち
尿 ニョウ
妊 ニン
任* ニン まか-せる まか-す
忍 ニン しの-ぶ しの-ばせる
認* ニン みと-める
寧 ネイ
ね
熱* ネツ あつ-い

年* ネン とし
念* ネン
捻 ネン
粘 ネン ねば-る
燃* ネン も-える も-やす も-す
の
悩 ノウ なや-む なや-ます
納* ノウ ナッ ナン トウ おさ-める おさ-まる おさ-めるおさ-まる
能* ノウ
脳* ノウ
農* ノウ
濃 ノウ こい
把 ハ
は
波* ハ なみ

派* ハ
破* ハ やぶ-る やぶ-れる
覇 ハ
婆 バ
馬* バ うま ま
罵 バ ののし-る
拝* ハイ おが-む
杯 ハイ さかずき
背* ハイ せ せい そむ-く そむ-ける
肺* ハイ
俳* ハイ
配* ハイ くば-る
排 ハイ
敗* ハイ やぶ-れる
廃 ハイ すた-れる すた-る
輩 ハイ

売* バイ う-る う-れる
倍* バイ
梅* バイ うめ
培 バイ つちかう
陪 バイ
媒 バイ
買* バイ か-う
賠 バイ
白* ビャク ハク しら-しろ しろ-い
伯 ハク
泊 ハク と-まる と-める
拍 ハク ヒョウ
迫 ハク せま-る
剝 ハク は-がす は-ぐ は-がれる は-げる
舶 ハク

博* ハク バク
薄 ハク うす-い うす-める うす-まる うす-らぐ うす-れる
麦* バク むぎ
漠 バク
縛 バク しば-る
爆 バク
箱* はこ
箸 はし
畑* はた はたけ
肌 はだ
八* ハチ や やっ-つ よう
鉢 ハチ ハツ
発* ハツ ホツ
髪 ハツ かみ
伐 バツ

抜 バツ ぬ-く ぬ-ける ぬ-かす ぬか-る
罰 バツ バチ
閥 バツ
反* ハン ホン タン そ-る そ-らす
半* ハン なか-ば
氾 ハン
犯* ハン おか-す
帆 ハン ほ
汎 ハン
伴 ハン バン ともな-う
判* ハン バン
坂* ハン さか
阪* ハン
板* ハン バン いた
版* ハン

班* ハン
畔 ハン
般 ハン
販 ハン
斑 ハン
飯* ハン めし
搬 ハン
煩 ボン ハン わずらう わずらわす
頒 ハン
範 ハン
繁 ハン
藩 ハン
晩* バン
番* バン
蛮 バン
盤 バン

ひ

比* ヒ くらべる
皮* ヒ かわ
妃 ヒ
否* ヒ いな
批* ヒ
披 ヒ
彼 ヒ かれ かの
肥* ヒ こえる こえ こやす こやし
非* ヒ
卑 ヒ いやしい いやしむ いやしめる
飛* ヒ とぶ とばす
疲 ヒ つかれる
秘* ヒ ひめる
被 ヒ こうむる

悲* ヒ かなしい かなしむ
扉 ヒ とびら
費* ヒ ついやす ついえる
碑 ヒ
罷 ヒ
避 ヒ さける
尾 ビ お
眉 ビ まゆ
美* ビ うつくしい
備* ビ そなえる そなわる
微 ビ
鼻* ビ はな
膝 ひざ
肘 ひじ
匹 ヒツ ひき
必* ヒツ かならず
泌 ヒツ

筆* ヒツ ふで
姫 ひめ
百* ヒャク
氷* ヒョウ こおり ひ
表* ヒョウ おもて あらわす あらわれる
俵* ヒョウ たわら
票* ヒョウ
評* ヒョウ
漂 ヒョウ ただよう
標* ヒョウ
苗 ビョウ なえ なわ
秒* ビョウ
病* ビョウ ヘイ やむ やまい
描 ビョウ えがく かく
猫 ビョウ ねこ
品* ヒン しな

浜 ヒン はま
貧* ヒン ビン まずしい
賓 ヒン
頻 ヒン
敏 ビン
瓶 ビン

ふ

不* フ ブ
夫* フ フウ おっと
父* フ ちち
付* フ つける つく
布* フ ぬの
扶 フ
府* フ
怖 フ こわい
阜* フ
附 フ

訃 フ
負* フ まける まかす おう
赴 フ おもむく
浮 フ うく うかれる うかぶ うかべる
富* フ フウ とむ とみ
普 フ
腐 フ くさる くされる くさらす
敷 フ しく
膚 フ
賦 フ
譜 フ
侮 ブ あなどる
武* ブ ム

部* ブ
舞 ブ まう まい
封 フウ ホウ
風* フウ フ かぜ かざ
紛 フン まぎれる まぎらす まぎらわす まぎらわしい
雰 フン
噴 フン ふく
墳 フン
奮* フン ふるう
憤 フン いきどおる
幅 フク はば
副 フク
服* フク
伏 フク ふせる ふす
復* フク
福* フク
腹* フク はら
複* フク
覆 フク おおう くつがえす くつがえる
払 フツ はらう
沸 フツ わく わかす
仏* ブツ ほとけ

物* モツ ブツ もの
粉* フン こな こ
紛 フン まぎれる まぎらす まぎらわす まぎらわしい
雰 フン
噴 フン ふく
墳 フン
奮* フン ふるう
憤 フン いきどおる
陛* ヘイ
閉* ヘイ とじる とざす しめる しまる
塀 ヘイ
幣 ヘイ
弊 ヘイ
蔽 ヘイ
餅 ヘイ もち
米* ベイ マイ こめ
壁 ヘキ かべ
璧 ヘキ

聞* ブン モン きく きこえる
文* ブン モン ふみ
分* ブン フン ブ わける わかれる わかる わかつ
丙 ヘイ

へ

平* ヘイ ビョウ ひら たいら
兵* ヘイ ヒョウ
併 ヘイ あわせる
並* ヘイ なみ ならべる ならぶ ならびに
柄 ヘイ がら え

別* ベツ わかれる
蔑 ベツ さげすむ
片* ヘン かた
辺* ヘン あたり べ
返* ヘン かえす かえる
変* ヘン かわる かえる
偏 ヘン かたよる
遍 ヘン
編* ヘン あむ
弁* ベン
便* ベン ビン たより
勉* ベン
歩* ホ ブ フ あるく あゆむ

ほ

癖 ヘキ くせ

保* ホ たもつ
哺 ホ
捕 ホ とらえる とらわれる とる つかまえる つかまる
補* ホ おぎなう
舗 ホ
母* ボ はは
募 ボ つのる
墓* ボ はか
慕 ボ したう
暮* ボ くれる くらす
簿 ボ
方* ホウ かた
包* ホウ つつむ
芳 ホウ かんばしい
邦 ホウ
奉 ホウ ブ たてまつる

宝* ホウ たから
抱 ホウ だく いだく かかえる
放* ホウ はなす はなつ はなれる ほうる
法* ホウ ハッ ホッ
泡 ホウ あわ
胞 ホウ
俸 ホウ
倣 ホウ ならう
峰 ホウ みね
砲 ホウ
崩 ホウ くれる くずす
訪* ホウ おとずれる たずねる
報* ホウ むくいる
蜂 ホウ はち
豊* ホウ ゆたか

飽 ホウ あきる あかす
縫 ホウ ぬう
褒 ホウ ほめる
亡* ボウ モウ ない
乏 ボウ とぼしい
忙 ボウ いそがしい
坊 ボウ ボッ
妨 ボウ さまたげる
忘* ボウ わすれる
防* ボウ ふせぐ
房 ボウ ふさ
肪 ボウ
某 ボウ
冒 ボウ おかす
紡 ボウ つむぐ
剖 ボウ
望* ボウ モウ のぞむ

傍 ボウ かたわら
帽 ボウ
棒* ボウ
貿* ボウ
貌 ボウ
膨 ボウ ふくらむ ふくれる
謀 ボウ ム はかる
頬 ホオ
北* ホク きた
木* ボク モク き こ
朴 ボク
牧* ボク まき
睦 ボク
僕 ボク
墨 ボク すみ

撲 ボク
没 ボツ
勃 ボツ
堀 ホリ
本* ホン もと
奔 ホン
翻 ホン ひるがえる ひるがえす
凡 ボン ハン
盆 ボン

暴* ボウ バク あばく あばれる
麻 マ あさ
摩 マ
磨 マ みがく
魔 マ
毎* マイ
妹* マイ いもうと
枚* マイ

ま

埋 マイ うめる うまる うもれる
幕* マク バク
膜 マク
枕 まくら
又 また
抹 マツ
末* マツ バツ すえ
万* マン バン
満* マン みちる みたす
慢 マン
漫 マン

味 マイ
岬 みさき
密* ミツ
蜜 ミツ
脈* ミャク
妙 ミョウ
民* ミン たみ
眠 ミン ねむる ねむい
矛 ほこ
務* ム つとめる つとまる
無* ブ ない
夢* ム ゆめ
霧 ム きり
娘 むすめ

む

命* メイ ミョウ いのち
明* メイ ミョウ あかり あかるい あかるむ あからむ あきらか あく あける あくる あかす
迷* メイ まよう
冥 メイ ミョウ
盟* メイ
銘 メイ
鳴* メイ なく なる ならす
滅 メツ ほろびる ほろぼす
免 メン まぬかれる
面* メン おも おもて つら
綿* メン わた
麺 メン

茂 モ しげる
模* モ ボ
毛* モウ け
妄 モウ ボウ
盲 モウ
耗 モウ コウ
猛 モウ
網 モウ あみ
目* モク ボク め
黙 モク だまる
門* モン かど
紋 モン
問* モン とう とい とん

も

治 ヤ
夜* ヤ よ よる
野* ヤ の
弥 や
厄 ヤク
役* ヤク エキ
約* ヤク
訳* ヤク わけ
薬* ヤク くすり
躍 ヤク おどる
闇 やみ

ゆ

由* ユ ユウ よし
油* ユ あぶら
喩 ユ

や

雄 ユウ おす
遊* ユウ あそぶ
裕 ユウ
猶 ユウ
湧 ユウ わく
郵* ユウ
悠 ユウ
幽 ユウ
勇* ユウ いさむ
有* ユウ ある
友* ユウ とも
唯 ユイ
癒 ユ いえる いやす
輸* ユ
諭 ユ さとす
愉 ユ

洋* ヨウ
妖 ヨウ あやしい
羊* ヨウ ひつじ
用* ヨウ もちいる
幼* ヨウ おさない
預* ヨ あずける あずかる
誉 ヨ ほまれ
余* ヨ あまる あます
予* ヨ
与 ヨ あたえる

よ

優* ユウ やさしい すぐれる
融 ユウ
憂 ユウ うれえる うれい うい
誘 ユウ さそう

窯 ヨウ かま
踊 ヨウ おどる おどり
瘍 ヨウ
様* ヨウ さま
腰 ヨウ こし
溶 ヨウ とける とかす とく
陽* ヨウ
葉* ヨウ は
揺 ヨウ ゆれる ゆる ゆらぐ ゆらめく ゆする ゆさぶる ゆすぶる
揚 ヨウ あげる あがる
庸 ヨウ
容* ヨウ
要* ヨウ かなめ いる

来* ライ くる きたる きたす
羅 ラ
裸 ラ はだか
拉 ラ

ら

翼 ヨク つばさ
翌* ヨク
欲* ヨク ほっする ほしい
浴* ヨク あびる あびせる
沃 ヨク
抑 ヨク おさえる
曜* ヨウ
謡 ヨウ うたい うたう
擁 ヨウ
養* ヨウ やしなう

利* リ きく
吏 リ

り

欄 ラン
藍 ラン あい
濫 ラン
覧* ラン
卵* ラン たまご
乱* ラン みだれる みだす
辣 ラツ
酪 ラク
落* ラク おちる おとす
絡 ラク からむ からまる からめる
頼 ライ たのむ たのもしい たよる
雷 ライ かみなり

留* リュウ とめる とまる
流* リュウ ながれる ながす
柳 リュウ やなぎ
略* リャク
慄 リツ
律* リツ リチ
立* リツ リュウ たつ たてる
陸* リク
離 リ はなれる はなす
璃 リ
履 リ はく
裏* リ うら
痢 リ
理* リ
里* リ さと

僚 リョウ
量* リョウ はかる
陵 リョウ みささぎ
猟 リョウ
涼 リョウ すずしい すずむ
料* リョウ
良* リョウ よい
両* リョウ
了 リョウ
慮 リョ
虜 リョ
旅* リョ たび
侶 リョ
硫 リュウ
隆 リュウ
粒 リュウ つぶ
竜 リュウ たつ

涙 ルイ なみだ
瑠 ル

る

臨* リン のぞむ
隣 リン となる となり
輪* リン わ
倫 リン
厘 リン
林* リン はやし
緑* リョク ロク みどり
力* リョク リキ ちから
糧 リョウ ロウ かて
瞭 リョウ
療 リョウ
寮 リョウ
領* リョウ

隷 レイ
霊 レイ リョウ たま
零 レイ
鈴 レイ リン すず
例* レイ たとえる
戻 レイ もどす もどる
励 レイ はげむ はげます
冷* レイ つめたい ひえる ひや ひやす ひやかす さめる さます
礼* レイ ライ
令* レイ

れ

類* ルイ たぐい
塁 ルイ
累 ルイ

呂 ロ

ろ

錬 レン
練* レン ねる
廉 レン
連* レン つら つらなる つらねる つれる
恋 レン こう こい こいしい
裂 レツ さく さける
烈 レツ
劣 レツ おとる
列* レツ
歴* レキ
暦 レキ こよみ
麗 レイ うるわしい
齢 レイ

常用漢字表 付表

（二字以上の漢字による熟字や当て字のうち、慣用の広く久しいもの。）

炉 ロ
賂 ロ
路* ロ ジ
露 ロ ロウ つゆ
老* ロウ おいる ふける
労* ロウ
弄 ロウ もてあそぶ
郎 ロウ
朗* ロウ ほがらか
浪 ロウ
廊 ロウ
楼 ロウ
漏 ロウ もる もれる もらす
籠 ロウ かご こもる
六* ロク むつ むっつ むい

録* ロク
麓 ロク ふもと
論* ロン

わ

和* ワ オ やわらぐ やわらげる なごむ なごやか
話* ワ はなす はなし
賄 ワイ まかなう
脇 わき
惑 ワク まどう
枠 わく
湾 ワン
腕 ワン うで

あす　明日
あずき　小豆
あま　海女・海士
いおう　硫黄
いくじ　意気地
いなか　田舎
いぶき　息吹
うなばら　海原
うば　乳母
うわき　浮気
うわつく　浮つく
えがお　笑顔
おじ　叔父・伯父
おとな　大人
おとめ　乙女
おば　叔母・伯母
おまわりさん　お巡りさん
おみき　お神酒
おもや　母屋・母家
かあさん　母さん
かぐら　神楽
かし　河岸
かじ　鍛冶
かぜ　風邪
かたず　固唾
かな　仮名
かや　蚊帳
かわせ　為替
かわら　河原・川原
きのう　昨日
きょう　今日
くだもの　果物
くろうと　玄人
けさ　今朝
けしき　景色
ここち　心地
こじ　居士
ことし　今年
さおとめ　早乙女
ざこ　雑魚
さじき　桟敷
さしつかえる　差し支える
さつき　五月
さなえ　早苗
さみだれ　五月雨
しぐれ　時雨
しっぽ　尻尾
しない　竹刀
しにせ　老舗
しばふ　芝生
しみず　清水
しゃみせん　三味線
じゃり　砂利
じゅず　数珠
じょうず　上手
しらが　白髪
しろうと　素人
しわす（しはす）　師走
すきや　数寄屋・数奇屋
すもう　相撲
ぞうり　草履
だし　山車
たち　太刀
たちのく　立ち退く
たなばた　七夕
たび　足袋
ちご　稚児
ついたち　一日
つきやま　築山
つゆ　梅雨
でこぼこ　凸凹
てつだう　手伝う
てんません　伝馬船
とあみ　投網
とうさん　父さん
とえはたえ　十重二十重
どきょう　読経
とけい　時計
ともだち　友達
なこうど　仲人
なごり　名残
なだれ　雪崩
にいさん　兄さん
ねえさん　姉さん
のら　野良
のりと　祝詞
はかせ　博士
はたち　二十・二十歳
はつか　二十日
はとば　波止場
ひとり　一人
ひより　日和
ふたり　二人
ふつか　二日
ふぶき　吹雪
へた　下手
へや　部屋
まいご　迷子
まじめ　真面目
まっか　真っ赤
まっさお　真っ青
みやげ　土産
むすこ　息子
めがね　眼鏡
もさ　猛者
もみじ　紅葉
もめん　木綿
もより　最寄り
やおちょう　八百長
やおや　八百屋
やまと　大和
やよい　弥生
ゆかた　浴衣
ゆくえ　行方
よせ　寄席
わこうど　若人

読書のすすめ

この教科書掲載の教材に関連する書籍を紹介します。これらを読むことで、教材への理解をさらに深めましょう。また、読書を通して、新しい知識を得たり、自分の考えを広げたり深めたりしましょう。

古文編

久保田淳『日本文学の古典50選』

上代・中古・中世・近世の代表的な古典を分かりやすく解説し、文学史の流れを捉える概説と略年表を付す。

鈴木健一『知ってる古文の知らない魅力』

文学作品は過去から未来へと続く表現の連鎖の上に成り立っていることを、著名な古典を例にあげて論じる。

ドナルド・キーン訳『Essays in Idleness』

『徒然草』の英訳版。原典自体が平易な文が多いので、英語でも無理なく読める章段も数多くある。興味の赴くままにひもといてみたい。

江國香織文　立原位貫画『竹取物語』

現代の小説家が『竹取物語』を忠実に現代語訳。ストーリー全体を的確に理解したい人にはお勧め。小説家の文章だけに味わい深いものに仕上がっている。

俵万智『恋する伊勢物語』

現代の歌人による『伊勢物語』の現代語訳。和歌までも現代語訳しているところが読みどころである。

大岡信『紀貫之』

『土佐日記』の作者である紀貫之について、現代の詩人が読み解く。的確な論理で貫之の歌人としての評価をどのように考えるべきかを記す。

木下順二文　瀬川康男絵『絵巻平家物語』

編年体の『平家物語』を、いわば紀伝体に再構成している。大胆に人物中心に話を絞っているので理解しやすい。絵も魅力的である。

足立巻一『やちまた』

本居宣長の子ども春庭が主人公。春庭は独自の分類で古典文法を確立した。今、我々が使っているものと同じようなものを独力で作り上げる様子が感動的に語られる。

漢文編

多久弘一『故事成語で中国を読む』

故事成語のエピソードに豊富な余談が加わることで、漢文が描く世界を楽しく学べる。

宮城谷昌光『管仲』

管仲の一生を、史実をもとに再構築した歴史小説。管仲と鮑叔の友情が興味深く描かれる。

一海知義『漢詩入門』

漢詩って何だろうと思ったら、まずこの一冊。親しみやすい語り口で、基礎知識や歴史、そして魅力がよく分かる。

中島敦『山月記・李陵』

中国古典に材をとった諸編を収載。中でも「弟子」は、門人子路の目を通して孔子と弟子たちの姿を活写する。

近現代文編

小川洋子（編著）『小川洋子の偏愛短篇箱』

編著者が宝物を収集箱に納めるようにして編んだアンソロジー。内田百閒「件」ほか十六作品。それぞれに解説エッセイが付いている。

芥川龍之介『羅生門　蜘蛛の糸　杜子春　外十八篇』

「鼻」や「地獄変」から「歯車」に至る主要作品を収めた、近現代の著名作家に焦点を当てるシリーズの一冊で、親切な語釈と評伝・年譜を付す。

『セレクション戦争と文学2　アジア太平洋戦争』

太宰治「待つ」を巻頭に、敗戦後の梅崎春生「ルネタの市民兵」や三島由紀夫「英霊の声」、平成期の蓮見圭一まで、アジア太平洋戦争について書き継がれた作品を広く採録。

幸田文『台所のおと』

「台所のおと」「祝辞」「おきみやげ」など、十編を収めた短編小説集。この時代の暮らしの様子が丁寧な言葉で描かれている。

紅野敏郎他編『日本近代短篇小説選　昭和篇2』

梅崎春生「蜆」ほか、原民喜・坂口安吾・林芙美子など、一九四六年から一九五二年に発表された短編を収める。

村上春樹『象の消滅　短篇選集1980–1991』

アメリカの出版社による第一選集の日本語版で、「納屋を焼く」「パン屋再襲撃」など十七編。「TVピープル」がニューヨーク発の憧れの雑誌に載った驚きを語る序文が印象的。

川上弘美『神様』『神様2011』

『神様』は「神様」「離さない」ほか九編の短編集。『神様2011』は、福島の原発事故を受け、「神様」で描かれた日常を書き直した「神様2011」と「神様」の二本を収録。

三好行雄『日本の近代文学』

いろいろな作家を読んだら、どのように関連するのか文学史も見てみたい。文学史を理解するうえでの重要なキーワードがコンパクトに解説されている。

斎藤美奈子『日本の同時代小説』

一九六〇年代から二〇一〇年代の文学史を、エンターテインメントやノンフィクションにも目配りして、平易に記述。作品のあらすじの紹介も多く、読みたい本を探しやすい。

詩歌編

渡部泰明（わたなべやすあき）『古典和歌入門』

高校生のみならず、現代を生きる人々に、古典和歌の読み方と楽しみ方を教えてくれる絶好の入門書。

大岡信『折々のうた』

短歌、俳句、漢詩（書き下し）、川柳、近現代詩（翻訳を含む）、歌謡の短評集。新聞の朝刊一面のコラム欄に連載されたもの。

永田和宏（かずひろ）『近代秀歌』

日本人の感性の基盤を形成してきた、知っておいてほしい近代の歌百選と、その魅力を伝えるエッセイ。

村上護（まもる）『きょうの一句 名句・秀句365日』

四季折々に詠まれた、江戸初期から現代に至る名句・秀句を一日一句選び、一年間三百六十五句を短く評釈している。

三好達治『詩を読む人のために』

心を柔軟に、精神を平らかに、近代のさまざまな詩に虚心に従い、楽しく遍歴することを流儀として、若い読者に詩を勧める。

茨木のり子『詩のこころを読む』

馥郁（ふくいく）たる香りを保ち、著者の心を豊かにし続けてくれた詩を選び、なぜ好きか、なぜ良いのか、その魅力を伝える。

谷川俊太郎『詩ってなんだろう』

意味に必ずしもとらわれない韻文の音のおもしろさ、豊かさに触れ、日本の詩歌の時間的、空間的広がりの見取り図を示してくれる。



参考図録

封筒・はがきの書き方



頭語・結語の例（手紙文）

手紙の種類	頭語	結語
一般的な場合	拝啓　拝呈　啓上	敬具　敬白
丁重な場合	謹啓　粛啓　恭啓	謹言　頓首　謹白
急ぎの場合	急啓　急呈　急白	不一　草々　以上
略式の場合（はがき）	前略　冠省	草々　不一
返信の場合	拝復　復啓	敬具　敬白

追伸の頭語の例には、「追伸」「追って」「二伸」「追啓」「再白」がある。女性の場合は、結語に「かしこ」を用いることがある。

敬称の例（手紙文）

名称	使用例
様	一般的に用いる。
殿	主に、公用文・商業文などで用いる。
先生	教員・医師などに対する敬称として用いる。
御中	会社・団体など個人名を書かないときに用いる。
各位	個人名を省略するときに用いる。（「会員各位」など）

原稿用紙の使い方



① **題　名**
二行目の三〜四ます目から書くのがよい。副題を付ける場合には、小さめの字で題名の下に書くか、改行してダッシュ（――）を頭に付け、題名より少し下げて書く。

② **氏　名**
三行目の下のほうに書く。いちばん下は一ます空けたほうがよい。学年・組・番号が必要な場合は、氏名の上のほうに書く。

③ **書き始め**
五行目くらいから書き始めるのがよい。そして行の最初を必ず一ます空ける。

④ **句読点及び符号**
句点（。）や読点（、）及び符号は、一字分ずつ使う。句読点や中点（・）、また）や」などのような終わりにくる括弧やかぎは、行の最初に書かないのが原則である。それらは、行末の一ますに入れるか、欄外に書く。また、（や「などのような括弧やかぎは、行の最後に書かないように工夫する。？や！の後は一ます空ける。――や……などの棒線や点線は二字か三字分使う。

⑤ **段　落**
段落の初め（改行の場合）は、行の最初を必ず一ます空ける。

⑥ **通し番号**
原稿用紙が二枚以上になる場合は、通し番号を付ける。

〈その他の注意〉
会話は普通「　」で示し、なるべく行を改めるようにする。
文字はます目の中にきちんと正しく、楷書で書く。
とじる場合は、特に指定がない限り、右上をとじる。

月の異名と二十四節気

※二十四節気の太字は八節。

	春			夏			秋			冬		
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
月の異名	睦月	如月	弥生	卯月	皐月	水無月	文月	葉月	長月	神無月	霜月	師走
二十四節気	**立春**	雨水	啓蟄	**立夏**	**夏至**	小暑	**立秋**	処暑	白露	**秋分**	寒露	霜降	**立冬**	小雪	**大雪**	小寒	**冬至**	**大寒**
二十四節気の意味	暦の上で春が始まる。	雪から雨へと変わり、雪が解けだす。	冬ごもりしていた虫が外にはい出てくる。	暦の上で夏が始まる。	一年中で昼が最も長い。	暑さがだんだんと強くなっていく。	一年中で最も暑い。	暦の上で秋が始まる。	暑さが落ち着く。	秋の気配が感じられ始める。	草花に冷たい露が宿る。	霜が降り始める。	暦の上で冬が始まる。	寒くなって雨から雪へと変わる。	雪が降り積もり始める。	寒の入りで、寒さが厳しくなる。	一年中で昼が最も短い。	一年中で最も寒い。
現在の日付	2月4日頃	2月18日頃	3月5日頃	5月5日頃	6月21日頃	7月7日頃	8月7日頃	9月23日頃	9月7日頃	8月23日頃	10月8日頃	10月23日頃	11月7日頃	11月22日頃	12月7日頃	1月5日頃	12月22日頃	1月20日頃
	①		②		④	⑤	⑥	②	⑦									

① **節分**…現在は立春の前日のみ。もともとは四季の全てにあった。
② **彼岸**…春分・秋分を中日とする 7 日間。
③ **八十八夜**…立春から 88 日目の日。作物の種をまく季節。
④ **入梅**…梅雨入りする季節。
⑤ **半夏生**…夏至から 11 日目。
⑥ **土用**…四季の終わりの 18 日間。夏の土用が有名。
⑦ **二百十日**…立春から 210 日目。台風が来る頃。

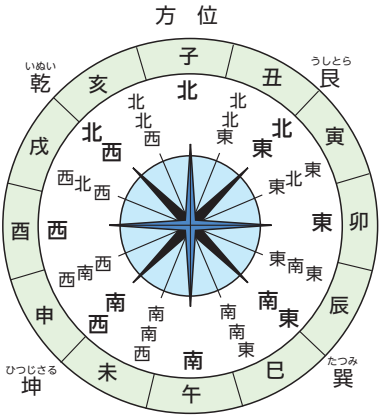
陰暦月齢表

月の名	新月（朔）	三日月	七日月（上弦の月）	十日余りの月	十三夜月 小望月	満月 望月	十六夜月	立待月	居待月	寝待月	更待月	二十三夜月（下弦の月）
日付	30日頃	3日頃	7日頃	11日頃	13日頃	15日頃	16日頃	17日頃	18日頃	19日頃	20日頃	23日頃
月の形												
月の出時刻	6:00	8:30	11:30	14:30	16:30	18:00	18:30	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00

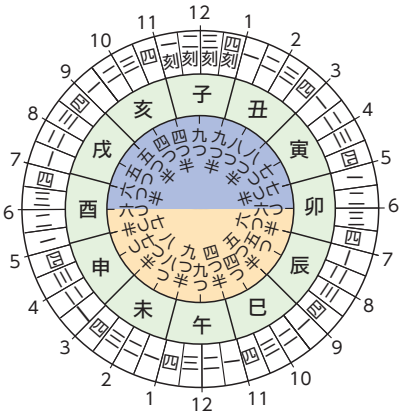
十干・十二支・干支

五行	木		火		土		金		水	
兄弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟
十干	甲（きのえ・コウ）	乙（きのと・オツ・イツ）	丙（ひのえ・ヘイ）	丁（ひのと・テイ）	戊（つちのえ・ボ）	己（つちのと・キ）	庚（かのえ・コウ）	辛（かのと・シン）	壬（みずのえ・ジン）	癸（みずのと・キ）
十二支	子（ね・シ）…鼠（ねずみ）	丑（うし・チュウ）…牛（うし）	寅（とら・イン）…虎（とら）	卯（う・ボウ）…兎（うさぎ）	辰（たつ・シン）…竜（たつ）	巳（み・シ）…蛇（へび）	午（うま・ゴ）…馬（うま）	未（ひつじ・ビ）…羊（ひつじ）	申（さる・シン）…猿（さる）	酉（とり・ユウ）…鶏（にわとり）	戌（いぬ・ジュツ）…犬（いぬ）	亥（い・ガイ）…猪（いのしし）
干支	1 甲子（きのえね・コウシ）	2 乙丑（きのとうし・イッチュウ）	3 丙寅（ひのえとら・ヘイイン）	4 丁卯（ひのとう・テイボウ）	5 戊辰（つちのえたつ・ボシン）	6 己巳（つちのとみ・キシ）	7 庚午（かのえうま・コウゴ）	8 辛未（かのとひつじ・シンビ）	9 壬申（みずのえさる・ジンシン）	10 癸酉（みずのととり・キユウ）
	11 甲戌（きのえいぬ・コウジュツ）	12 乙亥（きのとい・イツガイ）	13 丙子（ひのえね・ヘイシ）	14 丁丑（ひのとうし・テイチュウ）	15 戊寅（つちのえとら・ボイン）	16 己卯（つちのとう・キボウ）	17 庚辰（かのえたつ・コウシン）	18 辛巳（かのとみ・シンシ）	19 壬午（みずのえうま・ジンゴ）	20 癸未（みずのとひつじ・キビ）
	21 甲申（きのえさる・コウシン）	22 乙酉（きのととり・イツユウ）	23 丙戌（ひのえいぬ・ヘイジュツ）	24 丁亥（ひのとい・テイガイ）	25 戊子（つちのえね・ボシ）	26 己丑（つちのとうし・キチュウ）	27 庚寅（かのえとら・コウイン）	28 辛卯（かのとう・シンボウ）	29 壬辰（みずのえたつ・ジンシン）	30 癸巳（みずのとみ・キシ）
	31 甲午（きのえうま・コウゴ）	32 乙未（きのとひつじ・イツビ）	33 丙申（ひのえさる・ヘイシン）	34 丁酉（ひのととり・テイユウ）	35 戊戌（つちのえいぬ・ボジュツ）	36 己亥（つちのとい・キガイ）	37 庚子（かのえね・コウシ）	38 辛丑（かのとうし・シンチュウ）	39 壬寅（みずのえとら・ジンイン）	40 癸卯（みずのとう・キボウ）
	41 甲辰（きのえたつ・コウシン）	42 乙巳（きのとみ・イツシ）	43 丙午（ひのえうま・ヘイゴ）	44 丁未（ひのとひつじ・テイビ）	45 戊申（つちのえさる・ボシン）	46 己酉（つちのととり・キユウ）	47 庚戌（かのえいぬ・コウジュツ）	48 辛亥（かのとい・シンガイ）	49 壬子（みずのえね・ジンシ）	50 癸丑（みずのとうし・キチュウ）
	51 甲寅（きのえとら・コウイン）	52 乙卯（きのとう・イツボウ）	53 丙辰（ひのえたつ・ヘイシン）	54 丁巳（ひのとみ・テイシ）	55 戊午（つちのえうま・ボゴ）	56 己未（つちのとひつじ・キビ）	57 庚申（かのえさる・コウシン）	58 辛酉（かのととり・シンユウ）	59 壬戌（みずのえいぬ・ジンジュツ）	60 癸亥（みずのとい・キガイ）

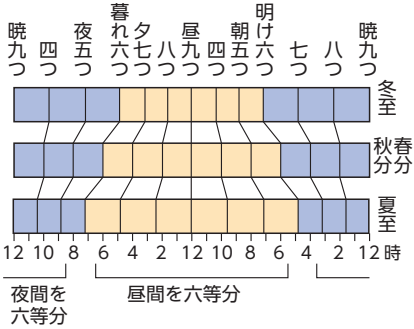
古方位



古時刻



江戸時代の不定時法



〔著作者〕

中島　国彦　早稲田大学名誉教授
渡部　泰明　国文学研究資料館館長
安藤　信廣　東京女子大学名誉教授

佐野　摩美　元光塩女子学院中・高等科校長
十重田裕一　早稲田大学教授
馬場　祐一　慶應義塾高等学校教諭
皆川　裕紀　埼玉県立川越女子高等学校教諭
横堀　利明　東京都立豊多摩高等学校教諭

石黒　圭　国立国語研究所教授
石出　靖雄　明治大学教授
坂口　陽子　富士見丘中学高等学校教諭
廣瀬　愛　東京都立白鷗高等学校・附属中学校教諭
和智　潔　文京学院大学女子中学・高等学校教諭

小澤　純　慶應義塾志木高等学校教諭
小平麻衣子　慶應義塾大学教授
中村　早知　新渡戸文化学園中学・高等学校教諭
田口　麻奈　明治大学准教授

植田　敦子　お茶の水女子大学附属高等学校教諭
川村　大　東京外国語大学教授
小林　俊洋　浅野中学・高等学校教諭
佐藤　至子　東京大学教授
田村　隆　東京大学准教授
畠山　俊　お茶の水女子大学附属高等学校教諭

齋藤　希史　東京大学教授
坂口　三樹　文教大学教授
前田　康晴　城西国際大学講師
宮　利政　開成中学・高等学校教諭

小川洋子　小説家

明治書院編集部

〔編集協力者〕

阿毛　久芳　都留文科大学名誉教授
小倉真理子　元東京成徳大学教授
橋本　直　神奈川大学非常勤講師
田中　洋美　椙山女学園高等学校教諭・司書教諭

●表紙作品　加藤一「輝くアンドロメダ」（Andromède brillante）　一九七一年
●表紙・本文レイアウト　アート工房　●見返し・口絵レイアウト　町田えり子
●挿絵・図版・写真　アート工房　朝日新聞社　amanaimages　出光美術館　Image: TNM Image Archives　イメージナビ　江戸東京博物館　大石天狗堂　大阪青山歴史文学博物館　九州国立博物館／山崎信一　京都府京都文化博物館　京都〈魯山人倶楽部 Rosanjin-club〉jp　京橋図書館　黒澤達矢／山田邦和　粉河寺　國學院大學図書館　国立国会図書館　五島美術館　Cynet Photo　産経新聞　サントリー美術館　シーピーシー・フォト　青蓮院門跡　昭和の暮らし博物館　神宮徴古館　静嘉堂文庫美術館／イメージアーカイブ／DNPartcom　醍醐寺　中部大学／池浩三研究室　鉄道博物館　天理大学附属天理図書館　東京国立博物館　東京大学東洋文化研究所　東京都立中央図書館　中尾松泉堂／岩波書店　名古屋市蓬左文庫　西本願寺　日本近代文学館　人形浄瑠璃文楽座／国立文楽劇場　根津美術館　林原美術館／DNPartcom　范曽美術館　PIXTA　風俗博物館　フェリス女学院大学附属図書館　フォトライブラリー　文藝春秋／amanaimages　町田えり子　滿タン web　宮沢賢治記念館　明星大学　大和文華館　山梨県立文学館　弥生美術館　和歌山県立近代美術館

精選　言語文化

令和三年三月五日　検定済
令和四年一月二十日　初版発行
令和七年一月二十日　四版発行

定価　文部科学大臣が認可し官報で告示した定価
（上記の定価は、各教科書取次供給所に表示します。）

著作者　中島国彦
渡部泰明
安藤信廣
（他二十六名別記）

発行者　株式会社　明治書院
代表者　三樹蘭
東京都新宿区大久保一―一―七

印刷者　大日本法令印刷株式会社
代表者　田中達弥
長野県長野市中御所三―六―二五

発行所　株式会社　明治書院
郵便番号　一六九―〇〇七二
東京都新宿区大久保一―一―七
電話　〇三（五二九二）〇一一七（代）
振替口座　〇〇一三〇―七―四九九一

117　明治　言文711

本書の解説書・ワークブックならびにこれに類するものの無断発行を禁じます。

©NAKAJIMA Kunihiko, WATANABE Yasuaki, ANDO Nobuhiro, MEIJISHOIN 2021



▲寝殿造　平安時代に発達した貴族の住宅様式。敷地は、一町（約 110 メートル）四方が標準的。中央南向きに主人が住む寝殿があり、その周囲（東・西・北など）に、対（対屋）と呼ばれる別棟の建物を配する。各建物の間は、渡殿と呼ばれる屋根のある渡り廊下で結ばれていた。また、東西の対から南へ中門廊が伸び、中門が設けられた。寝殿の南には遣水を通した庭が広がり、池があった。



▲寝殿の内部　奥にある母屋を中心として、その周囲に廂（廂の間）、簀子（縁）が設けられた。開放的な空間であり、几帳・御簾（簾）・屏風・障子などで区切って用いた。壁を塗り固めた空間は特に塗籠という。（考証・製作　中部大学 池浩三研究室）

女性の装束



◀**唐衣・裳**　貴族女性の正装時に着用。袿、表着の上に重ねて、上半身に唐衣（装飾用で短い）、下半身に裳（後方を覆う）を身につける。



◀**袿**　貴族女性の平常服。小袖（平安後期以降）、袴、単（裏地のない衣）を身につけた上に着る。袿は何枚も重ねて着ることが多い。



◀**小袿**　丈を短く仕立てた袿。略式正装の際、唐衣の代わりに着る。

男性の装束



▲武官束帯　武官は脇から下を前後縫い合わせない闕腋袍を着る。



◀文官束帯　束帯は男性貴族の正装。参内などの際に着用する。文官は脇から下の前後を縫い合わせた縫腋袍という上着を着る。位に応じて色の規定があった。



◀直衣　貴族男性の平常服。形は縫腋袍と同じで、色の規定がない。



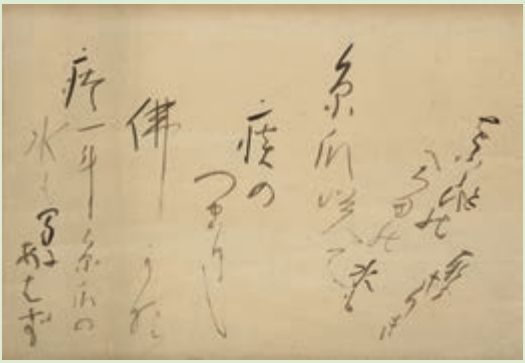
◀狩衣　貴族男性の平常服。外出時などに着用する。活動的な仕立て。

武装



▲大鎧　騎射戦での、矢に対する防御効果を高めるために発達した鎧。

近代の文学　人と作品



正岡子規「絶筆三句」



やは肌のあつき血しほにふれもみでさびしからずや道を説く君（『みだれ髪』より）



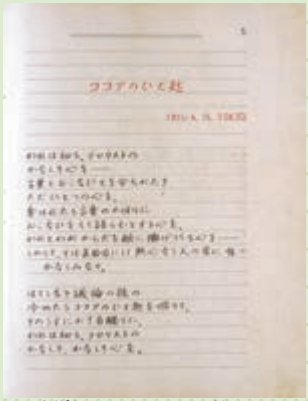
『スバル』創刊号表紙



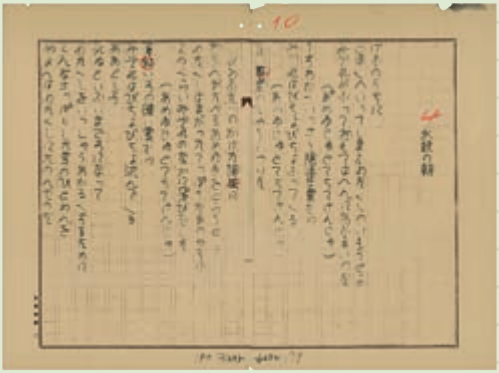
与謝野晶子（よさのあきこ）『みだれ髪』初版表紙



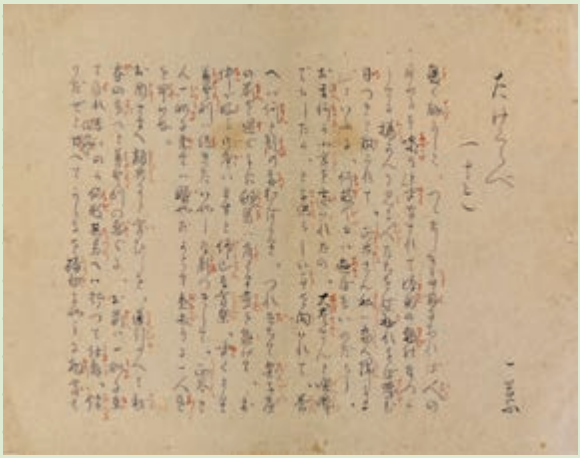
森鷗外（おうがい）



石川啄木（たくぼく）『ココアのひと匙（さじ）』
（『「呼子（よぶこ）と口笛」ノート』）



宮沢賢治『永訣の朝』原稿



樋口一葉『たけくらべ』原稿



二葉亭四迷『新編浮雲 第一篇』初版表紙



夏目漱石



芥川龍之介『羅生門』初版表紙



芥川龍之介「羅生門」草稿

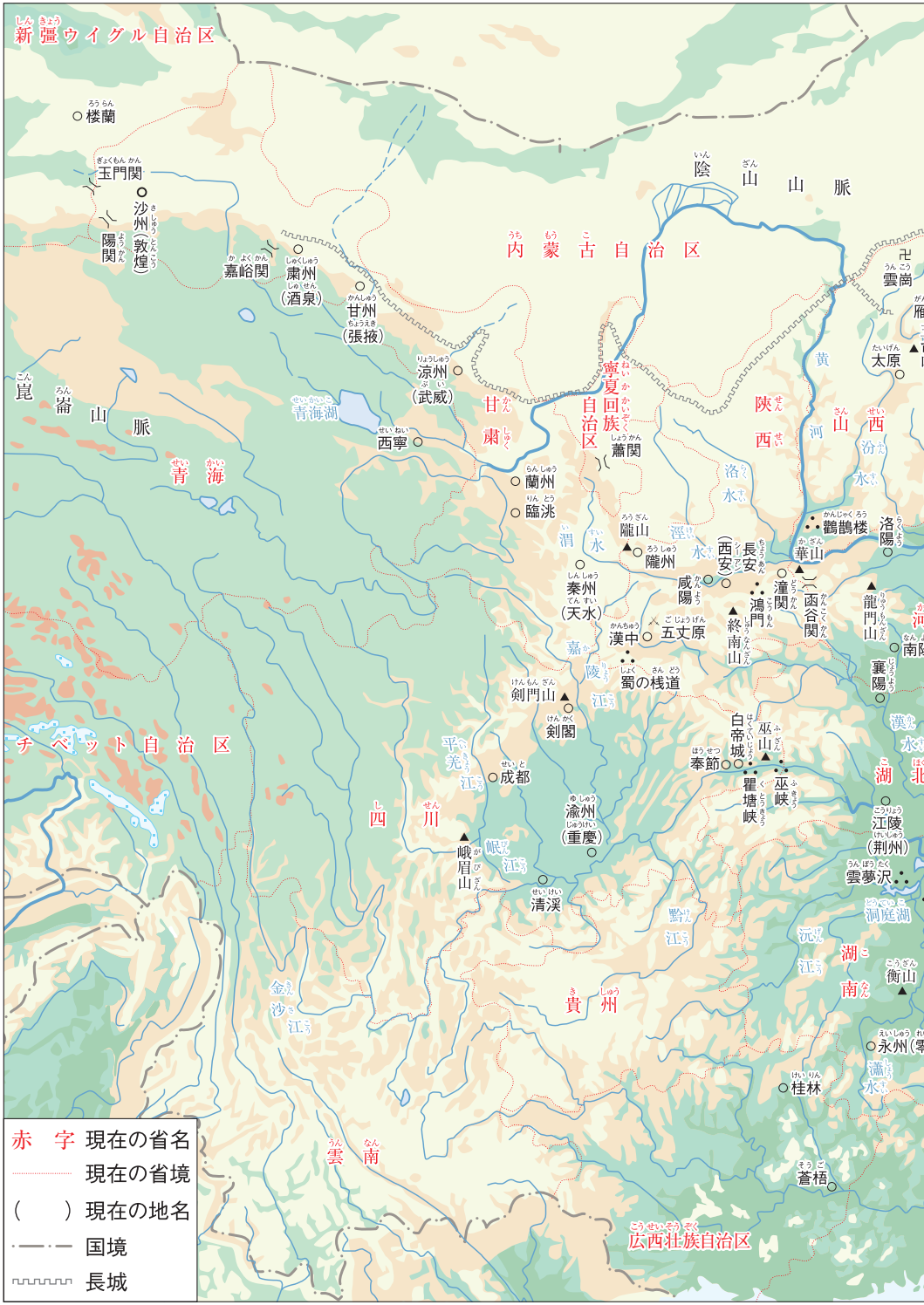


太宰治『人間失格』原稿



『白樺』創刊号表紙


中国新旧参考地図
吉林
遼寧
鴨緑江
張家口
漁陽
幽州(北京)
山海関
恒山
天津
大連
平壌
ソウル
渤海
易水
河北
黄河
邯鄲
臨淄
泰山
山東
青島
曲阜
鄒
旧大運河
大運河
江蘇
淮水
黄海
広島
福岡
汴京
開封
沛
埇下
広陵(揚州)
淮水
安徽
烏江
姑蘇山
長江
上海
蘇州
漢口(武漢)
金陵(南京)
天門山
大湖
杭州
会稽(紹興)
会稽山
黄鶴楼
漢陽
赤壁
九江
天台山
岳陽
廬山
鄱陽湖
浙江
汨羅
長沙
湘江
江西
東シナ海
福州
台北
福建
泉州
台湾
厦門
南シナ海
広東
汕頭
広州
香港
0
500km


新疆ウイグル自治区
楼蘭
玉門関
陽関
沙州（敦煌）
嘉峪関
粛州（酒泉）
甘州（張掖）
涼州（武威）
青海湖
西寧
崑崙山脈
青海
チベット自治区
蘭州
臨洮
内蒙古自治区
寧夏回族自治区
蕭関
陰山山脈
雲崗
太原
黄河西山西汾水
渭水
洛水
隴山
隴州
秦州（天水）
咸陽
長安（西安）
潼関
函谷関
華山
鸛鵲楼
洛陽
龍門山
南陽
襄陽
漢水北湖
江陵（荊州）
雲夢沢
洞庭湖
衡山
南湖江沅水
永州（零
桂林
蒼梧
広西壮族自治区
貴州
雲南
金沙江
四川
平羌江
成都
渝州（重慶）
峨眉山
清渓
黔江
嶓冢江
漢中
五丈原
嘉陵江
終南山
剣門山
剣閣
蜀の桟道
白帝城
奉節
巫山
巫峡
瞿塘峡
赤　字　現在の省名
現在の省境
（　）現在の地名
国境
長城

9784625004254

ISBN978-4-625-00425-4
C4381　¥00000E

1924381000000

この教科書は環境に配慮した紙及びインキを使用しています。